

393は胴部が下膨れを呈す形態で、脚が付く無頸壺の可能性はある。摩滅がひどく調整は不明。

SK1084 (Fig.106、PL.74)

H-17区で検出した不整形土坑。規模は直軸長1.29m、短軸長0.97m、深さ0.15mを測る。底面は南東隅がテラス状を呈す。埋土は黒色粘質土を呈し、中間に炭化物や焼土ブロックを含んでいた。特に土器片が集中するあたりに多く含む。

出土遺物 (Fig.111、PL.90) 弥生時代前期の土器や黒曜石剥片などが出土している。

394は丹塗土器壺口縁から胴部片で、復元口径22.4cmを測る。頸部と胴部外面に軽い段を有す。調整は胴部外面から口頸部内面迄ヘラミガキ、胴部内面はハケ目。395は刻目突帯文土器甕口縁部細片。口縁は内傾し、屈折部に突帯を持つ。調整は内外面条痕である。

SK1085 (PL.74)

H-19区で検出した不定形の細長い土坑。規模は長軸長2.27m、短軸長0.83m、最大深は0.2mを測る。北と南端はテラス状を呈す。底面は部分的にピット状に落ち込む。埋土は黒色粘質土で、中・下層には灰・炭化物、焼土ブロックを多く含む。

出土遺物 (Fig.111・119、PL.90) 弥生時代前期初頭の土器や黒曜石剥片などが出土している。

396はミニチュアの壺。最大胴径は7.0cm、残存器高5cmを測る。外面にはヘラによる沈線文が入る。調整は外面ヘラミガキ、内面と底部はナデ。397は口縁部と胴部に二重の刻目突帯を持つ甕。1/2片で、調整は外面条痕、内面は板ナデ、外底部はケズリ。刻目はヘラによる。399は刻目突帯文土器口縁部細片。内外面条痕調整である。

S31は黒曜石のスクレーパー。最大長2.5cmを測る。黒曜石である。

SK1087 (Fig.106)

F-14区で検出した長方形の土坑。長軸長0.9m、短軸長0.7m、深さ0.25mを測る。壁は内傾する。埋土は黒色粘質土で、下層は粘性が強くなる。**出土遺物**はなかった。

SK1112 (Fig.106、PL.74)

G-13区で検出した不整形の土坑。規模は長軸長1.10m、短軸長0.85m、深さ0.6mを測る。埋土は黒色粘土で、SD1139に切られる。壁面は一部袋状を呈す。底面密着で土器が出土している。湧水があり井戸の可能性はある。

出土遺物 (Fig.112、PL.90) 弥生時代後期後半の土器、木製品などが出土している。

400は壺胴頸部1/3片で頸部にヘラによる刻目突帯が付く。調整は内外面ハケ目で、外面一部ナデ。401は甕胴部。底部は凸レンズ状を呈す。調整は外面ハケ目、内面はナデとハケ目。外面には黒斑がある。402は甕底部3/4片。調整は内外面ハケ目で外面はタタキ後ハケ目を加え、二次的火熱を受ける。外底部もタタキ後ナデ。403は口縁部が大きく開く鉢1/6片。調整は口縁部外面ハケ目で、内面にかけてはヨコナデ。体部は外面ケズリ後ナデ、内面はハケ目。404は高坏の脚部1/8片。器表面は摩滅するがヨコナデ。405は器台1/4片。外面ハケ目、内面はナデとハケ目。406は杵形の支脚頂部。調整は外面タタキで、内面シボリ痕が残る。頂部に径1.3cmの孔が空く。

SK1113出土遺物 (Fig.112) 407は甕の口縁部1/8片。跳ね上げ口縁で、調整はハケ目、外面にはススが付着する。

SK1120 (Fig.106、PL.75)

H-17区で検出した楕円形状の土坑。規模は長軸長0.62m、短軸長0.5m、深さ0.5mを測る。底面はピット状に二段に深くなる。上層に408が出土している。埋土は黒色粘質土である。

出土遺物 (Fig.112) 弥生時代後期の土器が出土している。

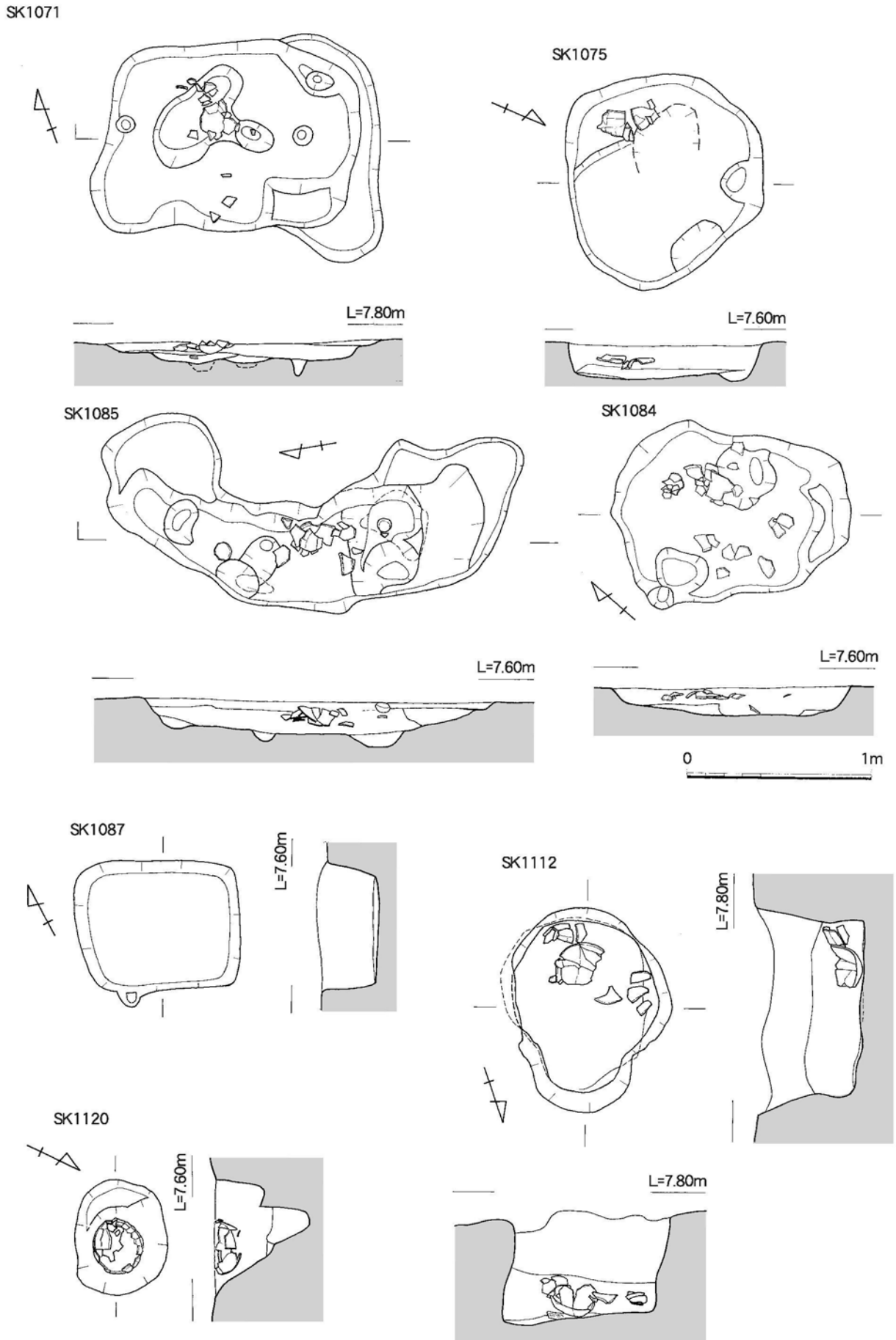


Fig.106 土坑 1 (1/30)

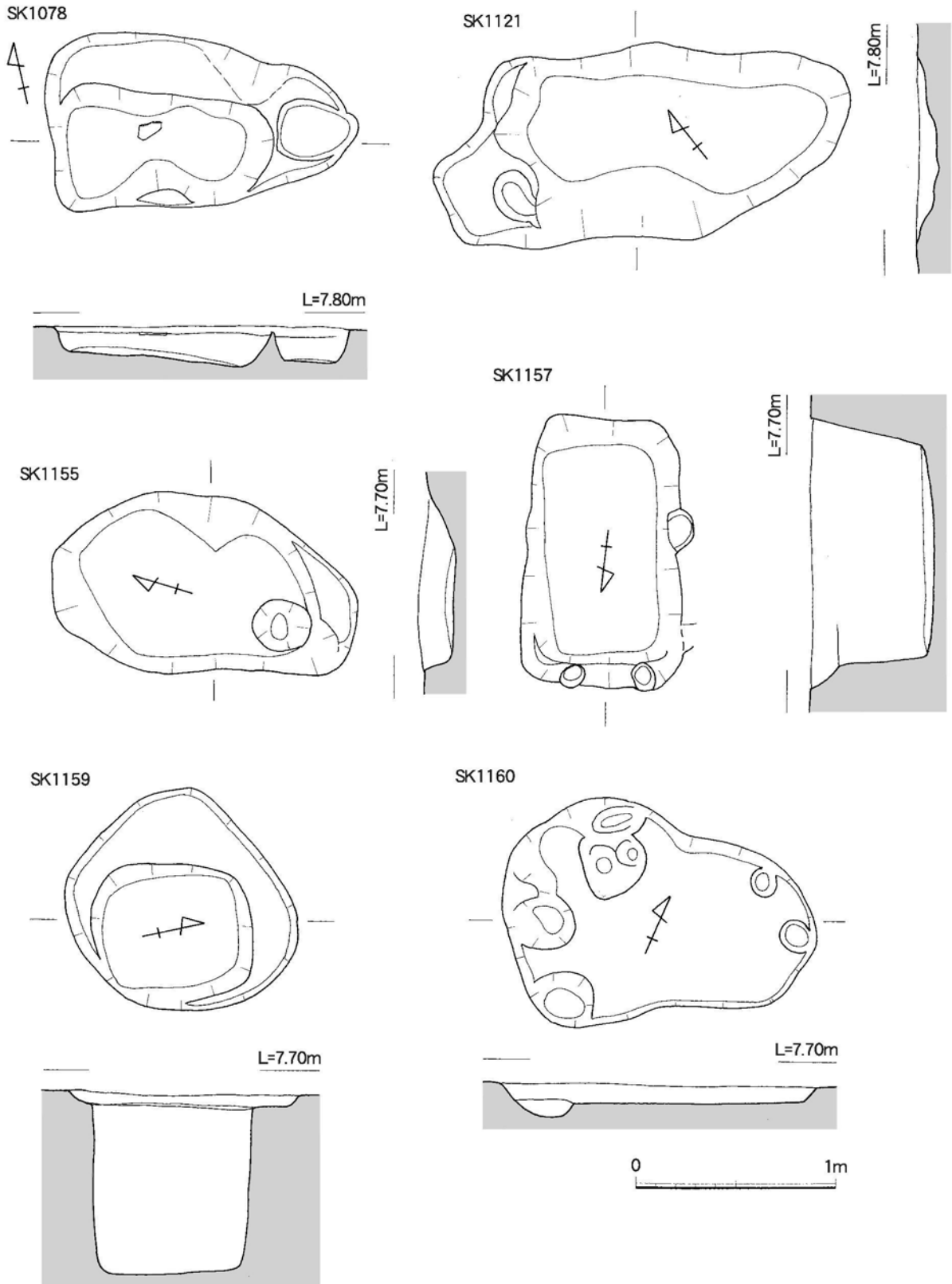


Fig.107 土坑 2 (1/30)

408は壺胴底部。扁球の胴部で中央に台形の突帯が付く。頸部も突帯があったと思われるが剥離している。調整はヘラミガキで、外面はハケ目後ミガキ。焼成やや不良。

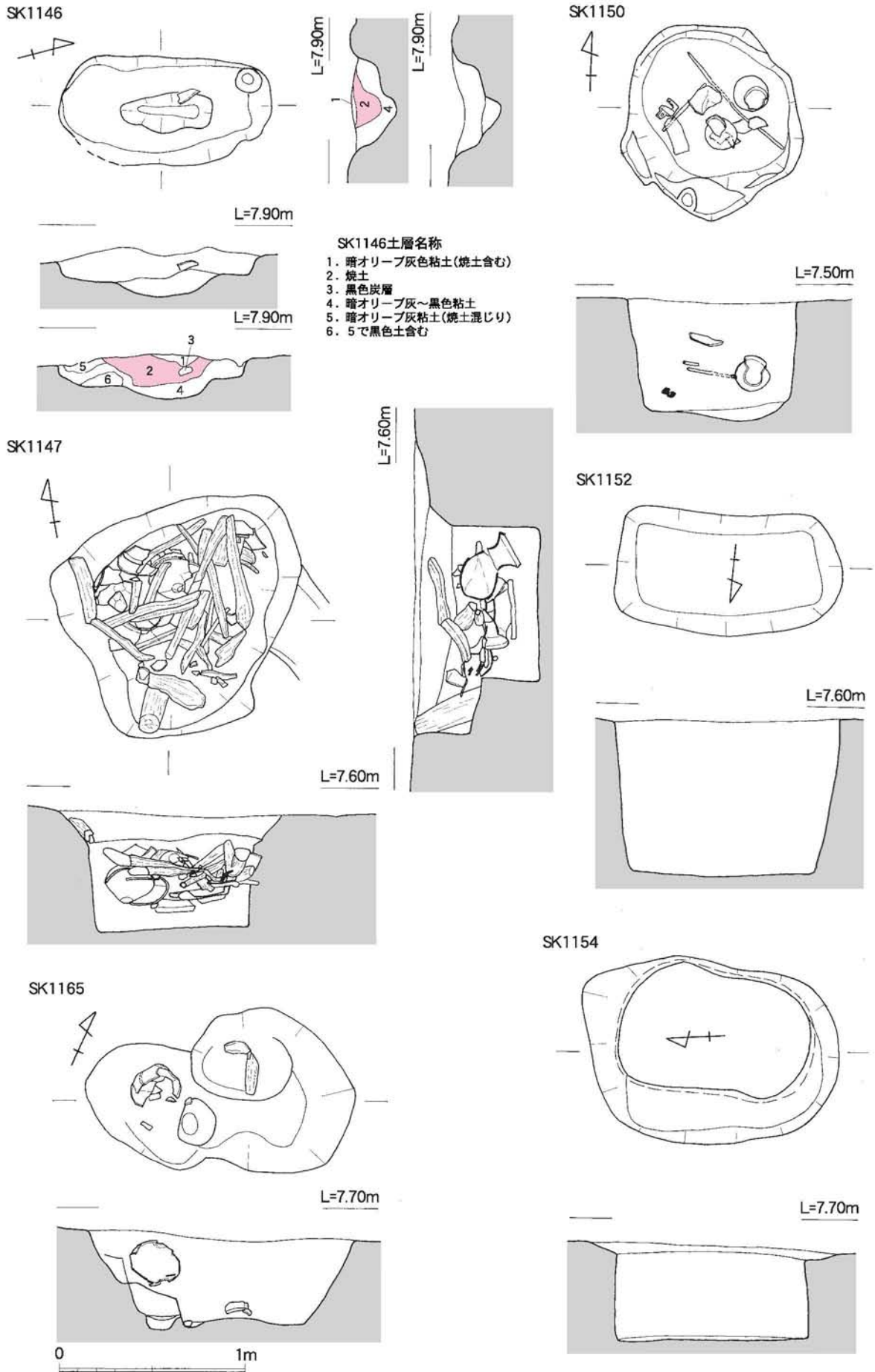


Fig.108 土坑 3 (1/30)

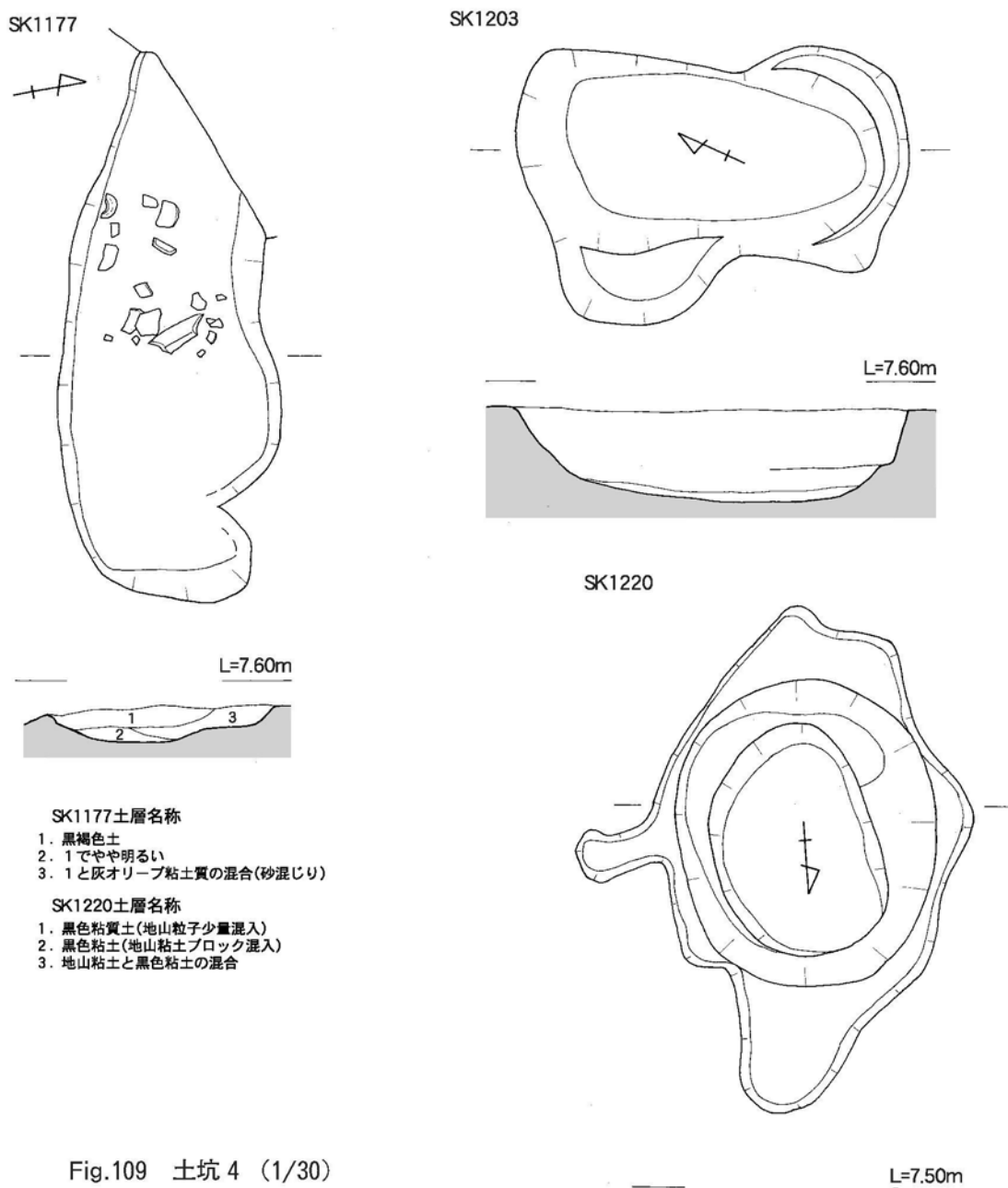


Fig.109 土坑 4 (1/30)

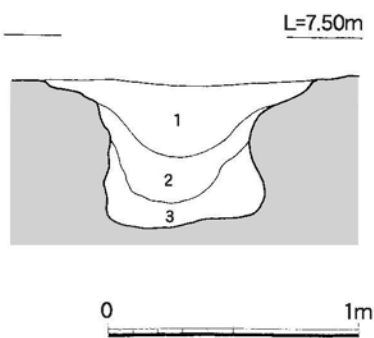
SK1121 (Fig.107)

H-13区で検出した不定形の土坑。規模は長軸長2.10m、短軸長0.96m、深さ0.1mを測る。埋土は黒色粘質土で明灰黄色シルトブロックが混入する。出土遺物は弥生時代後期土器が少量出土している。

SK1146 (Fig.108)

G-13区で検出した隅丸長方形の土坑。規模は長軸長1.02m、短軸長0.45m、最大深さは0.24mを測る。中央部に焼土がV形に集中堆積した部分があり、炉として使用された可能性がある。

出土遺物 図示出来ないが、弥生土器片や黒曜石剥片が少量出土している。



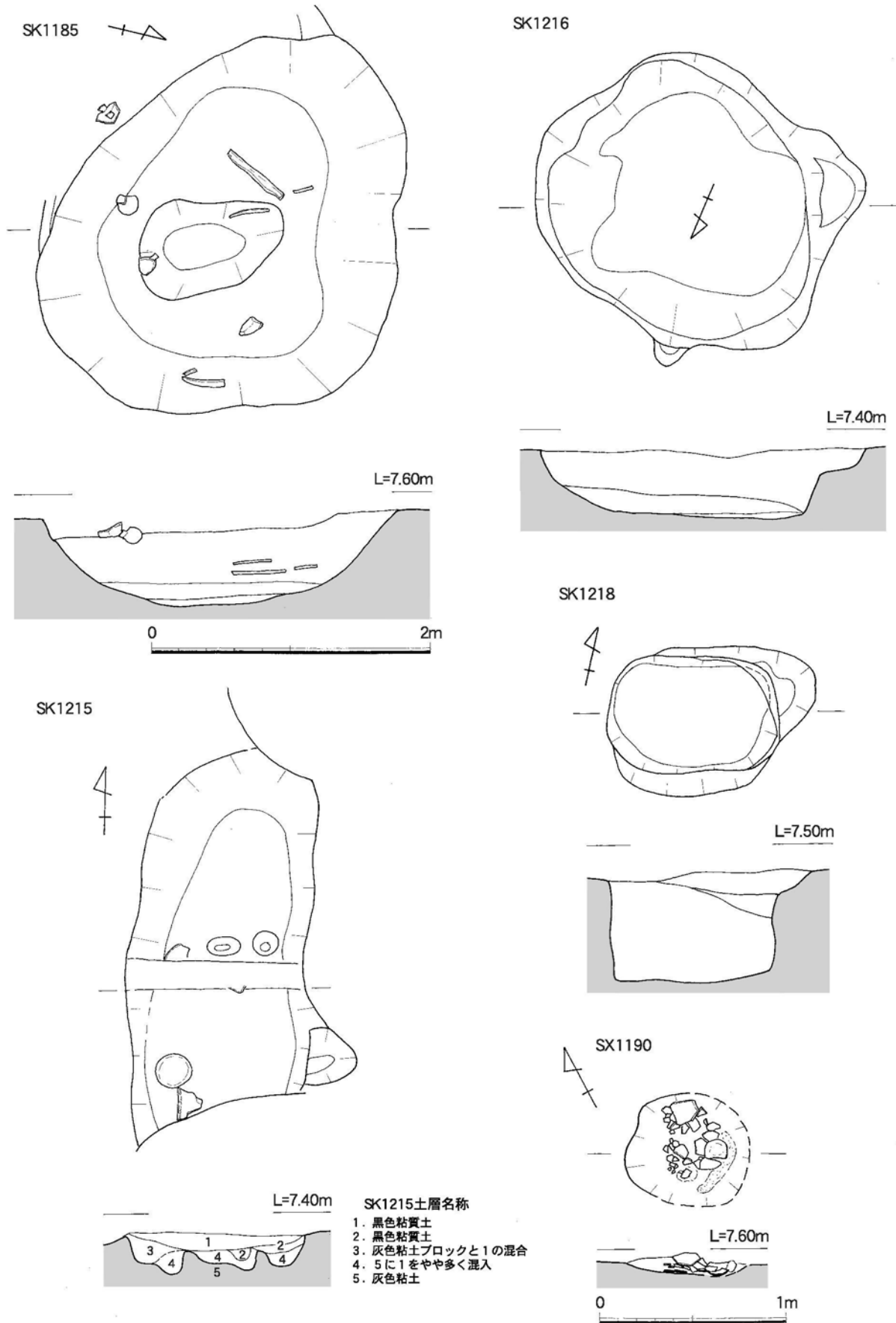


Fig.110 土坑5 (1/30・1/40)

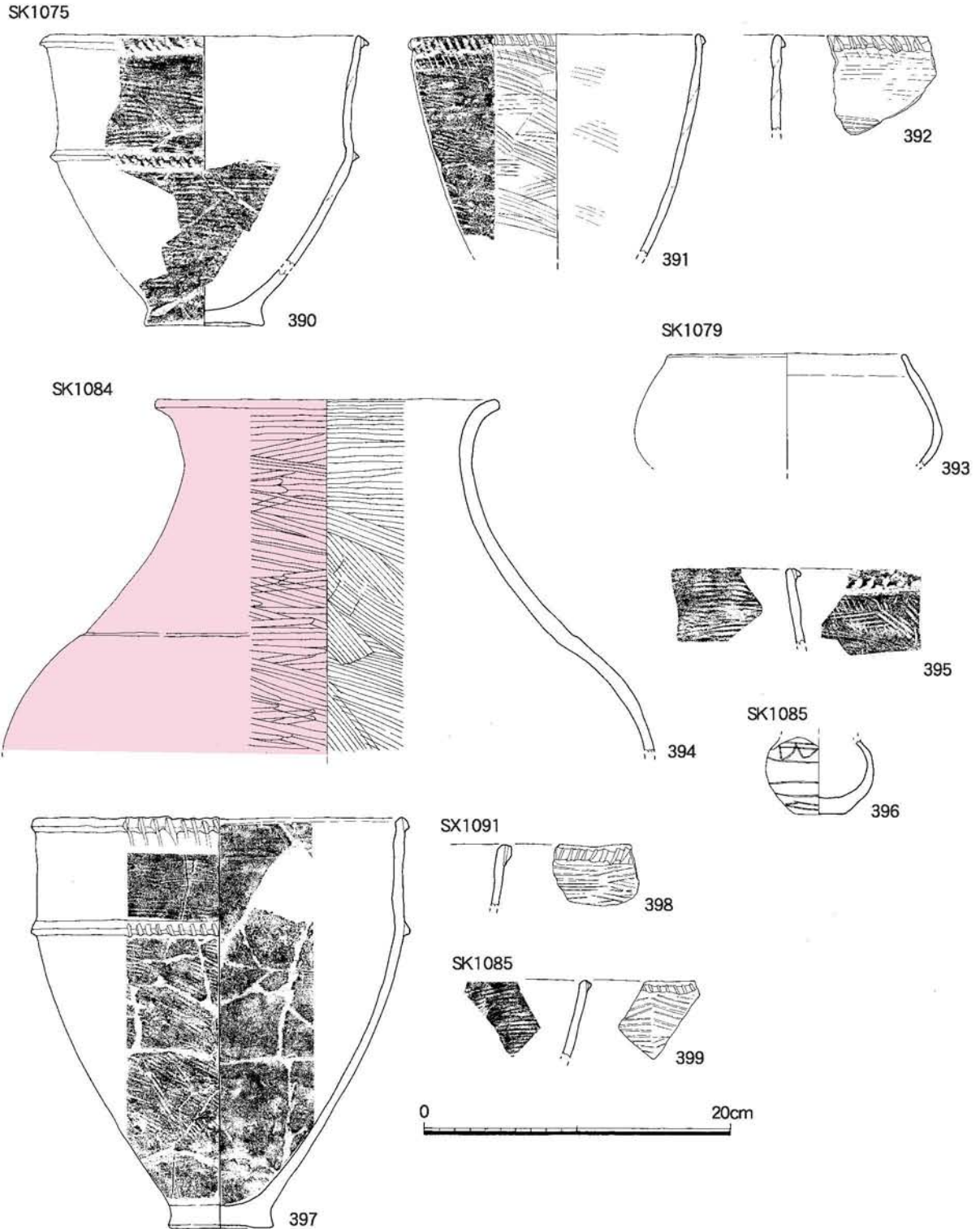


Fig.111 SK1075・1079・1084・1085、SX1091出土土器 (1/4)

SK1147 (Fig.108、PL.76)

G-14区で検出した不整円形の土坑。SD1119がこの遺構に接続する。この遺構の南東隅にはSB1403の柱根が残っていた。規模は長軸長1.47m、短軸長1.27m、深さは0.65mを測る。壁面はほぼ直立する。埋土は黒色粘質土から粘土で、下程粘性が強くなる。また中層あたりには、完形の壺などとともに、

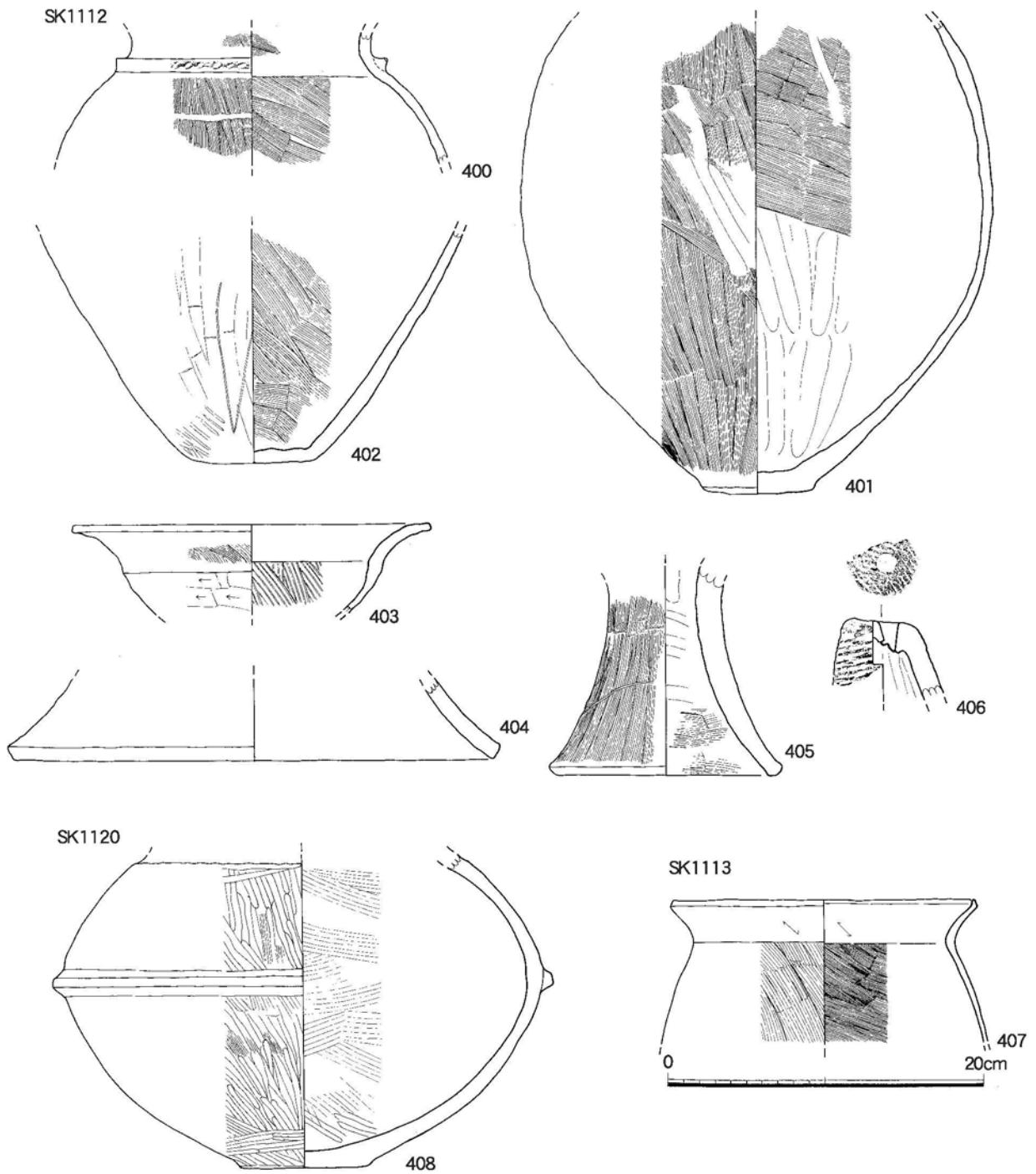


Fig.112 SK1112・1120出土土器 (1/4)

焼けた自然木や加工材、木製品などが集中して出土している。湧水があることから井戸又は貯木施設の可能性がある。樹種同定を行なった試料の結果を見た限りでは、クスノキ、クヌギ、コナラ、シキミ、アワブキ、ツブラジイ、ヤナギなどの種類がある。また土壌分析からは水陸両性の珪藻化石が検出されているが、水性珪藻化石が優越しており、この遺構に水が溜まっていたことが分かる。また多量のメロン類の種実なども検出されている。

出土遺物 (Fig.113・114・119・120、PL.90・94・101) 弥生時代後期中頃から後半の土器や木製品

が出土している。

409～412は複合口縁壺。409・410は頸部に三角突帯、胴部に刻目突帯が巡る。409はほぼ完形。410は頸部以下完存。胴部の刻目は409がハケ目工具の木口、410がヘラによる。調整は口縁部ヨコナデ、頸部から胴部は内外面ハケ目、409・410の胴部から底部はナデとハケ目。411は復元完形で頸部に三角突帯が巡る長胴の形態。調整は内外面と外底部はハケ目で、口縁部外面はヨコナデ。409～411いずれも外面には黒斑がある。412は口縁部1/12片。調整は口縁部ヨコナデ、頸部はハケ目である。413～418は甕。413は口縁部1/5片。調整は外面タタキ後ヨコナデ、内面はハケ目。414は1/4片で、調整はハケ目で、口縁部外面はヨコナデ。外面スガが付着する。415～418は口縁端部が跳ね上げの形態。415は1/6片、416は破片で1/2片、417・418は1/2片。調整はいずれも内外面ハケ目で、口縁部はヨコナデとハケ目。416・417外面にはスガが付着する。419は形態から壺の底部か。調整は内外面ハケ目。420は高坏坏部1/12片。器壁は摩滅するが、外面ヘラミガキ、内面ハケ目がかすかに残る。421～423は鉢。421は口縁部が屈折して開く器形。口縁部は1/2欠損。調整は体部外面ハケ目、下半と内面は丁寧なミガキ。422は口縁部1/10片。調整は内外面ハケ目。423は深底の1/8片。調整は外面ハケ目とナデ、内面はナデ。

S32は砥石片。残存長17.1cm、残存幅6.2cmを測る。上面と左右側面が使用で擦られている。粘板岩である。S33は軽石製の丸石。最大長2.3cm、幅1.9cmを測る。表面は擦られている。

W58は削り加工のある棒状の不明木製品。中央部で段が付くように加工している。残存長17.8cm、径2.9×2.1cmを測る。表面は火を受け炭化している。W59は槽で欠損がひどい。全長37.0cm、最大幅17.9cm、最大高6.4cmを測る。一木を削り込んで削り抜き仕上げしている。加工痕は明瞭でない。W60は棒状の材で先端は欠損する。残存長42.6cm、最大径6.1×6.6cmを測る。部分的に炭化面があり、樹皮も残る。槌のようなものか。

SK1150 (Fig.108、PL.75)

F-19区で検出した不整形の土坑。規模は長軸長1.05m、短軸長0.95m、深さ0.65mを測る。南側にテラス状の高まりを持つ。埋土は灰褐色から黒褐色粘土を主体とし、上層では炭化物がレンズ状に落込んでいた。土壌分析では陸生の珪藻化石やメロン類の種実が検出できた。

出土遺物 (Fig.114・115、PL.91・101) 弥生時代後期頃の土器が出土している。

424～426は壺。424は直口壺でほぼ完形。精製の土器で調整は外面ハケ目後ヘラミガキ、内面はナデ。425は広口の壺で口縁部1/3を欠く。精製土器で、口縁部外面はヨコナデ、胴部から内面はミガキである。426は複合口縁壺1/6片。調整はハケ目。427は深底の鉢1/8片。428～430は底部。428は1/3片。429は壺の底部2/3片。調整はハケ目とナデ。430の外底部には十字のヘラ描き沈線が入る。431は口縁が大きく開く器台1/2片。調整は外面ハケ目、内面はハケ目とナデ。

W57は家具などの組み合わせ式の把手である。全長12.5cm、残存幅8.7cm、高さ5.4cmを測る。板目材の使用で、丁寧なケズリ仕上げである。

SK1152 (Fig.108、PL.76)

G-20区で検出した長方形の土坑。規模は長軸長1.20m、短軸長0.6m、深さ0.86mを測る。壁はほぼ直立する。土坑底からは湧水があった。埋土は黒色粘質土で、下層ほど粘性が強くなる。埋土からは陸生珪藻化石などが土壌分析で検出された。

出土遺物 図示出来ないが、弥生時代前期から後期にかけての土器片が少量出土している。

SK1154 (Fig.108)

G-20区で検出した隅丸長方形の土坑。規模は長軸長1.30m、短軸長0.66m、深さ0.46mを測る。埋

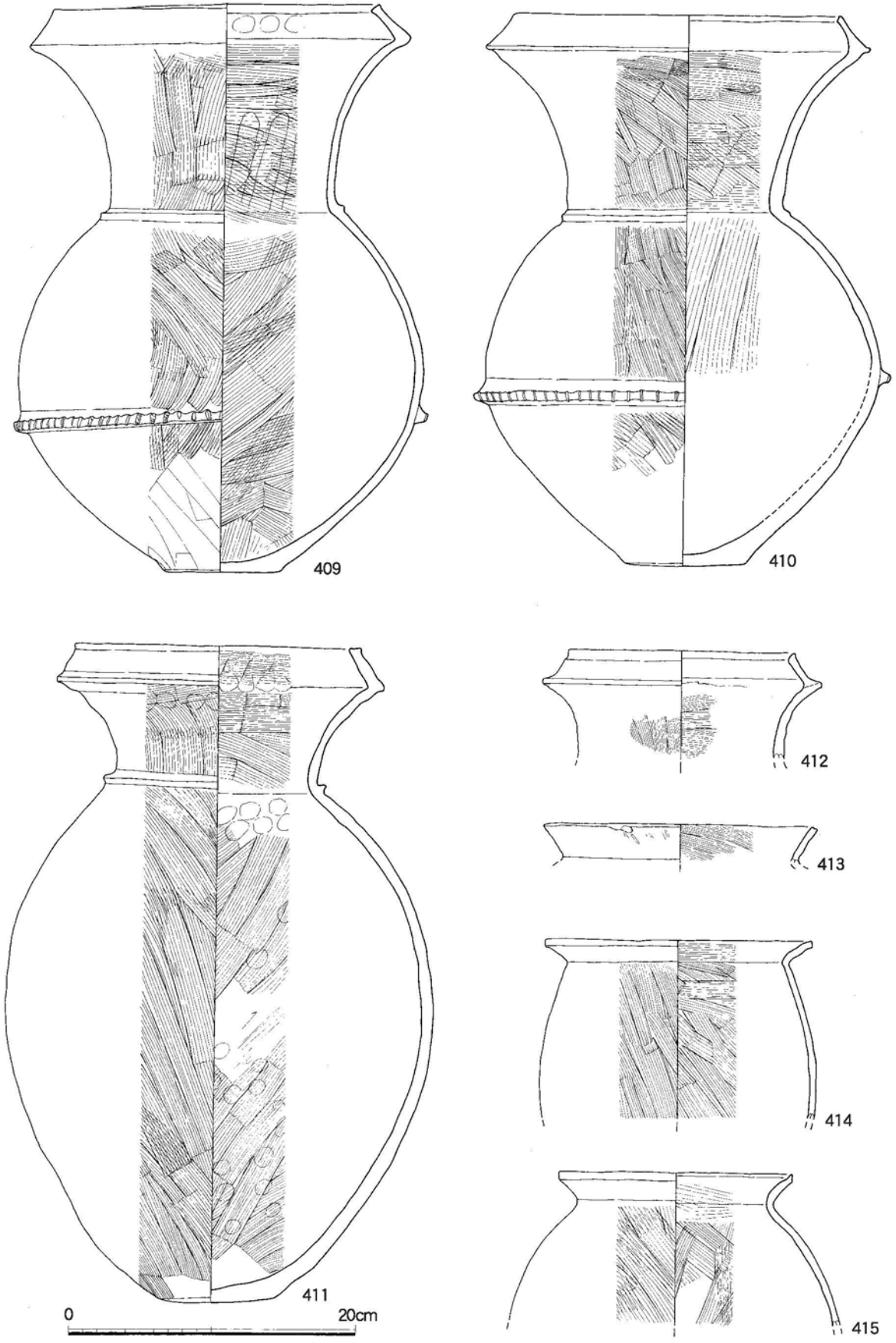
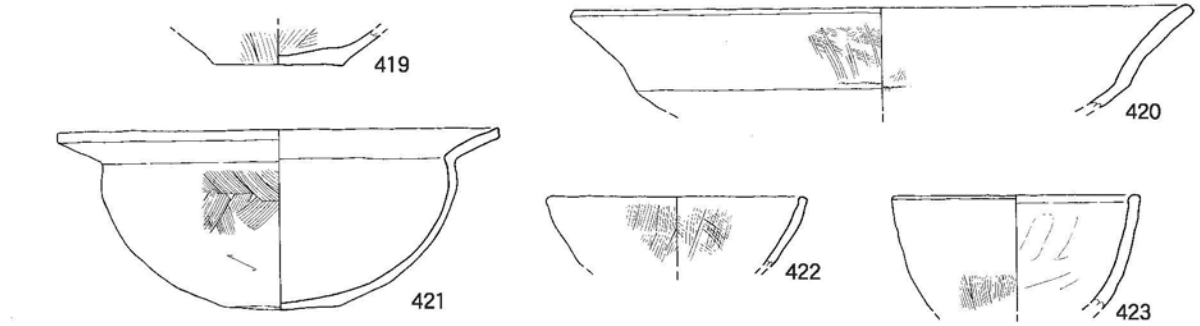
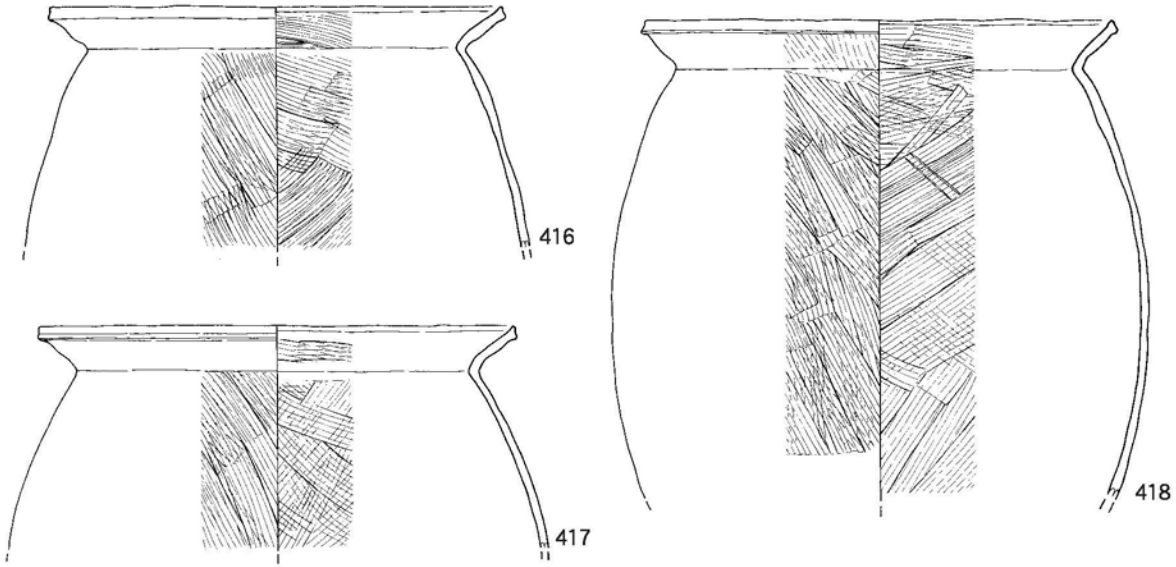
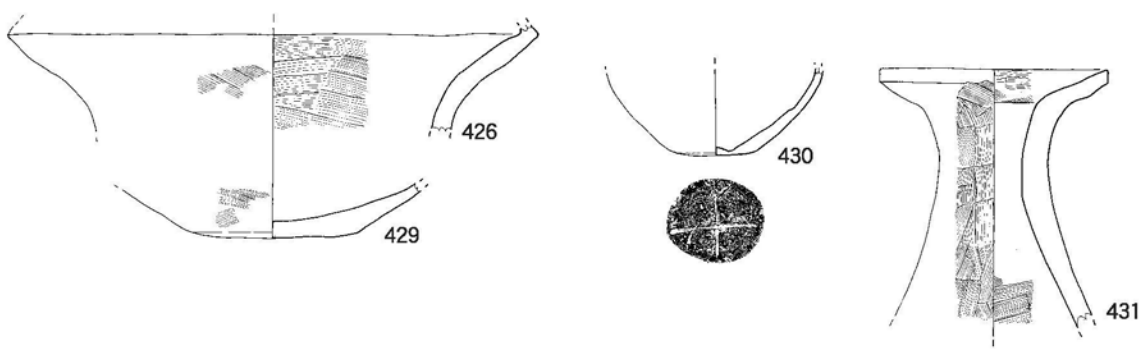
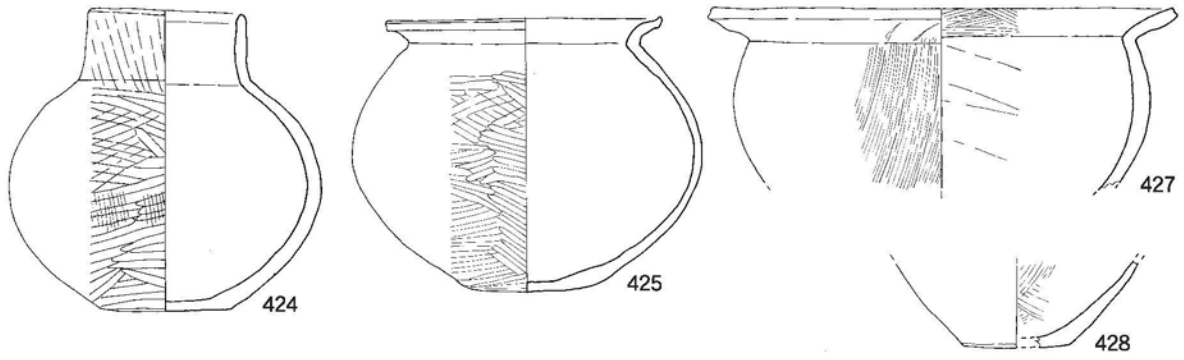


Fig.113 SK1147①出土土器 (1/4)

SK1147



SK1150



0 20cm

Fig.114 SK1147②・1150出土土器 (1/4)

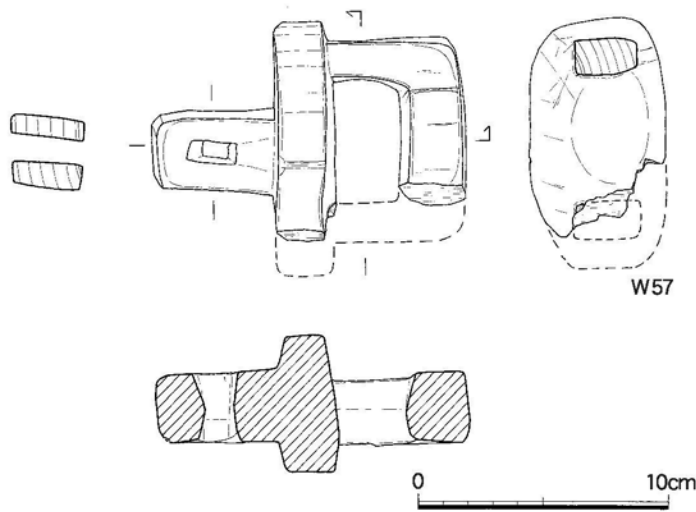


Fig.115 SK1150出土木製品 (1/3)

土は上層は黒色粘質土、下層は黒色粘土である。

出土遺物 (Fig.116) 弥生時代後期の土器片が少量出土している。

432は複合口縁壺細片。調整はヨコナデ。

SK1155 (Fig.107)

F-21区で検出した不整楕円形状の土坑。規模は長軸長1.55m、短軸幅0.89m、深さは0.15mを測る。埋土は黒色粘質土で、下部に炭化物を多く含む。

出土遺物 (Fig.116) 弥生時代前期初頭と後期の土器、黒曜石剥片が少量出土している。

433・434刻目突帯文土器甕細片。433は口縁部、434は屈曲部。調整は、434は外面条痕で内面はナデ。433は内外面ナデ。435は小型甕の口縁部1/8片。調整はヨコナデ。

SK1157 (Fig.107、PL.76)

F-21区で検出した長方形の土坑。規模は長軸長1.33m、短軸長0.80m、0.58mを測る。側壁はほぼ直立する。埋土は、上層は黒色粘質土で灰色粘土ブロックを含み、下層は腐植土に近くなる。底部近くは地山粘土ブロックを含む。埋土には陸生珪藻化石を含んでいた。

出土遺物 (Fig.116・119、PL.95) 弥生時代中期から後期の土器や黒曜石剥片が少量出土している。

436・437は逆L字形口縁の甕。1/4片と1/12片で、調整は、436は外面ハケ目、内面はナデ。437は外面ハケ目後ナデ、内面はナデで、口縁端部にススが付着する。438は鉢1/8片。調整は外面粗いハケ目、口縁から内面はナデ。439・440は支脚頂部と底部。調整は指押さえナデ、ハケ目である。441は蓋の摘み。調整はナデ。442は外面丹塗りの大型高坏1/8片。坏部との接合部には突帯が付く。筒部は中実でヘラミガキである。内面はシボリ痕が残る。

B1・B2はガラス小玉。直径は0.4cm・0.5cm、厚さ0.2cm・0.15cm、孔径は0.15cmを測る。色調はスカイブルー、濃紺色である。

SK1159 (Fig.107)

F-21区で検出した土坑。遺構面から5cm程下げた面で二段掘状に深くなる。規模は長軸長1.11m、短軸長1.10m、深さ0.9mを測る。埋土は黒色粘土で灰オリーブ地山粘土ブロックを含むが、下層ほど腐食物を含み泥土化している。湧水がある。土壌分析で陸生珪藻化石やメロン類の種実を検出した。

出土遺物 (Fig.116、PL.91) 弥生時代中期後半から後期頃の土器が出土している。

443・444は弥生時代後期の甕。443は1/8片。調整は外面粗いハケ目後ナデ、口縁部内面はヨコハケ目で内面はナデ。444は口縁から胴部1/4片で、調整はハケ目で、口縁部外面はヨコナデを加える。ススが付着する。445は底部。摩滅し調整は不明。

SK1160 (Fig.107)

F-21区で検出した不定形状の土坑。規模は長軸長1.55m、短軸長1.13m、深さ0.08mを測る。底面はピット状に凹凸がある。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物 (Fig.116・119、PL.95) 縄文時代晩期末から弥生時代後期の土器や、黒曜石剥片などが

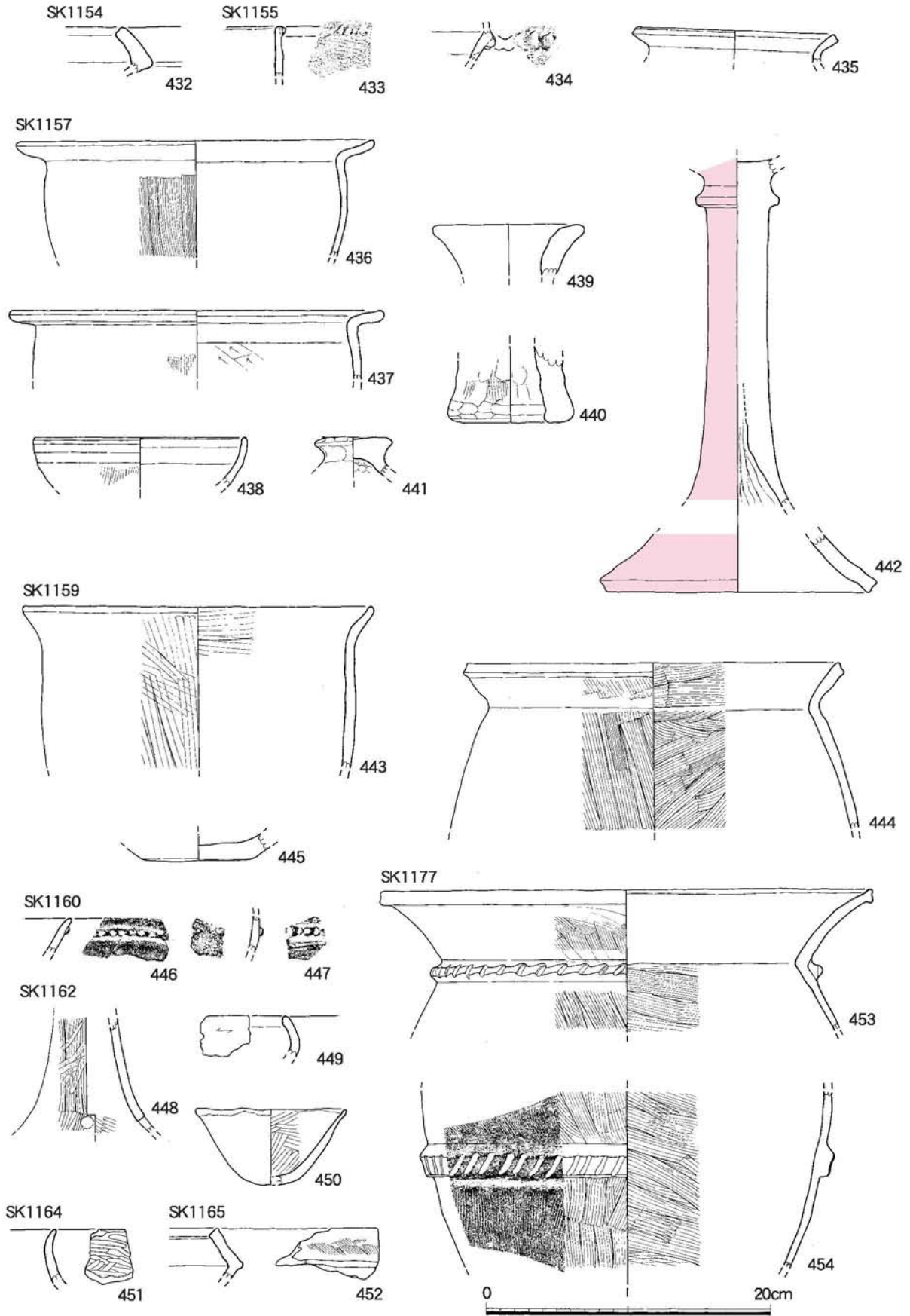


Fig.116 各土坑出土土器 (1/4)

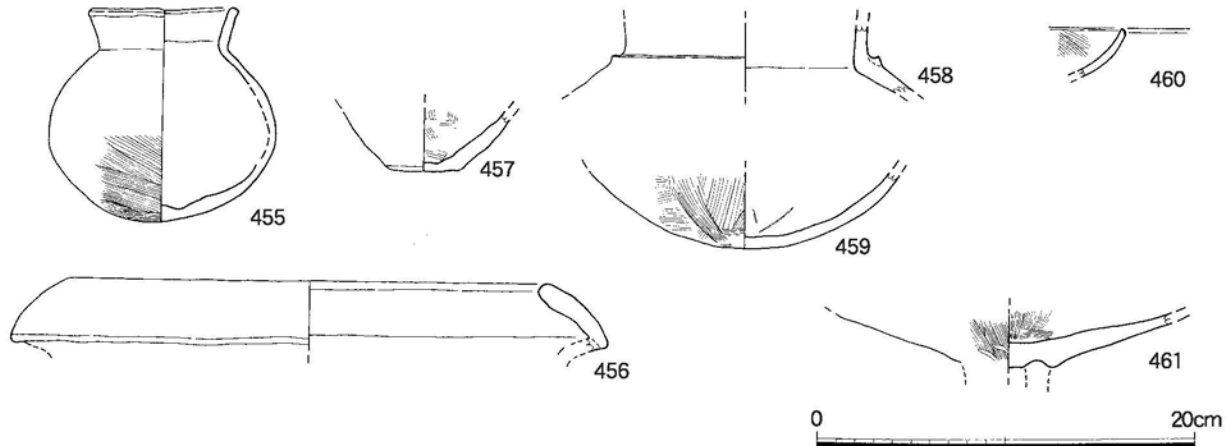


Fig.117 SK1185出土土器 (1/4)

出土している。

446・447は刻目突帯文土器。446は山形を呈す浅鉢口縁部細片。口縁下に突帯を持つ。調整はミガキである。447は甕屈曲部細片。調整は内外面条痕である。

B3はガラス小玉で、直径0.4cm、厚さ0.15cm、孔径0.15cmを測る。色調は濃紺色を呈す。

SK1162出土遺物 (Fig.116・119、PL.95) H-20区のSD1181、SB1318内で検出した土坑で弥生時代後期土器が少量出土している。

448は高坏脚部。外面ハケ目後ヘラミガキ、内面はナデでハケ目。下に円孔が空く。449・450は鉢。449は碗型の鉢細片。調整はヨコミガキ。450は口縁が開く鉢1/4片。調整は外面ヘラナデかミガキ、内面はヘラミガキ。

B6はガラス小玉。直径0.4cm、厚さ0.15cm、孔径0.2cmを測る。色調は濃紺色を呈す。

SK1164出土遺物 (Fig.116) G-21区で検出した不整形の土坑。451は弥生時代前期初頭の壺口縁部細片。外面丹塗りで、調整はヘラミガキ。

SK1165

H-19区で検出した不定形の土坑。西側と北側で柱穴と切り合い、不整形な形状を呈す。規模は長軸長1.43m、短軸長0.88m、最大深さ0.5mを測る。北側柱穴底には礎板があった。埋土は黒褐色粘質土で炭化物を含む。

出土遺物 (Fig.116・119、PL.95) 弥生時代後期土器が少量出土している。

452は弥生時代後期後半の複合口縁壺細片。調整はヨコナデで外面ハケ目を加える。

B7はガラス小玉。直径0.3cm、厚さ0.15cm、孔径0.15cmを測る。色調は濃紺色を呈す。

SK1177 (Fig.109、PL.76)

H-19区で検出した長方形の土坑。西側は攪乱を受ける。規模は長軸長2.36m、短軸長0.96m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色土で下ほど粘性を帯びる。底面は風倒木の痕跡があったのか、深く掘れた。

出土遺物 (Fig.116、PL.91) 弥生時代後期後半土器が少量出土している。

453は甕口縁部1/4片。頸部には刻目突帯が巡る。調整はハケ目とヨコナデ。454は胴部小片。胴部中央下に刻目突帯が一条巡る。調整は内外面ハケ目。

SK1185 (Fig.110、PL.77)

H・I-19区で検出した円形土坑。規模は長軸長2.92m、短軸長2.43m、深さ0.62mを測る。埋土は黒

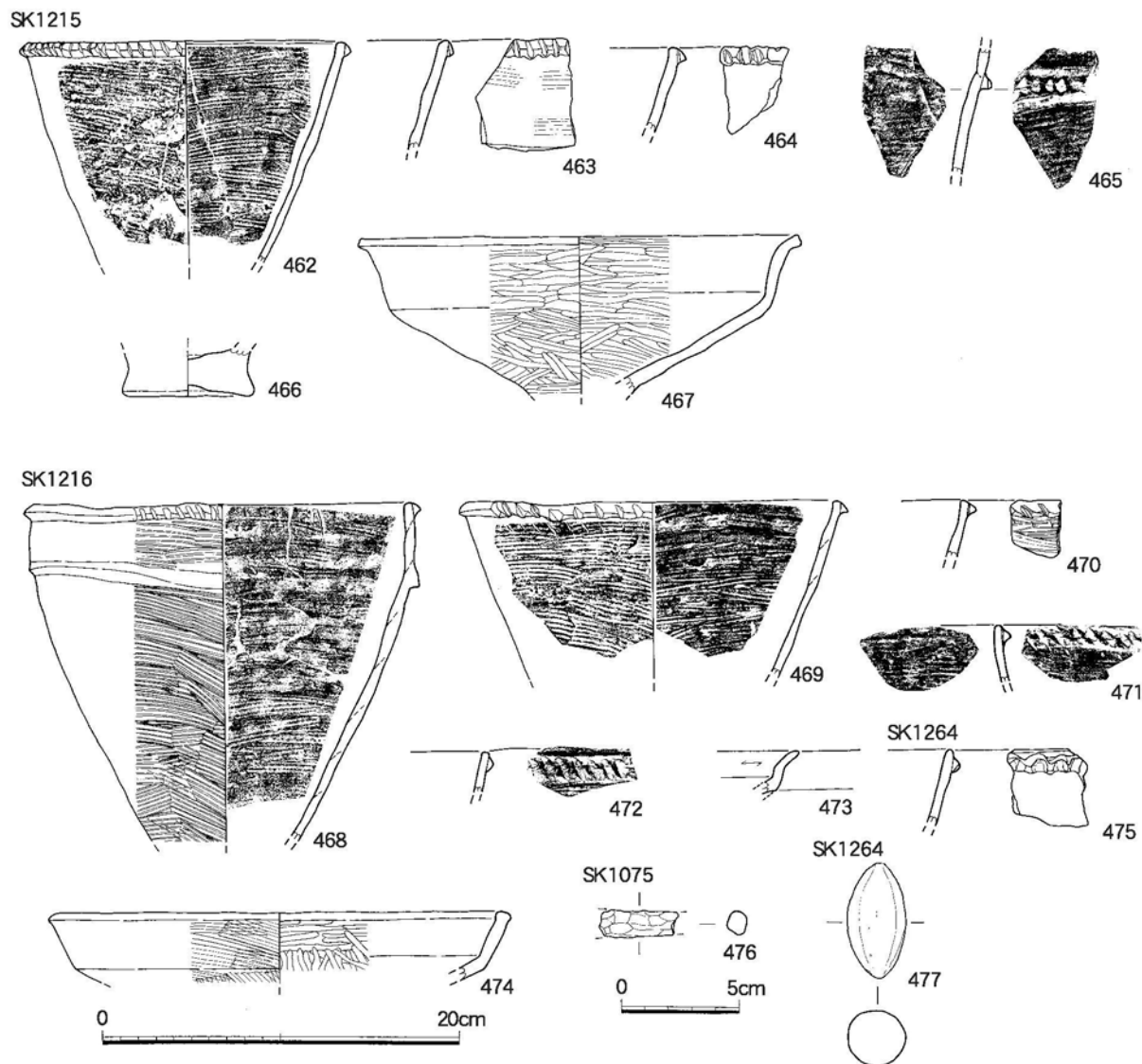


Fig.118 SK1075・1215・1216・1264出土遺物 (1/4・1/3)

色粘土又は粘質土で地山ブロックを混入する。

出土遺物 (Fig.84・117、PL.91・100) 弥生時代後期後半の土器が出土している。

455は弥生時代終末頃の小型壺で、口縁部を一部欠く。調整は外面下半がハケ目、その他はナデ。外面ススが付着する。456は複合口縁壺の口縁部1/12片。調整はナデ。457は底部片。調整はナデで、外面ススが付着する。

W50は薄い板状の木製品。全長25.5cmを測る。円孔が5か所あるが、2か所は未完通。底は狭くなっており、錐などの工具で穿ったものか。下端は細く削って尖らしている。

SX1190 (Fig.110)

H-20区で検出した浅い窪み。図右側は調査時掘り過ぎたので正確ではないが、規模は長軸長約0.65m、短軸長0.6m、深さ0.08mを測る。土器片が底面にまとまって出土した。埋土は黒色粘質土で、灰白色粘土や炭化物を含んでいたが、特に図右側には灰白色粘土が土器の上面全体を覆っていた。

出土遺物 (Fig.117) 弥生時代後期終末頃の土器が出土している。

458は壺頸部1/7片で頸部に突帯が巡る。調整は工具ナデであるが、砂粒が動く。459は丸底の底

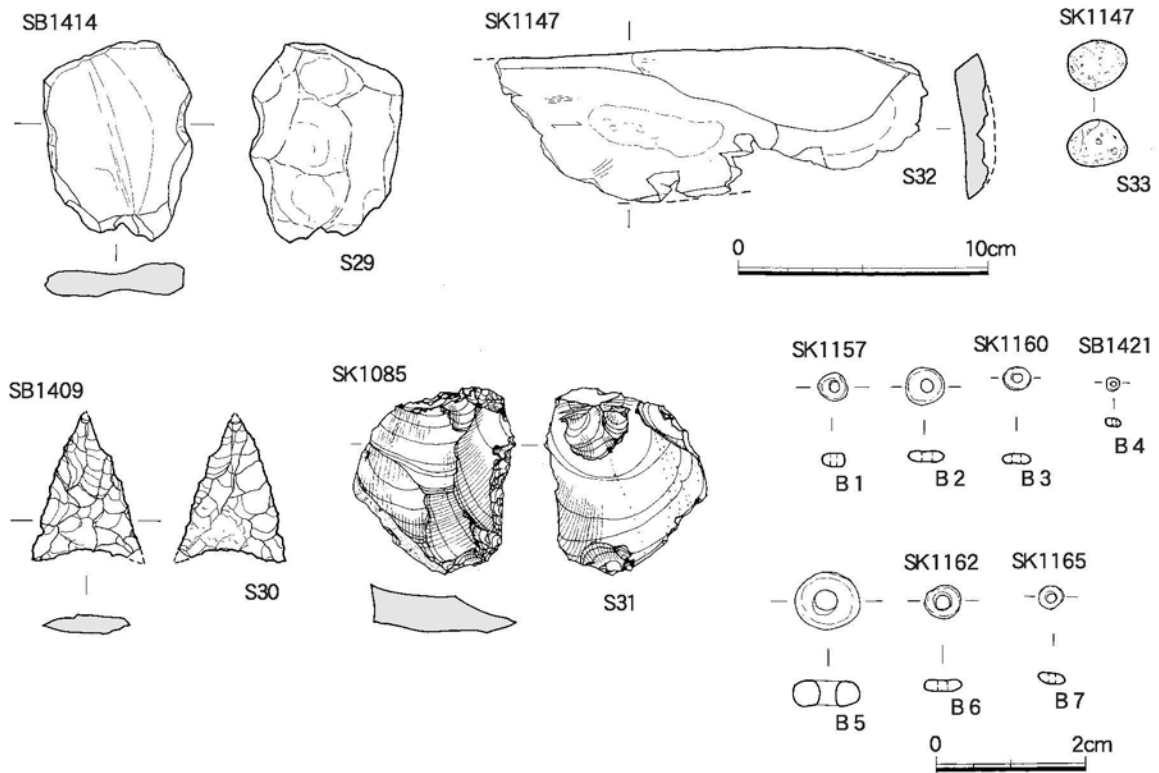


Fig.119 各土坑出土石器・玉類 (1/3・1/1)

部。調整はハケ目、内面はナデ。460は鉢口縁部細片。やや摩滅するがナデで、外面はハケ目がかすかに残る。461は高坏坏部。表面は摩滅が進むが、調整はハケ目。ススが付着する。

SK1203 (Fig.109)

G-22区で検出した長方形の土坑。規模は長軸長1.70m、短軸長1.18m、深さは0.4mを測る。西側と南側にはテラス状の高まりを持つ。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを混入する。

出土遺物 (Fig.123) 弥生時代中期から後期土器片が少量出土している。

493は底部1/2片で、調整はハケ目とナデ。

SK1215 (Fig.110)

I-16区で検出した細長い溝状の土坑。両側を他遺構に切られ不明。確認規模は2.5m、幅は0.92m、深さ0.08mを測る。埋土は黒色粘質土である。底面は凹凸がある。

出土遺物 (Fig.118、PL.91) 弥生時代前期初頭板付I式古段階土器や黒曜石剥片が出土している。

462～465は刻目突帯文土器甕。462は胴下半を欠く。調整は条痕で、刻目はヘラによる。463・464は口縁部細片。463は外面条痕内面ナデ。464の調整はナデ。465は胴部屈曲部細片。刻目突帯が付く。調整は内外面条痕。刻目は463・465はヘラ、464は棒状工具による。466は底部1/2片。調整は外底部ケズリ、その他はナデ。467は黒色磨研の高坏坏部1/4片。

SK1216 (Fig.110、PL.77)

G-10・11区で検出した不整円形状の土坑。規模は長軸長1.60m、短軸長1.56m、深さ0.34mを測る。埋土はオリーブ黒色粘土と灰色粘質シルトなど地山ブロックの混合土である。

出土遺物 (Fig.118、PL.91) 弥生時代前期初頭土器が出土している。

468～473は突帯文土器。468は胴部に屈曲を持つ甕。口縁から胴部1/6片で口縁部と胴部に突帯が巡る。口縁部は刻目突帯である。調整は内外面条痕で、外面にはススが付着する。469は1/2片。

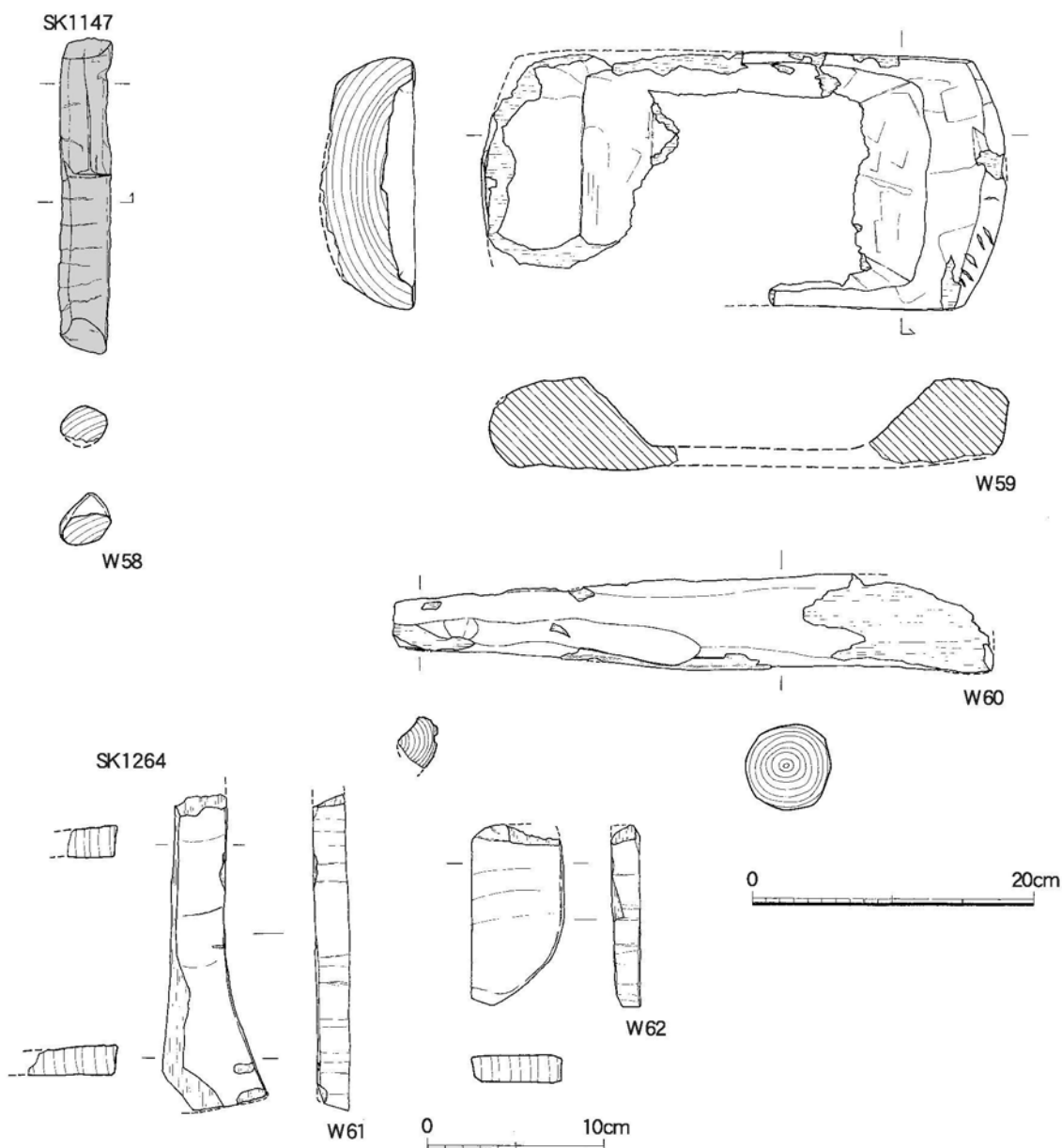


Fig.120 SK1147・1264出土木器 (1/4・1/5)

ヘラによる刻目で、調整は条痕である。外面ススが付着する。470～472は口縁部細片。調整は472がナデの外は、条痕とナデ。刻目はヘラによる。473は浅鉢細片か、研磨調整である。474は高坏口縁部1/8片。調整は外面ハケ目、内面ミガキ。

SK1218 (Fig.110)

G-11区の微高地落ち際で検出した隅丸長方形の土坑。規模は長軸長1.10m、短軸長0.90m、深さ0.60mを測る。埋土は黒色粘土に青灰色から灰色地山粘土ブロック混入。

出土遺物 図示出来るものはないが、弥生土器細片が少量出土している。

SK1220 (Fig.109)

E-20区で不定形の汚れた遺構面から一段下がった所で検出した楕円形を呈す土坑。規模は長軸長1.33m、短軸長1.08m、深さは0.58mを測る。断面を見ると壁面は袋状を呈す。埋土は凸レンズ状に落ち込み、黒色粘質土から粘土で下は粘性強くなる。下は地山粘土ブロック混入。

出土遺物 図示出来るものはないが、弥生土器片が少量出土している。

⑤ 低地部水田遺構と関連遺構

SS1261 (Fig.121、PL.78～80)

調査区南側8～12ライン低地部で検出したものである。埋土は黒色粘土で地山粘土ブロックを混入する。上面に洪水砂などは被っていないが、水田を区画する畔のような高まりと、杭列SX1246・1247を検出しており、足跡などは確認できていないものの、水田の可能性があるので報告する。第6次調査区と第8次調査区微高地上の集落間の低地部に営まれた水田であろうか。

出土遺物 (Fig.78、PL.95) 銅鏃が1点と弥生土器細片がわずかに出土するのみである。

M2は銅鏃で、全長4.6cm、最大幅1.3cmを測る。先端部はケズリ込んでおり、使用によるのか傷んでいる。錆はなく保存状態は良い。

SK1264 (Fig.122、PL.80)

G-8区の低地部の水田と思われる部分で検出した不定形の浅い土坑。規模は長軸長2.15m、短軸長2.0m、深さは0.22mを測る。埋土は黄白色粗砂で、水田に伴う遺構の可能性はある。土坑内から木製品などが出土している。

出土遺物 (Fig.118・120、PL.91・101) 刻目突帯文土器細片や木製品が出土している。

475は刻目突帯文土器細片。調整はナデで、棒状工具による刻目である。外面スガが付着する。477は投弾。調整は丁寧なナデ。

W61・W62は不明木製品。W61は右側面を弧状に削り込んだ板状の製品。表面は丁寧な削り加工であるが、左側面は欠損している。残存長17.9cm、最大幅5.8cm、厚さ1.8cmを測る。W62は表面は傷みがあるが、右側面をカーブ状に丁寧に削り込んだ板材。全長10.2cm、幅5.2cm、厚さ1.6cmを測る。樹種はアカガシの板目材である。

SX1246・47出土遺物 (Fig.128、PL.79・80) W71はSX1246杭列の杭。残存長37.7cmを測る。先端部は削って尖らず。先端部は潰れる。W72はSX1247出土で、柱材転用したと思われる杭。残存長30.7cmを測る。先端部から22cm上部に方形のほぞ孔がある。

⑥ その他の遺構出土遺物 (SX) (Fig.105・123、PL.91・92・94・101・102)

遺構面の汚れや風倒木痕などの自然痕跡、明瞭でない遺構 (SX) からの出土の遺物を報告する。

478～480は遺構面の浅い窪みSX1080出土。いずれも突帯文土器の甕の口縁部や胴部の細片。調整は478が条痕、480がハケ目である。398はSX1091出土。刻目突帯文土器口縁部細片。内外面条痕調整。481・482はSX1116出土。481は甕口縁部1/2片。調整は内外面ハケ目。482は器台口縁部1/6片。調整は外面ハケ目、内面は剥落し調整は不明。483は遺構面の窪みであるSX1117出土の複合口縁壺1/8片。摩滅し調整は不明。484はSX1122出土の底部。調整は摩滅するが、内面ハケ目、外面ハケ目。485・486はSX1153出土。485は甕口縁部1/8片。調整はヨコハケとナデ・ハケ目。486は支脚か。調整は外面板ナデ。内面はナデ。487～489はH-21区のSX1194出土。487は長頸壺の口頸部。調整は外面ハケ目後ヘラミガキ、内面板ナデ上げ後ヨコナデ。488は高坏坏底部。調整は器壁は摩滅するが、ヘラミガキか。489は口縁部がわずかに外折する鉢1/4片。器表は摩滅が進むが、調整はナデか。弥生時代後期中頃のもの。490・491はH-21区のSX1195出土の刻目突帯文土器口縁部細片。器壁の調整は板ナデ。492はSX1081出土。底部1/2片。器壁は摩滅し、調整は不明。弥生時代前期のもの。494はSX1237出土。壺の底部1/3片。器壁は摩滅し、調整不明。495～499はSX1242出土。495は小型壺口縁部1/4片。調整はナデで、口縁部に径0.5cmの円孔が1カ所残る。496は壺、鋤先状口縁1/10片。調整はナデ。497・498は甕底部。いずれも1/3片。調整は497はハケ目とナデ、498はハケ目。499は

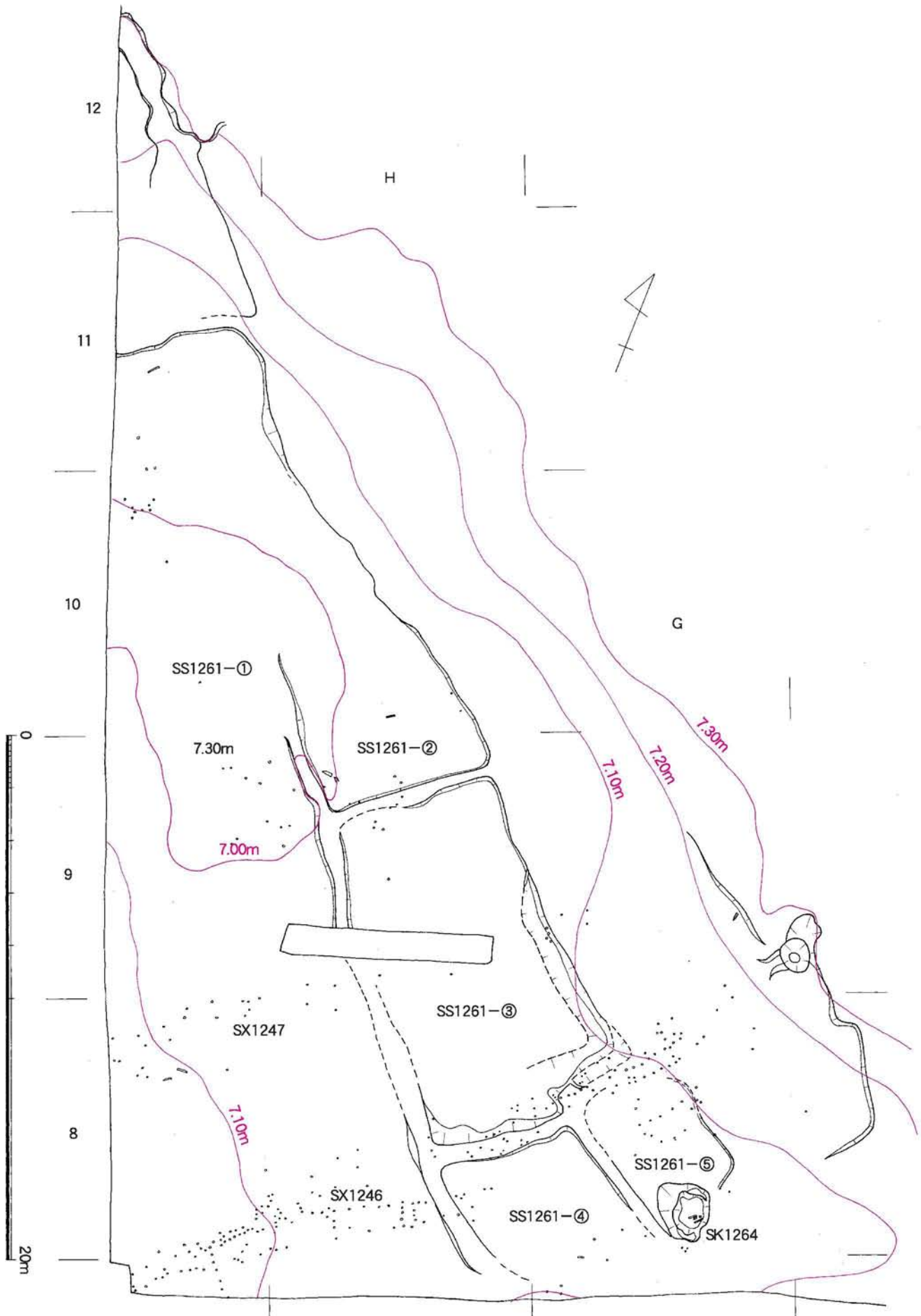


Fig.121 南西側水田遺構検出状況 (1/200)

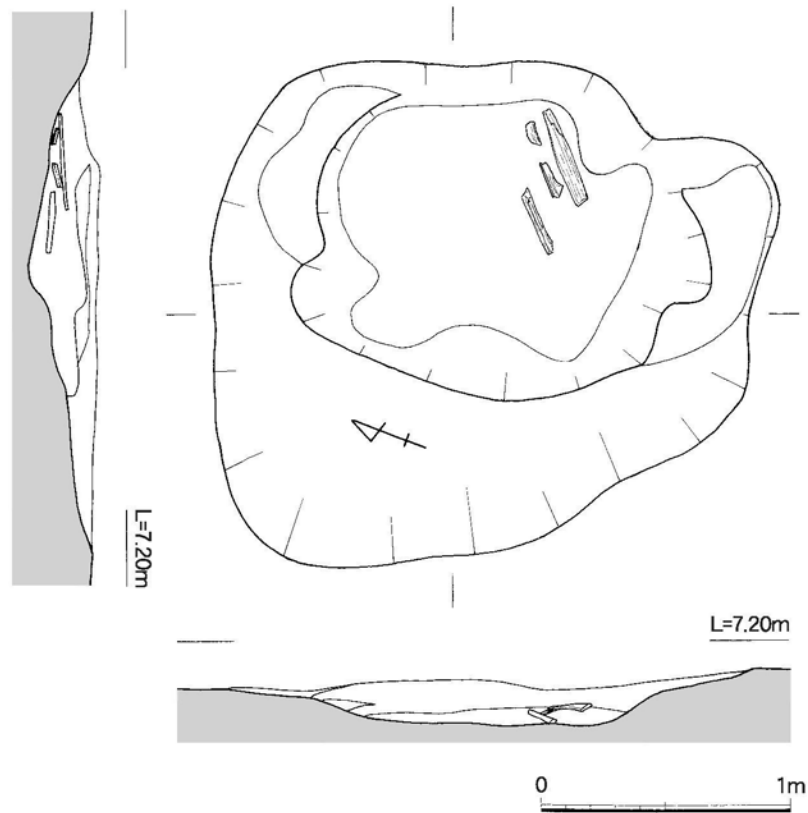


Fig.122 SK1260 (1/30)

土製品の把手。調整は指ナデ、押え仕上げ。

S26はSX1130出土の打製石斧か。全長は11.55cm、最大幅8.0cmを測る。石材は滑石片岩か、蛇紋岩で、縁辺に粗い調整を加える。S27・S28は黒曜石の剥片鏃。鏃身長1.83cm、2.90cmを測る。S27はSX1228出土、S28はSX1231出土。

⑦ ピット・柱穴出土遺物 (SP) (Fig.124~127、PL.91・102)

主なものを図示する。時期は弥生時代前期初頭から古墳時代前期初頭頃である。

500・501はSP 9 出土。500は如意形の甕口縁部 1/10片。口縁端部に刻目が付く。調整は外面タテハケ目、口縁から内面はヨコナデからナデ。外面ススが付着する。501は突帯文土器甕 1/4片。口縁部と胴部に刻目突帯が付く。調整は外面条痕、内面はナデと板ナデ。502はSP45出土。丸底の甕底部。外面ハケ目後板ナデ、内面板ナデ上げ。503はSP78出土。壺口縁部 1/8片。調整は内外面ハケ目後ヨコヘラミガキ。外面部分的に赤色顔料が残る。504はSP126出土。弥生時代初頭の壺か鉢底部片で、調整は板ナデとナデ。505はSP147出土。板付 I 式甕口縁部細片。口縁部端部に刻目が付く。506はSP168出土。突帯文土器の上げ底の底部。調整は外面条痕か板ナデ、底部はハケ目と板ナデ。507はSP337出土。突帯文土器の小型甕で口縁部は 1/5片。底部は高台状で上げ底。口縁部にヘラによる刻目が付く。調整は板ナデとナデ。508はSP339出土。刻目突帯甕口縁部細片。外面雑なハケ目、内面ヨコヘラミガキ。509はSP361出土。やや平底気味の底部で、調整は内外面ハケ目とナデ。510はSP378出土。上げ底の底部。調整はナデ。511はSP384出土。底部で、調整はナデ。512はSP390出土。

壺の口縁部細片。調整はハケ目とナデ。30はSP426出土。鋤先状口縁の壺細片。調整は内外面ハケ目。弥生時代中期後半頃のもの。515はSP432出土。大型の甕口縁部1/10片。調整はナデで、外面丹塗り痕が残る。516はSP469出土。甕の口縁部1/9片。調整は外面から口縁部内面はハケ目、胴部内面はナデ。外面ススが附着する。517はSP486出土。壺胴部1/2片で、頸部と胴部下部に刻目突帯が1条ずつ巡る。頸部の刻目は×字状である。調整は胴部内外面ハケ目、外底部はナデ。518はSP546出土。蓋2/3片で、調整は外面ヘラミガキ、内面は丁寧なナデで工具痕残る。外面丹塗り。519はSP552出土。甕口縁部1/12片。調整は口縁部ヨコナデ。520はSP557出土。甕口縁部1/5片。調整は胴部外面ハケ目、口縁から内面はナデ。521はSP565出土。底部で調整は外面板ナデ、内面はハケ目、底部はナデ。522はSP568出土。突帯文土器口縁細片。調整は外面条痕、内面はナデ。524・525はSP593出土。甕の底部。524は1/2片で調整はナデか板ナデ。525は外面ナデで内面はハケ目。526はSP634出土。手捏の鉢1/2片で器形は歪む。復元口径7.5~8.0cmを測る。527はSP668出土。筒型器台の口縁部か。1/5片で、調整は外面タテヘラによる暗文、内面はナデ。内外面丹塗り痕跡が残る。528はSP674出

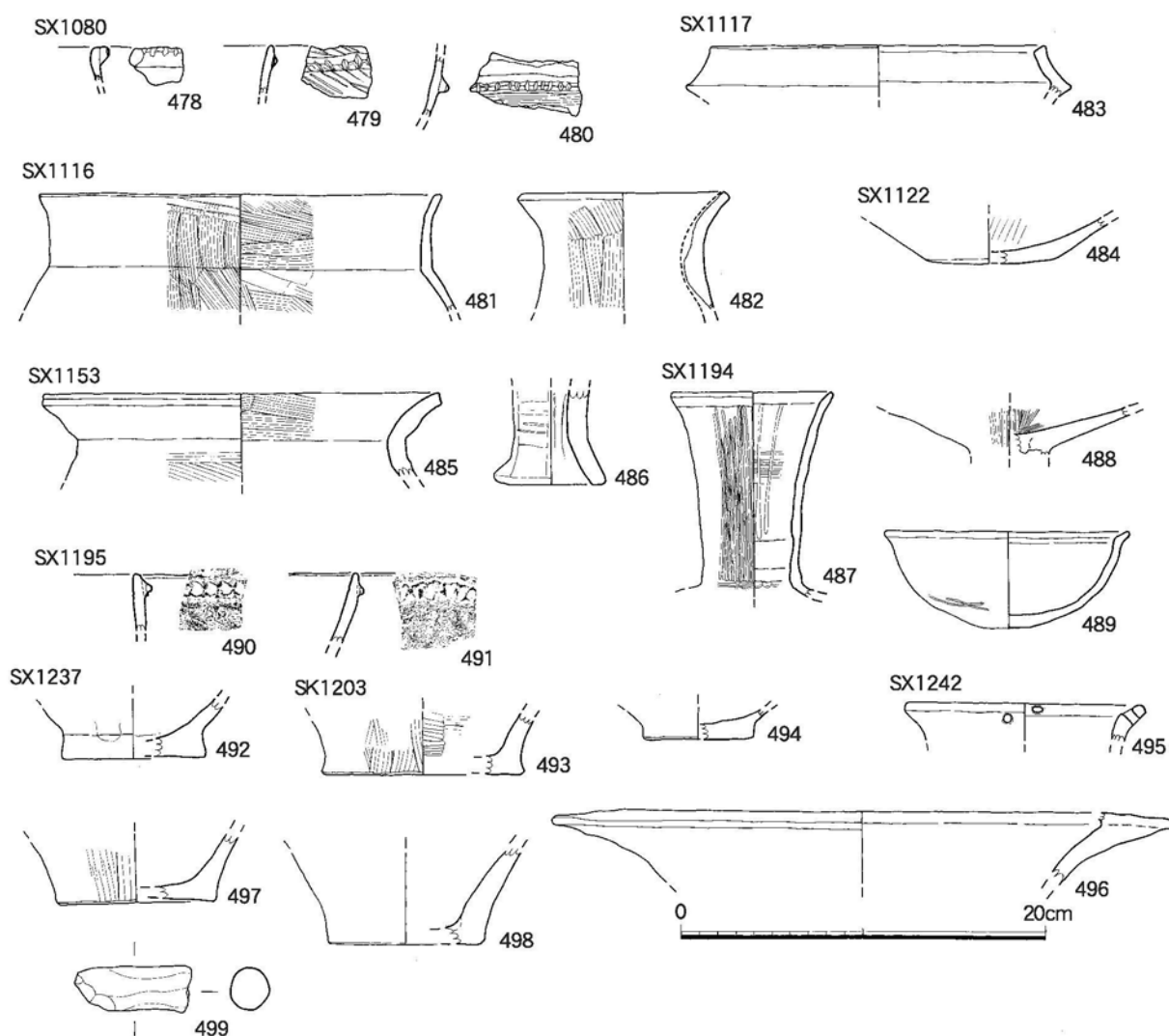


Fig.123 各遺構出土土器 (1/4)

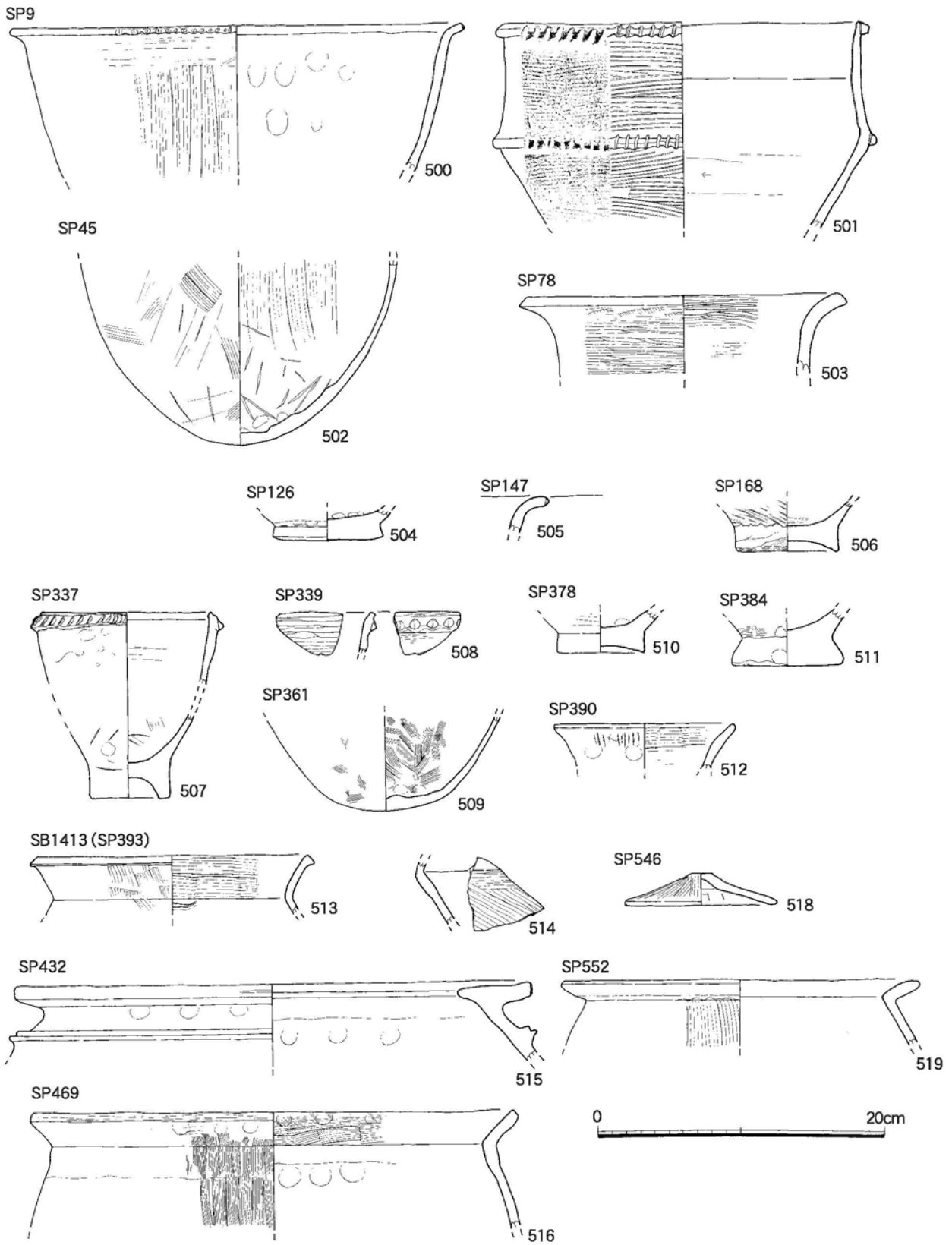


Fig.124 柱穴出土土器① (1/4)

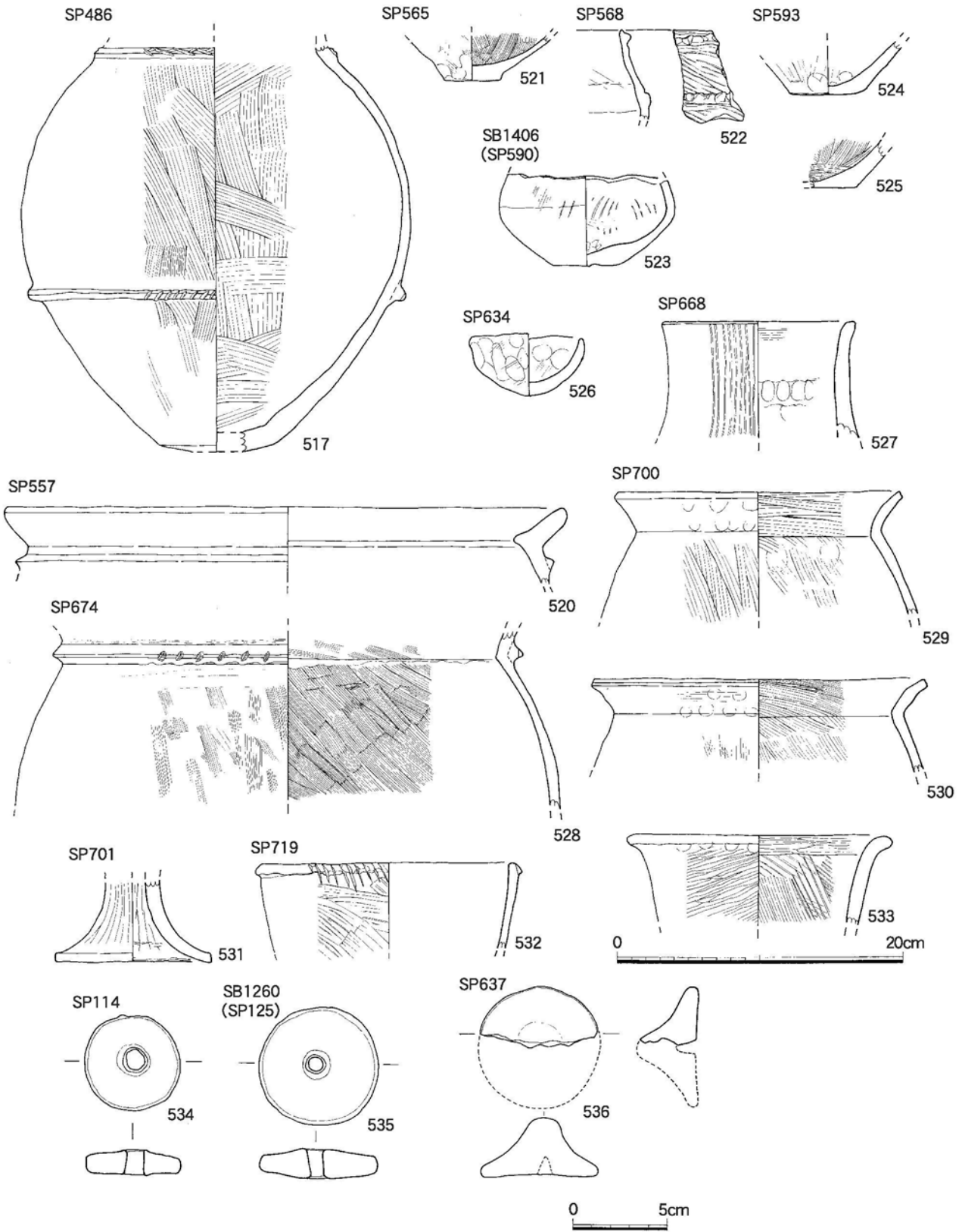


Fig.125 柱穴出土土器② (1/4・1/3)

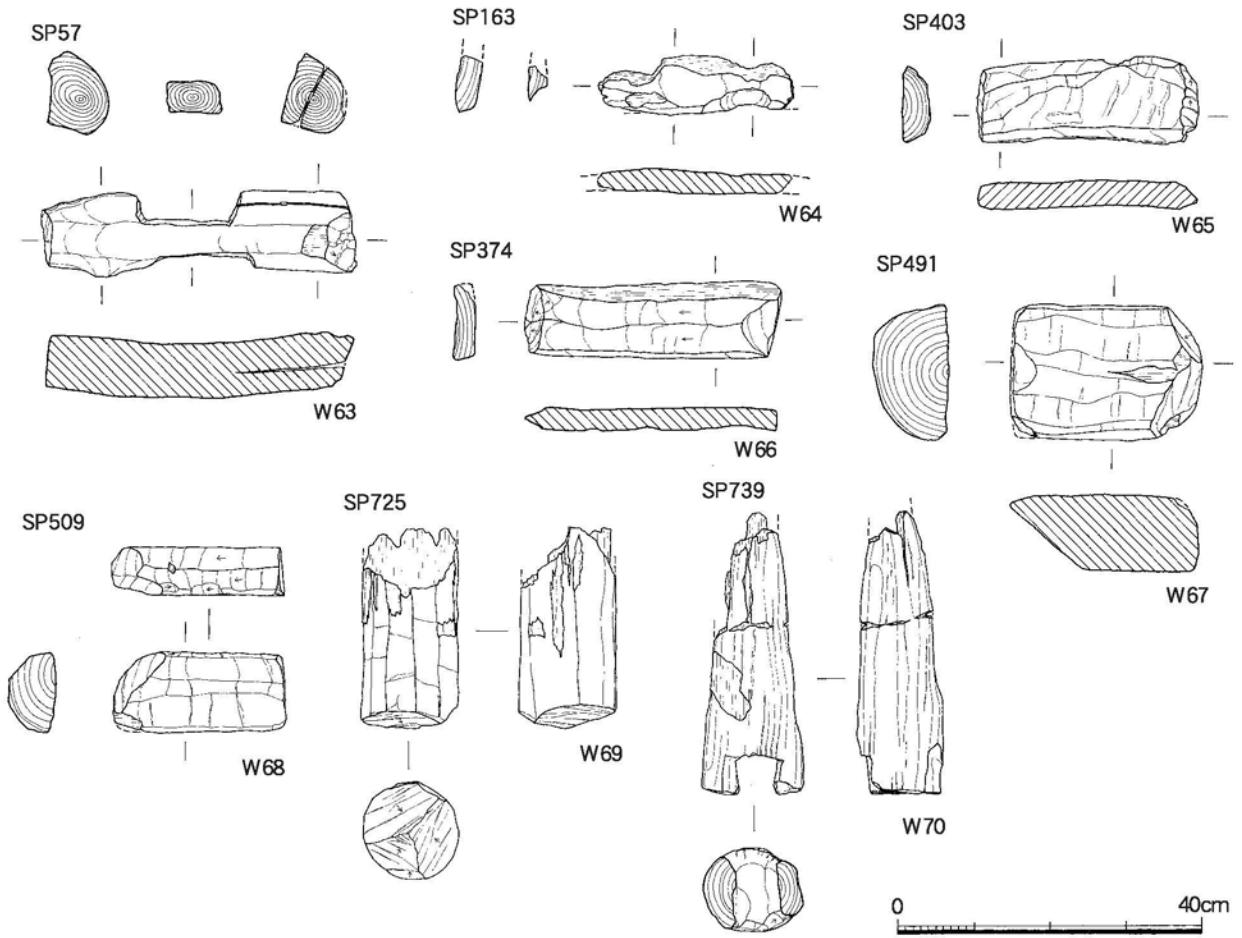


Fig.126 柱穴出土柱・礎板 (1/10)

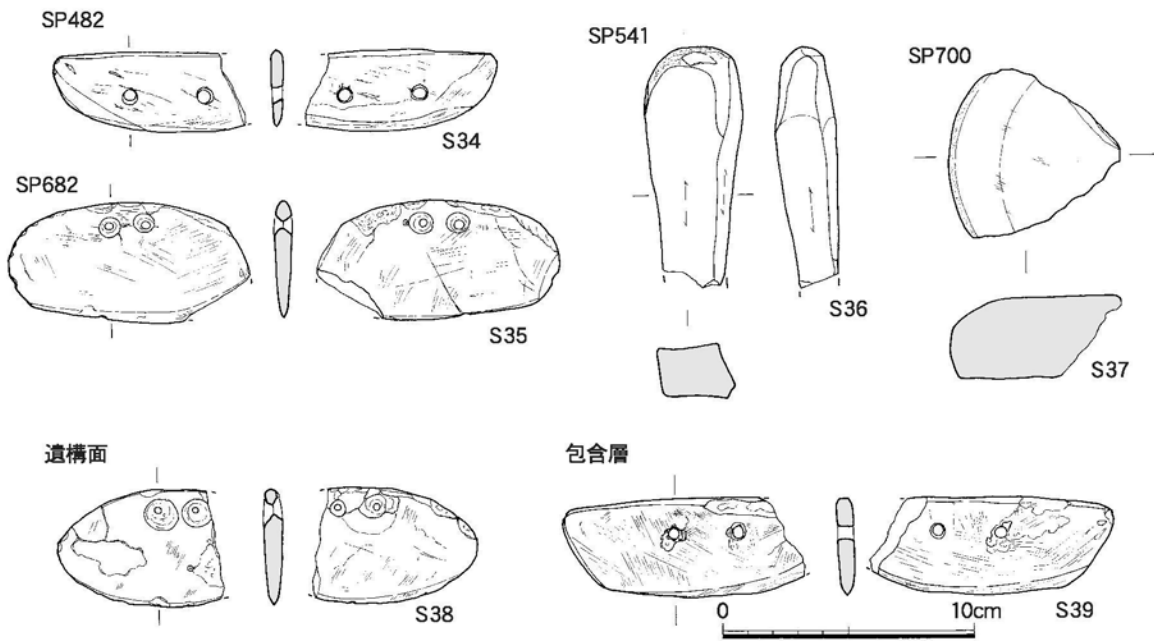


Fig.127 柱穴、遺構面出土石器 (1/3)

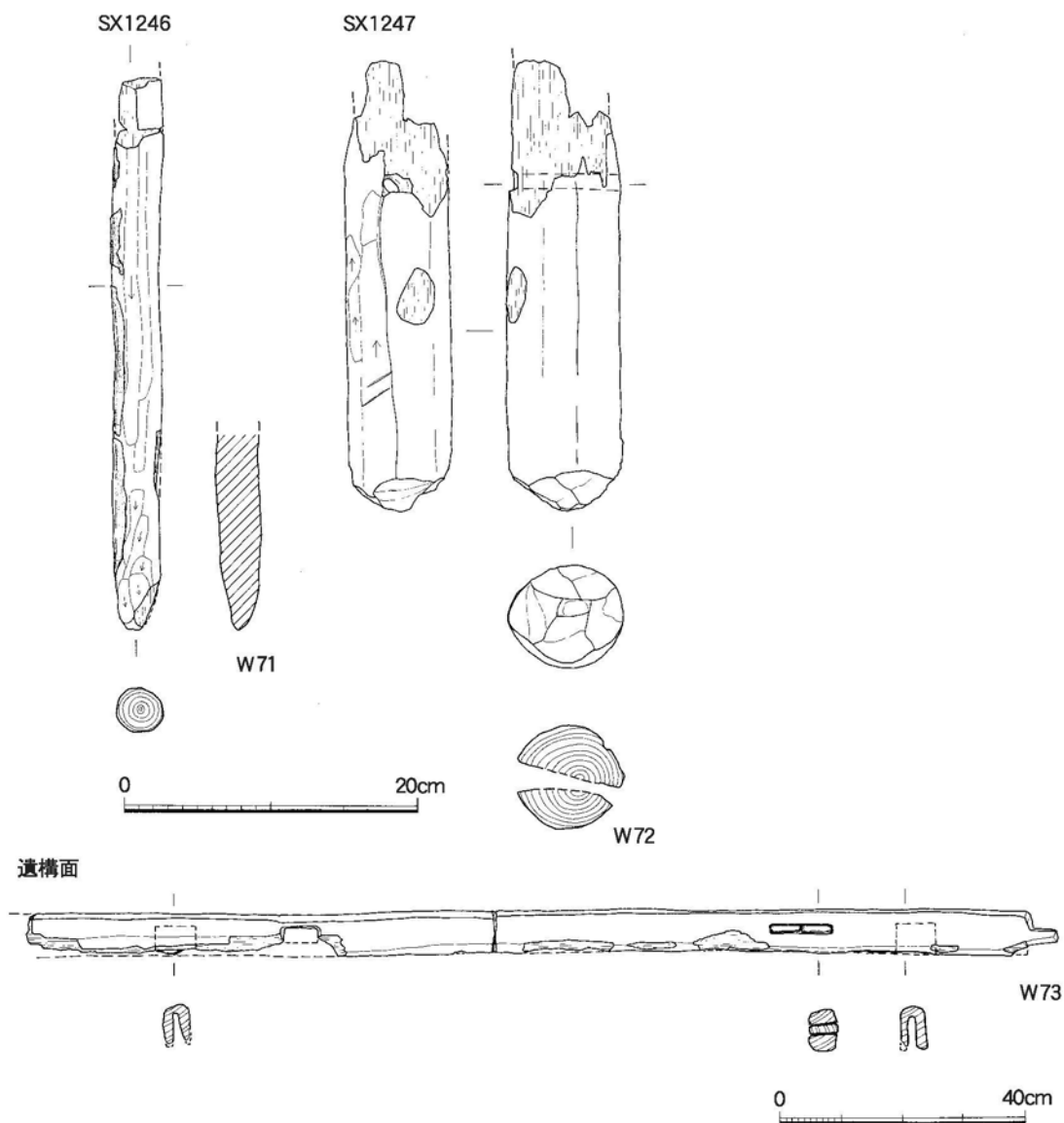


Fig.128 杭列SX1246・1247、遺構面出土木器 (1/5・1/12)

土。甕頸胴部 1/5 片。調整は内外面ハケ目。頸部には突帯が 1 条巡り、木口による刻目が付く。529・530はSP700出土。甕口縁部 1/6 片・1/7 片で、いずれも調整はハケ目とナデ。531はSP701出土。脚部 1/3 片で、調整は外面細かいヘラミガキ、内面はナデ。532・533はSP719出土。532は突帯文土器甕口縁部。口縁にはヘラによる刻目突帯が付く。調整は外面条痕でススが付着し、内面は板ナデ。533は壺口縁部 1/8 片で、調整は内外面ヘラミガキ。内面ハケ目が残る。534は土製紡錘車。534はSP114出土。直径5.0cm、孔径は1.0cmを測る。調整は丁寧なナデ。536はSP637出土。中央部が丸く高くなる山形の円形土製品。1/2 弱残り、直径6.2cm、高さ3.1cmを測る。底面には未完通であるが、孔が空く。調整は丁寧な磨き。

S34はSP486出土の外湾刃半月形の石包丁片。残存長7.6cmを測る。紐孔が 2 か所あり、その間隔は 3.0cmを測る。研磨調整であるが、かなり磨り減る。S35はSP682出土の杏仁形石包丁。残存長9.6cmを測る。研磨調整であるが、使用による欠損・摩滅が進む。S36はSP541出土の砥石片。残存長9.5cmを測る。4面が使用されている。石材は粘板岩か泥岩。S37はSP700出土の磨石片。上面は丁寧な擦り、石材は玄武岩。

W63～W70は建物としてまとめ切れなかった各柱穴出土の礎板と柱。詳細は遺物観察表Tab. 4を

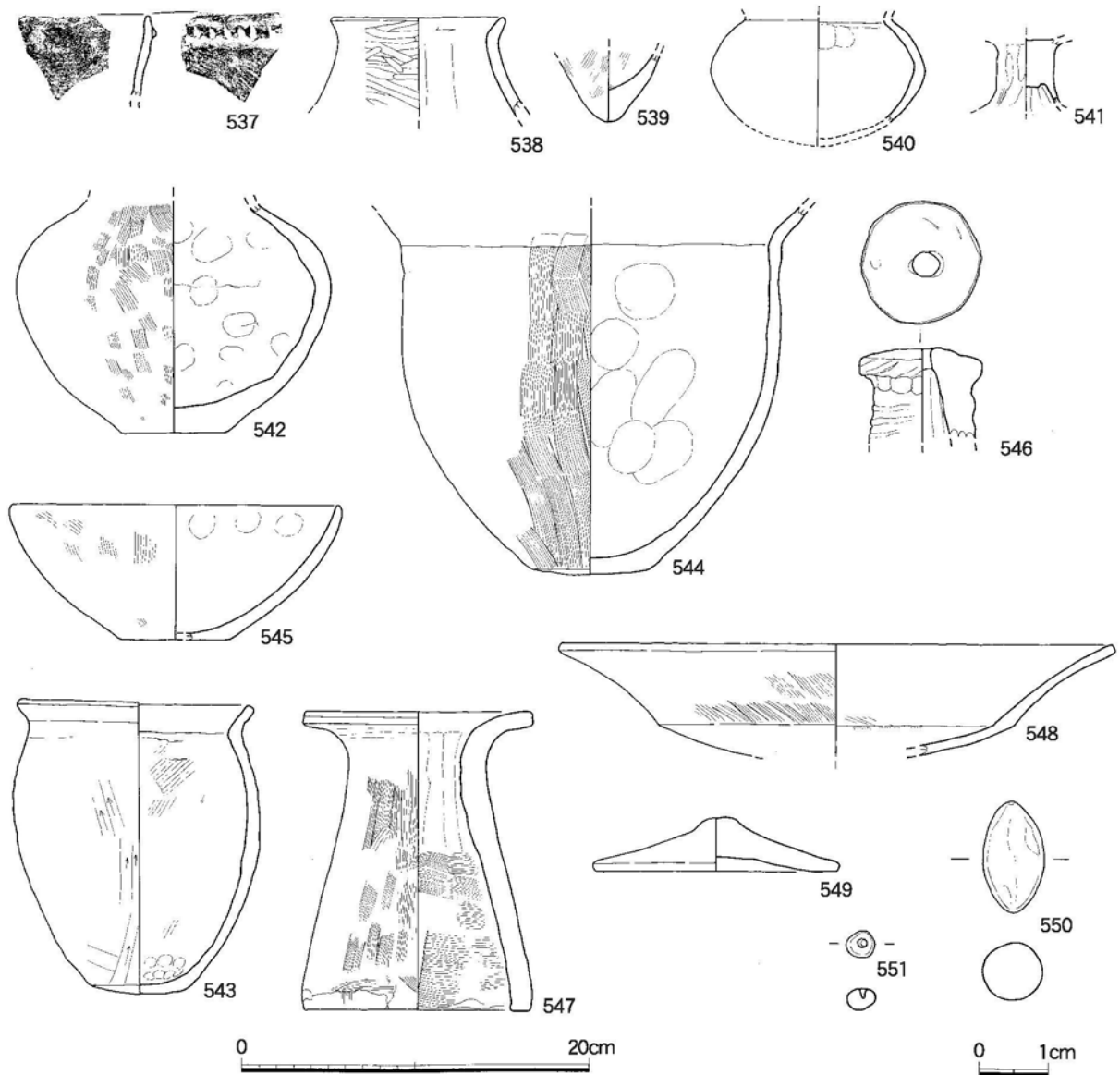


Fig.129 包含層・遺構面出土土器 (1/4・1/1)

参照のこと。

⑧ 包含層・遺構面出土遺物 (Fig.127~130、PL.92・95・102)

537・538はSK1160周辺出土。537は突帯文土器口縁部細片。ヘラによる刻目が付き、調整は条痕。538は壺口縁部1/4片。調整はヘラミガキとナデ。539はI-20区遺構面出土。器壁が厚手の尖底部分。調整は内外面ハケ目後ナデ。540・541は包含層SX1149出土。いずれも古墳時代前期の土師器。540は壺の胴部1/4片。調整はナデ。541は高坏脚部。調整はヘラケズリ後ナデでハケ目を加える。542~546はI-13区包含層出土。542は壺1/2片。調整は外面ハケ目後ナデ、内面はナデで粘土帯の痕跡が残る。543・544は甕。543は小型で1/4~1/6片。復元口径13.6cmを測る。調整は外面板ナデ、内面はハケ目後ナデ。外面ススが付着する。544は口縁部を欠く1/3片。調整は胴部ハケ目、口縁から内面・底部はナデ。545は鉢4/5片で、器壁は摩滅するが、外面ハケ目後ナデ。546は支脚の頂部。頂部径6.9cmを測る。頂部には1.4×1.6cmの円孔がある。調整は体部タタキ、頂部は摩滅する。547はH-17区遺構面出土。器台3/4片で、調整は体部ハケ目、口縁部はヨコナデ。548は調査区西壁出土。

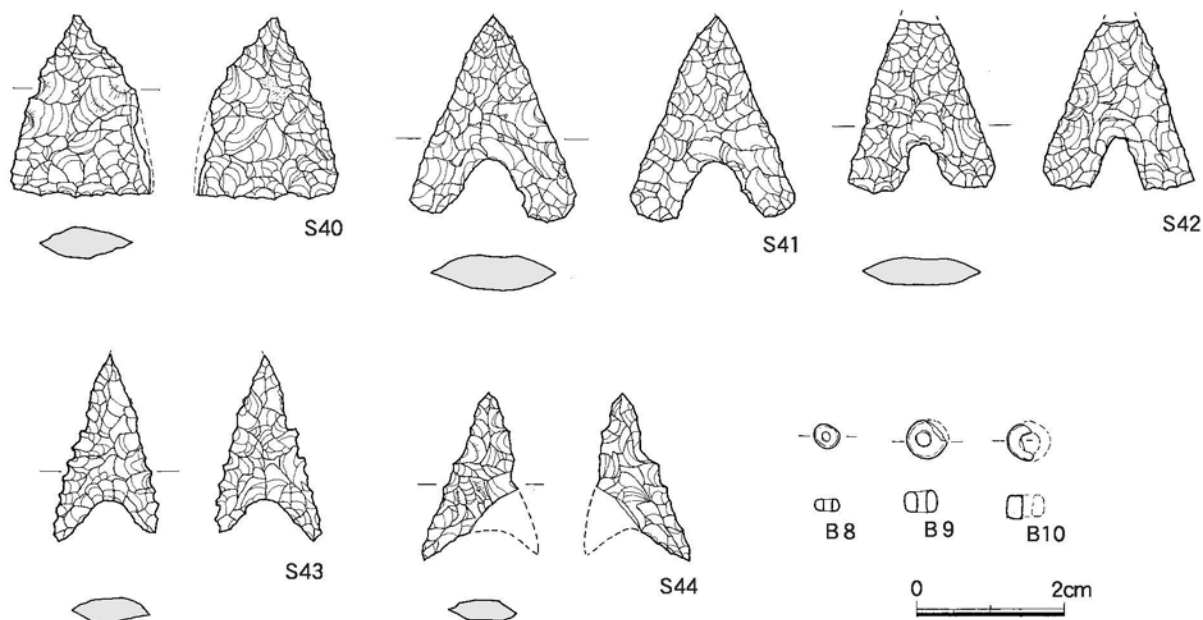


Fig.130 各遺構出土石器・玉類 (1/1)

高坏坏部 1 / 5 片。器壁は摩滅するが、外面ハケ目。549はD-21区遺構面出土。口縁端部を大半欠く蓋。調整は丁寧なナデ。裾に紐 1 対の円孔が斜めにあく。550はI-19区出土。投弾で長さ4.8cm、直径2.6cmを測る。調整は丁寧なナデ。551はH-20区出土。円形の土玉か、直径1.1cm、厚み0.9cmを測る。上面には直径0.4cmの孔が開くが貫通していない。全体に摩滅がひどい。

S38はI-19区遺構面。杏仁形石包丁片で、残存長6.6cmを測る。研磨仕上げであるが、全体に傷みが激しい。2カ所の紐孔があるが、間隔は中心で1.5cmを測る。S39はI-13区包含層。外湾刃半月形石包丁片。残存長9.6cmを測る。調整は研磨仕上げで、2カ所の紐孔間は2.5cmを測る。S40～S44は黒曜石の石鏃。

W73は断面長方形の建築部材。残存長167.7cmを測る。右端にホゾ、左端や側面には貫孔がある。全体に丁寧なケズリ。

Tab.4 第三面遺物観察表

土器・土製品観察表

報告番号	Fig.	PL.	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)()は復元・残存				胎土	色調	焼成	残存状況	備考
						口径・長さ	胴径	底径・幅	器高・厚さ					
1	57		SB1249(SP200)		弥生土器・甕		頸部径 13.0		5.5	精良	黒褐色	良好	胴部1/4	
2	57		SB1250(SP687)		弥生土器・甕			8.2	3.2	1mm以下砂粒混入	灰黄褐色	良好	底部1/2	
3	57		SB1250(SP194)		弥生土器・鉢	(10.0)			3.3	2mm以下砂粒混入	灰黄色	良好	口縁1/6	
4	57	81	SB1251(SP6)		弥生土器・壺	(11.8)			12.2~12.4	1mm以下砂粒混入	鈍い黄橙色	良好	1/2	V様式系
5	57		SB1253(SP351-352)		弥生土器・器台			(17.0)	3.4	2mm以下砂粒混入	鈍い黄橙色	良好	底部1/8	
6	57	81	SB1254(SP375)		弥生土器・甕	11.2	14.95		13.7	1mm以下砂粒少量混入	鈍い橙色～鈍い赤褐色	良好	ほぼ完存	
7	57		SB1254(SP375)		弥生土器・甕	(15.6)			4.3	2mm以下砂粒少量混入	鈍い黄橙色	良好	口縁細片、 脚部1/8	
8	57		SB1254(SP371)		弥生土器・甕				12.0	3mm以下砂粒混入	鈍い褐色	良好	胴部1/6	
9	57		SB1254(SP371)		ミニチュア土器・鉢	(7.8)			5.8	2mm以下砂粒多量混入	褐灰色	良好	1/4	
10	57		SB1256(SP30)		弥生土器・器台			(12.6)	6.1	2mm以下砂粒多量混入	鈍い黄橙色	良好	細片	
11	57		SB1257(SP311)		弥生土器・甕	(18.2)			3.3	2mm以下砂粒多量混入	黒褐色	良	口縁細片	
12	57		SB1257(SP311)		弥生土器・高坏	(14.0)			2.5	2mm以下砂粒多量混入	鈍い褐色	良好	脚部1/10	

下月限C遺跡

報告 番号	Fig.	PL	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)()は復元・残存				胎 土	色 調	焼成	残存状況	備 考
						口径 ・長さ	胴径	底径・備	器高 ・厚さ					
13	57		SB1258(SP262)		弥生土器・高坏			(17.0)	4.1	精良	鈍い橙色	普通	脚部1/8	丹塗り
14	57		SB1259(SP77)		突帯文土器・甕				2.6	2mm以下砂粒多量混入	明褐色	不良	口縁細片	
15	57		SB1259(SP77)		突帯文土器・甕				1.8	精良	鈍い褐色	良好	口縁細片	
16	57		SB1260(SP127)		突帯文土器・甕				3.8	1mm以下砂粒少量混入	黒色	良好	口縁細片	
17	57		SB1260(SP649)		弥生土器・甕？ 壺？			(10.6)	3.7	2mm以下砂粒多量混入	鈍い黄褐色	良好	底部1/4	
18	57		SB1401(SP318)		弥生土器・甕				3.0	2mm以下砂粒混入	褐灰色	良好	口縁細片	
19	57		SB1401(SP318・ 319)		弥生土器・甕				2.1	精良	鈍い黄褐色	良好	口縁細片	
20	57		SB1401(SP318)		弥生土器・甕	(16.0)			2.2	2mm以下砂粒混入	灰黄褐色	良好	口縁1/12	
21	57		SB1404(SP316)		弥生土器・甕				3.1	2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	口縁細片	
22	57		SB1404(SP316)		弥生土器・高坏	(27.8)			3.4	精良	鈍い黄褐色	良	口縁1/10弱	
23	57		SB1404(SP316)		弥生土器・鉢				2.1	1mm以下砂粒少量混入	浅黄褐色	良好	口縁細片	
24	57		SB1405(SP14)		突帯文土器・甕			6.8	2.6	3mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	底部1/3	
25	57		SB1406(SP15)		弥生土器・甕				3.1	2mm以下砂粒混入	褐灰色	良好	口縁細片	
26	57		SB1406(SP193)	北側	弥生土器・壺			頸部径 (20.0)	4.3	2mm以下砂粒多量混入	鈍い橙色	良好	頸部1/12位	
27	57		SB1409(SP103)		弥生土器・甕				4.7	精良	灰白色	良	口縁細片	
28	57		SB1409(SP103)		弥生土器・甕				3.0	1mm以下砂粒混入	灰褐色	普通	口縁細片	
29	57		SB1416(SP529)		突帯文土器・鉢				3.3	3mm以下砂粒混入	褐灰色	良好	口縁細片	
30	57		SP426		弥生土器・壺				4.7	2mm以下砂粒混入	鈍い橙色	良好	細片	
31	57		SB1420(SP623)		弥生土器・甕	17.2			3.7	2mm以下砂粒混入	鈍い褐色	良好	口縁1/5	
32	57	81	SB1420(SP534)		弥生土器・甕	(8.8)			15.0	5mm以下砂粒多量混入	褐灰色～黒色	良好	1/2	
33	61		SB1421(SK1161)		弥生土器・壺				2.8	砂粒多量混入	褐色を帯びた灰色	良好	口縁細片	
34	61		SB1421(SK1161)		弥生土器・甕			(8.8)	4.2	砂粒多量混入	薄い褐色	良好	底部1/3	
35	61		SB1421(SK1161)		弥生土器・甕			(9.0)	2.5	砂粒多量混入	鈍い赤褐色	良好	底部1/6	内面炭化物付着
36	65	81	SD818 9区	上層	弥生土器・甕	(11.8)			12.0	3mm以下砂粒多量混入	鈍い黄褐色	良好	1/4	
37	65	31	SD818 9区	上面	土師器・甕	17.2			26.6	精良	褐灰色	良好	口縁全周、 体部1/2	
38	65		SD818 9区	上層	ミニチュア土器・ 鉢	(11.6)			7.5	1mm以下砂粒混入	灰黄褐色	良好	1/9	
39	65		SD818 9区	上層	弥生土器・壺	(15.0)			5.5	1mm以下砂粒混入	灰黄褐色	良好	口縁1/5	
40	65		SD818 9区	中層・下層粘土	弥生土器・壺	(20.0)			14.2	2mm以下砂粒混入	灰褐色	良好	口縁細片、 頸部1/3弱	
41	65		SD818 9区	中層～下層	弥生土器・壺	(12.0)			6.0	1mm内外砂粒少量混入	黒色	良好	口縁1/4	
42	65		SD818 9区	1号ベルト中層	弥生土器・高坏				13.6	精良	鈍い褐色	良好	脚部片	径1cmで2ヶ1対の孔
43	65		SD818 9区	中層・下層粘土	弥生土器・鉢	(24.0)			4.6	2mm以下砂粒混入	にふい黄褐色	良好	1/10	黒色にいふして研磨か？
44	65		SD818 9区	中層・下層粘土	弥生土器・鉢	(21.0)			6.6	2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	口縁1/5	
45	65	81	SD818 9区	中～下層R 5・6	弥生土器・鉢	(44.0)			21.0	3mm以下砂粒多量混入	灰褐～灰黄褐色	良好	口～脚部 1/10	
46	65		SD818 9区	下層	弥生土器・壺	(10.0)			5.3	精良	淡褐色	良好	口縁1/6	
47	65		SD818 9区	下層	弥生土器・壺				5.5	精良	鈍い黄褐色	良好	頸部1/3	
48	65		SX1213 3区	下部砂礫中	弥生土器・壺	(21.2)			13.5	1～2mm粗砂多量混入	灰黄褐色	良好	口縁1/4	
49	66		SD818 9区	下部砂礫中	弥生土器・甕	(23.2)			8.0	1mm内外砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	口縁1/4	
50	66		SD818 9区	最下層	弥生土器・高坏			脚径 16.8	5.2	精良	灰黄褐色	普通	脚部1/4	
51	66	81	SD818 9区	下部砂礫中	ミニチュア土器・ 鉢	7.0			3.7	精良	鈍い黄褐色	良好	3/4	
52	66	81	SD818 9区	下部砂礫中	弥生土器・鉢などの 脚台			脚径 9.3	4.0	1～2mm粗砂多量混入	灰褐色	良好	3/4	
53	66		SD818 9区		弥生土器・壺	15.2			5.5	4mm以下砂粒多量混入	鈍い褐色	良好	口縁1/4	
54	66		SD818 9区		弥生土器・甕			4.0	8.5	2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	底部	外面スス付着
55	66		SD818 9区		ミニチュア土器・ 鉢	6.5		2.3	3.6	4mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	ほぼ完存	
56	66		SD818 9区		弥生土器・鉢	(23.1)		7.6	18.8	3mm以下砂粒多量混入	鈍い黄褐～灰黄褐色	良好	1/2	
57	66		SD818 9区		土師器・器台				13.0	4mm以下砂粒多量混入	褐灰色	良好	1/2弱	
58	66	81	SD818 9区		弥生土器・器台				16.3	砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	体部完存	
59	66		SD818 9区		土師器・支脚	受部径 8.7		(4.3～ 5.7)	5mm以下砂粒混入	灰褐色	良好	受部と下方 1/2	頂部に円孔あり	
60	67	81	SD818 10区	中層～下層	土師器・壺	(13.0)	(17.9)		12.75	1mm以下砂粒少量混入	浅黄褐～黒褐色	良好	口縁1/4～ 脚部2/3	
61	67		SD818 10区		弥生土器・壺	14.7			4.5	1mm内外砂粒多量混入	浅黄褐～灰灰色	良好	口縁～肩部	2次被熱
62	67	81	SD818 10区		弥生土器・壺	(12.5)			10.5	1mm内外砂粒多量混入	浅黄褐色	良好	口縁と体部 上半1/4	
63	67		SD818 10区		弥生土器・壺	(20.4)			7.0	1mm内外砂粒混入	鈍い黄褐色	良好	口縁1/4	
64	67		SD818 10区		弥生土器・壺	(22.0)			5.9	1mm内外砂粒少量混入	鈍い黄褐色	良好	口縁1/4	
65	67		SD818 9区	下層底面粗砂 +同 10区	弥生土器・壺	(27.2)			11.1	精良	灰黄褐～鈍い黄褐色	良好	口縁1/4	
66	67	82	SD818 10区		弥生土器・甕	12.5	15.3		12.4	1mm以下砂粒少量混入	灰黄褐～暗灰色	良好	ほぼ完存	

報告 番号	Fig.	PL	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)()は復元・残存				胎土	色調	焼成	残存状況	備考
						口径・長さ	胴径	底径・備	器高・厚さ					
67	67		SD818 10区		土師器・甕	(17.6)	26.2		22.5	1mm以下砂粒少量混入	灰黄褐～黒色	良好	口縁1/3～ 胴部1/6	布留式
68	67		SD818 10区		土師器・甕		(25.3)		14.2	3mm以下砂粒少量混入	明褐～鈍い褐色、黒色	良好	胴部～底部	
69	67		SD818 10区	中層～下層	弥生土器・甕	(20.8)			6.95	2mm以下砂粒多量混入	鈍い黄橙～鈍い黄褐色	良好	口縁1/4	
70	67	82	SD818 10区		弥生土器・甕	(21.0)			19.7	1mm以下砂粒多量混入	鈍い褐～黒色	良好	口縁～胴部 1/4	2次被熱
71	67	82	SD818 10区		弥生土器・甕	(20.8)			17.5	2mm以下砂粒多量混入	鈍い赤褐～灰褐色	良好	1/3	強い2次被熱
72	68		SD818 10区		弥生土器・甕	(16.2)			18.4	2mm以下砂粒多量混入	浅黄橙色	良好	胴部1/2弱 ～口縁1/8	
73	68		SD818 10区	下層粘土と接合	弥生土器・甕	(23.5)			9.2	1～4mm砂粒多量混入	鈍い橙色	普通	口縁1/6	
74	68	82	SD818 10区		弥生土器・甕	(22.8)			21.2	1～2mm粗砂少量混入	灰黄褐色	良好	口縁～胴部 1/3	炭化物が付着か?
75	68		SD818 10区	SX1280と接合	弥生土器・甕	(35.4)			6.15	1mm内外砂粒多量混入	鈍い黄橙～鈍い橙色	良好	口縁1/6	
76	68		SD818 10区	東側落降最下層	弥生土器・高坏	30.2			8.6	1mm内外砂粒少量混入	鈍い橙～オリーブ黒色	良好	口縁1/7	
77	68		SD818 10区		弥生土器・高坏	(34.6)			6.2	細砂少量混入	鈍い黄橙～鈍い橙色	良好	口縁1/7	
78	68		SD818 10区		弥生土器・高坏				14.0	精良	灰褐色	良好	胴部	
79	68		SD818 10区		弥生土器・器台	(14.3)			14.1	1～3mm砂粒多量混入	鈍い橙～褐灰色	良好	口縁1/4	
80	68	82	SD818 10区		弥生土器・甕型器台	頭部径 5.8	頭部長 8.55	脚径 11.1	9.5	3mm以下砂粒多量混入	浅黄橙～灰色	良好	完存	
81	68		SD818 10区	下層粘土	弥生土器・壺	(17.5)			6.1	1～3mm砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	口縁1/8	
82	68		SD818 10区	下層(SX1269 上面)	弥生土器・甕	(14.3)			6.1	1mm以下砂粒少量混入	鈍い褐色	良好	頭部1/4	
83	68	82	SD818 9区	上層・10区中層 ～下層	土師器・高坏	25.5			11.7	2mm以下砂粒多量混入	鈍い褐色	良好	口縁1/2	
84	68		SD818 10区	下層砂	弥生土器・高坏	(18.6)			3.75	1mm以下砂粒少量混入	橙～浅黄橙色	良好	口縁1/5	
85	68		SD818 10区	下層	弥生土器・鉢	(15.2)			3.3	1～2mm粗砂少量混入	褐色	良好	口縁1/8	
86	68		SD818 10区	下層粘土	弥生土器・壺	(8.6)	(9.8)		5.2	精良	鈍い橙色	良好	口縁～胴部 1/4	朝鮮系土器の可能性あり
87	68		SD818 10区	下層	弥生土器・器台	(15.2)			7.2	1mm内外砂粒多量混入	鈍い黄褐色	良好	口縁1/5	
88	68	82	SD818 10区	下層砂	弥生土器・器台	(15.6)			17.6	1mm以下砂粒少量混入	にぶい黄橙～灰黄褐色	良好	胴部1/2弱	
89	69	82	SD818 10区	最下面	弥生土器・壺	(20.2)			12.5	3mm以下砂粒やや多量混入	にぶい黄橙色	良好	口縁1/4	
90	69	82	SD818 10区	最下面	弥生土器・壺		頭部径 (13.9)		12.1	1mm以下砂粒少量混入	赤褐～橙色	良好	頭部1/2弱	丹塗り
91	69		SD818 10区	最下部砂層	弥生土器・甕	(33.3)			9.9	1mm以下砂粒少量混入	にぶい橙色	良好	口縁～頭部 1/7	
92	69		SD818 10区	東側落降最下層	弥生土器・高坏	(30.4)			3.3	3mm以下砂粒やや多量混入	にぶい黄橙～黒色	良好	口縁1/12	
93	69		SD818 10区	東側落降最下層	弥生土器・高坏			脚径 (6.5)	6.5	精良	灰黄褐色	良好	胴部1/6	
94	69		SD818 11区		弥生土器・壺	9.5			7.9	1mm以下砂粒多量混入	にぶい橙色	良好	口縁～頭部 1/2	
95	69		SD818 11区		弥生土器・壺	(19.4)			5.0	2mm以下砂粒多量混入	褐灰色	良好	口縁部細片	粘土貼付管状文・口縁部2段の波状文
96	69		SD818 10区	中層～下層	弥生土器・甕	(34.4)			18.2	1～2mm粗砂多量混入	黒～黒褐色	良好	口縁～胴部 2/3	
97	69		SD818 11区		弥生土器・甕			8.8	21.45	2mm以下砂粒多量混入	にぶい橙～にぶい黄褐色	良好	底部～胴部 1/3	
98	69	82	SD818 11区	1号ベルト上層 +SD1131	弥生土器・甕	(12.6)		5.4	(12.9)	3mm以下砂粒少量混入	にぶい黄橙～暗灰色	良好	口縁～胴部 上半部4次損	
99	69	82	SD818 11区		弥生土器・鉢	15.1	16.6		13.7	1mm以下砂粒少量混入	にぶい黄橙～黒色	良好	ほぼ完存	
100	69		SD818 11区		弥生土器・鉢	(15.0)			6.0	1mm以下砂粒少量混入	にぶい黄橙色	良好	口縁1/6	
101	69	82	SD818 11区		ミニチュア土器・鉢	6.5			3.3	1～2mm以下砂粒混入	褐灰色	良好	ほぼ完存	
102	69		SD818 10区	東落降下層 +11区	弥生土器・鉢	(25.6)			5.6	精良	褐灰色	堅微	口縁1/6	
103	69		SD818 11区		弥生土器・鉢	(25.6)			7.0	精良	淡橙～灰褐色	良好	1/10	
104	69	82	SD818 11区		弥生土器・支脚?			脚径 9.6	9.9	3mm以下砂粒少量混入	にぶい黄橙～褐灰色	良好	胴部	
105	70		SD818 11区	下層+SD1210 最下層・1号ベルト +2区下層	弥生土器・甕	(47.8)			15.2	1mm以下砂粒多量混入	灰黄褐～オリーブ黒色	良好	口縁～頭部 1/10	
106	70	82	SD818 11区	下層と接合	弥生土器・甕	(60.0)			20.1	2mm以下砂粒多量混入	灰黄色	良好	口縁1/3強	
107	70		SD818-11区	下層	弥生土器・甕				12.6	2mm以下砂粒混入	灰褐色	良好	底部1/3弱	
108	70		SD818-11区	下層砂層	弥生土器・高坏	(32.6)			7.2	精良	灰褐色、やや橙色	良好	坏部1/7	
109	70		SD818-11区	下層	土師器・鉢	(13.1)			5.25	2mm以下砂粒少量混入	にぶい褐色	良好	口～体部 1/4	
110	70		SD818-11区	下層	弥生土器・器台	(16.4)			14.8	3mm以下砂粒やや多量混入	灰黄褐色	良好	口～胴部上 半1/2弱	
111	70		SD818-9区	上層	奈良系土器・筒型 坏		(7.2)		2.5	砂粒混入	灰白色	やや軟	細片	径が広がる可能性あり
112	70		SD818-9区	中層～下層	弥生土器・壺		(9.4)		2.4	精良	褐灰色	良好	底部1/3	木の葉圧痕あり
113	70		SD818-10区	下層砂	弥生土器・壺			7.0	2.9	1mm以下砂粒少量混入	灰黄褐～黒色	良好	底部	
114	70		SD818-9区	上層	弥生土器・壺		(8.2)		2.9	1mm以下砂粒混入	灰白色	普通	底部1/2	木の葉圧痕あり
115	70		SD818-10区		弥生土器・壺			9.5	3.95	2mm以下砂粒多量混入	にぶい橙色	良好	底部	
116	70		SD818-11区	下層	弥生土器・壺			9.3	3.4	4mm以下砂粒少量混入	にぶい橙色	良好	底部	木の葉圧痕あり
117	72	83	SD818-3区		土師器・甕	頭部径 (13.3)	(23.1)		21.6	2mm内外砂粒少量混入	浅黄橙～黒色	良好	胴部1/2	筑前型庄内甕
118	72		SD818-4区	上層粘土	弥生土器・甕				18.9	1～4mm粗砂多量混入	にぶい橙色	やや不良	底部	
119	72	83	SD818-7区	下層粘土	弥生土器・甕	(17.2)			9.2	1mm以下砂粒少量混入	橙～黒色	良好	口縁～胴部 1/3	
120	72	83	SD818-5-2区	上層砂	弥生土器・高坏			脚径 (20.6)	20.65	1mm以下砂粒少量混入	にぶい黄橙～黒褐色	良好	胴部、胴部 1/6	

報告 番号	Fig.	Pl.	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量 単位 cm				胎土	色調	焼成	残存状況	備考
						口径・長さ	胴径	底径・幅	器高・厚さ					
121	72	88	SD18-6区	南側下層砂層	弥生土器 器台	188			20	2mm以下砂粒少量混入	にぶい橙色	良好	脚部欠損	
122	72		SD18-7区	下層砂層	弥生土器 鉢	(68)	102		6.35	2~3mm砂粒少量混入	にぶい橙~黒色	良好	/5	
123	72		SD18-7区	下層砂層	ミニチュア土器 鉢				4.6	2~3mm砂粒少量混入	にぶい黄橙~黒褐色	良好	細片	
124	72		SD18-7区	下層砂層	ミニチュア土器 鉢	(67)		(40)	4.5	1mm内外砂粒多量混入	にぶい黄~黒褐色	良好	/4	
125	73	88	SD18-9区	下層	土製品 サジ	88		28	10	粗砂少量混入	褐灰色	良好	把手	
126	73		SD18-9区	下層底面粗砂	土製品 サジ	88		78	12	粗砂少量混入	褐灰色	良好	把手	
127	73	88	SD18-10区	上層	土製品 サジ	89		49	18	2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	把手	
128	73	88	SD18-11区	下層	土製品 サジ	100		53	18.5	5mm以下砂粒少量混入	灰黄褐色	良好	把手	
129	73	88	SD18-11区	下層	土製品 サジ	88		30	22	2mm以下砂粒多量混入	にぶい黄橙色	良好	把手	
130	73		SD18-11区	東側壁際	土製品 サジ	65		31	26	2mm以下砂粒多量混入	灰白色	良好	把手	
131	73	88	SD210-3区	SD18-9区川底 下	土製品 サジ	90		36	19	砂粒少量混入	暗灰黄色	良好	把手	
132	74		SD210	下層粗砂 +SD18-9区	弥生土器 壺	(260)			60	2~3mm砂粒多量混入	灰黄色	良好	口縁 /6	
133	74		SD210-2区	2号ベルト SD18-8底層	弥生土器 壺	(246)			5.5	2~3mm砂粒多量混入	灰黄色	良好	口縁 /6	
134	74		SD210-3区		弥生土器 壺				9.3	砂粒多量混入	淡黄褐色	良好	頸部~胴部	
135	74		SD210-2区	SD18-10川底 下層下	弥生土器 壺				5.5	砂粒多量混入	灰褐色	良好	頸部~胴部 /4	
136	74		SD210	下層粗砂	弥生土器 壺	(222)			50	2~2mm砂粒多量混入	褐灰~黒褐色	良好	口縁 /6	
137	74		SD210-3区	SD18-9の川底 下	弥生土器 壺	(474)			116	2~3mm砂粒多量混入	灰黄色	良好	口縁 /6	
138	74	88	SD210	SX277	弥生土器 壺	最大約 470			332	砂粒少量混入	黄褐~灰褐~黒色	不良	頸部~胴部	
139	75		SD210-3区	下層	弥生土器 高坏	(276)			50	緻密	黄赤褐色	良好	口縁 /6	
140	75		SD210-3区	SD18-9の川底 下	弥生土器 高坏				40	2~2mm砂粒多量混入	にぶい黄橙~にぶい 黄褐色	良好	胴部 /6	
141	75		SD210-3区		弥生土器 高坏				147	細砂少量混入	黄褐~灰黄褐色	良好	柄と脚部 欠損	
142	75		SD210-3区	下層	弥生土器 高坏	(154)			5.9	砂粒多量混入	灰黄~黄灰色	良好	脚部 /4	
143	75		SD210-3区	下層	弥生土器 甗				70	砂粒多量混入	赤味帯びる	良好	底部 /6	孔径 cm位
144	75		SD210-3区	下層	土師器 鉢	(110)			5.9	砂粒少量混入	灰黄褐色	不良	/6	
145	75		SD210-2区	最下層粘土の露 出	土師器 鉢	(180)			6.3	2~2mm砂粒多量混入	灰黄色	良好	/6	
146	75		SD210-2区	2号ベルト SD18-8底層	弥生土器 鉢	(260)			5.2	2~2mm砂粒多量混入	にぶい黄橙色	良好	口縁 /6	
147	75		SD210	砂粗砂	土師器 鉢	(196)			9.7	精良	灰黄褐色	良好	口縁 /6	
148	75		SD210	上層粘土	弥生土器 鉢			(136)	40	細砂多量混入	赤味を帯びた 灰褐色	良好	/6	
149	75	88	SD210-3区	下層	弥生土器 器台	(176)			11.9	砂粒多量混入	灰褐~暗灰褐色	良好	上部 /4	
150	75		SD210-3区		弥生土器 器台	126			11.5	1mm内外砂粒多量混入	淡灰褐~暗灰色	良好	口縁 /4と 脚部欠損	
151	75	88	SD210-3区	SD18-9区 SX277	弥生土器 器台			樽径 (186)	16.7	2~2mm砂粒多量混入	暗褐~黒色	良好	脚部 /4、上 部 /4	
152	75	88	SD210-2区		弥生土器 器台	(150)			9.1	2~3mm砂粒多量混入	灰白~浅黄褐色	良好	底部片	
153	75		SD210		弥生土器 器台			樽径 (164)	14.2	細砂多量混入	灰褐色	良好	/4	か所穿孔あり
154	75	88	SD210	最下層粗砂	奈良系土器 筒型 杯			(80)	1.5	緻密	灰~黄灰色	良好	底部 /4	
155	75		SD210-3区	下層	突帯文土器 甗				5.5	砂粒多量混入	黄回褐色	良好	細片	
156	75		SD210	最下層粗砂	弥生土器 鉢				4.1	2~2mm砂粒多量混入	暗灰黄色	良好	口縁片	
157	75		SD210-3区		弥生土器 甗				7.3	2~3mm砂粒多量混入	にぶい黄橙色	良好	底部	
158	75	88	SD210		弥生土器 高坏	(258)			10.8	2~2mm砂粒多量混入	黄褐~褐色	良好	坏部 /3	
159	82		SX269	下層砂層	弥生土器 壺	(190)			8.6	精良	橙色	良	口縁 /6	
160	82		SX269	周辺	弥生土器 壺	(250)			10.5	3mm以下砂粒多量混入	灰黄色	良好	口縁 /5	
161	82		SX269	R-1	弥生土器 壺	(164)			18.1	3mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	/4	
162	82		SX269	下層砂層	弥生土器 壺	182			7.0	精良	灰黄褐色	良好	口縁 /10	
163	82		SX269	周辺	弥生土器 壺			頸部径 (220)	9.7	2mm以下砂粒多量混入	黄灰色	良好	頸部 /7	
164	82		SX269	周辺	弥生土器 高坏	250			50	精良	にぶい黄橙色	良好	体部 /10	
165	82		SX269	下層砂層	弥生土器 高坏				13.2	精良	にぶい黄橙色	良好	脚部全周	
166	82		SX269	周辺	弥生土器 高坏			樽径 (200)	6.7	精良	灰褐色	良	脚部 /2	
167	82		SX269	+SD278-3区	弥生土器 高坏			樽径 (168)	7.9	1mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	脚部 /4	
168	82		SX269	周辺	弥生土器 高坏			樽径 (182)	4.7	精良	灰白色	良好	脚部 /6	
169	82		SX269	周辺	弥生土器 高坏			樽径 (166)	30	精良	にぶい黄褐色	良好	脚部 /30	柄が丹塗りか?
170	82		SX269	下層砂層	弥生土器 鉢?				3.2	1mm以下砂粒混入	暗灰黄色	良好	底部全周	
171	82		SX269	周辺	突帯文土器 甗	(166)			70	精良	にぶい橙色	良好	口縁 /6	
172	82		SX269	周辺	突帯文土器 甗				30	精良	にぶい黄褐色	良好	細片	
173	82		SX269	周辺	突帯文土器 甗				4.7	2mm砂粒少量混入	灰黄褐色	良好	細片	外面ス付着
174	83		SX262-4区	上層	弥生土器 壺			頸部径 (133)	2.3	2mm以下砂粒少量混入	浅黄橙~橙色	良好	頸~胴部 /6	

報告 番号	Fig.	PL	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)()は復元・残存				胎土	色調	焼成	残存状況	備考
						口径・長さ	胴径	底径・備	器高・厚さ					
175	83		SX1262 1区		弥生土器・甕	(18.7)			4.1	1mm内外砂粒多量混入	灰褐色	良好	口縁1/7	
176	83		SX1262 1・2区		弥生土器・甕	(43.8)			8.2	1~3mm砂粒多量混入	にぶい橙色	良好	口縁1/8	
177	83		SX1262	下層砂層	手捏土器・鉢	(11.0)			3.0	砂粒少量混入	にぶい黄橙~褐色	良好	口縁1/7	
178	83		SX1262 1区	上層	弥生土器・鉢	(21.4)			6.6	1mm以下砂粒少量混入	灰褐色	良好	口縁1/10	
179	83	84	SX1262 1区		弥生土器・高坏		軸部径 4.5		14.1	0.5~2mm砂粒少量混入	浅黄橙色	良好	脚軸~环底部	
180	83	84	SX1263 2区	下層粗砂	弥生土器・壺		(17.7)		7.75	1mm以下砂粒少量混入	黒色	良好	脚部1/4	
181	83		SX1263 2区	杭列内(SD1210 3区)	弥生土器・壺	(20.7)			5.75	2mm以下砂粒少量混入	灰白色	良好	口縁1/5	
182	83	84	SX1263 2区	下層粗砂	弥生土器・壺	(11.6)			5.7	3mm以下砂粒少量混入	にぶい橙色	良好	口縁1/8	
183	83		SX1263	粗砂層	弥生土器・甕	(21.4)			8.1	3mm以下砂粒やや多量混入	にぶい橙色	良好	口縁1/8	
184	83	84	SX1263 2区	R 1・2+SX1267 下層粗砂	弥生土器・甕	(47.5)			23.3	2mm以下砂粒多量混入	浅黄橙色	良好	口縁~脚部 1/8	酸化鉄分付着
185	83		SX1263 2区	杭列内(SD1210 3区)	弥生土器・甕			(6.6)	4.35	3mm以下砂粒少量混入	にぶい黄橙色、にぶい褐色	良好	底部1/4	
186	83		SX1263 2区	下層粗砂	弥生土器・高坏	(34.4)			5.7	精良	にぶい橙色	良好	口縁1/10	
187	83	84	SX1263 2区		弥生土器・器台	14.4			14.95	1~4mm粗砂多量混入	にぶい褐色	良好	脚部欠損	
188	83	84	SX1263 2区	杭列内(SD1210 3区)	弥生土器・鉢	(23.4)			7.9	2mm以下砂粒少量混入	浅黄橙色	良好	口縁1/8	
189	85		SX1267	粗砂	弥生土器・壺				4.3	2mm以下砂粒少量混入	黄灰色	良好	1/10	
190	85		SX1267	粗砂	弥生土器・甕	(21.0)			10.2	1mm以下砂粒少量混入	黒褐色	良好	口縁1/8	
191	85		SX1267	下層粗砂	弥生土器・甕	(23.2)			7.3	2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	口縁1/6	
192	85		SX1267	粗砂・下層粗砂	弥生土器・高坏	(16.6)	最大 20.6		7.5	精良	明黄褐~にぶい黄橙色	良好	口縁1/3	
193	85		SX1267	粗砂	弥生土器・高坏	(29.2)			4.5	精良	にぶい橙色	良好	口縁1/10弱	
194	85		SX1267	下層粗砂	弥生土器・鉢?	(18.8)			5.6	2mm以下砂粒混入	黒色	良好	口縁1/5	外面黒塗り
195	85	84	SX1267	下層粗砂	弥生土器・甕	(16.2)	(19.0)		12.9	1mm内外砂粒少量混入	橙~灰褐色	良好	口縁~脚部 1/4	
196	85	84	SX1267	下層粗砂・粗砂	弥生土器・鉢	(25.4)			6.5	1mm以下砂粒混入	灰黄色	良好	口縁1/3	
197	85		SX1267	杭下	弥生土器・鉢	(14.8)			3.4	2mm以下砂粒混入	灰黄褐色	良好	口縁1/10	
198	85	84	SX1267		弥生土器・器台	受部径 15.6			14.4	2mm砂粒多量混入	橙~にぶい褐色	良好	脚部と器部 の一部	
199	85		SX1267	粗砂	土製品・円板	7.35		7.4	1.9	1~2mm砂粒多量混入	オリーブ黒色	普通	完存	
200	86		SX1212 3区		弥生土器・壺				3.9	4mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	底部	
201	86		SX1214		弥生土器・壺		屈曲部径 (27.2)		3.5	2mm以下砂粒混入	橙色	良好	口縁1/12	
202	86		SX1214		弥生土器・高坏			脚部径 (18.2)	4.9	1mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	器部1/3	
203	86	84	SX1214	下層(SD818 10区の下)	弥生土器・器台	受部径 (20.0)			17.3	3mm以下砂粒多量混入	黄灰色	良好	口縁~脚部 1/6	
204	86		SX1270	2号ベルト	弥生土器・甕	(12.7)			4.7	2mm以下砂粒多量混入	鈍い黄橙色	良好	口縁1/7	
205	86		SX1270	上層粗砂	弥生土器・甕	(19.6)			5.6	1mm以下砂粒多量混入	鈍い褐色	良好	口縁1/8弱	
206	86		SX1270	上層粗砂	弥生土器・高坏		屈曲部径 5.2		5.7	1mm以下砂粒多量混入	灰黄色	良好	屈曲部のみ	
207	86		SX1272		弥生土器・鉢	(26.0)			7.0	2mm以下砂粒多量混入	鈍い黄橙色	良好	口縁1/7	
208	86		SX1272		弥生土器・器台				15.7	3mm以下砂粒多量混入	鈍い黄橙色	良好	口縁~脚部 1/3	
209	86		SX1275 2区	最下層灰色の粗砂	土器器・小型丸底壺		最大 8.0		5.3	砂粒多量混入	灰黄色	良好	1/4	
210	86		SX1275 2区	粗砂	弥生土器・壺	(27.4)			5.5	砂粒多量混入	明褐色	良好	口縁1/8弱	
211	86		SX1275 3区	+SX1277	弥生土器・甕	(19.2)			10.0	砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	口縁1/6	
212	86		SX1275	2号ベルト粗砂層	弥生土器・甕	(22.4)			8.5	砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	口縁1/6	
213	86		SX1275 2区	最下層灰色の粗砂	弥生土器・甕	(26.0)			3.7	砂粒多量混入	暗黄褐色	良好	口縁1/4	
214	86		SX1275 2区		弥生土器・甕	(26.2)			15.0	砂粒多量混入	黒褐色	良好	口縁1/4弱	
215	86		SX1275	2号ベルト粗砂層	弥生土器・壺?		脚径 (3.1)		2.2	砂粒多量混入	灰黄色	良好	底部1/4	
216	86	84	SX1275 2区		弥生土器・器台	12.6			15.5	砂粒多量混入	浅黄橙色	良好	口縁部	
217	86		SX1275 3区		土製品・円盤	3.5		3.5	0.8	2mm以下砂粒多量混入	褐色	良好	完存	土器片利用
218	87		SX1276		弥生土器・甕	(13.0)			10.5	砂粒多量混入	黒褐~淡褐色	良好	脚部1/6	
219	87		SX1276	下層砂層	土器器・壺				8.7	1mm内外砂粒多量混入	黄~赤褐~暗褐色	良好	底部全周	
220	87		SX1276	下層砂層	弥生土器・壺			11.0	11.4	1~2mm砂粒多量混入	淡黄褐色	不良	底部3/4	
221	87		SX1276	下層砂層	弥生土器・器台	(15.0)			8.7	1mm内外砂粒多量混入	黄~暗褐色	良好	口縁1/4	
222	87		SX1276	下層砂層	弥生土器・器台		屈曲部径 (3.4)		13.2	砂粒多量混入	明~暗褐色	不良	上半1/2	
223	87		SX1277		土器器・壺			13.2	4.6	細砂少量混入	灰褐色	良好	脚部1/6	
224	87		SX1277		土器器・高坏? 鉢?	(23.2)			7.5	砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	口縁1/4~ 1/6	
225	87		SX1280		弥生土器・甕				22.1	砂粒多量混入	黄~灰~暗黄褐色	良好	底部付近	黒褐色付着あり
226	87	84	SX1280		弥生土器・器台	8.3		(16.0)	17.6	1~2mm砂粒多量混入	灰褐色	良好	1/3	
227	90		SD1088		突帯文土器・甕				6.0	2~3mm以下砂粒少量混入	褐色	良好	口縁部破片	
228	90		SD1088		突帯文土器・甕				2.3	精良	褐色	普通	細片	

報告 番号	Fig.	PL	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm) ()は復元・残存				胎土	色調	焼成	残存状況	備考
						口径 ・長さ	胴径	底径・備	器高 ・厚さ					
229	90		SD1088		突帯文土器・甕				2.8	4mm以下砂粒多量混入	鈍い橙色	普通	細片	
230	90		SD1088		突帯文土器・甕				2.2	2mm以下砂粒多量混入	灰褐色	良好	細片	
231	90		SD1093		弥生土器・壺	(11.6)			6.7	3mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色～褐色	良好	口縁～胴部 1/3	
232	90	84	SD1093		ミニチュア土器・鉢	7.2		2.2	4.4	2mm以下砂粒多量混入	鈍い褐色～褐色	良好	ほぼ完存	
233	90	84	SD1094		弥生土器・壺				4.4	精良	灰褐色	良好	破片	
234	90		SD1094		突帯文土器・甕				5.1	2mm以下砂粒少量混入	灰褐色	良好	破片	
235	90	84	SD1104		弥生土器・壺	(10.6)			推定 (23.5)	精良	褐色～黒色	良	破片	胴部に粘土層の浮文・ 曲線文、図上復元
236	90		SD1119	上面	土師器・壺				3.3	精良	褐色	良好	細片	
237	90	84	SD1119	上面+同 4区上部	土師器・壺				3.4	精良	鈍い褐色	良好	細片	
238	90		SD1119 2区	下底	土師器・壺	(8.4)	(9.3)		5.55	1mm以下砂粒少量混入	鈍い褐色～灰褐色	良好	口縁～胴部 1/8	
239	90		SD1119	ベルト2	土師器・甕		(15.0)		7.0	3mm大砂粒多量混入	鈍い橙色	良好	頸部～胴部 片	
240	90	85	SD1119 2区	下底	土師器・甕	(8.3)	10.9		11.7	2mm以下砂粒多量混入	鈍い褐色～黒色	良好	口縁3/4, 胴 部1/6欠損	
241	90		SD1119 1区	下底	弥生土器・壺	(21.0)			3.4	1mm以下砂粒多量混入	鈍い橙色	良好	口縁細片	
242	90		SD1119 1区	下底	弥生土器・甕	(20.0)			7.5	2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	口縁1/6	
243	90		SD1119 5区	下底	弥生土器・壺	(12.0)			4.8	精良	灰黄褐色	良好	口縁片	
244	90		SD1119 4区	上部	弥生土器・甕				10.5	2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	胴部1/6	
245	90	85	SD1119 1区	下底	弥生土器・甕	(22.1)			11.05	1mm以下砂粒少量混入	黒褐色	良好	口～頸部 1/8	
246	90		SD1119 5区	上部	弥生土器・壺	(40.4)			6.5	2mm以下砂粒多量混入	灰褐色	良好	口縁1/12	
247	90		SD1119	上面	土師器・高環	(16.4)			4.1	精良	灰褐色	普通	細片	
248	90		SD1119 3区	下底	土師器・高環			脚径2.7 ～2.9	(3.9)	精良	鈍い黄褐色	普通	脚部片	
249	90		SD1119 2区	下層	弥生土器・鉢	(29.8)			5.5	2mm以下砂粒多量混入	灰白色	良好	環部1/7	
250	90		SD1119 6区	上部	弥生土器・高環				10.0	2mm以下砂粒多量混入	鈍い黄褐色	良好	脚部	
251	90		SD1119 1区	下底+下部	弥生土器・高環			脚径 (17.5)	4.7	2mm以下砂粒少量混入	鈍い黄褐色～黒色	良好	脚部1/4	円形透かし1か所
252	91		SD1119 1区	下部	弥生土器・鉢	(9.4)			5.5	2mm以下砂粒多量混入	灰褐色	普通	1/5	
253	91		SD1119 6区	上部	弥生土器・鉢	(13.6)			4.6	精良	鈍い橙色	普通	1/6	
254	91		SD1119 1区	下部	弥生土器・鉢	(15.4)			4.0	精良	鈍い橙色	良好	1/8	
255	91		SD1119 1区	下底	弥生土器・鉢	(20.0)			6.5	砂粒混入	明赤褐色	良好	口縁1/3	
256	91		SD1119 5区	上部	弥生土器・鉢				3.7	精良	鈍い黄褐色	良好	脚部か	
257	91		SD1119 4区	上部	弥生土器・鉢	受部径 (12.8)			3.5	2mm以下砂粒多量混入	灰黄色	良好	1/3弱	
258	91		SD1119 1区	土器群	弥生土器・器台			脚径 (15.5)	14.7	2mm以下砂粒多量混入	鈍い褐色～褐色	良好	脚部1/4	
259	91		SD1119 1区	下底	弥生土器・支脚	受部径 8.5			(6.1～ 7.2)	精良	褐色	良好	頂部	頂部に円孔あり
260	91		SD1119 5区	下底	弥生土器・支脚	受部径 6.1×6.5			(4.0～ 4.7)	1mm以下砂粒多量混入	灰褐色	良好	頂部	頂部に円孔あり
261	91		SD1124 1区		弥生土器・甕	(24.2)			14.1	砂粒多量混入	-	良好	口縁1/4	焦げ付き痕の為、色調 不明
262	91	85	SD1125		弥生土器・甕	(25.0)			16.8	3mm砂粒多量混入	赤褐色	良好	口縁1/4	
263	91		SD1125	R 2	弥生土器・甕			8.6	8.3	1mm内外砂粒多量混入	黄褐色	良好	底部片	
264	92		SD1127 1区		弥生土器・壺	9.8			2.8	精良	黒褐色	良好	口縁1/6	
265	92		SD1129 1区		突帯文土器・甕				4.8	2mm以下砂粒混入	黒褐色	良好	細片	
266	92		SD1127 1区		突帯文土器・鉢				4.1	精良	黒褐色	良好	口縁細片	
267	92		SD1127 1区		突帯文土器・鉢				2.2	精良	褐色	良好	口縁細片	
268	92		SD1127	ベルト	突帯文土器・鉢				2.7	精良	灰黄褐色	良好	細片	
269	92	85	SD1131	ベルト	突帯文土器・甕	(18.4)			11.0	2mm以下砂粒多量混入	褐色	良好	口縁1/3強	
270	92		SD1131		突帯文土器・甕	(20.2)			10.8	5mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良	口縁1/6	
271	92		SD1131		突帯文土器・甕		(6.5)		5.1	2mm以下砂粒多量混入	鈍い褐色	良好	底部1/2	高台
272	92		SD1131		突帯文土器・甕			7.7	2.9	3mm以下砂粒混入	鈍い褐色	普通	底部1/2	
273	92		SD1134		弥生土器・甕	(14.0)			12.7	精良	灰黄褐色	良好	1/4	
274	92		SD1181 4区		弥生土器・甕	(14.6)			5.0	2mm以下砂粒多量混入	暗灰黄～黒色	良好	口縁1/9	
275	92		SD1181	5号ベルト	弥生土器・甕	(27.2)			9.0	3mm以下砂粒多量混入	褐色～明赤褐色	良好	口縁1/10	
276	92		SD1181 4区		弥生土器・甕				12.9	3mm以下砂粒多量混入	灰～鈍い黄褐色	良好	脚部片	横長32cm
277	92		SD1181 6区		弥生土器・甕		(10.0)		7.1	2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	底～胴部 1/3	
278	92		SD1181	ベルト5	弥生土器・壺		(9.2)		2.2	2mm以下砂粒多量混入	鈍い橙色	良	底部1/5	
279	92		SD1181 4区		弥生土器・鉢				4.7	精良	褐色	良好	口縁細片	
280	91		SD1183		弥生土器・高環	(28.2)			5.0	精良	褐色	良好	口縁1/10	
281	92	85	SD1184		弥生土器・高環	(16.2)			11.8	1mm内外砂粒多量混入	赤褐色	良好	1/3	
282	92		SD1187 1区	(SD1207との交 差分)	弥生土器・壺	(8.0)			8.5	3mm以下砂粒混入	灰白～鈍い黄褐色	良好	口縁1/2	

報告 番号	Fig.	PL	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)()は復元・残存				胎 土	色 調	焼成	残存状況	備 考
						口径 長さ	胴径	底径・備	器高 高さ					
283	92		SD1187 3区		弥生土器・壺				5.8	精良	橙色	良好	頸部1/8	
284	92		SD1187 1区		弥生土器・壺				4.3	3mm以下砂粒混入	灰褐色	良好	頸部1/6	
285	92		SD1187		弥生土器・甕	(16.8)			3.5	6mm以下砂粒混入	鈍い黄褐色	良好	口縁1/10	
286	92		SD1187 3区		弥生土器・甕		2.6	(2.4)		2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色、黒色	良好	底部片	
287	92		SD1187 1・2区	上層ベルト(床面部分)	弥生土器・甕		4.7		2.9	精良	鈍い橙色	良好	底部一部欠損	
288	92		SD1240		弥生土器・壺	(10.4)			8.8	砂粒多量混入	淡黄褐色～赤味帯びる	良好	1/4	
289	93		SD1278 3区		弥生土器・壺	(10.6)			5.2	1mm内外砂粒多量混入	灰褐色	良好	口縁1/6	
290	93		SD1278 3区		弥生土器・甕		5.0		5.3	1～2mm砂粒多量混入	赤味を帯びた灰褐色	良好	底部	
291	93		SD1278 3区		弥生土器・甕	(24.6)			12.5	砂粒多量混入	少し赤味帯びた灰褐色	良好	口縁～胴部1/4弱	
292	93		SD1278 3区		弥生土器・甕	(40.0)			11.2	砂粒多量混入	黒褐色	良好	口縁～胴部1/10	
293	93		SD1278 3区		弥生土器・壺?			高台径 3.4	1.7	砂粒多量混入	暗～黒褐色	良好	底部片	高台
294	93		SD1278 3区		弥生土器・高坏	(36.0)			6.3	緻密	淡灰黄褐色	良好	1/3	
295	93	85	SD1278 3区	(SD1278 2と接合) +SX1263 2区・ SX1269下層砂層	弥生土器・高坏	(28.4)			10.0	緻密	薄い黄褐～赤味を帯びる～暗褐色	良好	1/2～1/3	
296	93		SD1278 3区		弥生土器・鉢	(13.6)			7.5	1～2mm砂粒多量混入	黄～赤褐色	良好	胴部1/6	
297	93		SD1278 3区		土器群F	(15.2)			5.4	細砂少量混入	淡黄褐色	良好	口縁1/8	
298	93		SD1278 3区		弥生土器・鉢	(26.2)			6.2	砂粒多量混入	赤味帯びた黄褐色	良好	1/6	
299	93		SD1278 3区		弥生土器・鉢	(21.2)			7.7	砂粒多量混入	赤味帯びた黄褐色	良好	口縁～胴部1/6	
300	93		SD1278 3区		弥生土器・器台			裾径 (15.2)	13.8	砂粒多量混入	灰褐～暗灰褐色	良好	胴部1/3	
301	93		SD1278 3区		突帯文土器・甕				5.1	砂粒多量混入	暗灰黄褐色	良好	口縁部片	
302	93		SD1278 3区		突帯文土器・甕				4.6	砂粒多量混入	赤味帯びた薄い褐色	良好	口縁部片	
303	93	85	SD1278 3区		差込系土器・筒型 坏		(8.6)		3.5	精良	灰黒色	良好	底部1/5	
304	94		SX1156	土器群B	弥生土器・壺	(26.6)			8.9	砂粒多量混入	淡褐～暗灰黄褐色	良好	口縁1/6	
305	94		SX1156	土器群F	弥生土器・壺	(24.2)			9.5	細砂多量混入	灰黄褐色	不良	口縁1/4	
306	94	85	SX1156	土器群E	弥生土器・壺	(15.5)			22.7	細砂多量混入	薄い黄褐色	良好	口縁2/3	
307	94		SX1156	土器群D	弥生土器・高坏	(28.4)			4.9	砂粒多量混入	赤褐～黒～薄い灰黄褐色	良好	口縁1/8	豊前系高坏
308	94		SX1156	土器群F	弥生土器・壺? 鉢?	(16.8)			9.0	細砂少量混入	淡灰褐色	良好	口縁弱1/4	黒塗りの痕跡か?
309	94	85	SX1156	土器群D	弥生土器・器台	(16.8)			15.0	1～2mm砂粒多量混入	薄い黄褐色	良好	口縁1/4	
310	94	92	SX1156	土器群F	弥生土器・器台	(16.8)			12.7	砂粒多量混入	薄い褐色	やや不良	1/6	
311	94	85	SX1156	土器群F	弥生土器・器台	(10.2)			11.6	砂粒多量混入	黄褐～やや灰色	良好	口縁1/3	
312	94		SX1156	土器群D	弥生土器・甕蓋		つまみ 径5.4		6.9	細砂少量混入	赤味帯びた灰黄褐色	良好	天井部のみ	
313	94	92	SX1156	土器群D	土製品・円板	最大 5.6		最大 5.5	最大 1.0	2mm以下砂粒多量混入	灰黄色	良好	黒斑あり	
314	96	85	SX1186	土器群A下層	弥生土器・壺	9.7	最大 12.2		9.3	精良	鈍い黄褐色	良好	9/10	
315	96	85	SX1186	土器群A下層	弥生土器・壺	(11.2)			9.1	精良	橙色	普通	ほぼ完存	胴部に櫛歯文
316	96	85	SX1186	土器群A上層	手捏土器・壺	(8.6)			11.5	2mm以下砂粒混入	灰褐色	良好	1/2	
317	96		SX1186	土器群A下層	弥生土器・壺	(14.2)		4.2	推定 19.1	砂粒混入	鈍い褐色	良好	口縁1/6、 底部	図上復元
318	96	85	SX1186	土器群A下層	弥生土器・壺	(18.4)			25.7	2mm以下砂粒混入	鈍い橙色	良好	口縁～胴部 1/4	
319	96	86	SX1186	土器群A上層	弥生土器・壺	(23.5)			(21.0)	1～2mm粗砂多量混入	鈍い黄褐色	良好	口縁～胴部 1/3～1/4	
320	96	86	SX1186	土器群A下層	弥生土器・壺	23.2	7.5	37.4～ 7.9	推定 42.0	3mm以下砂粒多量混入	鈍い橙色	良好	1/2強	
321	96	86	SX1186	土器群A下層	弥生土器・壺	21.2	7.7	推定 42.0	推定 42.0	1～3mm粗砂多量混入	黒～鈍い褐色	普通	口縁	図上復元
322	96	86	SX1186	土器群A上層	弥生土器・甕	(19.0)	21.0		19.4	1mm内外細砂混入	灰黄褐色	良好	口縁～底部 1/3	
323	97	86	SX1186	土器群A上層	弥生土器・甕	(17.4)			24.2	2mm内外砂粒混入	灰黄褐色	良好	2/3	
324	97	86	SX1186	土器群A上層	弥生土器・甕	25.1	最大 28.3		推定 38.0	1～2mm粗砂多量混入	鈍い黄褐～黒色	良好	口縁全周～ 底部	図上復元
325	97		SX1186	土器群A上層	弥生土器・高坏	(32.0)			5.3	2mm以下砂粒混入	鈍い黄褐色	良好	口縁1/6	
326	97	86	SX1186	土器群A下層	弥生土器・高坏	(27.9)		脚径 17.2	21.8	精良	暗灰黄色	良好	口縁と脚部 1/2	脚部穿孔は2か所1対 で3対(非対称)
327	97	86	SX1186	土器群A上層	ミニチュア土器・ 鉢	8.0			7.5	精良	黒色	良好	4/5	
328	97	86	SX1186	土器群A下層	弥生土器・鉢	16.5			7.1	2mm以下砂粒多量混入	灰白色	良	ほぼ完存	
329	97	86	SX1186	土器群A下層	弥生土器・鉢	(21.05)	21.9	7.9	17.5	1mm以下砂粒少量混入	鈍い黄褐～黒褐色	良好	口縁2/3欠 損	
330	97	86	SX1186	土器群A下層	弥生土器・鉢? 甕?	21.0			18.8～ 20.8	1～2mm粗砂混入	灰黄褐色	良好	口縁1/5欠 損	焼成後と想定される 穿孔5.7×7.7cm(不整 円形)あり
331	97	87	SX1186	土器群A上層	弥生土器・鉢	(18.6)	最大 約22.0		最大 15.5	1～3mm粗砂多量混入	灰黄褐色	良好	口縁1/2欠 損	
332	97	86	SX1186	土器群A上層	弥生土器・器台		受部径 13.6		17.3	2mm以下砂粒多量混入	灰褐～鈍い橙色	良好	裾部欠損	
333	97		SX1186	土器群A上層	弥生土器・器台			裾径 17.2	13.0	2mm以下砂粒多量混入	灰褐色	良好	3/4	
334	98		SX1186	土器群A下層	弥生土器・器台			脚径 17.0	13.4	1mm以下砂粒混入	鈍い黄褐色	良好	1/8欠損	
335	98		SX1186	土器群A上層	弥生土器・器台			脚径 (16.6)	20	2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	2/3	
336	98		SX1186	土器群A上層	弥生土器・器台			裾径 (14.5)	16.4	2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	下半部1/2	

報告 番号	Fig.	PL	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm) ()は復元・残存				胎土	色調	焼成	残存状況	備考
						口径・長さ	胴径	底径・備	器高・厚さ					
337	99	87	SX1186	土器群B	ミニチュア土器・壺		最大 8.5		(6.6)	3mm以下砂粒混入	灰黄褐色	良好	胴部1/2弱	
338	99		SX1186	土器群B上層	ミニチュア土器・壺	(7.2)			5.7	精良	鈍い黄褐色	良	1/3	
339	99	87	SX1186	土器群B下層	弥生土器・壺		最大 11.0		7.6	2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	1/2	
340	99		SX1186	土器群B上層	弥生土器・壺	(10.4)			9.3	2mm以下砂粒混入	灰黄褐色	良	1/3	
341	99	87	SX1186	土器群B上層	弥生土器・壺	(13.6)			15.3	1mm以下砂粒少量混入	鈍い黄褐色	良好	1/3弱	
342	99	87	SX1186	土器群B上層	弥生土器・壺	11.0			10.9	3mm以下砂粒多量混入	浅黄褐色～灰褐色	良好	上半全周	
343	99	87	SX1186	土器群B上層	弥生土器・壺	10.6			16.9	1～3mm以下砂粒混入	灰黄褐色	良好	胴部1/2	
344	99	87	SX1186	土器群B下層	弥生土器・壺	21.1			12.1	1～3mm砂粒少量混入	灰黄褐色	良好	口縁～胴部	
345	99	87	SX1186	土器群B上層	弥生土器・壺	(12.9)		2.5	(15.4)	1mm以下砂粒混入	灰黄褐色	良好	1/3	
346	99		SX1186	土器群B下層	弥生土器・壺	(16.1)			11.3	2mm以下砂粒混入	鈍い黄褐色	良好	1/2	
347	99	87	SX1186	土器群B上層	弥生土器・壺		最大 15.5		17.1	2mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	胴部～底部	
348	99	87	SX1186	土器群B下層	弥生土器・壺	19.3			13.5	1～3mm粗砂多量混入	黒色	良好	口縁～胴部片	(内面黒灰色)
349	99	87	SX1186	土器群B下層	弥生土器・壺	(18.4)	24.5	7.3	25.55	1mm内外砂粒少量混入	浅黄褐色	良好	胴部一部、口縁1/2欠損	
350	100	87	SX1186	土器群B上層	弥生土器・壺	(23.7)			20.1	2mm以下砂粒多量混入	黒褐色	良好	口縁～胴部1/4	
351	100	88	SX1186	土器群B下層	弥生土器・壺	16.7	27.0	9.5	33.3	1mm内外砂粒少量混入	鈍い黄褐色～黒色	良好	ほぼ完存	
352	100	88	SX1186	土器群B	ミニチュア土器・鉢	(6.0)		3.0	4.1	3mm以下の砂粒混入	灰黄褐色	良	1/2	
353	100	88	SX1186	土器群B下層	弥生土器・鉢	15.3		3.8	5.5	精良	灰黄褐色	良好	2/3	
354	100	88	SX1186	土器群B下層	弥生土器・鉢			口径 11.0	6.1	5mm以下砂粒多量混入	鈍い褐色	良	胴部	
355	100		SX1186	土器群B下層	弥生土器・器台	受部径 13.8			8.0	6mm以下砂粒多量混入	鈍い黄褐色	良好	受部3/5	
356	100	88	SX1186	土器群B下層	弥生土器・器台	(18.4)			14.3	1～2mm粗砂少量混入	灰黄褐色	良好	底部1/2強・支脚欠損	
357	100	90	SX1186	土器群B	土製品・輝型土製品	(4.5)			(4.7)	1mm内外砂粒多量混入	暗黄褐色	良好	上半1/3	
358	101	88	SX1186	土器群C下層	土師器・壺	(9.2)			15.4	2mm以下砂粒混入	鈍い黄褐色	良好	径1/2弱	
359	101	88	SX1186	土器群C下層	弥生土器・壺	(11.9)			最大 13.2	砂粒少量混入	橙～灰褐色	良好	1/2	
360	101	88	SX1186	土器群C上層	弥生土器・壺	(13.2)	(17.4)		17.1	精良	灰黄褐色	良好	1/2	
361	101	88	SX1186	土器群C上層	弥生土器・鉢	(15.6)		4.7	10.5	3mm以下砂粒多量混入	褐灰色	普通	口縁、胴部1/3	
362	101	88	SX1186	土器群C上層	弥生土器・鉢	22.4		4.0	8.6	精良	灰白色	良好	口縁1/6～胴部片	
363	101	88	SX1186	土器群C上層	弥生土器・鉢	28.8			12.1	2mm以下砂粒混入	鈍い黄褐色	良好	ほぼ完存	
364	101	88	SX1186	土器群C上層	弥生土器・鉢	29.4			(12.8)	2～4mm粗砂多量混入	黄褐色	良好	底部欠損	
365	101	88	SX1186	土器群C上層	弥生土器・高坏			脚径 16.8	17.9	精良	灰黄色	良好	胴部1/2強	樽部に2ヶ所の円穿
366	101	88	SX1186	土器群C上層	弥生土器・高坏			脚径 (18.8)	18.3	精良	灰黄褐色	良好	樽部1/2	2ヶ所の孔
367	101		SX1186	土器群C上層	弥生土器・高坏				14.0	精良	灰黄褐色	良好	胴部	
368	101	89	SX1186	土器群C上層	弥生土器・支脚	受部径 8.1		脚径 12.0	8.6～9.3	2mm以下砂粒多量混入	鈍い黄褐色	良好	ほぼ完存	
369	101	89	SX1186	土器群C上層	弥生土器・支脚	受部径 6.0		口径 11.6	9.1～10.7	2mm以下砂粒多量混入	灰黄色	良好	ほぼ完存	
370	102	89	SX1186	土器群D上層・SX1186D	弥生土器・壺	(6.2)			(7.5)	精良	褐灰～黒褐色	良	胴部3/4	
371	102		SX1186	土器群C上層	弥生土器・壺	10.6			11.3	1mm以下砂粒混入	灰黄～橙色	良好	上半部1/2	
372	102		SX1186	土器群D	弥生土器・壺	(14.0)			11.3	2mm以下砂粒多量混入	暗黄褐色	良好	上半1/3	外面スス付着
373	102	89	SX1186	土器群D下層	弥生土器・壺	(23.5)	(26.8)	6.7	32.9	1～3mm砂粒少量混入	鈍い橙～鈍い褐色	良好	底部1/2～口縁1/3	
374	102	89	SX1186	土器群D下層	弥生土器・鉢	(17.1)			8.0	2mm以下砂粒多量混入	鈍い黄褐色	良好	1/3	
375	102	89	SX1186	土器群D上層	弥生土器・鉢	15.0		7.7	3.5	1mm以下砂粒混入	灰褐色	良好	ほぼ完存	
376	102		SX1186	土器群D上層	弥生土器・鉢	(19.0)		5.0	11.0	2mm以下砂粒混入	灰黄褐色	良	上半1/4、底部～胴部	
377	102	89	SX1186	土器群D上層	弥生土器・支脚	受部径 (6.0)		口径 (12.2)	(10.5)	2mm以下砂粒混入	灰黄色	良好	1/2	中央からずれた所に径1.3cm位の孔あり
378	103		SX1186	土器群E	弥生土器・壺		最大 (3.0)		(5.6)	精良	灰黄色	良	胴部1/2	
379	103	89	SX1186	土器群E	弥生土器・壺		最大 14.8	3.0	(10.8)	砂粒混入	明黄褐色	良好	胴部全周	
380	103	89	SX1186	土器群E	弥生土器・壺	(11.7)			27.4	3mm以下砂粒多量混入	鈍い褐～鈍い褐色	良好	1/4	
381	103	89	SX1186	土器群E	弥生土器・壺	(18.7)			推定 (26.3)	1～5mm粗砂少量混入	明赤褐色	良好	口縁～胴部上半・下半1/2	図上復元
382	103	89	SX1186	土器群E	弥生土器・壺	24.5			38.9～ 39.3	2mm以下砂粒混入	灰黄褐～灰白色	良好	1/2強	
383	103		SX1186	土器群E	弥生土器・高坏	30.8			8.65	3mm以下砂粒混入	鈍い褐色	良好	坏部のみ2/3	
384	103	89	SX1186	土器群E	弥生土器・高坏	(34.2)		(17.2)	25.9～ 26.7	精良	灰黄褐色	良好	1/2	
385	103		SX1186	土器群E	弥生土器・高坏			口径 15.5	9.7	1mm以下砂粒混入	鈍い黄褐色	良好	樽部1/4強欠損	
386	103	89	SX1186	土器群E	弥生土器・器台	受部径 20.4			20.0	2mm以下砂粒多量混入	鈍い黄褐～褐灰色	良好	ほぼ完存	
387	104		SX1186		弥生土器・壺	(22.8)			11.4	1～5mm粗砂多量混入	オリブ黒色	良好	口縁2/3	
388	104	90	SX1186		弥生土器・壺	26.0	最大 33.0		25.2	1～2mm粗砂多量混入	鈍い黄褐色	普通	口縁～胴部一部	
389	104	89	SX1186		弥生土器・壺	(24.8)		6.7	37.4	1mm内外砂粒少量混入	鈍い橙～黒褐色	良好	胴部1/4欠損	
390	111		SK1075		突帯文土器・壺				推定29.0	細砂多量混入	赤味を帯びた褐色	良好	口縁と底部	径に比較して器高が低いか? 図上復元

報告 番号	Fig.	PL	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)()は復元・残存				胎 土	色 調	焼成	残存状況	備 考
						口径 長さ	胴径	底径・備	器高 厚さ					
391	111	90	SK1075		突帯文土器・甕	18.8			14.4	砂粒多量混入	黄褐色	良好	口縁3/4	
392	111		SK1075		突帯文土器・甕				6.3	砂粒多量混入	褐色	良好	口縁部片	
393	111		SK1079		弥生土器・壺?	(15.4)			7.3	精良	薄い灰褐色	良好	口縁1/3	
394	111	90	SK1084		弥生土器・壺	(22.4)			23.0	1~2mm砂粒多量混入	赤褐色	良好	上半部	丹塗り
395	111		SK1084		突帯文土器・甕				4.9	細砂少量混入	薄い褐色	良好	口縁部片	
396	111	90	SK1085		ミニチュア土器・壺			3.3	5.0	精良	黒褐色	良好	胴部	胴部にはへらによる沈線・旋文。
397	111	90	SK1085		突帯文土器・甕	(24.0)			26.7	1~2mmの砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	口縁~胴部1/4	
398	111		SX1091		突帯文土器・甕				4.0	砂粒多量混入	薄い黄褐色	良好	口縁部片	
399	111		SK1085		突帯文土器・甕				5.0	細砂少量混入	赤味を帯びた黄褐色	良好	口縁部片	炭化物付着
400	112		SK1112		弥生土器・壺		頸部径(17.2)		8.5	1mm以下砂粒少量混入	明赤褐~鈍い橙色	良好	頸部1/3	
401	112	90	SK1112		弥生土器・壺		(29.8)	7.0	30.1	1mm以下砂粒少量混入	明赤褐~黒色	良好	底部~胴部	
402	112		SK1112		弥生土器・甕			7.9	14.8	1~2mm砂粒多量混入	灰褐~黒褐色	良好	底部3/4	
403	112		SK1112		弥生土器・鉢	(22.8)			5.7	2mm内外の砂粒多量混入	鈍い褐色、褐灰色	良好	口縁~体部1/6	
404	112		SK1112		弥生土器・器台?			脚径(31.2)	5.3	2mm内外砂粒少量混入	鈍い橙~橙色	良好	脚部1/8	
405	112		SK1112		弥生土器・器台			脚径(14.7)	13.7	1mm内外砂粒少量混入	鈍い橙~鈍い赤褐色	良好	脚部1/4	
406	112		SK1112		弥生土器・器台		頸部径4.6		5.4	0.5~2mm砂粒少量混入	鈍い褐色	良好	頸部2/3	
407	112		SK1113		弥生土器・甕	(19.4)			9.1	砂粒多量混入	灰色帯びた黄褐色	良好	口縁1/6	
408	112	90	SK1120		弥生土器・壺			8.2	19.9	砂粒混入	黄褐~赤色、灰色	不良	胴部~底部	
409	113	90	SK1147		弥生土器・壺	22.6			39.2	砂粒少量混入	淡褐~暗褐~黒褐色	良好	胴部一部欠損	
410	113	90	SK1147		弥生土器・壺	(22.6)			38.0	砂粒多量混入	明暗灰黄褐色	良好	口縁部欠損	
411	113	90	SK1084		弥生土器・壺	19.8			45.5	1~2mm砂粒多量混入	灰褐色	良好	口縁・底部残存	
412	113		SK1147		弥生土器・壺	(15.6)			7.4	1mm内外砂粒多量混入	橙~鈍い橙色	良好	口縁1/12	
413	113		SK1147	東側上層	弥生土器・甕	(18.4)			2.65	精良	鈍い褐色	良好	口縁1/5	
414	113	90	SK1147		弥生土器・甕	(18.4)			12.3	砂粒少量混入	黒色	良好	口縁1/4	
415	113		SK1147		弥生土器・甕	(16.0)			10.5	砂粒多量混入	黄褐色	良好	口縁1/6	
416	114	90	SK1147		弥生土器・甕	(24.0)			12.8	砂粒多量混入	褐~淡褐色	良好	口縁~胴部1/2片	
417	114	90	SK1147		弥生土器・甕	(25.0)			11.8	1~2mm砂粒多量混入	黒~暗褐~黄褐色	良好	口縁1/2弱	
418	114	90	SK1147		弥生土器・甕	(25.2)			25.3	1~2mm砂粒多量混入	黄褐~赤味~暗灰褐色	良好	口縁1/2	
419	114		SK1147		弥生土器・壺			(7.0)	1.9	細砂多量混入	灰褐色	良好	底部1/3	
420	114		SK1147	東側上層	弥生土器・高坏	(32.8)			5.4	精良	鈍い褐~黒色	良好	口縁1/12	
421	114	90	SK1147		弥生土器・鉢	(23.5)			9.6	1~2mm砂粒多量混入	黄~暗褐色	良好	口縁1/3, 胴部2/3, 底部	
422	114		SK1147		弥生土器・鉢	(13.8)			3.7	1mm以下砂粒少量混入	灰黄褐色	良好	口縁~体部1/10	
423	114	90	SK1147-1区	西側	弥生土器・鉢	(13.1)			6.1	2mm以下砂粒少量混入	鈍い橙~鈍い褐色	良好	口縁~体部1/8	
424	114	91	SK1150		弥生土器・壺	8.4			16.1	1~2mm砂粒多量混入	鈍い橙色	良好	口縁~胴部一部欠損	黒塗りか?
425	114	91	SK1150		弥生土器・壺	14.5			14.5	1~2mm砂粒多量混入	鈍い黄褐色	良好	ほぼ完存	外面~口縁内面は丹塗りか?
426	114		SK1150		弥生土器・壺				5.7	1~2mm砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	頸部1/6	
427	114		SK1150		土師器・甕?鉢?	(24.6)			9.6	1mm内外砂粒多量混入	黄褐色	良好	口縁~胴部1/8	
428	114		SK1150		弥生土器・甕			(5.6)	4.6	砂粒多量混入	暗~黒褐色	良好	底部1/3	
429	114		SK1150		弥生土器・壺			9	2.9	細砂混入	薄い灰褐色	良好	底部2/3	
430	114	91	SK1150		弥生土器・壺			4.3	4.6	砂粒多量混入	褐~暗褐~黒色	良好	底部	
431	114	91	SK1150		弥生土器・器台	(12.0)			13.5	細砂多量混入	灰色帯びた黄褐色	良好	裾部欠損	
432	116		SK1154		弥生土器・壺				3.2	2mm以下砂粒多量混入	橙色	良好	口縁部細片	
433	116		SK1155		突帯文土器・甕				3.5	2mm以下砂粒多量混入	浅黄橙~鈍い黄褐色	良好	細片	
434	116		SK1155		突帯文土器・甕				2.5	1mm以下砂粒多量混入	橙~鈍い褐色	良好	細片	
435	116		SK1155		弥生土器・甕	(14.4)			2.1	2mm以下砂粒多量混入	鈍い黄橙~黒褐色	良好	口縁1/8	
436	116	91	SK1157	ベルト下層	弥生土器・甕	(25.2)			8.2	1~2mm砂粒多量混入	淡褐色	良好	口縁1/4	
437	116		SK1157	東側	弥生土器・甕	(26.4)			4.85	1mm以下砂粒少量混入	鈍い褐色	良好	口縁1/12	
438	116		SK1157	東側	弥生土器・鉢	(15.0)			5.5	1mm以下砂粒少量混入	明赤褐~鈍い褐色	良好	口縁~体部1/8	
439	116		SK1157	東側	弥生土器・支脚	(10.6)			3.7	2mm以下砂粒少量混入	明赤褐色	良好	口縁1/4弱	脚の可能性あり
440	116		SK1157	東側	弥生土器・支脚			(8.8)	5.55	0.5~5mm砂粒少量混入	橙~浅黄褐色	良好	脚部1/4	
441	116		SK1157	東側	弥生土器・甕蓋		つまみ部径5.5		2.8	3mm以下砂粒やや多量混入	鈍い褐色	良好	つまみ部	
442	116		SK1157	東側	弥生土器・高坏				30.6	砂粒多量混入	明赤褐色	良好	脚部1/8	丹塗り、図上復元
443	116		SK1159	西側下層	土師器・甕	(24.8)			11.4	砂粒多量混入	淡褐色	良好	口縁1/8	
444	116	91	SK1159	西側下層	弥生土器・甕	(26.6)			11.7	1mm内外砂粒多量混入	暗褐~黒色	良好	口縁と胴部1/4片	

報告 番号	Fig.	Pl.	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量 単位 cm				胎 土	色 調	焼成	残存状況	備 考
						口径・長さ	胴径	底径・幅	器高・厚さ					
445	116		SK 159	東側	弥生土器 壺			(80)	19	2~3mm砂粒多量混入	薄い灰黄褐色	良好	底部 /4	
446	116		SK 160		突帯文土器 浅鉢?				24	精良	にぶい赤褐色	良好	細片	
447	116		SK 160		突帯文土器 瓊				27	砂粒多量混入	黒色	良好	胴部片	
448	116		SK 162 2区		弥生土器 高坏				79	緻密	暗灰褐色	良	底部 /4, 孔 /4 残存	
449	116		SK 162 1区		弥生土器 鉢				29	砂粒多量混入	鈍い橙褐色	良好	口縁部片	丹塗か?
450	116		SK 162		弥生土器 鉢	(106)			54	砂粒多量混入	赤味帯びた黄褐色	不良	/4	
451	116		SK 164		弥生土器 壺				39	砂粒少量混入	明赤褐色	良好	口縁部細片	
452	116		SK 173	ベルト	弥生土器 壺				36	細砂少量混入	淡黄褐色	良好	口縁部片	
453	116	91	SK 177		弥生土器 瓊	(344)			100	2~2mm砂粒多量混入	赤味を帯びる	良好	口縁 /4	
454	116		SX 171	SK 177と接合	弥生土器 瓊				125	砂粒多量混入	褐~黒色	良好	胴部片	
455	117	91	SX 185		弥生土器 壺	(80)			114	2mm以下砂粒多量混入	褐灰色	良好	口縁一部欠損	外面下半スス付着する。
456	117		SX 185	土層ベルト 下層	弥生土器 壺	(252)			36	4mm以下砂粒多量混入	鈍い橙~鈍い褐色	良好	口縁 /12	
457	117		SX 185 2区	上層	土師器 壺			36	33	2mm以下砂粒混入	鈍い橙褐色	良好	底部	
458	117		SX 190		弥生土器 壺		屈曲部 (127)		36	3mm以下砂粒多量混入	鈍い橙褐色	良好	口縁 /7	
459	117		SX 190		弥生土器 瓊			38	42	3mm以下砂粒多量混入	灰黄色	良好	底部	
460	117		SX 190		弥生土器 鉢				26	1mm以下砂粒混入	橙~鈍い黄褐色	良好	細片	
461	117		SX 190		弥生土器 高坏				30	0.5mm以下砂粒混入	鈍い褐~鈍い橙褐色	良好	坏部下半	
462	118	91	SK 215		突帯文土器 瓊	180			125	砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	口縁~胴部片	炭化物付着
463	118		SK 215 1区	北側土層ベルト	突帯文土器 鉢				62	砂粒少量混入	灰色	良好	口縁部細片	
464	118		SK 215 1区	北側土層ベルト	突帯文土器 瓊				49	砂粒多量混入	—	良好	口縁部細片	外面スス付着の為、色調不明
465	118		SK 215 1区	北側土層ベルト	突帯文土器 瓊				72	砂粒多量混入	淡黄褐色	良好	胴部片	
466	118		SK 215 1区	北側土層ベルト	突帯文土器 瓊			74	26	1mm内外砂粒多量混入	淡黄褐色	良好	/2	
467	118	91	SK 215 4区	北側土層ベルト	突帯文土器 高坏	(246)			89	2~2mm砂粒多量混入	暗褐~黒褐色	良好	/4	
468	118	91	SK 216 2区	南側土層ベルト	突帯文土器 瓊	(220)			190	1mm内外砂粒多量混入	黄褐色	良好	口縁 /6	外面スス付着
469	118	91	SK 216 1区	土層ベルト 北側	突帯文土器 瓊	(210)			100	砂粒多量混入	黄褐色	良好	口縁 /2	炭化物付着
470	118		SK 216 2区	土層ベルト 南側	突帯文土器 瓊				32	1mm内砂粒混入	灰褐色	良好	口縁細片	
471	118	91	SK 216 1区	土層ベルト 北側	突帯文土器 瓊				32	砂粒多量混入	灰褐色	良好	口縁部片	
472	118	91	SK 216 1区	土層ベルト 北側	突帯文土器 瓊				22	砂粒多量混入	灰褐色	良好	口縁部片	
473	118		SK 216 2区	土層ベルト 南側	突帯文土器 瓊				23	砂粒混入	黒色	良好	口縁細片	
474	118		SK 216 2区	東側	突帯文土器 高坏	(260)			39	砂粒多量混入	赤味を帯びた黄褐色	不良	口縁 /6	
475	118		SK 264		突帯文土器 瓊				43	砂粒少量混入	黒色	良好	口縁部片	
476	118		SK 075		土製品 サジ	33		115	08	精良	暗灰黄色	良好	把手	
477	118	91	SK 264		土製品 投擧	最大 48		最大 24	最大 23	精良	鈍い黄褐色	良好	充存	
478	123		SX 080		突帯文土器 瓊				20	—	—	良好	細片	傾き、調整等不明
479	123		SX 080		突帯文土器 瓊				27	砂粒多量混入	赤味を帯びた黄褐色	良好	細片	
480	123		SX 080		突帯文土器 瓊				37	1mm内外砂粒多量混入	灰褐~黒色	良好	胴部片	
481	123		SX 116 1117		弥生土器 瓊	(222)			65	2~2mm砂粒多量混入	黒褐色	良好	口縁 /2	
482	123		SX 116		弥生土器 器台	(115)			64	1mm内外砂粒多量混入	赤味を帯びた黄褐色	良好	口縁 /6	
483	123		SX 117		弥生土器 壺	(183)			29	1mm内外砂粒多量混入	灰褐~暗灰褐色	良好	口縁 /6	
484	123		SX 122		弥生土器 壺			(70)	25	砂粒多量混入	淡灰褐色	良好	底部外周 /4	
485	123		SK 153		弥生土器 瓊	(220)			46	1mm内外砂粒混入	暗褐色	良好	口縁 /6	
486	123		SK 153		弥生土器 支脚?			62	52	砂粒混入	うすい黄褐色	良好	裾端部まばら全周	
487	123	91	SX 194		土師器 壺	88			113	2mm以下砂粒混入	にぶい黄褐色	良好	口縁~頸部のみ充存	復元頭部径 5cm
488	123		SX 194		土師器 高坏		屈曲部 (45)		26	1mm砂粒多量混入	にぶい赤褐色	良好	坏下半のみ残存	
489	123	91	SX 194		土師器 鉢	(132)		26	53	2mm以下砂粒多量混入	灰黄色	良好	/4	
490	123		SX 195		突帯文土器 深鉢				31	2mm以下砂粒多量混入	灰褐色	良好	細片	
491	123		SX 195		突帯文土器 深鉢				39	2mm以下砂粒多量混入	褐灰色	良好	細片	
492	123		SD 081		突帯文土器 瓊			(78)	32	3mm以下砂粒多量混入	にぶい橙褐色	普通	底部 /2	
493	123		SX 203		弥生土器 瓊			(111)	34	1mm以下砂粒多量混入	にぶい赤褐色	良好	底部 /2	
494	123		SX 237		弥生土器 壺			(60)	27	2mm以下砂粒多量混入	にぶい黄褐色	良好	底部 /6弱	
495	123		SX 242		弥生土器 壺	(71)			20	1mm以下砂粒多量混入	にぶい黄褐色	良好	口縁 /4	穿孔 一つのみ残存
496	123		SX 242		弥生土器 壺	(340)			39	2mm以下砂粒多量混入	にぶい橙褐色	良好	口縁 /10	
497	123		SX 242		弥生土器 瓊			(86)	37	2mm以下砂粒多量混入	橙~にぶい黄褐色	良好	底部 /6	
498	123		SX 242		弥生土器 壺			(85)	52	2mm以下砂粒多量混入	にぶい黄橙~褐灰色	良好	底部 /6	

報告 番号	Fig.	PL	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)()は復元・残存				胎 土	色 調	焼成	残存状況	備 考	
						口径 ・長さ	胴径	底径・備	器高 ・厚さ						
499	123		SX1242		土製品・サジ	最大 4.8		最大 1.9	最大 1.8	精良	灰白色	良好	把手?		
500	124		SP9		弥生土器・甕	(31.6)			10.4	砂粒混入	にふい黄褐色~灰黄褐色	良好	口縁1/10		
501	124	91	SP9		突帯文土器・甕	(25.8)			14.4	3mm以下の砂粒混入	灰黄褐色	良好	口縁1/4		
502	124		SP45		弥生土器・甕				12.8	4mm以下砂粒混入	灰黄褐色	良好	底部全周		
503	124		SP78		弥生土器・壺	(22.6)			5.6	2mm以下砂粒混入	灰黄褐色	良	口縁1/8	内外に丹塗り?	
504	124		SP126		突帯文土器・壺? 鉢?			7.6	2.1	3mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	底部9/10		
505	124		SP147		弥生土器・甕				2.6	2mm以下砂粒多量混入	暗灰黄色	良	口縁細片		
506	124		SP168		突帯文土器・甕			7.2	3.5	2mm以下砂粒多量混入	褐色	良好	底部全周		
507	124	91	SP337		突帯文土器・甕	(12.0)		5.8	推定 13.0	砂粒混入	暗灰黄色	良	口縁1/5, 底部全周	図上復元	
508	124		SP339		突帯文土器・甕				3.0	1mm以下砂粒混入	黒~灰黄褐色	普通	口縁細片		
509	124		SP361		弥生土器・甕				6.5	1mm以下砂粒混入	褐灰色	良好	底部1/3		
510	124		SP378		突帯文土器・壺			6.0	3.1	3mm以下砂粒多量混入	橙色	良好	底部		
511	124		SP384		突帯文土器・甕			(7.8)	3.9	3mm以下砂粒多量混入	にふい黄褐色	良好	底部1/2		
512	124		SP390		弥生土器・壺				3.2	3mm以下砂粒少量混入	灰黄褐色	良好	古円細片		
513	124		SB1413(SP393)		弥生土器・甕	(19.8)			4.3	1mm以下砂粒多量混入	褐灰色	良好	口縁1/12		
514	124		SB1413(SP393)		弥生土器・甕				4.4	2mm以下砂粒混入	褐灰色	良好	細片		
515	124		SP432		弥生土器・甕	(36.0)			5.6	精良	灰褐色	良好	口縁1/10		
516	124		SP469		弥生土器・甕	(33.4)			8.3	3mm以下砂粒多量混入	褐灰色	普通	口縁1/9		
517	125	92	SP486		弥生土器・壺				28.4	2mm以下砂粒多量混入	橙~浅黄褐色	良好	1/2弱		
518	124		SP546		弥生土器・壺	(10.6)		つまみ 径1.4	2.2	精良	明赤褐色	良好	2/3	丹塗り	
519	125		SP552		弥生土器・甕	39.0			5.3	3mm以下砂粒混入	にふい黄褐色	良好	口縁1/12		
520	124		SP557		弥生土器・甕	(24.8)			4.5	2mm以下砂粒混入	にふい橙色	良好	口縁1/5		
521	125		SP565		弥生土器・壺			4.0	3.1	2mm以下砂粒多量混入	にふい橙色	良好	底部全周		
522	125		SP568		突帯文土器・深鉢				6.2	3mm以下の砂粒混入	灰黄褐色	良	口縁細片		
523	125	92	SB1406(SP590)		弥生土器・鉢			最大 12.2	4.7	6.0	2mm以下砂粒多量混入	にふい黄褐色	普通	口縁部欠損	
524	125		SP593		弥生土器・壺			5.4	3.9	1mm以下砂粒多量混入	にふい黄褐色、黒色	良	底部1/2		
525	125		SP593		弥生土器・壺				3.3	1~3mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	普通	底部1/6		
526	125	92	SP634		ミニチュア土器・ 鉢?壺?	8.0			4.3	3mm以下砂粒多量混入	灰白~浅黄褐色	良好	口縁1/2		
527	125		SP668		弥生土器・壺	(13.4)			8.1	1mm以下砂粒少量混入	灰黄褐色	良好	口縁1/5	丹塗り	
528	125		SP674		弥生土器・甕			頸部径 31.4	12.3	5mm以下砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	頸部1/5		
529	125		SP700		弥生土器・甕	(20.0)			8.8	3mm以下の砂粒混入	黒色	良好	口縁1/6		
530	125		SP700		弥生土器・甕	(23.2)			6.6	2mm以下砂粒混入	にふい褐色	良好	口縁1/7		
531	125		SP701		弥生土器・高坏			裾径 (10.8)	5.6	4mm以下砂粒混入	にふい褐色	良好	脚~裾部 1/3		
532	125		SP719		突帯文土器・甕	18.6			6.5	2mm以下砂粒多量混入	にふい黄褐色	良	口縁1/9		
533	125		SP719		弥生土器・鉢	(18.4)			6.3	精良	灰黄褐色	良好	口縁1/8	丹塗り	
534	125	91	SP114		土製品・紡錘車	4.9		5.0	最大 1.3	1~2mm砂粒多量混入	にふい黄褐色	普通	黒斑あり		
535	125	81	SB1260(SP125)		土製品・紡錘車	6.2		6.2	最大 1.5	1~2mm砂粒多量混入	灰オリーブ色	良好	完存		
536	125		SP637		土製品・不明土製品	6.2			3.1	精良	暗灰黄色	良好	1/2弱		
537	129		SK1160周辺遺構面		突帯文土器・深鉢				4.6	細砂多量混入	淡褐色	良好	口縁細片		
538	129		SK1161周辺遺構面		弥生土器・壺	10.0			5.7	砂粒多量混入	黒~淡灰褐色	良好	口縁1/4		
539	129	92	第Ⅲ面遺構面	I-20区	ミニチュア土器・ 鉢				3.8	精良	灰褐色	良好	底部全周		
540	129		第Ⅲ面包含層 SX1149	と同・2区接合	土器器・壺				5.9	精良	橙色	良好	1/4		
541	129		第Ⅲ面包含層 SX1149-2区		土器器・高坏				3.7	精良	にふい橙色	良好	脚部		
542	129	92	第Ⅲ面包含層	I-13区上層	弥生土器・壺			6.0	13.0	3mm以下砂粒多量混入	にふい黄褐色	良好	胴部1/2弱		
543	129	92	第Ⅲ面包含層	I-13区上層	弥生土器・甕	13.55		5.8	16.9	0.5~3mm砂粒多量混入	浅黄褐色~黒褐色	良好	口縁~胴部 1/4~1/6欠損		
544	129	92	第Ⅲ面包含層	I-13区上層	弥生土器・甕			最大 21.7	(6.8)	21.0	1~5mm粗砂多量混入	灰黄褐色	良好	口縁~底部 1/3	
545	129	92	第Ⅲ面包含層	I-13区上層	弥生土器・鉢	(18.8)		6.4	7.8	2mm以下砂粒多量混入	にふい黄褐色	普通	4/5		
546	129		第Ⅲ面包含層	I-13区上層	弥生土器・支脚			受部径 6.9	5.3	3mm以下砂粒多量混入	黄褐色	良	受部全周		
547	129	92	第Ⅲ面遺構面	H-17区	弥生土器・器台			受部径 13.0	裾径 (13.0)	17.0	2mm以下砂粒混入	にふい橙色	良好	3/4	
548	129		第Ⅲ面遺構面	西壁落際	弥生土器・高坏	(31.6)			6.3	精良	にふい橙色	良好	1/5		
549	129	92	第Ⅲ面遺構面	D-21区	弥生土器・壺蓋	(14.0)		つまみ 径1.7	3.1	精良	灰黄色	良	7/8		
550	129	92	第Ⅲ面遺構面	I-19区	土製品・土錘	最大 4.8		最大 2.6	最大 2.5	精良	橙色	良好	完存		
551	129		第Ⅲ面遺構面	H-20区	土製品・玉?	1.2		1.1	0.9	細砂少量混入	灰黄色	普通	完存	直径0.4cmの孔	

石器・石製品・ガラス製品・金属製品観察表

報告番号	Fig.	PL.	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)()は残存			材質	色調	備考
						長・直径	幅・高さ	厚・孔径			
S1	76	93	SD818-9区	下部砂層上面	扁平片刃石斧	7.2	(5.1)	(1.1)	粘板岩? 泥岩?	緑灰色	
S2	76	93	SD818-9区	最下層	石包丁	(5.5)	(3.7)	0.6	変成岩	明緑灰色	1/2残存
S3	76	93	SD818-9区	最下層	石包丁	(5.7)	(3.9)	0.6	頁岩	暗青灰色	1/2残存
S4	76	93	SD818-11区		砥石	最大38.0	最大9.9	最大10.3	泥岩+頁岩	暗緑灰色	縦状に灰色がうすく入る
S5	76	93	SD1210-3区		石包丁	10.5	4.0	0.75	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス	褐灰色	貫通してない小穴が2つある
S6	76		SD1210-1区	最下層粗砂	磨石	(7.5)	最大3.4	1.4	砂岩	灰色	
S7	76		SD1210-2区	下層	砥石	6.4	最大4.2	最大2.8	砂岩	灰色	
S8	76	93	SD1210-3区		磨製石斧? 石鏃?	12.2	最大5.2	最大1.2	火成岩?	暗オリーブ色	使用擦痕が多く見られる
S9	76		SD1210-3区	(SD818底下)	砥石	(13.3)	最大14.7	最大3.2	砂岩	黄灰色	
S10	77	93	SD1119-5区	下層	石包丁	(6.7)	(4.0)	0.8	粘板岩	灰色	1/2弱残存
S11	77	93	SD1131		磨製石斧	(10.5)	最大6.05	2.5	玄武岩	灰白色	
S12	77		SD1131		砥石?	9.2	最大5.6	2.3	頁岩? 粘板岩?	暗灰色	石斧転用品
S13	77		SD1119-5区	下層	石核		3.73	1.50	黒燻石	黒色	重さ:11.05g
S14	77	93	SD1278		石包丁	(8.7)	3.2	最大0.8	変成岩	灰オリーブ黒色	
S15	77	93	SD1278		石包丁	(7.6)	3.25	0.55	輝緑凝灰岩	暗赤褐色	
S16	77		SD1278		磨石	(9.0)	最大8.9	最大7.9	火成岩?	灰色	
S17	78	93	SD1210-2区	最下層粘土層	砥石	最大25.1	最大14.4	最大3.3	泥岩系水成岩	灰褐色	
S18	78	93	SD1222-2区		石鏃	2.15	1.6	0.2	黒燻石	黒色	
S19	105	94	SX1156	土器群D	スクレイパー	4.1	3.3	0.9	古銅輝石安山岩	暗灰色	重さ:15.13g
S20	105	94	SX1186	土器群D	鏃	6.9	最大4.7	最大4.3	火成岩系?	灰白色	
S21	105		SX1186	土器群No.133	磨石? 砥石?	最大5.8	最大5.3	最大3.1	火成岩	灰色	
S22	105	94	SX1186	土器群C	砥石	(19.1)	最大10.8	7.9	砂岩	灰色	比較的に目が粗い
S23	105		SX1186		浮子?	8.95	最大5.65	2.75	軽石	灰色	
S24	105	94	SX1186	土器群B	石鏃	2.0	最大1.4	最大0.3	黒燻石	黒色	白濁した混入物が2か所入っている
S25	105	94	SX1186		石鏃	2.2	最大1.5	最大0.3	黒燻石	黒色	
S26	105	94	SX1130		打製石斧	11.55	最大8.0	最大1.8	滑石片岩? 蛇紋岩?	緑灰色・銀色を帯びる	
S27	105	94	SX1228		剥片鏃	1.83	1.93	0.36	黒燻石	黒色	重さ:1.07g
S28	105	94	SX1231		剥片鏃	2.90	最大2.0	最大0.4	黒燻石	不透明黒色で白色微粒混入	
S29	119		SB1414(SP512)		打製石鏃	7.9	5.9	1.2	礫岩	灰オリーブ色	
S30	119		SB1409(SP103)		石鏃	最大1.8	最大1.5	最大0.25	黒燻石	黒色	全体に不透だが、先端が少し透明感があり、縦状。
S31	119		SK1085		スクレイパー	最大2.5	2.14	0.59	黒燻石	黒色	
S32	119	94	SK1147		砥石	(17.1)	(6.2)	1.5以上	粘板岩	灰色	剥落が著しく、使い込まれている
S33	119		SK1147		丸石	最大2.3	1.9	1.9	軽石	暗灰色	
S34	127	94	SP486		石包丁	(7.6)	最大3.2	最大0.55	輝緑凝灰岩	暗灰赤色	刃部に擦痕あり。疵穴に明瞭な紐ずれ痕が見られない。
S35	127	94	SP682		石包丁	(9.6)	最大4.3	最大0.6	泥岩	灰色/赤灰色	
S36	127	94	SP541		砥石片	(9.5)	3.9	最大2.5	粘板岩? 泥岩?	オリーブ黒色	
S37	127		SP700		磨石	6.7	6.8	3.3	玄武岩	灰白色	
S38	127	95	第Ⅲ面遺構面	I-19区	石包丁	(6.6)	最大4.6	最大0.75	輝緑凝灰岩	暗赤灰色	使用痕として刃部が欠けているが体部の明瞭な擦痕は不明。
S39	127	95	第Ⅲ面包含層	I-13区上層	石包丁	(9.6)	最大3.9	最大0.7	輝緑凝灰岩	黒褐色/青味を帯びた褐灰色	かなり使用により摩滅し消耗している
S40	130	95	第Ⅲ面包含層	上層	石鏃	2.4	1.85	0.45	黒燻石	黒色	薄茶の混合物帯が入っている
S41	130	95	第Ⅲ面遺構面		石鏃	最大2.7	最大2.2	最大0.5	黒燻石	黒色	先端の側縁が若干欠損
S42	130	95	第Ⅲ面遺構面		石鏃	最大2.3	最大2.0	最大0.3	黒燻石	黒色	先端欠損、上方は透明度が高く下方は低い
S43	130	95	第Ⅲ面検出面		石鏃	最大2.45	最大1.4	最大0.3	黒燻石	不透明黒色	先端の側縁が若干欠損
S44	130	95	第Ⅲ面遺構面		石鏃	最大2.2	1.0	最大0.3	黒燻石	黒色	片側が欠損
B1	119	95	SK1157	ベルト上層	ガラス小玉	0.4	0.2	0.15	ガラス	スカイブルー色	
B2	119	95	SK1157	東側下層	ガラス小玉	0.5	0.15	0.15	ガラス	濃紺色	
B3	119	95	SK1160		ガラス小玉	0.4	0.15	0.15	ガラス	濃紺色	
B4	119		SB1421(SK1161)		ガラス小玉	0.2	0.1	0.75	ガラス	濃紺色	孔は小さくほとんど見えない
B5	119	95	SB1421(SK1161)		ガラス小玉	0.85	0.35	0.3	ガラス	濃紺色	風化が進み白っぽい
B6	119	95	SK1162-2	ベルト	ガラス小玉	0.4	0.15	0.2	ガラス	濃紺色	側面丸味をもつ
B7	119	95	SK1173	ベルト上層	ガラス小玉	0.3	0.15	0.15	ガラス	濃紺色	側面丸味をもつ
B8	130	95	SP188		ガラス小玉	0.3	0.15	0.1	ガラス	コバルトブルー色	ガラス
B9	130	95	SP486		ガラス小玉	0.45	0.3	0.2	ガラス	濃紺色	
B10	130	95	第Ⅲ面 遺構面		ガラス小玉	0.5	0.3	0.2	ガラス	暗青緑色	
M1	78	95	SD1210		鉄斧	15.35	最大5.9	最大3.8	鉄	-	表面は全体的に錆が進んでいるが重い
M2	78	95	SS1261		銅鏃	4.6	最大1.3	最大0.4	銅	-	表面の保存状態は良い。後世の傷などの傷みがある

木器観察表

報告番号	Fig.	P.L.	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量 単位 cm ()は残存				木 取 り	樹 種	備 考 ・ 所 見
						長さ・口径 径・底径	幅・高さ ・短軸	厚さ・ 直径	その他			
W1	58	95	SB24E(SP81)	柱	柱	(478)	150	155		芯持ち	クスノキ	根部のみ残存。腐食による樹芯の抜け落ちあり。表面はゆるがが多く、傷みが著しい。下部では削りによる抉りあり。全体的に粗い削り。
W2	58	95	SB24E(SP81)	礎板	礎板	442	197	6.6		板目	クリ	宍存。表面は粗削り加工。裏面は荒削り加工。両側面は樹皮残存の自然面。木口面は粗削り加工で、一方を斜めに面を作り出す。
W3	58	95	SB24E(SP82)	礎板	礎板	348	190	6.1		板目	スダジイ	宍存。表面は粗削り加工。裏面は荒削り加工。両側面は樹皮残存の自然面。木口面は削り加工。
W4	58	95	SB24E(SP83)	柱	柱	(331)	119	9.2		割材	クリ	根部のみ残存。表裏面ともに大きな粗削り加工で面を整える。表面には一部自然面が残る。
W5	58	95	SB24E(SP83)	礎板	礎板	323	177	6.3		板目	クリ	宍存。表面は粗削り加工。裏面は荒削り加工。木口面は削り加工。側面に樹皮残存。
W6	58	95	SB24E(SP83)	礎板	礎板	394	201	7.4		板目	スダジイ	宍存。表面は大きな粗削り加工。中央部分に削りによる大きな抉れあり。片方の木口面には突出部あり。裏面は荒削り加工。側面に樹皮残存。
W7	58	95	SB24E(SP83)	礎板	礎板	426	197	6.1		板目	スダジイ	宍存。表面は削り加工による面を作り出す。裏面は荒削り加工だが、平坦に削り出す。側面に樹皮残存。
W8	58	95	SB25A(SP5)	礎板	礎板	490	219	5.6		板目	チシャノキ	宍存。表面は大きな削り加工だが、削りに伴うひっかかりが多い。幅約5cmで一方の木口面に向かって斜めに面を作り出す。裏面は荒削り加工(後削り)加工で面を整える。側面は樹皮のない自然面。
W9	58	95	SB25A(SP5)	礎板	礎板	400	147	2.5		板目	スダジイ	宍存。表裏面ともに比較的丁寧で大きな削り加工。幅4cm程で一方の木口面に向かって斜めに面を作り出す。側面には面取削りの削り加工あり。
W10	58	97	SB25E(SP62)	柱	柱	(177)	126	125		芯持ち	スダジイ	根部のみ残存。欠損部分が多く、全体的に傷みが著しい。表面は比較的丁寧な削り加工。裏面は平坦に整える。
W11	58	97	SB25E(SP62)	礎板	礎板	366	261	7.8		板目	スダジイ	宍存。表裏面ともに荒削り加工のような大きな削り加工。木口面は斜めに大きく削り加工。側面は樹皮のない自然面。
W12	59	97	SB25E(SP71)	礎板	礎板	337	140	3.0		板目	クリ	宍存。表面は大きな削り加工。裏面は荒削り加工。木口面は削り加工。部分的に砂粒の付着あり。側面は樹皮のない自然面。
W13	59	97	SB25E(SP71)	礎板	礎板	387	202	4.2		板目	クリ	宍存。表面は大きな粗削り加工。裏面は荒削り加工。粗削り加工。木口面は削り加工により、一方を斜めに面を整える。一部に砂粒の付着あり。両側面は荒削り加工によって斜めに面を作り出す。
W14	59	97	SB25E(SP79)	礎板	礎板	248	8.8	4.3		板目 割材	クリ	宍存。表面は樹皮のない自然面。木口面は削り加工。裏面は荒削り加工。両側面の中央部分では削り加工によって、長さ10cmの抉りが作り出されている。
W15	59	97	SB25E(SP74)	礎板	礎板	395	9.2	5.3		板目 割材	クリ	宍存。表面は大きな削り加工。裏面は全面に樹皮残存。木口面は削り加工により、斜めに面を整える。一部に砂粒付着あり。
W16	59	97	SB25E(SP85)	礎板	礎板	378	101	6.8		板目 割材	クリ	宍存。表面は樹皮が多く残り、おそらく当初は全面に残っていたものと思われる。木口面は削り加工により、一方を斜めに面を整える。裏面は荒削り加工。両側面とも削り加工により中央部分にゆるい抉りを作り出す。
W17	59	97	SB25E(SP87)	柱	柱	(308)	100	9.8		芯持ち	クリ	根部のみ残存。底部は削り加工により中心部分を削りぬいて二又の足を作り出す。他の建築部材と組み合わせて利用。表面は削り加工によって、面を整えている。腐食のため、樹芯は抜け落ちる。
W18	59	97	SB25E(SP87)	礎板	礎板	428	9.0	6.3		板目 割材	クリ	宍存。表面に樹皮残存。一部を削り加工により、樹皮を剥く。木口面は削り加工。一方の木口面には砂粒の付着あり。側面中央部分には削り加工によって、抉りが作り出される。裏面は荒削り加工。
W19	59	98	SB25E(SP8)	礎板	礎板	(350)	114	6.4		板目	カヤ	表裏面ともに荒削り加工。表面には削り加工により溝が作り出される。
W20	59		SB25E(SP8)	礎板	礎板	(384)	110	6.3		板目	カヤ	表面は細かな削り加工による溝が作り出される。表・側面ともに荒削り加工。
W21	59	98	SB25E(SP85)	柱	柱	(397)	291	255		芯持ち	タブノキ属	根部のみ残存。樹芯は抜け落ちており、中心部分は大きく欠損。底面は腐食が著しく、底部周辺はこわやかに削り加工がみられる程度。表面は形が変形するほど腐食が著しい。
W22	59	98	SB40E(SP29)	柱	柱	(398)	146	138		芯持ち	ツバキ属	根部のみ残存。底面と表面の一部に削り加工。全体的に傷みが著しく、表面の加工痕等は不明瞭。
W23	60	98	SB40E(SP89)	柱	柱	(447)	131	130		芯持ち	アワブキ属	根部のみ残存。表面は樹皮のない自然面。傷みが著しく、亀裂が多い。底面は削り加工。
W24	60	98	SB40E(SP85)	礎板	礎板	229	142	6.3		板目	アワブキ属	宍存。樹木を縦に半裁したような断面半円形。表面は大きな荒削り加工。裏面は樹皮のない自然面。木口面は削り加工により、一方を斜めに面を作り出す。
W25	60	98	SB40E(SP83)	柱	柱	(420)	157	144		芯持ち	クスノキ科	根部のみ残存。底面のみ削り加工で面を整える。表面は部分的に樹皮残存の自然面。欠損部分は傷みが著しい。
W26	60	98	SB40E(SP24)	柱	柱	(335)	145	150		芯持ち	ツブラジイ	根部のみ残存。底面は丁寧な削り加工。表面は傷みが著しいが、自然面と想定。
W27	60	98	SB40E(SP24)	礎板	礎板	287	9.0	5.0		板目	エノキ属	宍存。樹木を縦に半裁したような断面半円形。表面は樹芯が抜け落ちているが、削り加工。木口面は削り加工。裏面は樹皮のない自然面。
W28	60	98	SB40E(SP24)	礎板	礎板	284	9.1	4.8		板目	エノキ属	宍存。樹木を縦に半裁したような断面半円形。表面は大きな荒削り加工。木口面は削り加工により、一方を斜めに面を作り出す。裏面は部分的に樹皮残存の自然面。
W29	60	98	SB40E(SP86)	柱	柱	(314)	134	121		芯持ち	ツバキ属	根部のみ残存。底面は削り加工。表面は腐食が著しいが、削り加工か。
W30	60	99	SB40E(SP16)	礎板	礎板	339	9.4	4.9		板目	モモ	表面は細かな削り加工。裏面は荒削り加工。側面は樹皮のない自然面。木口面は削り加工により、一方を斜めに面を整える。
W31	60	99	SB40E(SP16)	礎板	礎板	331	106	4.9		板目	モモ	表面は荒削り後削り加工。裏面は削り加工。側面は樹皮のない自然面。木口面は削り加工により、一方を斜めに面を整える。
W32	60	99	SB40E(SP86)	礎板	礎板	330	100	7.4		板目	モモ	宍存。樹芯が抜け落ちているが、表面は大きく削り加工されていると想定。裏面は2ヶ所後打部分が残る。ほぼ全面に樹皮が残存。木口面は削り加工により、一方を斜めに尖らせる。

報告 番号	Fig.	P L.	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)()は残存				木 取 り	樹 種	備 考 ・ 所 見
						長さ・口 径・底径	幅・高さ ・短軸	厚さ・ 直径	その他			
W33	60	99	SB1411(SP231)		礎板	31.6	33.6	9.0		板目	コナラ属コナラ垂属ク ヌギ節	完存。部分的に剥落しているが、表面には厚 さ約3cmの樹皮が全面に残存。側面は荒削り 加工後、表面を簡単に整える。木口面は大き な削り加工。
W34	60	102	SB1413(SP752)		柱	(27.5)	20.4	20.1		芯持ち	カヤ	根部のみ残存。底・表面ともに丁寧な削り加 工。底面中心に使用時の潰れと思われる部 分があるが不明瞭。腐食の為、中心部分に欠 損あり。
W35	60	99	SB1414(SP620)		板材?	30.8	6.9	2.7		板目	ツブラジイ	孔が4ヶ所あり、そのうち2ヶ所は未貫通。 種生跡か。全体的に傷みが著しく、表裏面の 加工痕等不明。側面は削り加工。
W36	61	99	SB1421(SK1161)		柱	(46.8)	26.5	21.2		芯持ち	マツ属複雑管束亜属	根部のみ残存。底面から約10cmの部分に方 形の粗通孔あり。底面は大きな削り加工。表 面も削り加工により整える。
W37	71	99	SD818 10区		杓子状木製品	(21.6)	5.9	1.4		板目	クリ	
W38	71	99	SD818 9区		農耕具(頭部片)	(9.2)	(2.6)	1.5		板目	コナラ属アカガシ垂属	
W39	71	99	SD818 10区		不明木製品(板状 木製品)	40.0	8.1	2.0		板目	スギ	
W40	71		SD818 10区		不明木製品	21.9	(5.5)	0.7		板目	コナラ属アカガシ垂属	
W41	71	99	SD818 11区		不明木製品(板状 木製品)	(37.4)	(6.8)	1.5		板目	サカキ	
W42	71		SD818 9区	西側落跡中〜下層	不明木製品	(27.7)	(5.4)	1.4		板目	コナラ属アカガシ垂属	
W43	71		SD818 9区		杭	(35.9)	5.0	4.3		芯持ち	アワブキ属	
W44	71	99	SD818 9区		杭(建築部材?)	56.7	5.0	3.5		芯持ち	広葉樹(散孔材)	
W45	71		SD818 11区		杭	(108.8)	3.6	2.6		芯持ち	シキミ	
W46	71	100	SD818 11区		建築部材	(169.0)	6.6	4.8		芯持ち	スダジイ	
W47	79	100	SD1210 3区		農耕具?	(30.2)	(7.5)	1.1		板目	コナラ属アカガシ垂属	
W48	79	100	SD1210		農耕具?	(28.9)	(6.4)	0.9		板目	コナラ属アカガシ垂属	
W49	79	100	SD1210 3区		不明木製品(板状 木製品)	(29.2)	9.0	1.8		板目	コナラ属アカガシ垂属	
W50	84	100	SK1185		不明木製品	(25.5)	4.0	0.6			コナラ属アカガシ垂属	
W51	84	100	SX1262 1区		杭	(34.0)	10.6	8.5		芯持ち	ムクノキ	
W52	84	100	SX1263		農耕具	43.0	18.0	1.1	番柄角75 度+85度	板目		樹種:コナラ属アカガシ垂属?柄差: 3.3×4.7cm
W53	84	100	SX1263		杭	(97.4)	11.2	10.2		芯持ち	コナラ属コナラ垂属ク ヌギ節	完存
W54	84	100	SX1269		不明木製品	27.1	34.7	2.9		芯持ち	カヤ	
W55	84	101	SX1269		建築部材	129.8	6.4	4.0		芯持ち	コナラ属コナラ垂属ク ヌギ節	完存
W56	84	100	SX1275		杭	53.4	8.8	8.1		芯持ち	コナラ属コナラ垂属ク ヌギ節	
W57	115	101	SK1150		組合せ式把手	12.5	8.7	5.4		板目	クリ	家具等の把手?
W58	120	101	SK1147		不明木製品(棒状 木製品)	17.8	2.9	2.1		板目	コナラ属アカガシ垂属	表面炭化
W59	120	101	SK1147		槽	37.0	17.9	6.4		板目	ツバキ属	
W60	120		SK1147		不明木製品(棒状 木製品)	(42.5)	6.1	6.6		芯持ち	カマツカ	
W61	120	101	SK1264 2区		不明木製品	(17.9)	5.8	1.8		板目	コナラ属アカガシ垂属	
W62	120		SK1264 3区		不明木製品	10.2	5.2	1.6		板目	コナラ属アカガシ垂属	
W63	126	101	SP57		礎板	41.5	11.0	7.8		芯持ち	チシャノキ	完存。表面は樹皮のない自然面。裏面は荒削 り加工。木口面は削り加工。側面中央部分は 削り加工により抉りが作り出される。
W64	126	101	SP163		礎板	(25.8)	(7.7)	3.3		板目	キハダ	表・側面ともに欠損部分が多く本来の形は 不明。表面は削り加工か。裏面は荒削り加工。
W65	126	101	SP407		礎板	29.2	11.5	3.7		板目	クリ	完存。表面は削りにより樹皮を剥いだだけ の状態。木口部分は削り加工により、一方を 斜めに面を整える。側面は削り加工か。裏面 は荒削り加工。
W66	126	101	SP407		礎板	33.9	(10.3)	3.0		板目	クリ	表面は丁寧で大きな削り加工。裏面は荒削 り加工。木口面は削り加工により、一方を断 面三角形に尖らせる。側面は削り加工。
W67	126	102	SP491		礎板	25.1	18.1	10.1		板目	コナラ属アカガシ垂属	完存。樹木を縦に半截したような断面半円 形。表面は粗削り加工。裏面は樹皮のない自 然面。木口面は削り加工により、一方の裏面 部分を大きく斜めに面を整える。
W68	126	101	SP509		礎板	22.8	10.7	6.4		板目	コナラ属アカガシ垂属	完存。表面は粗削り加工。裏・側面ともに削 り加工。木口面は削り加工により、一方を斜 めに面を整える。
W69	126	99	SP725		柱	(26.6)	12.7	13.0		芯持ち	コナラ属アカガシ垂属	根部のみ残存。底面は大きく三面の削り加 工。中心には使用時の潰れあり。表面は樹皮 のない自然面。
W70	126	102	SP739		柱	(37.5)	13.4	11.4		芯持ち	クスノキ科	根部のみ残存。底面は中心部分を削りぬき、 削り加工により二又の足を作り出す。別の 建築部材と組み合わせて利用。底部も含め、 全体的に傷みが著しく、加工痕等は不明瞭。
W71	128		SX1246		杭	(37.7)	3.3	3.2		芯持ち	コナラ属アカガシ垂属	
W72	128		SX1247		杭	(30.7)	7.8	7.0		芯持ち	クスノキ科	柱転用材
W73	128	102	第Ⅲ面遺構面		建築部材	(167.7)	7.2	4.6		板目(割材)	ツブラジイ	

下月隈C遺跡

第9次調査

第IV章 はじめに

1. 調査に至る経過

本書は、空港周辺の洪水対策用として福岡市博多区月隈4丁目7地内に計画された月隈調節池建設事業に伴う調査で、事業計画地の第6年度（平成15年度調査、18年度整理）に実施した第9次調査の報告である。

調査・整理作業に当たっては九州地方整備局の皆様をはじめ、地元の皆様にご理解とご協力を得ました。この場を借りてお礼申し上げます。

2. 調査の組織

第9次調査の調査組織は以下のとおりである。

(1) 委託者

	運輸省第四港湾建設局博多港湾空港工事事務所			
	国土交通省九州地方整備局博多港湾空港工事事務所			
《平成6年度》	第四港湾建設局長	石田省三	博多港工事事務所長	鹿籠雅純
《平成15年度》	九州地方整備局長	岡山和生	博多港湾・空港整備事務所長	酒井洋一
《平成16年度》	九州地方整備局長	岡山和生	博多港湾・空港整備事務所長	元野一生
《平成17年度》	九州地方整備局長	宮田年耕	博多港湾・空港整備事務所長	元野一生
《平成18年度》	九州地方整備局長	小原恒平	博多港湾・空港整備事務所長	杉野浩茂

(2) 調査主体

福岡市教育委員会

《平成6年度》……試掘調査

	教 育 長	尾 花 剛
	文化財部長	後 藤 直
	埋蔵文化財課長	折 尾 学
事前審査	主任文化財主事	濱 石 哲 也
試掘調査	文化財主事	長 家 伸
経理担当	事務吏員	内 野 保 基

《平成15年度》……発掘調査

	教 育 長	生 田 征 生
	文化財部長	堺 徹
	埋蔵文化財課長	山 崎 純 男
	調査第2係長	田 中 寿 夫
調査担当	主任文化財主事	山 崎 龍 雄
経理担当	文化財整備課	鈴 木 由 貴

《平成18年度》……整理作業

	教 育 長	植 木 とみ子
	文化財部長	山 崎 純 男
	埋蔵文化財第1課長	山 口 讓 治
	調 査 係 長	山 崎 龍 雄
整理担当	調 査 係 長	山 崎 龍 雄
	主任文化財主事	荒 牧 宏 行
経理担当	文化財管理課	鳥 越 由紀子

《調査指導》 佐藤洋一郎（総合地球環境学研究所教授）、日野尚志（佐賀大学名誉教授）

《調査・整理協力者》

調査・整理補助 上方高弘、河野麻耶（慶応大学大学院）、境聡子、瀬戸啓治、藤野雅基、山口朱美、大賀順子、木藤直子、清永啓子、澤 玲子、西島奈美、平ノ内 武、平山景将、松尾信子、増永好美、宮坂 環、村上信子、持原良子、本村幸代

調査協力 井上一雄、井上利弘、井上英子、井上佳子、岩崎良隆、榎田信一、大賀 一、大橋由美子、岡部安正、小野千佳、甲斐康完、兼田ミヤ子、河野一一、北原由紀子、久保登喜子、黒瀬千鶴、小島キサエ、後藤タミ子、酒井次憲、坂本久幸、里崎直子、佐藤アイ子、真田弘二、高手與志子、武田潤子、田中茂孝、田上智雄、知花繁代、堤 正子、永田八重子、二宮白人、野口リュウ子、畠中千恵美、別府俊美、松永七朗、松葉祐輝、丸山勝江、安高邦晴、安高精一、山下嘉人

第V章 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig.5)

第9次調査区は調節池建設予定地の南東隅、第8次調査区の南側に位置し、調査事務所があった部分(第1区)に、調節池建設予定地中央を南北に通る管理道路を横断する調節池の通水管部分の調査が新たに加わり、その部分を第2区、第3区として合わせて3地区の部分第9次調査として行った。

調査は第7・8次調査に準じて調査面の設定を行い実施した。ただ第1区地点は浅い谷部に位置し、谷を埋める堆積土が大きく2面に分離出来、下層上面で遺構が検出できたことから、この面を第Ⅲ面として、谷基盤面を第Ⅳ面として、合わせて4面の調査となった。各区の調査面積は第1区1,411㎡、第2区270㎡、第3区319㎡の合計2,000㎡である。

今回も全体の遺構図や写真撮影は時間的な都合からセスナ機による空中写真測量を写測エンジニアリング株式会社に委託して行った。

調査区の基準は第4次調査で設定した基準に準じて、申請地の長軸に沿って、東西南北10mの方眼を組み、東西は東からA～Z迄、南北は南から1～32区迄グリッドを設定し、10mグリッドの番号は右下隅の杭番号とした。

1) 調査日誌抄

第9次調査は平成15(2003)年4月1日に着手し、同年10月31日に終了した。

以下調査の経緯を述べる。

2003年

- 4月 今年度調査予定の事務所の移転、新事務所の建設準備。
- 5月 事務所の引越し、解体作業。新事務所の建設作業。
- 6月 4日より重機による表土掘削作業。第1区～第3区と順次行う。
16日より人力による現場作業開始。
9日梅雨入り、雨の日が続くようになる。
19日台風6号が九州に接近、大風が吹く。
- 7月 各区第Ⅰ面の調査。水田面の調査。
雨が多く作業は進まない。
10日空中写真測量を行う。その後実測作業と補足調査を行う。
15日3区第Ⅱ面掘削。
31日例年より10日以上遅い梅雨明け。
- 8月 6日に第3区第Ⅲ面全体写真撮影。7日台風接近のため、午前中第2区第Ⅱ面全体写真撮影を行う。
10日静岡大学佐藤洋一郎先生視察。
18日第3区調査終了。23日迄、県立高校の先生の職場研修。
21日第1区第Ⅱ面空中写真測量。SX1317の調査。

- 9月 第1区第Ⅲ面の調査。
12日に台風来襲、18日第Ⅲ面全体写真撮影。補足実測と調査。
25日重機により第Ⅳ面検出作業。
- 10月 第Ⅳ面遺構検出作業と掘り下げ作業。
17日第Ⅳ面空中写真撮影。
21～28日埋め戻し作業、調査終了。
29～31日 撤収作業。



高校の先生の体験学習風景

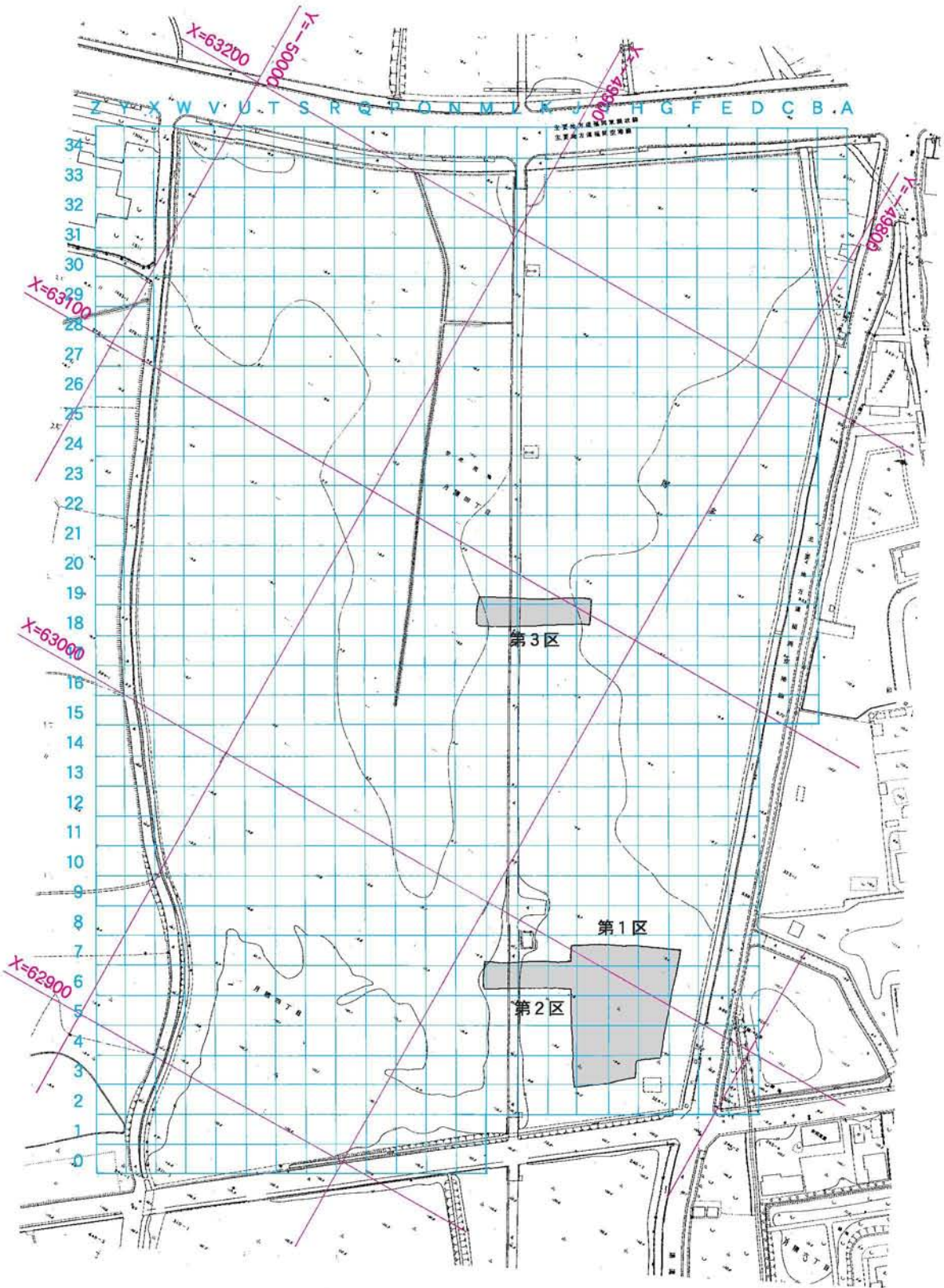


Fig.131 下月隈C遺跡調査区配置図 (1/2,000)

2. 第1区の調査

1) 第I面の調査 (Fig.131~133)

第1区の調査面積は1,411㎡である。第I面は地表-0.9~1.0m、標高(8.7~8.6m)である。第I面までの堆積土は0.5~0.8m厚のバラスや客土などの下に近代水田土があり、その下に粗砂や砂質シルトの薄い層が体積し、その下に畦を伴う灰オリーブシルト面があり、その面を遺構面とした。検出した遺構は第8次調査区から続く水田とそれに伴う畦、流路である。電柱基礎などの攪乱もあり、水田面は余り残りは良くなく、畔や水田が明瞭に確認できたのは調査区北半のみであった。

2) 遺構と遺物

① 溝状遺構 (SD)

SD1302

調査区北東側、第8次調査区では確認出来ていないが、畦1の上面で検出した小溝。長さ2.8m、0.4m、深さ6~7cm程である。埋土は灰白色を呈す。

出土遺物 (Fig.135、PL.117) 白磁皿や土器細片が少量出土。

1は白磁皿1/8片で、復元口径12.4cmを測る。低い高台が付く形態と思われる。内外面乳白色の釉が薄くかかるが、口縁部は釉を掻き取る。13世紀前半~14世紀前後である。

② 水田遺構 (SS)

SS1301 (Fig.132、PL.103・104)

北側で検出した水田面で、第8次調査区南側で分岐して続く畔があり、東側の畦1はまた斜めに分岐する。西側の畦2は南西側に延び、I-7区杭あたりでまた2つに分岐する。水田面には洪水粗砂が覆うが余り厚くはない。水田面には足跡や切り株痕などが残っていた。畔2の分岐するあたりでは水口と思われる畔が途切れる部分がある。水田面は畔で5区画に分割したが、畔の残りが悪い為に面積など明確に出来ない。畔は地山削り出しではなく、盛り土で作成されたものである。水の流れは水田⑤から③、③から④への流れである。

出土遺物 (Fig.135、PL.117) 水田埋土から古墳時代~中世の土師器や須恵器、中国産の白磁などが少量出土している。混入である近世以降の遺物もわずかに出土している。

2は白磁の皿細片である。輪花の型押し成形で薄く精緻な作り。全面に灰白色の薄い透明釉がかかる。3は瓦質土器の播鉢の片口部細片。調整は内面ハケ目、外面ナデ、指押さえである。4は古代の須恵器の坏細片。灰色を呈し、焼成は良い。

③ その他 (SX)・遺構面出土遺物

SX1304出土遺物 (Fig.135、PL.117)

北側調査区進入口で出土したもの。5は青磁碗口縁部1/8片で、復元口径16cm前後を測る。口縁端部は短く外折する形態である。表面にはくすんだオリーブ灰釉がかかる。胎土・焼成は良好。

SX1306出土遺物 (Fig.135)

試掘トレンチから出土した遺物である。6は小型の高坏脚部片。表面は摩滅し、調整不明。胎土に砂粒を少量含むが、焼成は良好。

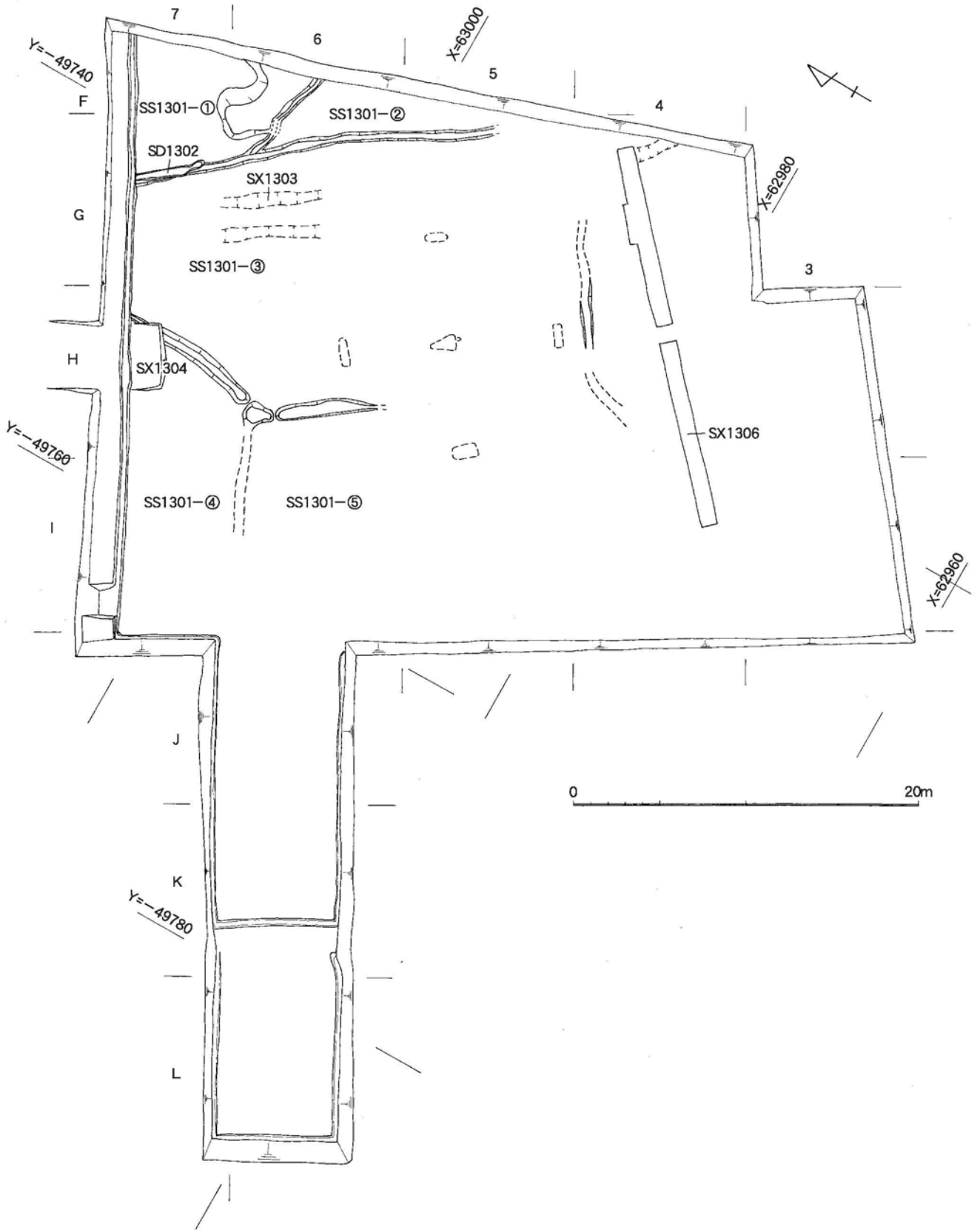


Fig.132 第1区・第2区第I面遺構全体図 (1/300)

遺構面出土遺物 (Fig.135)

7は土師器の埴高台1/5片。復元底径は7.6cmを測る。全体に摩滅し、調整は不明。胎土は精良、焼成は普通。

2) 第II面の調査 (Fig.136)

第I面から-0.6~0.8m下、標高7.8~9mで検出した面である。第I面との間層は粗砂混じりシルトである。第8次調査区第II面から続く面であるが、第8次調査区と同じように遺構は確認出来なかった。遺構面は黒褐色粘土である。調査区南東隅で、排水溝を掘った所、流木を確認したので、拡張したところ、木製品を含む流木の溜まりのような所 (SX1317) を確認した。

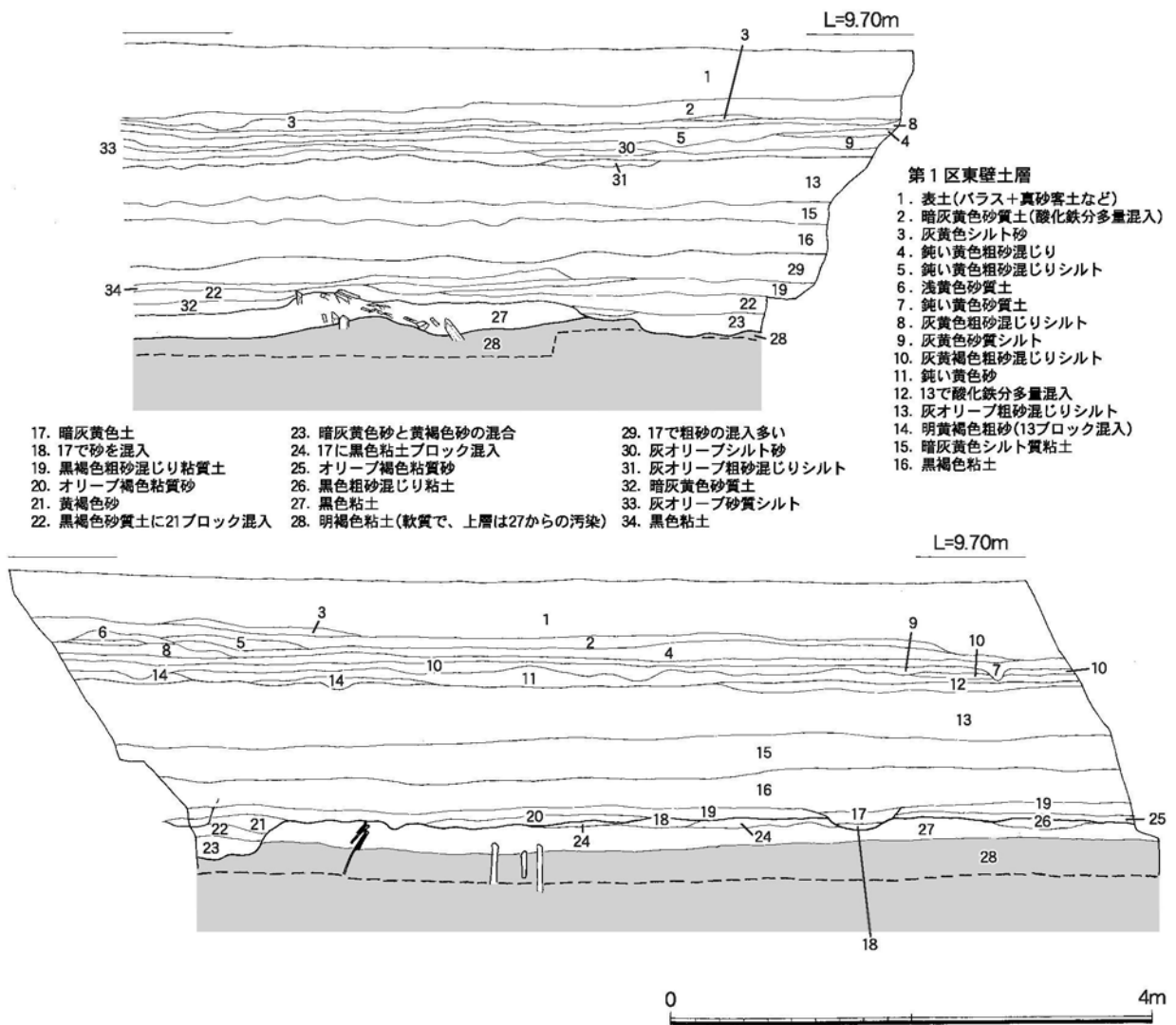


Fig.133 第1東・南壁区土層図 (1/60)

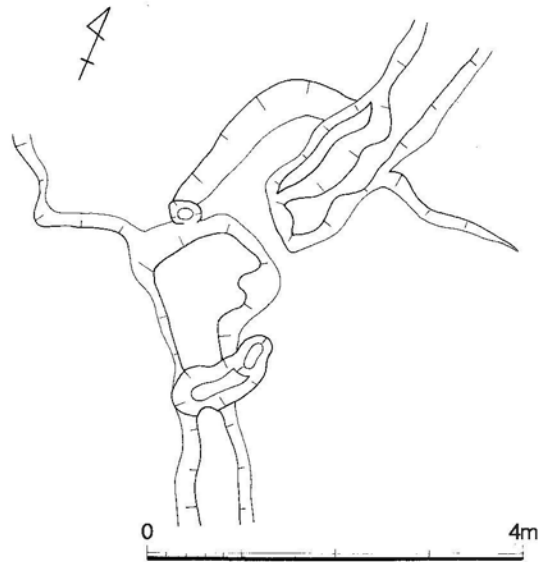


Fig.134 SS1301水田水口実測図 (1/80)

① 木製品・流木集積遺構

SX1317 (Fig.138、PL.105)

南東隅、排水溝掘削によって確認した遺構である。第Ⅱ面より、15~20cm 掘り下げた黒褐色粘土中で確認した。流木や木製品は規則性がなく、水平堆積に近く、自然に寄せ集まった状況である。

出土遺物 (Fig.139・140、PL.118・119) 弥生から古墳時代土器細片と、木製品が少量出土している。

W1・W2は機織りの腰当てのような木製品。規模は全長が47.4cm、45.7cm、最大幅10.4cm、9.0cm、最大厚は3.2cm、2.9cmを測る。両端がやや狭まり、上面は両端を高くして中央部をケズリ込み、底部は平坦面を残して、両端をケズリ込んでいる。いずれも両端に2個ずつ一對の1cm弱の円孔があり、また中央部にはW1に直径1cmの円孔、W2には2カ所の1辺1cmの方形孔がある。W1は板目材で、底部の平坦面以外はケズリ加工、W2はナナメ材で、全面ケズリ加工である。W3は編み具と思われる棒状の材。両端上部にナナメに切り込みを入れる。樹皮が残る芯持ち材で、残存長38.9cm、直径2.5×2.6cmを測る。W4は板材の一部。上側面は欠損し、残存長37.3cm、残存幅4.35cm、最大厚1.35cmを測る。表面は平坦に仕上げるが、上面には刃物傷が多く残る。左端に直径0.5cm程の円孔が3カ所あり、左端の2個は1cm間隔で接近し、間に孔を繋ぐ樹皮の紐が残る。板目材である。W5は板材。残存長41.6cmを測る。板目取りである。表面の傷みは激しいが、粗いケズリ加工である。W6は長方形の有孔板材片。残存長26.0cm、幅8.1cmを測る。板目取りで、丁寧なケズリで平滑に仕上げる。4カ所孔が空いており、板組物の部材であろう。W7は小型の槽の一部。全長24.8cm、器高5.0cmを測る。一部炭化する。丁寧な仕上げであるが、内面には刃物痕が多く残り、内底の表面は荒れている。スギの板目取りである。

② その他・遺構面出土遺物 (Fig.137、PL.119)

弥生土器から古代の土師器、須恵器が少量出土している。

1~4は遺構面出土。1~3は須恵器。1はH-3区出土。須恵器の坏高台1/8片で、底径11.0cmを測る。調整は回転ヨコナデ。色調は褐灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。8世紀代のもの。2は

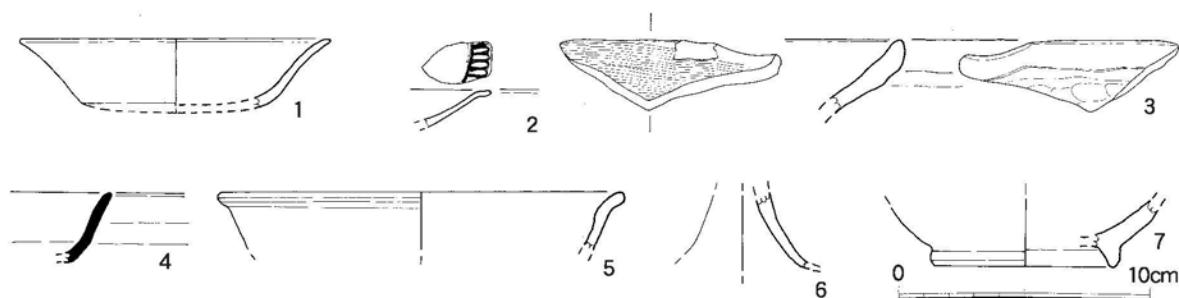


Fig.135 各遺構出土土器 (1/3)

I-3区出土の坏蓋天井部片。外面回転ヨコナデ、内面はナデ。外面には自然釉がかかる。3はI-3区出土。坏身細片でIV期のもの。調整は回転ヨコナデ。色調は灰色で、胎土は精良、焼成は良好。4はH-3区出土。土師器の甕で口縁部が外反し、端部は丸い。内外面調整はハケ目。色調は灰色を呈す。1~2mm砂粒を含み、焼成は良好。

W8・W9は頂部を山形にケズリ出した板材。W8は全長17.8cmを測る。厚みは0.2cmと薄い。表面は丁寧なケズリ仕上げである。頂部には孔が空き、W9には径2mmの孔が2カ所空く。

3) 第三面の調査 (Fig.141、PL.106)

第三面は第二面より0.3~0.7m下がった標高7.2~7.5mで、試掘トレンチSX1306の土層断面で、層が明確に分離出来たため、この面を遺構面として、遺構の確認を行った。検出遺構は溝や杭列、水田面と思われる砂が詰まった足跡、畦状の高まりなどである。北側が低く、粗砂の堆積が厚く、湧水があり地盤は軟弱であった。

① 溝状遺構

検出した溝は15条である。いずれも幅1m前後、深さは最大で0.2m程の小溝である。埋土も上からの堆積土のものが多く、外幅3mで並行する溝が多く、その規模が重機の幅に近いことから、第三面を重機で掘削する際の重機キャタピラの圧力による、遺構面の溝状の落ち込みと思われる。ただ、SD1331のように、調査区南壁から続く溝もあるので、一部は本来の遺構であろう。遺構と思われるものを中心に述べる。

SD1320出土遺物 (Fig.142)

1は甕の口縁部1/6片。復元口径33.4cmを測る。調整はナデで、胴部外面ハケ目後ナデ。色調は灰黄色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。弥生時代中期後半頃のもの。

SD1331

調査区南壁から続く溝である。H-5杭あたりで、並行する溝があり、キャタピラ溝と重複する。溝自体は確認長10m、幅0.6m、深さは南壁土層で0.2mを測る。溝は南壁土層で、第二面下層から掘り込んでいる。埋土は暗灰黄色土である。出土遺物は古墳時代土師器と思われる細片のみである。

出土遺物 (Fig.143、PL.117) W1は三又鍬の歯。残存長22.4cm、厚さ0.9cmを測る。ケズリで表面は平滑に仕上げる。

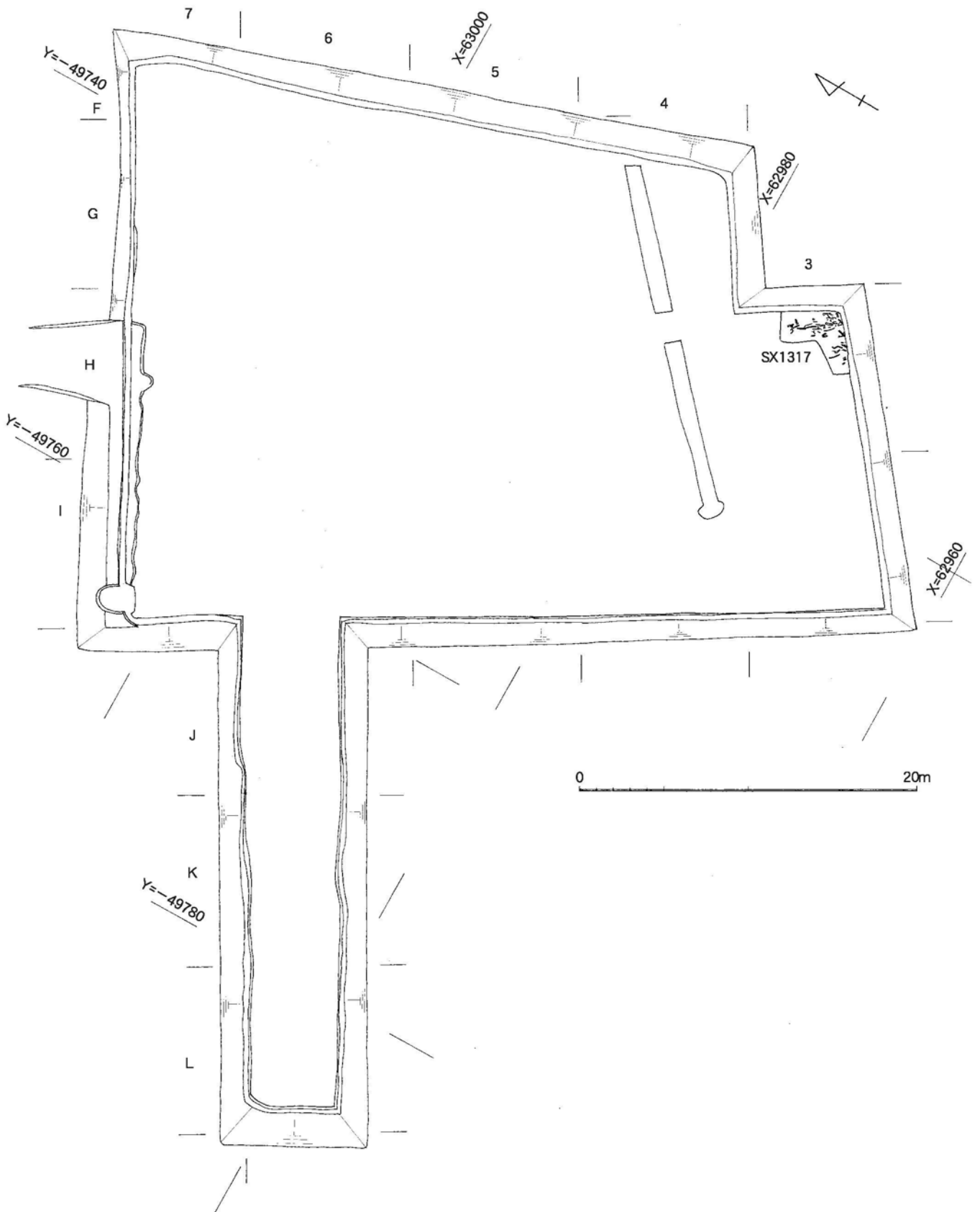


Fig.136 第1区・第2区第Ⅱ面遺構全体図 (1/300)

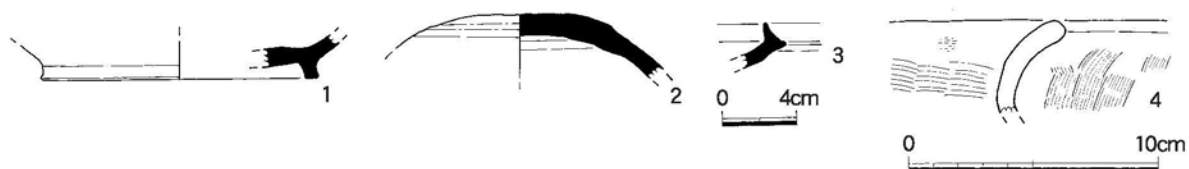


Fig.137 各遺構出土土器 (1/3・1/4)

SD1333出土遺物 (Fig.144)

SD1331と並行する溝で、形状から重機のキャタピラによる落ち込みであろう。S1は蛤刃の磨製石斧刃部片。残存長8.6cmを測る。下端に研磨された刃部がある。色調は灰色を呈し、石材は火成岩か。

SD1338

調査区東壁に続く自然流路で、粗砂が堆積していた。幅1～2mで、深さは浅く、深くても3cm前後である。

出土遺物 (Fig.142、PL.117) 弥生土器や流木が少量出土している。

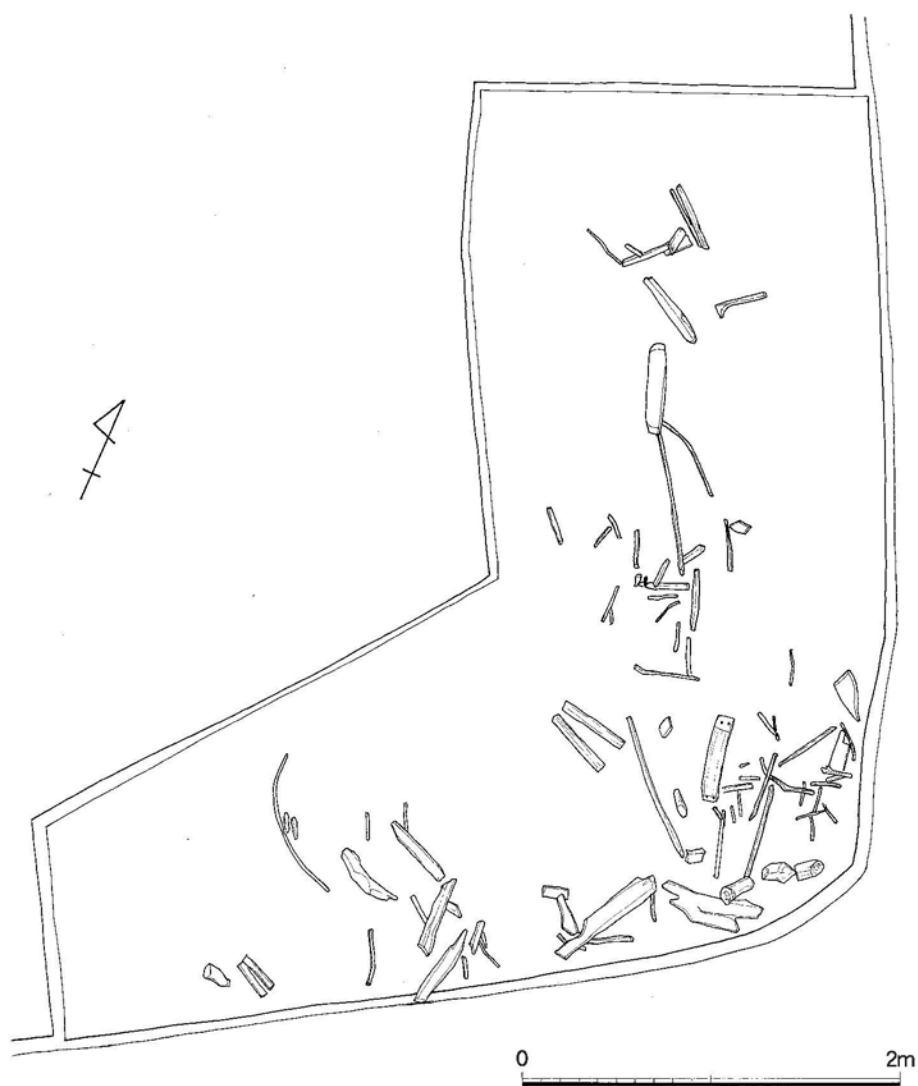


Fig.138 SX1317 (1/40)

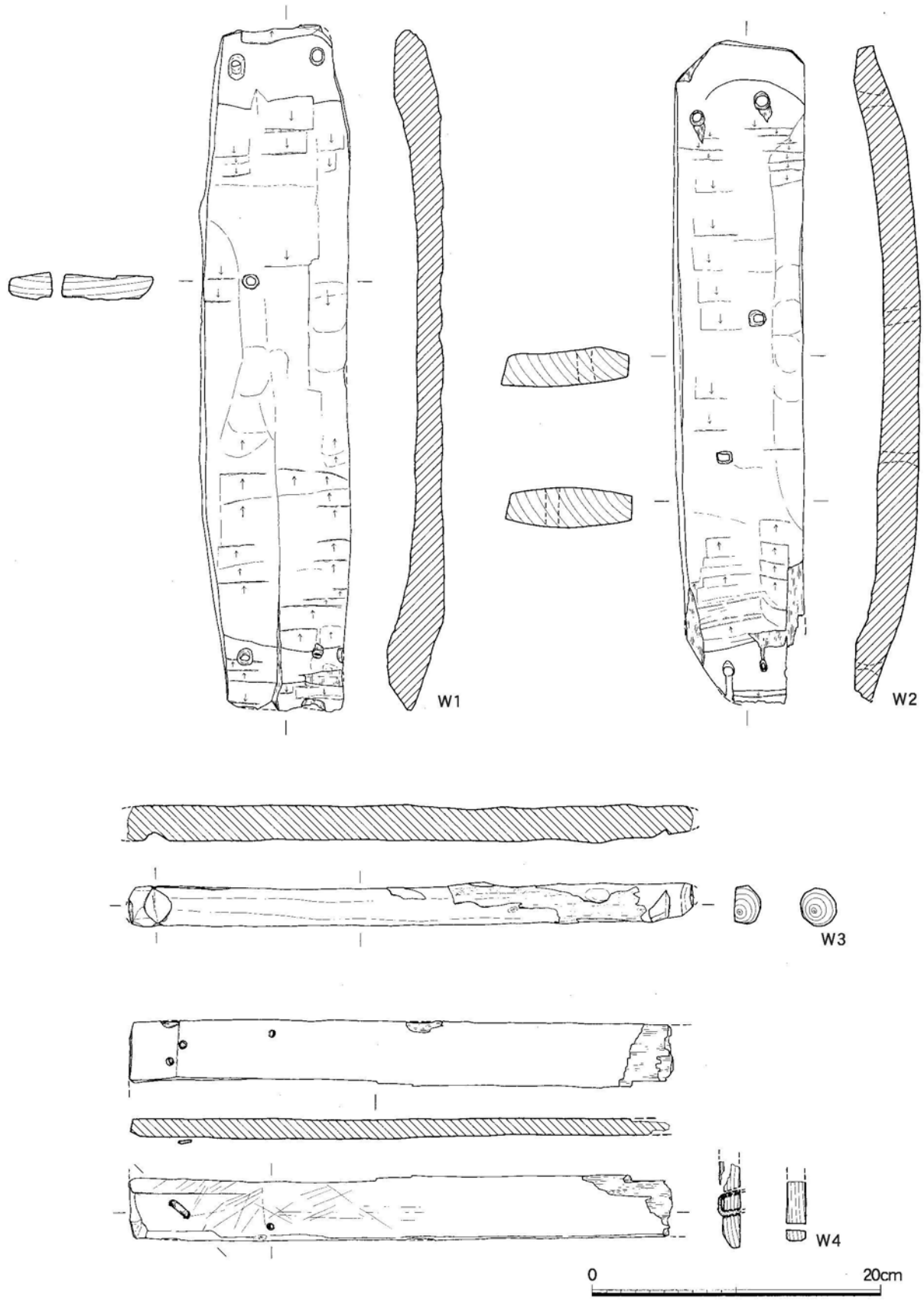


Fig.139 SX1317出土木器① (1/4)

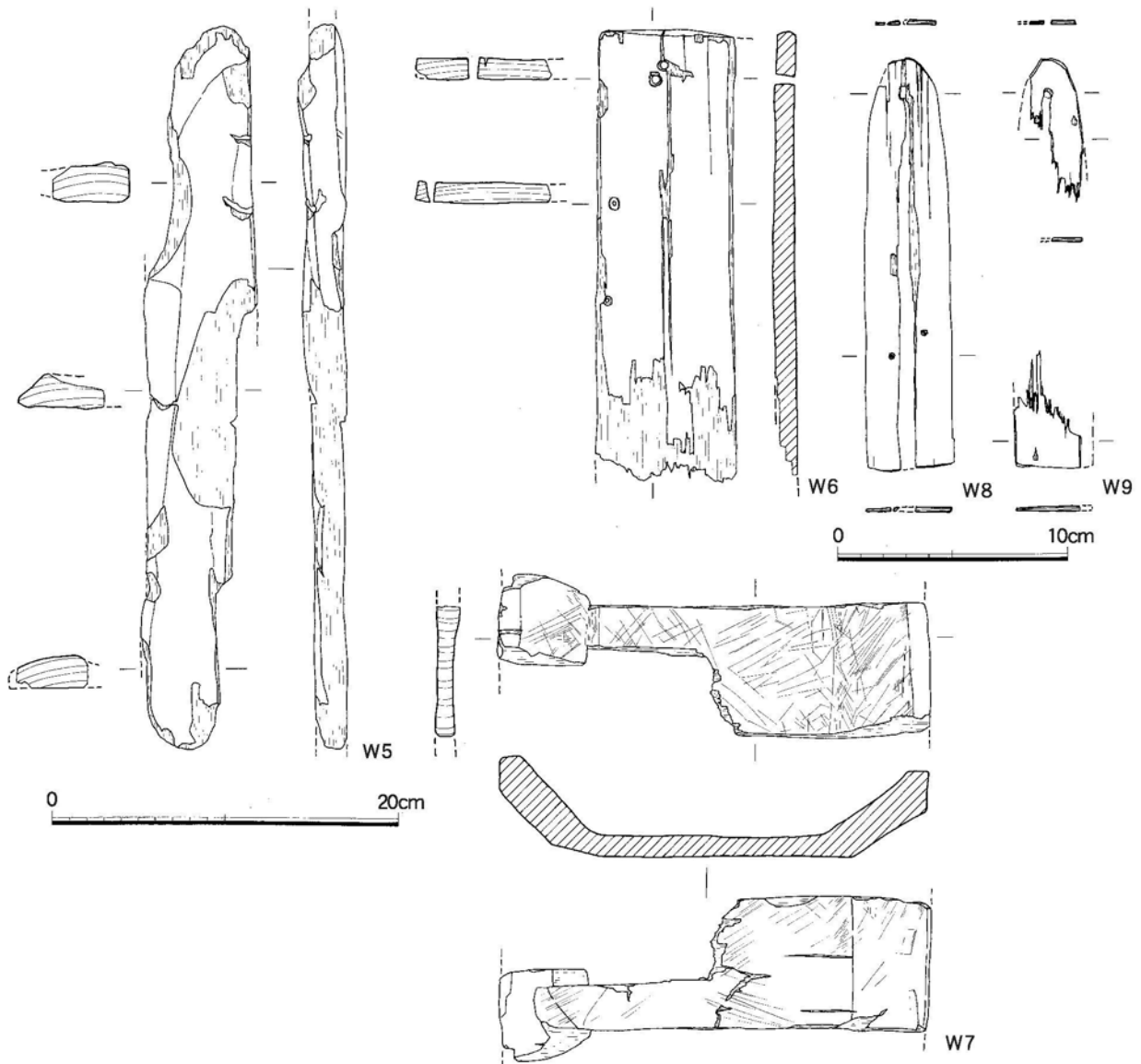


Fig.140 SX1317-②、遺構面出土木器 (1/3・1/4)

2は高坏口縁部1/6片で、復元口径30.8cmを測る。調整は外面指押さえ後ナデ、内面は密なヨコハケ目後、暗文風のタテヘラミガキ。色調は灰黄褐色を呈し、胎土精良、焼成は良好。弥生時代後期末のもの。

② 杭列

SX1319 (Fig.141、PL.106)

調査区北西側の湧水の激しい低地部検出した杭群や流木。打ち込みに規則性がないが、東西方向に並んで伸びる状況が見て取れる。周辺に足跡などの痕跡が多くあるので、水田に関連があるのかも知れない。

出土遺物 (Fig.142・143、PL.120) 弥生土器の細片などが少量出土している。

3は甕1/6片で、復元口径24.0cmを測る。調整は胴部外面粗いタテハケ目で、下半は剥落が著しい。その他はヨコナデからナデで、内面下半にはススが付着する。色調は褐灰色で、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。4は甕口縁部1/6片で、復元口径29.2cmを測る。調整は胴部外面がタテハケ目、口縁

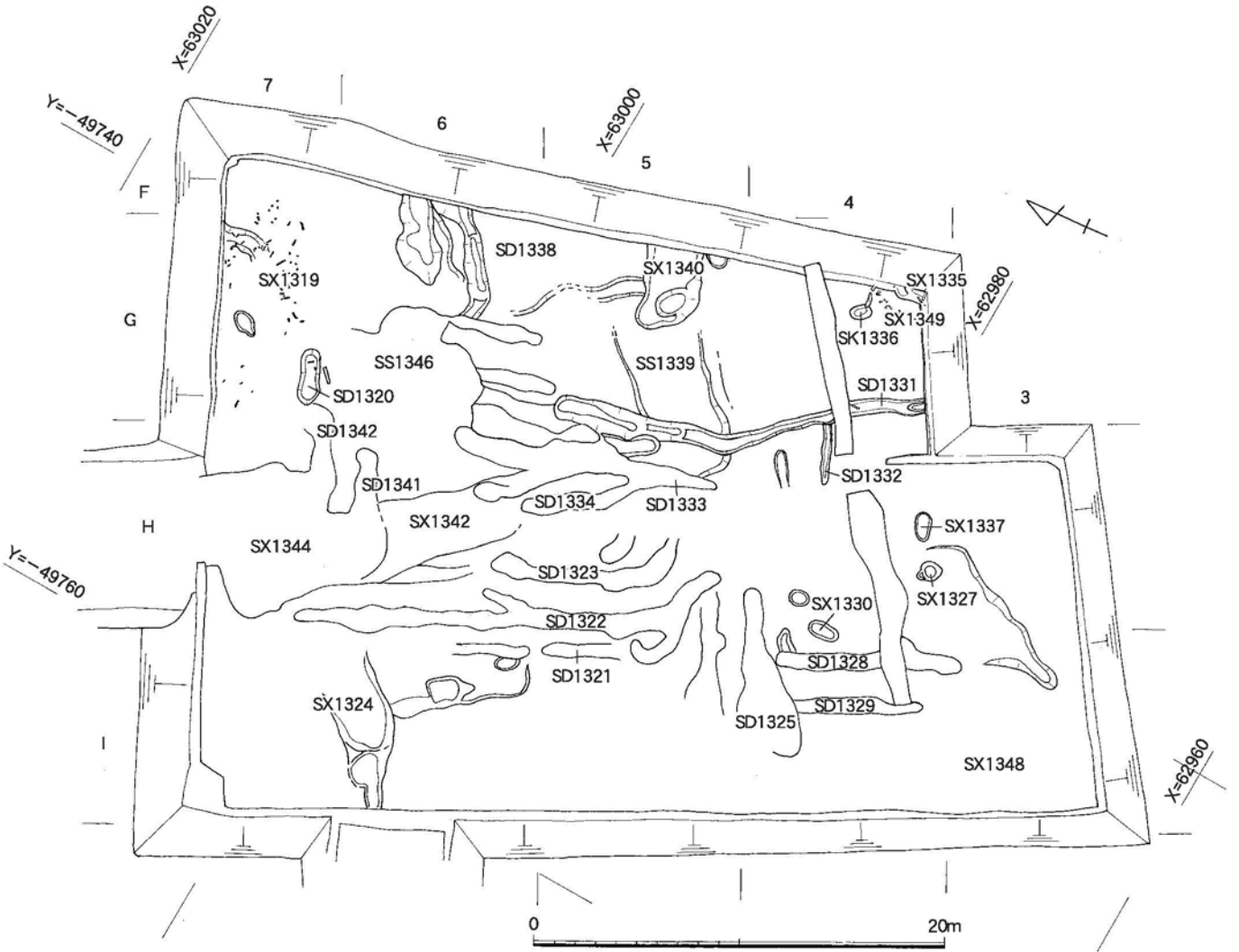


Fig.141 第1区第Ⅲ面遺構全体図 (1/300)

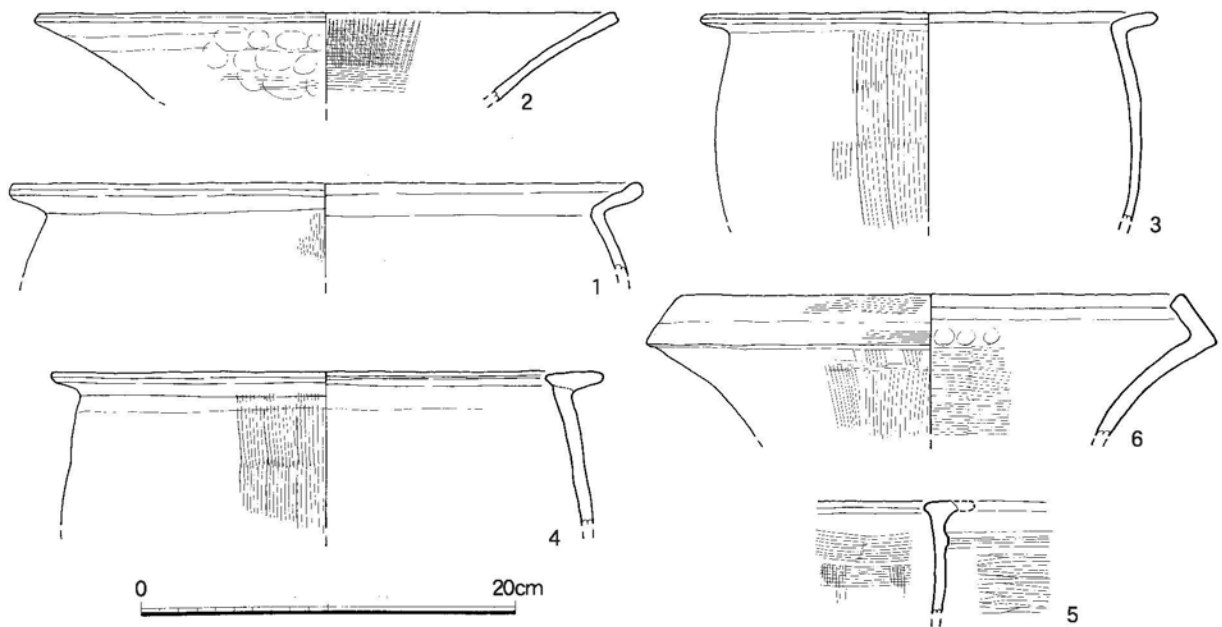


Fig.142 各遺構出土土器 (1/4)

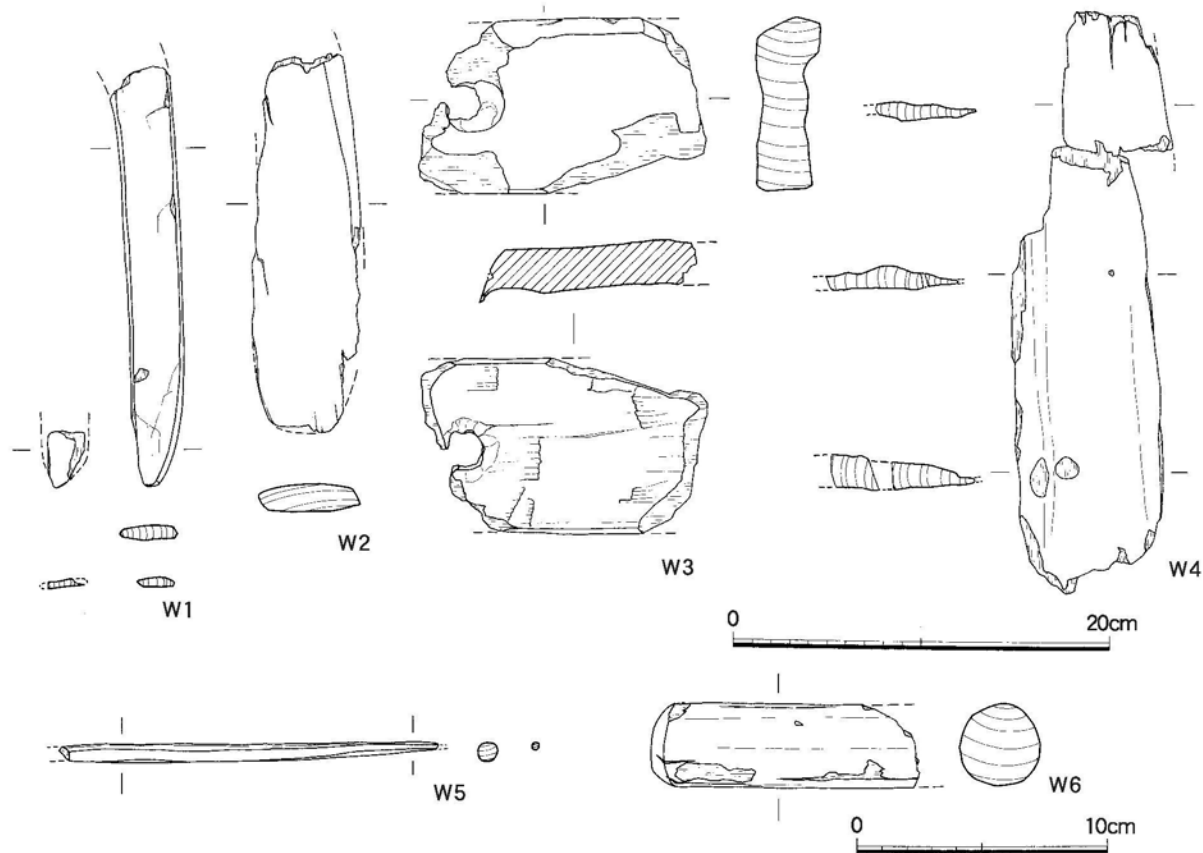


Fig.143 各遺構出土木器 (1/3・1/4)

部はヨコナデ、内面はナデ。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は粗砂を多く含み、焼成は良好。

W 2 は板材。残存長20.2cm を測る。ケズリ加工。下端は面取りしている。W 3 は加工角材の一部。樹種はカシ。両側面はケズリ加工で、上端には節穴と思われる孔がある。

SX1340出土遺物 (Fig.142)

G-6 区の東壁で検出した浅い落ち込み。幅5.5m、深さ0.15cm 程である。この北側に細く続く高まりがあり、畦の可能性もある。埋土は黒褐色粘質砂で暗灰黄色砂が混入する。底面には流木が入っていた。5 は丹塗り甕口縁部小片。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面はヘラミガキ、内面はハケ目後ナデ消し。色調は鈍い赤褐色を呈し、胎土精良、焼成は良好。

SX1342出土遺物 (Fig.142)

H-6 区で検出した重機による落ち込み部分から出土した遺物。6 は複合口縁壺の口縁部1/6片。復元口径は26.4cm を測る。調整は内外面ハケ目で、口縁はその後ナデ、内面には指押さえ痕残る。

SX1344 (Fig.144)

調査区I-6 区北側で検出した落ち込みである。7 は土製の投弾。全長4.6cm、最大径2.3cm を測る。調整は丁寧なナデ。胎土は精良、焼成は良好。

SX1350出土遺物 (Fig.143、PL.120) W 6 は鋤の柄か。残存長10.6cm を測る。先端は丸く、表面は丁寧に仕上げる。

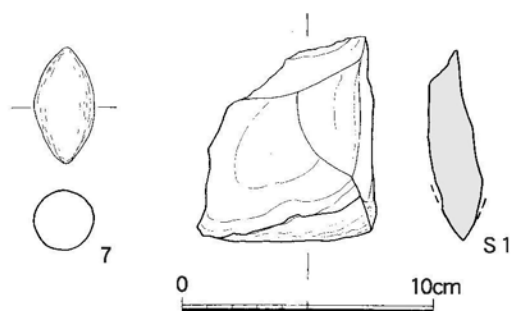


Fig.144 各遺構出土遺物 (1/3)

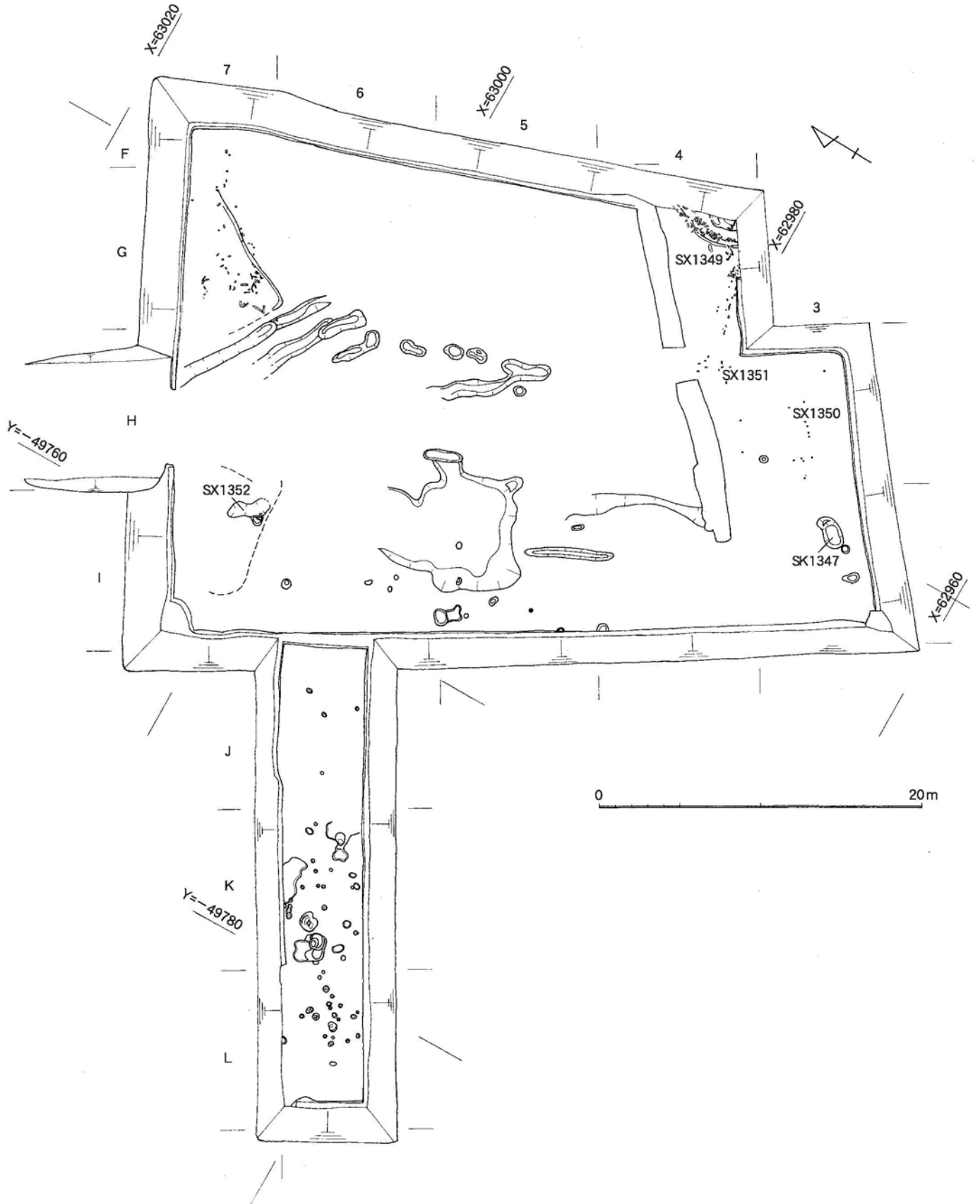


Fig.145 第1区第IV面・第2区第III面遺構全体図 (1/300)

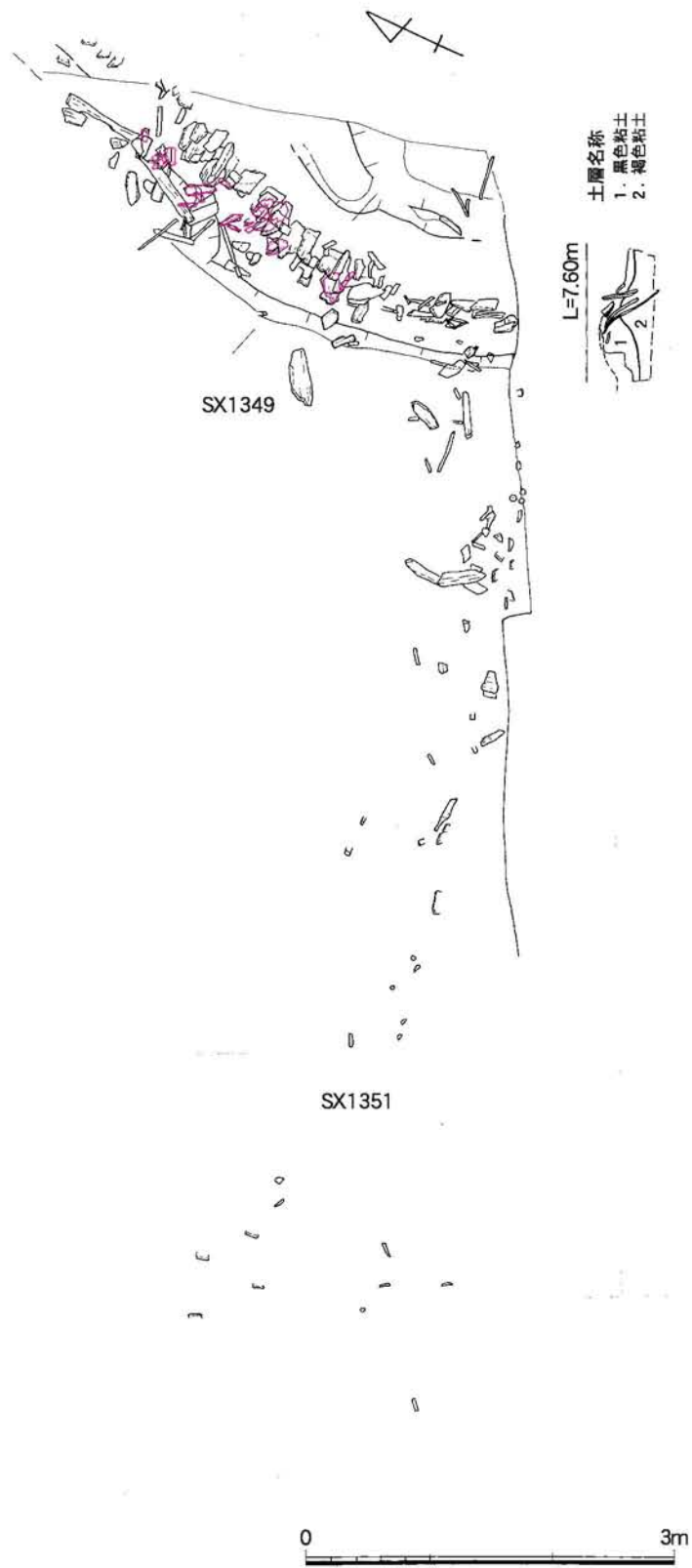


Fig.146 SX1349 (1/60)

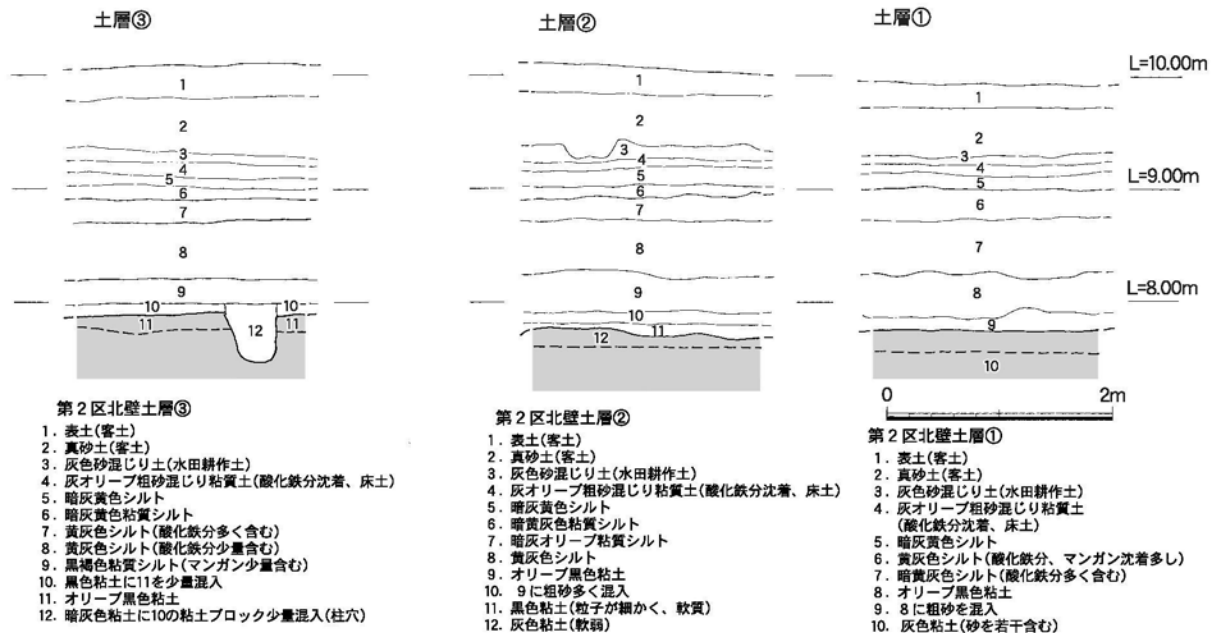


Fig.147 第2区北壁土層(1/60)

4) 第IV面の調査 (Fig.145、PL.106)

第Ⅲ面を基盤面上に堆積した黒色粘土上面で検出したため、更に基盤面まで、掘り下げて遺構の確認をした。この基盤面を第IV面とする。基盤面は灰オリーブ粗砂混じり粘土である。検出した遺構は大半が第Ⅲ面からの遺構の残りや木の根などであり、主なものは南東隅、第Ⅲ面で検出していた矢板を伴った畔状遺構と杭列などである。

① 土堤状遺構

SX1349 (Fig.146、PL.108)

調査区南東隅で検出した遺構。蛇行する幅0.5~0.7m、高さ0.15mほどの黒色粘土を主体とする土堤状の高まりで、東側に何重も連続して打ち込まれた矢板が伴う。反対側は土層ではこの遺構の内側には黄褐色砂、黒褐色砂質土、暗灰黄色と黄褐色砂の互層が堆積した溝状遺構(SD1335)が第Ⅲ面で確認されており、それに伴う土堤と思われる。この遺構は第IV面の基盤面でも高まりが続き、第IV面から始まるものとする。

出土遺物 (Fig.143、PL.120) 古墳時代土師器細片が少量出土している。

W 4は割材。残存長30.8cmを測る。表面は傷みが激しい。

② 遺構面出土遺物

遺構面出土遺物 (Fig.143、PL.120) W 5は簀か。全長15.0cmを測る。表面は丁寧なケズリ仕上げ。断面は角張った円形。

3. 第2区の調査

1) 各遺構面の調査

第1区の西側、管理用道路を横断する通水管敷設部分の調査である。この部分は15年度に工事予定で、工事業者が決定した事を受けて、調査を実施した。調査地は飛行機の進入誘導灯があり、その電気配線も調査地内を通過していたので、当初はその埋設管を壊さないように残して調査を行った。表土区掘削は第1区の調査区の遺構面に合わせて行った。

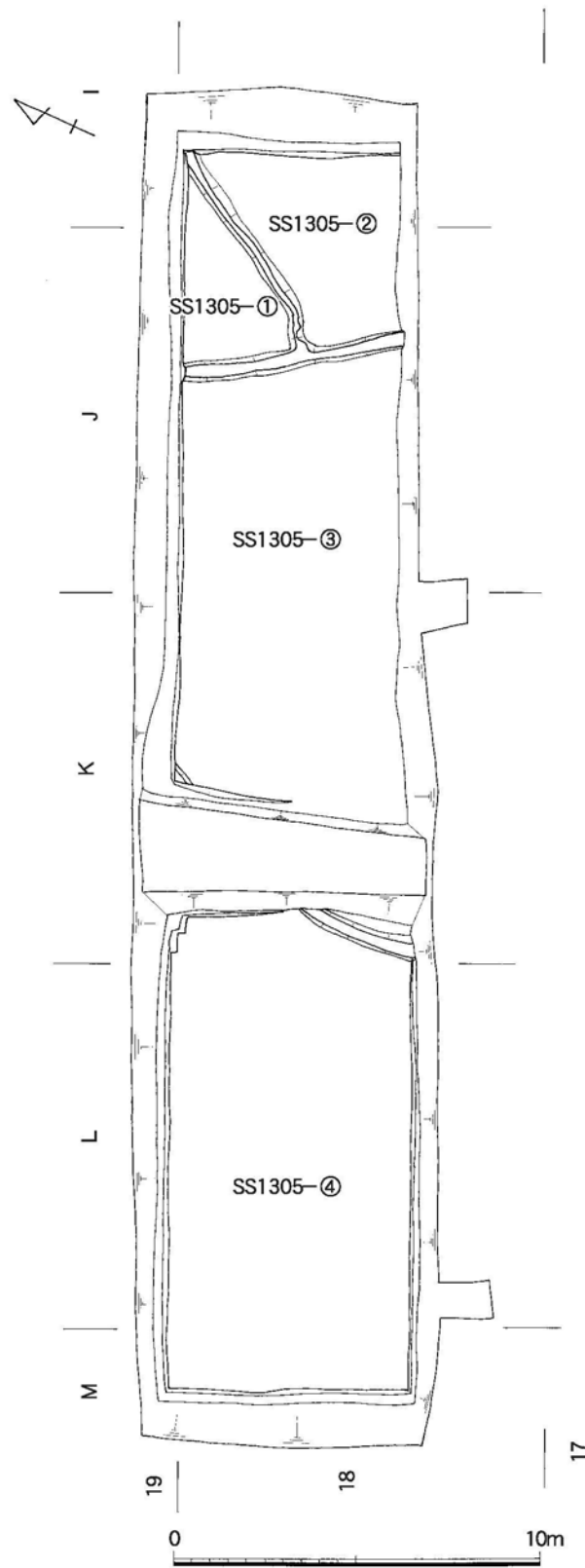


Fig.148 第3区第I面遺構全体図 (1/200)

① 第Ⅰ面の調査 (Fig.132、PL.109)

第Ⅰ面は地表面から-1.0~1.1m下がった標高8.9~9.0mの面で、第1区から続く面である。遺構面は暗灰オリーブシルトから青灰色シルトで、酸化鉄分を多く含んでいた。この面の上面には洪水砂層がかぶらず、水田面としては把握出来なかった。また遺物の出土はなかった。

② 第Ⅱ面の調査 (Fig.136、PL.109)

第Ⅱ面は第Ⅰ面から0.7~0.8m下がった面で、オリーブ黒色粘土上面である。標高は8.2~8.3mを測る。第Ⅰ面との間層は砂ではなくシルトである。第1区では遺構を確認出来なかったが、第2区も遺構を確認出来なかった。遺物の出土もなかった。

③ 第Ⅲ面の調査 (Fig.145、PL.109)

第Ⅲ面は第Ⅱ面から0.3~0.5m下がった面で、灰色粘土上面が遺構面となる。標高は7.8~7.9mを測る。この面では地山の汚れやシミの外に、数は少ないがピットなどを検出した。ピットはこの面の上の黒色粘土から掘り込むものもある。遺構の分布は西側に比較的多く、調査区外南側に遺構分布の中心域があるものと思われる。出土遺物は弥生土器の細片が1点と黒曜石の剥片が1点出土した。

4. 第3区の調査

J-19~M-19ラインを通る東西方向の調査区である。上面で幅8m、長さ36mを測る。調査は両隣で調査した、第5次調査区、第8次の調査区の遺構面に合わせて行ったが、第Ⅲ面は川跡に当たり、時期的なこともあって、湧水が激しく、溝の完掘は出来なかった。

1) 第Ⅰ面の調査 (Fig.148、PL.110)

第Ⅰ面は地表下1.1mで水田面を検出した。遺構面までの深さは0.7m程の客土、近代水田土、洪水砂層の下である。水田面の基盤は灰色から褐灰色粘土である。水田上面には厚い砂がかぶっていたので、足跡などの痕跡が残っていた。

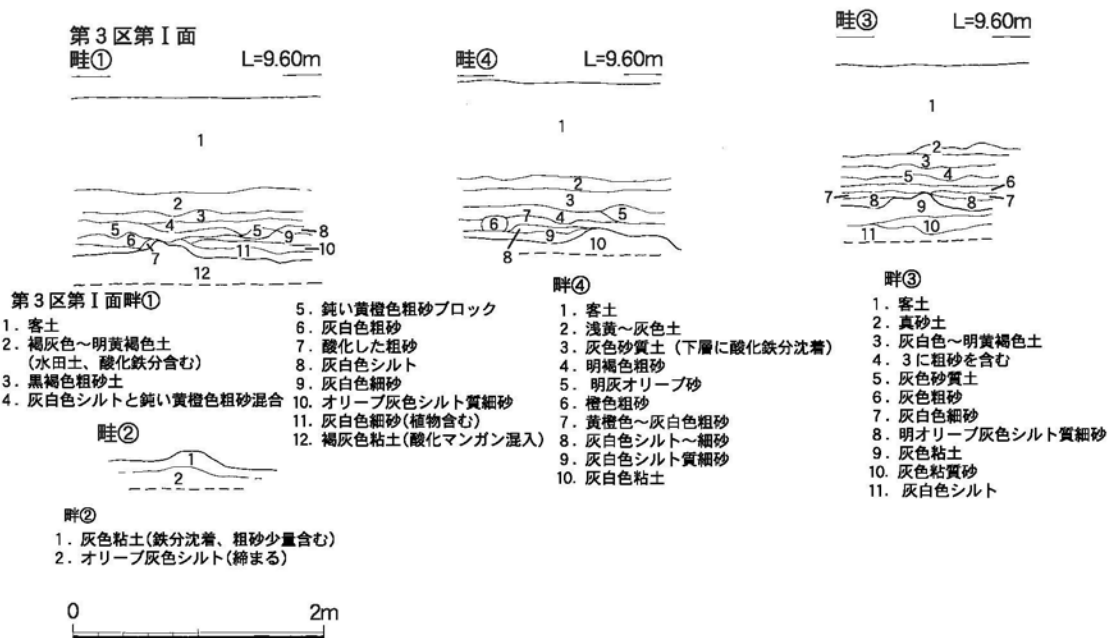


Fig.149 第3区第Ⅰ面土層 (1/60)

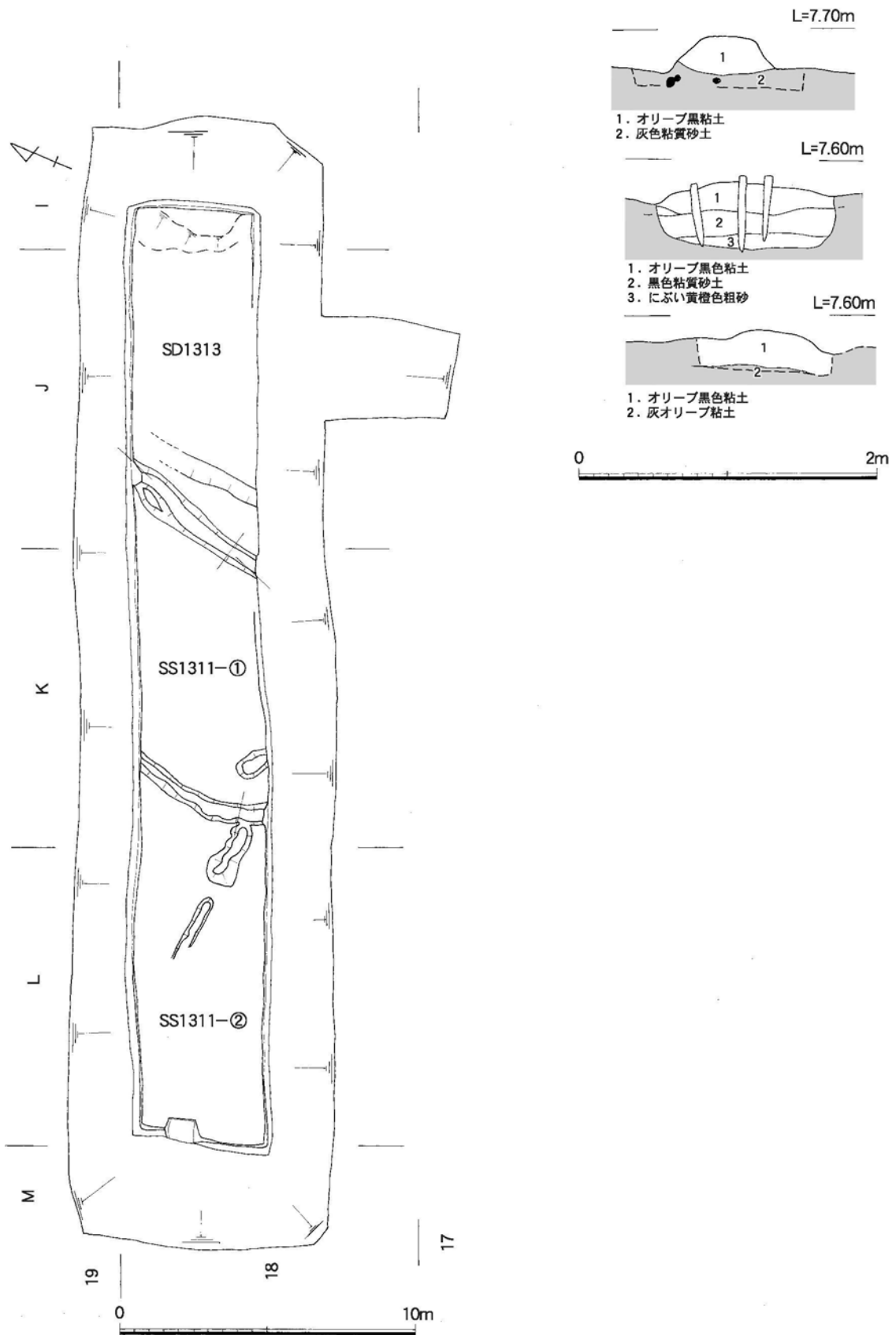


Fig.150 第3区第II面遺構全体図・畔断面図 (1/200・1/40)

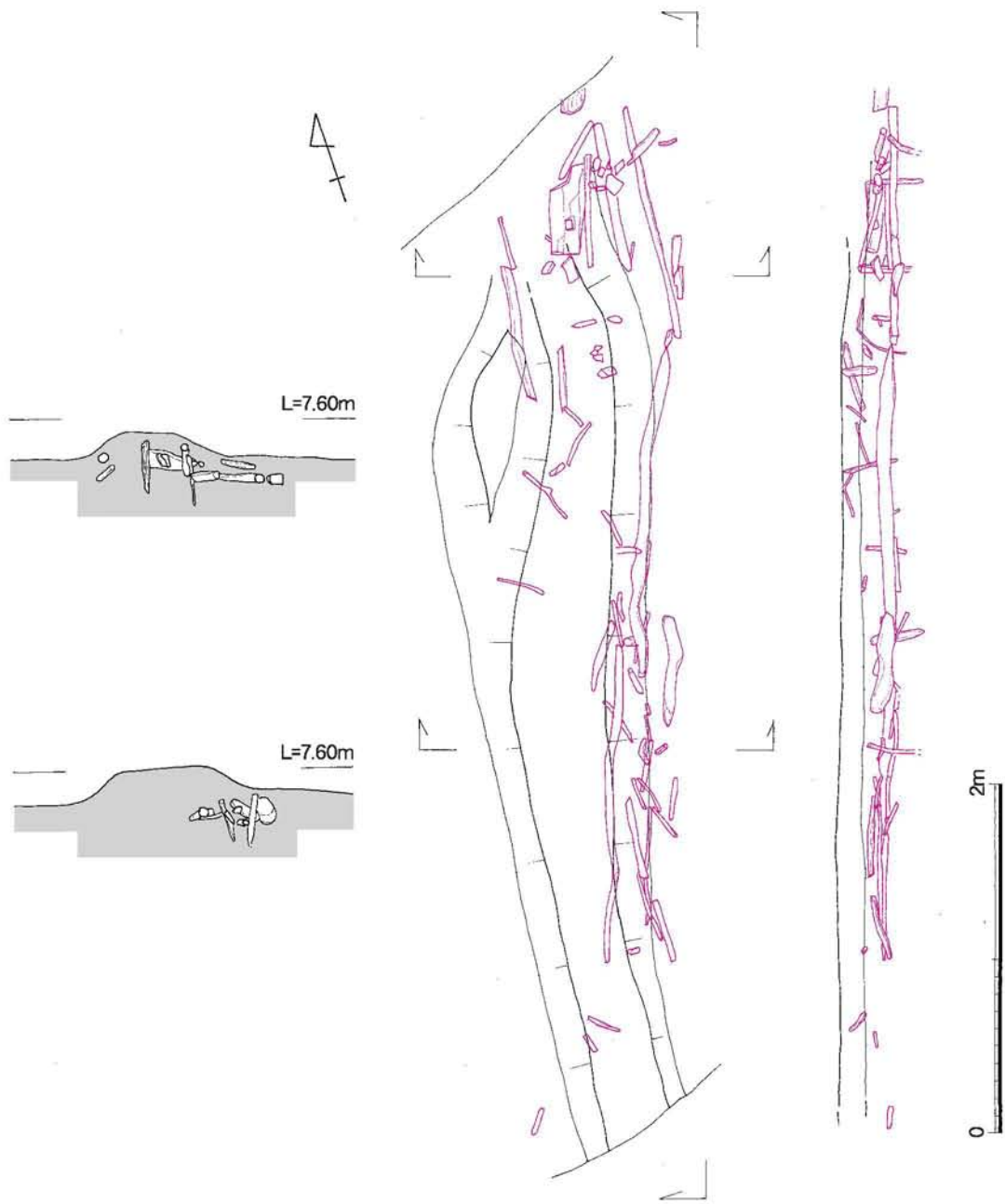


Fig.151 水田畔下敷き (1/40)

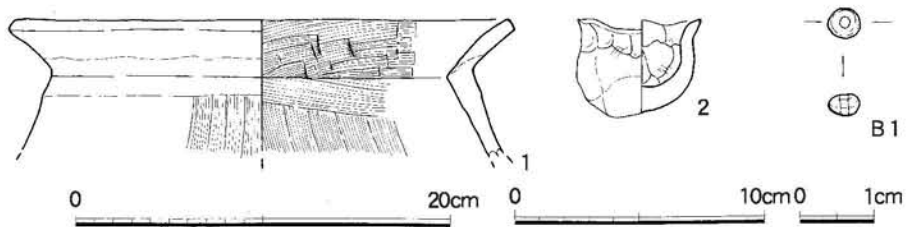


Fig.152 各遺構出土土器・玉類 (1/1・1/3・1/4)

① 水田遺構

SS1305 (Fig.148・149、PL.110)

第8次調査から続く畔とそれに斜交する畔を検出した。細長い調査区なので、水田区画の単位は不明。ただ畔の在り方から4枚の水田区画が確認出来た。その内、東側の2枚は第8次調査区の水田の一部である。畔は基盤面から削り出したもので、断面台形を呈し、高さ10cm程である。

2) 第Ⅱ面の調査 (Fig.150、PL.111)

第Ⅱ面は第Ⅰ面から-0.8~0.9m下がった面である。標高7.3m前後を測る。遺構面は明灰黄色粘土である。検出した遺構は溝と水田である。

① 溝状遺構

SD1313 (Fig.150・151、PL.111)

水田SS1311-①内で検出した第8次調査区から続く浅い自然流路である。水田面より5cm強下がる程である。埋土は黄色粗砂である。

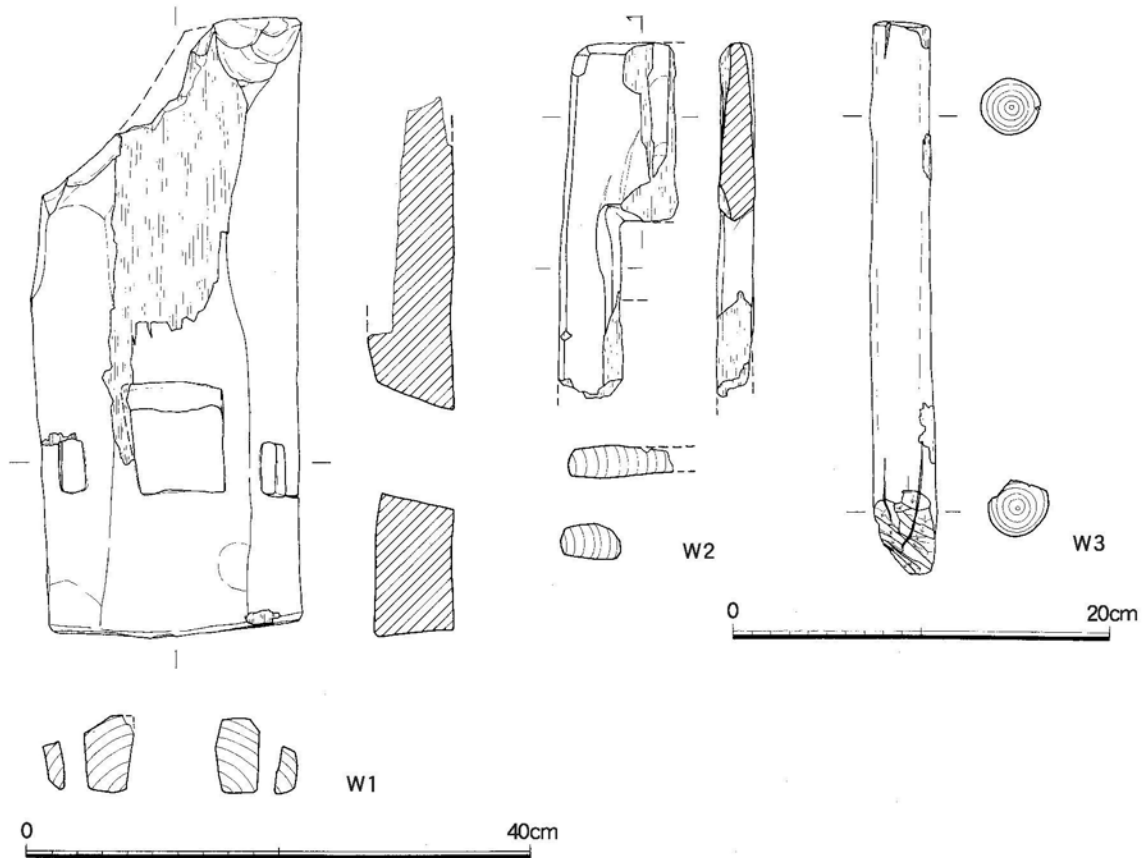


Fig.153 各遺構出土木器 (1/4・1/6)

② 水田遺構

SS1311 (Fig.150、PL.112)

調査区全域で検出した。東側は浅い自然流路SD1313が流れる。上面には洪水砂が厚く堆積していた。南北方向の畔2条と、西側の畔と直交する畔と思われる高まりが断続的にあった。水田面は南北の畔で最低3区画ある。畔は幅0.5~1.0m、高さは最大で15cmを測る。オリブ黒色粘土を盛り上げて作り上げている。この水田の畔1では第7次調査区で検出した下敷が確認された。

下敷き遺構は長さ1.4~2.0mの杭材や木製品などを、畔長軸方向の横材として敷き、その横材を補佐するように杭を打ち込んでいる。畔はその上にオリブ黒色粘土を畔土として盛り上げている。遺構は畔基底面より下のレベルで検出しているが、畔の方向性に沿っており、畔の基礎下敷きと考える。

出土遺物 (Fig.152・153、PL.117・120) 弥生土器片が出土しているが、下層包含層からのものである。

1・2は①水田埋土出土。1は弥生土器甕口縁部1/7片。復元口径26.0cmを測る。調製は内外ハケ目。色調は褐灰色を呈し、胎土は粗砂を含み、焼成は良好。2はミニチュア土器壺。手捏ねで、内外面指押さえ痕が残る。色調は褐灰色を呈し、胎土は粗砂を多く含み、焼成は良好。

W1は下敷きから出土した建築材と思われる板材の一部。残存全長49.4cm、最大幅21.2cm、最大厚6.8cmを測る。端部から12cm程内側に9×7cmの方形孔とその両側に2×4cm程の長方形孔の、計3個の孔がある。表面は傷みがあるが、ケズリ加工である。W2は直柄鍬の頭頂部の柄つぼの一部。残存長18.9cmを測る。カン材で板目取りである。W3は棒材で、残長29.3cmを測る。先端は斜めに削り出す。B1はSS1311-②で出土したガラス小玉。扁平な円形で、直径0.4cm、厚さ0.25cm、孔径0.15cmを測る。色調は明緑色を呈す。

3) 第Ⅲ面の調査 (Fig.154、PL.114)

第Ⅲ面は第Ⅱ面から0.6m程下がった面で、遺構面は灰オリブ砂質粘土である。検出した遺構は溝2条である。調査区が狭く、また湧水が激しく、天候が悪く、壁の崩壊が予想されたことから、東側の溝を一部掘った以外は、掘り下げを断念した。

① 溝状遺構

SD1314 (Fig.154、PL.115・116)

東側で検出した溝で、第8次調査区で検出したSD818の続きである。埋土は、上層は粘土で、間層に粗砂を含む。下層は粗砂層となる。湧水がひどく、周壁の崩落もあって、完掘は出来ていない。土層では西側壁際に杭が打ち込まれているが、第Ⅱ面からのものであろう。

出土遺物 (Fig.156、PL.117) 弥生時代後期後半代の土器が出土した。量はそれ程多くない。

1は丸底気味の小型壺。ほぼ完形で、口径9.0cm、器高10.8cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、胴部内外面はハケ目である。色調は灰黄色を呈し、胎土に1~2mmの粗砂を多く含み、焼成は良好。2は複合口縁壺の口縁3/4片で、復元口径は24.2cmを測る。口縁部内外面ヨコナデ、頸部は内外面タテ又はヨコハケ目。口縁の屈折部にはヘラによる1cm間隔の浅い刻み目が付く。色調は褐灰色で、胎土に1~2mmの粗砂を多く含み、焼成は良好。3は甕口縁部。頸部に低い突帯が付く。調製は内外面ナナメ・ヨコハケ目、口縁端部と突帯部には木口面による刻目が付く。色調は暗灰黄色、胎土は精良、焼成は良好。4は甕底部片。底径は8.6cmを測る。調整は細かいハケ目、内面は工具によるナデ上げ。色調は灰黄色を呈し、胎土は最大5mmの粗砂を多く混入。焼成は良好。2・4は上層、1・3は下層出土。

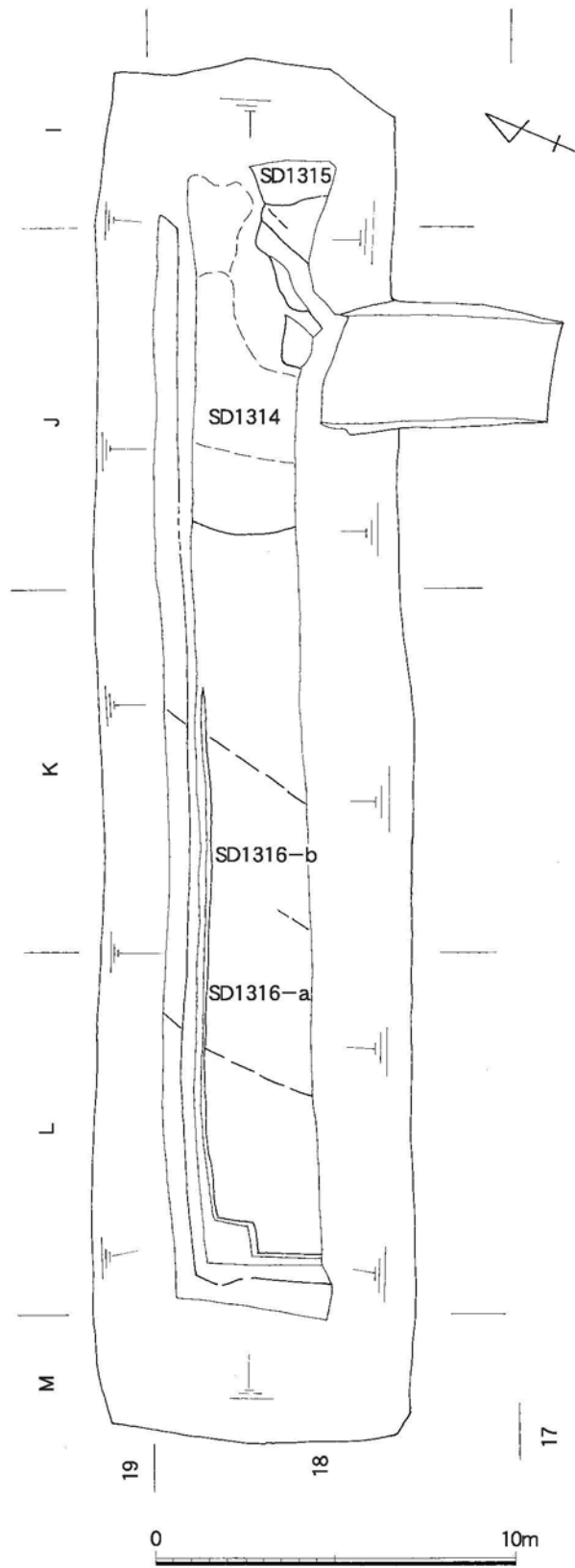


Fig.154 第3区第三面遺構全体図 (1/200)

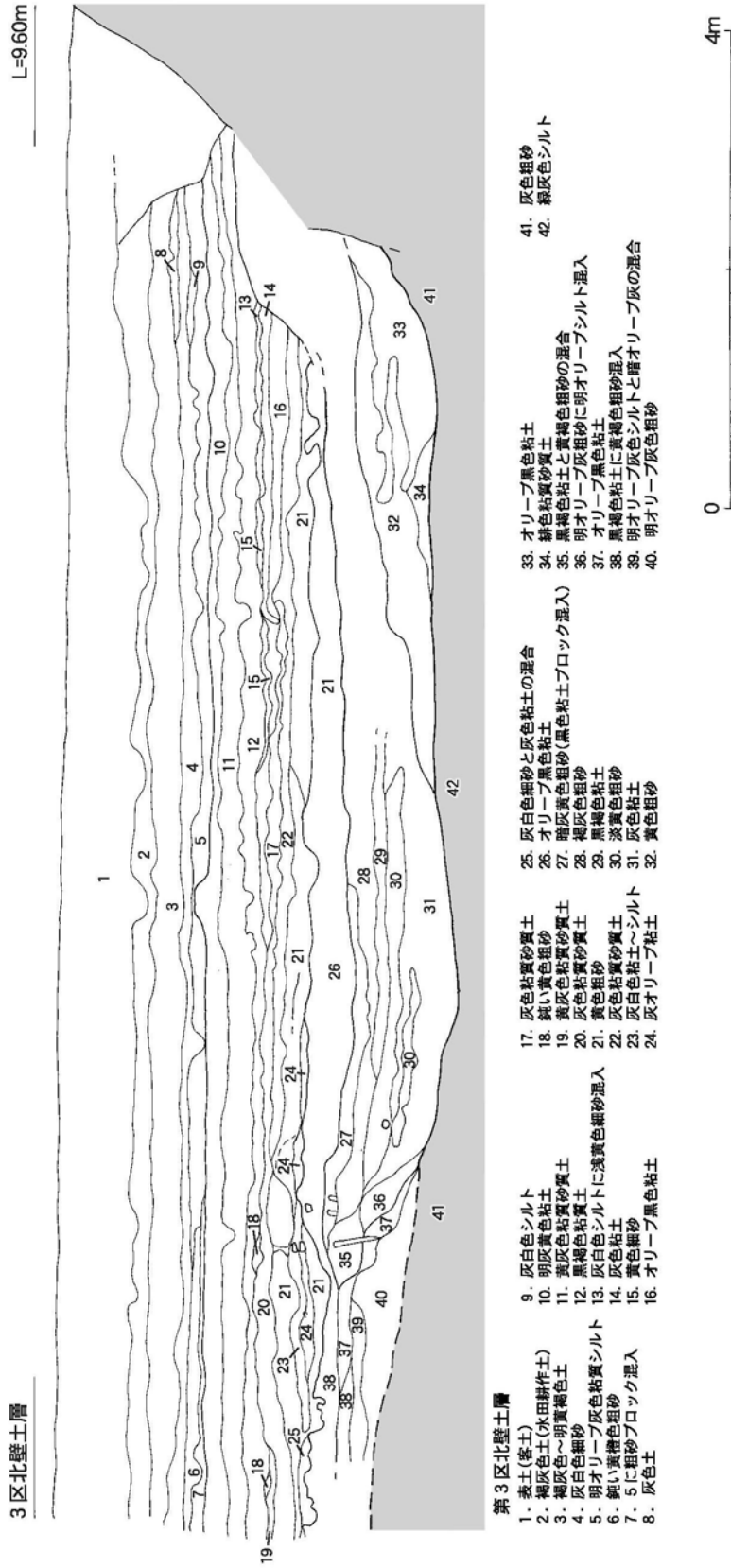


Fig.155 北壁土層 (1/60)

SD1315

調査区南東隅で検出した落ち込み。位置的に第8次調査区SD735溝の岸の可能性はある。調査区壁の崩落もあって、十分掘り切れていない。SD735は古代の溝であり、出土した土器と時代が合わないので、包含層から流れ込んだ土器が出土したのであろう。流木なども下層には認められた。

出土遺物 (Fig.156、PL.117) 弥生時代後期後半代の土器が多量に出土。主なものを上げる。

5は丸底の鉢2/3片で、口径14.0cm、器高6.2cmを測る。調整は外面細かいハケ目、内面は板ナデで、工具痕が残る。外面黒斑がある。

SD1316 (Fig.154、PL.115)

調査区西側で検出した溝、湧水が激しく、掘削に危険性があったので、遺構を確認しただけで、完掘していない。幅7mを測り、上面の観察では2条の溝の重なりが見て取れた。西側が新しく、粗砂を主体とする。出土遺物は掘削していないので少ない。弥生時代後期後半のものが少量出土している。

② 包含層出土遺物 (Fig.156、PL.117・118)

調査区東側で検出した。第Ⅱ面下のオリブ黒色粘土部分が包含層となる。弥生時代後期から古墳時代前期前半までの土器が多量に出土した。

6は土師器の小型丸底壺1/4片。復元口径8.5cmを測る。調整は内外面ナデで、胴部内面には指押さえ痕が残る。色調は暗灰黄色を呈し、胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好。I-18区出土。7は胴底部片で、底部がやや平底を呈す。最大胴部径11.1cm、残存高6.3cmを測る。外面丁寧なミガキ、内面ナデである。色調は暗灰黄色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好。外面黒斑がある。I-18区出土。8・9は甕。8は大型で口縁から胴部1/6片。復元口径45.5cmを測る。調整は内外面ハケ目で工具痕が残る。外面のハケ目は目が細かい。色調は黄褐色を呈し、胎土は粗砂を多く含み、焼成は良好。9は底部で、内面と外底部はハケ目調整。10・11は鉢。10は大型で口縁部1/6片。碗形で復元口径27.8cmを測る。器表面は摩滅が著しいが、内面にはハケ目、外面には工具ナデ痕がかすかに残る。色調は灰黄色を呈し、胎土に粗砂を多く含み、焼成は良好。11は外折する口縁を持つ形態。口縁部を一部欠損するが、復元口径は16cm以上、残存高9.5cmを測る。調整は外面の表面はやや摩滅するがミガキに近いナデ、内面は表面が一部剥落するがナデ上げ。色調は暗灰黄色を呈すが、黒斑がある。胎土は粗砂を多く含み、焼成は良好。12・13は鷲口の支脚。12はほぼ完形。底径12.4cm、最大高12.4cmを測る。頂部には直径2cmの円孔が空く。調整は頂部はナデ、体部外面は平行タタキ、内面はナデで、裾部はハケ目。13は体部下半を欠損する。頂部には上から空けられた上部径3.3cmの円孔がある。頂部はナデ、体部は工具ナデ。色調は12・13いずれも灰黄褐色を呈し、胎土も粗砂を多く含む。焼成は良好。14はミニチュア土器。高坏の脚部か。底径2.8cm、残存高3cmを測る。表面は摩滅するが、指押さえ仕上げ。色調は褐灰色を呈し、胎土は精良、焼成は普通。15は紡錘車1/2片。復元径5.0cm、最大厚0.9cm、孔径1cmを測る。調整はナデ。色調はオリブ黒色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。

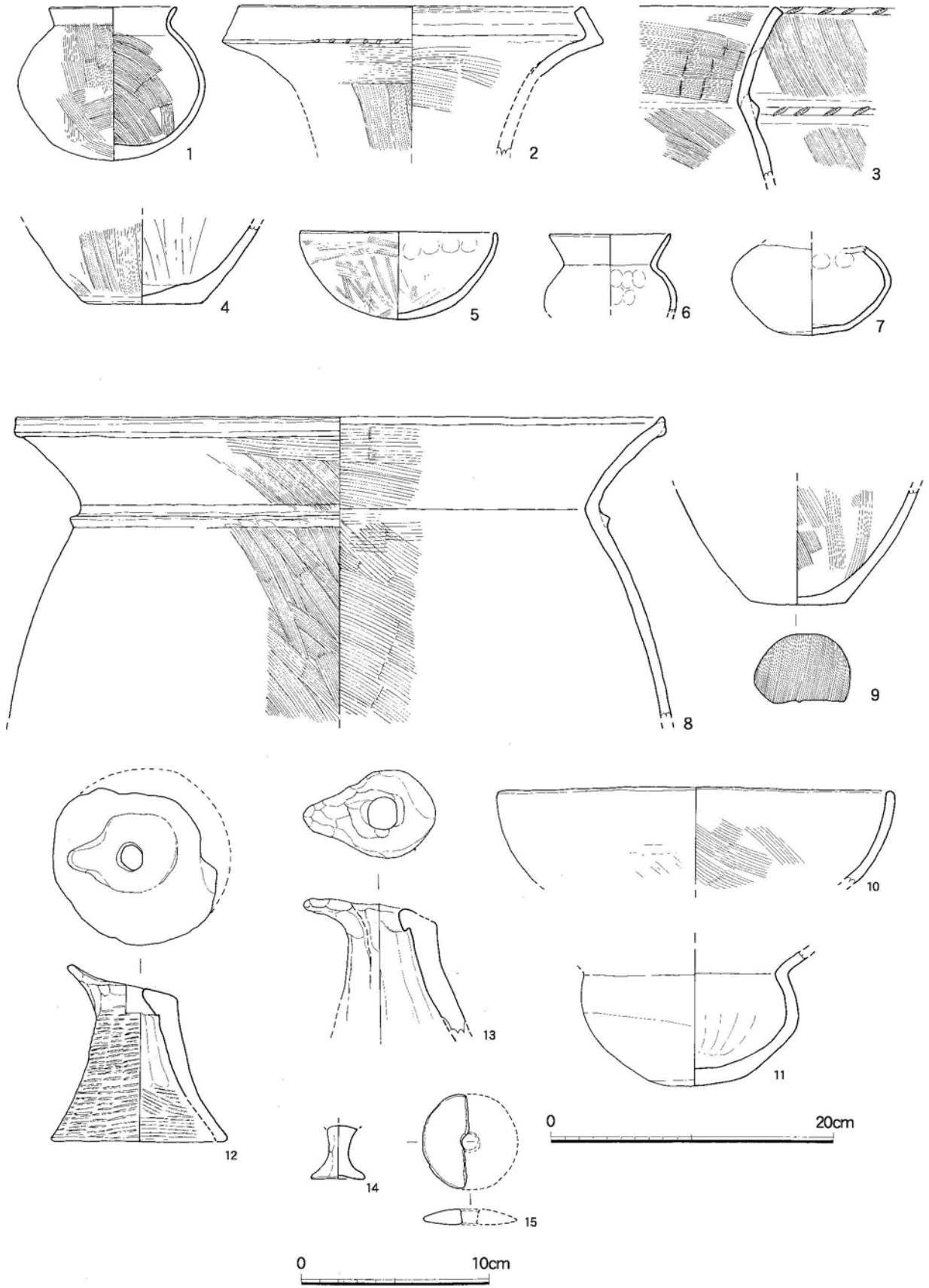


Fig.156 各遺構出土土器 (1/3・1/4)

Tab.5 第9次調査遺物観察表

土器・土製品観察表

報告番号	Fig.	PL	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm)()は復元・残存				胎土	色調	焼成	残存状況	備考
						口径・長さ	胴径	底径・幅	器高・厚さ					
1	135	117	SD1302		白磁・皿	(12.4)			(2.7)	灰白色、精良	釉:乳白色	良好	1/8	
2	135	117	SS1301	畦上	白磁・皿				1.5	灰白色、精良	釉:灰白色	良好	細片	
3	135		SS1301-③	水田埋土	瓦質土器・楯鉢				3.0	1~2mm 砂粒少量混入	灰白色	普通	細片	
4	135		SS1301-①	下層水田埋土	須恵器・杯				2.8	1~4mm 砂粒少量混入	灰色	良好	1/8	
5	135	117	SX1304		青磁・碗	16前後			2.3	灰白色、精良	釉:オリーブ灰色	良好	口縁1/8	
6	135		SX1306	試掘トレンチ	土師器・高杯				3.1	1~2mm 砂粒少量混入	明赤褐色	良好	脚部片	
7	135		第I面遺構面		土師器・高台付碗		(7.6)		2.6	精良	橙色	普通	高台1/5	
1	137		第II面遺構面	H-3区	須恵器・高台付杯		(11.0)		1.7	精良	褐灰色	良好	1/8	
2	137		第II面遺構面	I-3区	須恵器・杯蓋?				2.5	精良	灰色	良好	1/2	
3	137		第II面遺構面	I-3区	須恵器・杯身				2.3	精良	灰~灰白色	良好	細片	自然釉がかかる
4	137		第II面遺構面	H-3区	土師器・甕				3.7	1~2mm 砂粒少量混入	暗灰白色	良好	口縁細片	
1	142		SD1320		弥生土器・甕	(33.4)			5.0	1~2mm 粗砂粒多量混入	灰黄色	良好	1/6	
2	142	117	SD1338		弥生土器・高杯	(30.8)			4.7	精良	灰黄褐色	良好	1/6	
3	142		SX1319		弥生土器・甕	(24.0)			11.3	1~2mm 粗砂粒多量混入	褐灰色	良好	口縁1/6	
4	142		SX1319		弥生土器・甕	(29.2)			8.4	1~2mm 粗砂粒多量混入	にぶい黄褐色(外面:やや赤味が強い)	良好	口縁1/6	
5	142		SX1340		弥生土器・甕				6.0	精良	にぶい赤褐色	良好	口縁細片	丹塗り
6	142		SX1342		弥生土器・壺	(26.4)			7.4	1~2mm 粗砂粒多量混入	にぶい黄褐色	良好	口縁1/6	
7	144	117	SX1344		土製品・投弾	4.6	2.3		2.3	精良	オリーブ黒~暗灰色	良好	完存	
1	152		SS1311-①	水田埋土	弥生土器・甕	(26.0)			7.3	1~2mm 砂粒多量混入	褐灰色	良好	口縁1/7	
2	152	117	SS1311-①	水田埋土	ミニチュア土器・壺	4.8			4.0	1~3mm 砂粒多量混入	褐灰色	良好		
1	156	117	SD1314	下層粗砂中	弥生土器・壺	9.0	13.2		10.8	1~2mm 粗砂粒多量混入	灰黄色	良好	ほぼ完存	外面下半部に酸化鉄分付着
2	156		SD1314	上層	弥生土器・複合口縁壺	(24.2)			10.1	1~2mm 粗砂粒多量混入	褐灰色	良好	口縁3/4	
3	156		SD1314	下層	弥生土器・甕				12.1	精良	暗灰黄色	良好	口縁細片	
4	156		SD1314	上層	弥生土器・甕		8.6	5.5		1~5mm 粗砂粒多量混入	暗灰黄色	良好	底部片	
5	156	117	SD1315		弥生土器・鉢	14.0	2.0	6.2		1~2mm 砂粒多量混入	灰黄褐色	良好	口縁2/3	
6	156		第III面包含層	中層 I-18区	土師器・小型丸底壺	(8.5)	(9.2)		5.6	1~2mm 砂粒少量混入	暗灰白色	良好	口縁1/4	
7	156	117	第III面包含層	上層 I-18区	土師器・壺		11.1		6.3	1~2mm 砂粒混入	暗灰黄色	良好	完存	頸部意図的な打欠きの可能性あり
8	156	117	第III面包含層	+SD1315	弥生土器・甕	(45.5)			16.2	2~3mm 粗砂粒多量混入	黄褐色	良好	1/6	
9	156		第III面包含層	上層	弥生土器・甕		6.7	8.3		1mm 程細砂粒混入	灰黄褐色	良好	底部1/2	
10	156		第III面包含層	+SD1315	弥生土器・鉢	(27.8)			6.5	1~2mm 粗砂粒多量混入	灰黄色	良好	口縁1/6	
11	156	118	第III面包含層	東麓際+SD1315	弥生土器・鉢	16以上		最大9.5		1~3mm 粗砂多量混入	暗灰黄色	良好	口縁欠損	頸部径14.3cm
12	156	118	第III面包含層	+SD1315	弥生土器・支脚		12.4	最大12.4		1mm 程細砂粒混入	灰黄褐色	良好	ほぼ完存	
13	156	118	第III面包含層	+SD1315	弥生土器・支脚				10.2	1~5mm 粗砂粒多量混入	灰黄褐色	普通	脚部欠損	上部径3.3cmの円孔
14	156		第III面包含層	中層	ミニチュア土器・高杯?		2.8	3.0		精良	褐灰色	普通	脚部片	
15	156	117	第III面包含層	上層	土製品・紡錘車	(5.0)			0.9	精良	オリーブ黒色	良好	1/2	孔径1.0cm

石器・石製品・ガラス製品観察表

報告番号	Fig.	PL	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm) ()は残存			材質	色調	備考
						長	幅	厚			
S 1	144	117	SD1333		蛤刀磨製石斧	8.6	6	(1.8)	火成岩か	灰色	
B 1	152	118	SS1311-②	水田埋土R-1	ガラス小玉	0.4	0.4	0.25	ガラス	明緑色	孔径0.15cm

木器観察表

報告番号	Fig.	PL	出土遺構	出土位置・層位	器種・器形	法量(単位:cm) ()は残存				木取り	樹種	備考
						長さ・口径・底径	幅・高さ・短軸	長さ・直径	その他			
W 1	139	118	SX1317		機織具(腹当て)?	47.4	10.4	最大3.2		板目材		穿孔5つ
W 2	139	118	SX1317		機織具(腹当て)?	45.7	9.0	最大2.9		ナナメ材		穿孔6つ
W 3	139	119	SX1317		機織具(引き手)?	(38.9)		2.5×2.6		樹皮付芯持ち材		
W 4	139	119	SX1317		板材	(37.3)	(4.35)	最大1.35	紐幅0.5 紐厚0.2	板目材		穿孔3つ、樹皮紐あり
W 5	140	119	SX1317		不明木製品	(41.6)	(6.8)	2.4		板目材	広葉樹	
W 6	140	119	SX1317		有孔板材	(26.0)	8.1	1.35		板目	ヒノキ?	
W 7	140	119	SX1317		容器・樽	(24.8)]	1.2		板目材	杉	
W 8	140	119	第II面遺構面		板材	17.8	5.45	0.2		板目材	針葉樹?	
W 9	140	119	第II面遺構面		板材		(3.01)	0.2		板目材		推定全長11.35cm
W 1	143	120	SD1331		三又楸	(22.4)		0.9		柱目	カシ	
W 2	143	120	SX1319		板材	(20.2)	(5.7)	1.5		板目		
W 3	143	120	SX1319		加工角材	(15.15)	9.3	(3.7)		柱目	カシ	裏面8つの孔は植生痕
W 4	143	120	SX1349		板材・割材	(30.8)	(8.5)	1.75		柱目		孔は植生痕
W 5	143	120	SX1343	周辺	簀	(15.0)	0.75	0.81		割材	杉?	
W 6	143	120	SX1350		鋤柄?	(10.6)	3.4	3.25		柱目	カシ	權の可能性あり
W 1	153	120	SS1311		建築材?	(49.4)	最大21.2	最大6.8		割材		方形孔3つ
W 2	153	120	SS1311	畔①下	農耕具(直柄)	(18.9)	(6.3)	2		柱目	カシ	
W 3	153	120	SS1311	畔①下	棒材	29.3	3.5	3.05		芯持ち	広葉樹	樹皮残存

第Ⅵ章 自然科学分析

1. 下月隈C遺跡から産出した昆虫化石群集について

森 勇一 (愛知県立津島東高等学校)

1. はじめに

昆虫の外骨格はキチン質で構成されていて、土中に埋もれてからも長い間保存される。昆虫の生息環境が多岐にわたり、かつ食性がきわめて多様であることから、遺跡中より発見された昆虫化石の種類レベルの同定が進めば、そこから得られる情報はすくぶる多い。筆者は、先史～歴史時代の地層中に含有される昆虫化石を抽出・分析することにより、植生や水域および地表環境、人為による土地改変の様子など、人々を取りまく環境史についての情報を多数蓄積してきた(森、1994, 1997, 1999)。

本論では、福岡市博多区月隈に所在する下月隈C遺跡の古墳時代後期～古代にかけての遺跡包含層より発見された昆虫化石群集と、そこから導かれた古環境について述べる。

2. 試料および分析方法

下月隈C遺跡は、御笠川右岸の氾濫平野域に位置しており、遺跡は自然堤防と後背湿地等が入り組んだ複雑な地形面上に立地している。下月隈C遺跡は、弥生時代前期～古墳時代前期の集落跡に加え、古墳時代後期～奈良時代の水田、9～10世紀の水田、12世紀～14世紀の集落と水田の4時期の遺構が検出され、弥生時代・古墳時代・古代・中世など複数の時代にまたがる複合遺跡とされる(福岡市教育委員会、2003)。

このうち、昆虫分析試料は、第7次調査の第Ⅱ面(古墳時代後期)の畦畔7下木列中とされるNo.1試料(試料1)、同じく第Ⅱ面(古墳時代後期～奈良時代)のSD746北ベルトとされるNo.2試料(試料2)、同じく第Ⅲ面(弥生時代後期～古墳時代前期)のSD818(1区～2区ベルト)上層粘土とされるNo.3試料(試料3)、同じく第Ⅲ面(弥生時代後期～古墳時代前期)のSD818-4区上層粘土とされるNo.4試料(試料4)、第8次調査の第Ⅱ面(奈良時代以前)のSX1041-2区とされるNo.5試料(試料5)の計5試料である。

分析試料の湿潤重量は、試料1が1.32kg、試料2が284g、試料3が1.63kg、試料4が1.12kg、試料5が320gであった。うち、試料2および試料5はこの全量、試料1は320g、試料3は340g、試料4は300gについて計量し分析した。

昆虫分析試料は、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課の山崎龍雄氏により、遺跡を貫流する水路や溝などより精力的に採取されたものであり、現地にて存在が確認されたNo.5試料中の昆虫化石を除き水洗浮遊選別法により検出した。昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ実施した。なお、昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示したものではない。

3. 昆虫化石群集

昆虫分析試料より抽出された昆虫化石は、計46点であった(表1)。産出した昆虫化石のうち、主なものについては、図版1に実体顕微鏡写真を掲げた。昆虫化石群集は、陸生の食植性昆虫を主体に、主に湿潤地表面上に多い地表性歩行虫で構成され、これに水生昆虫が伴われた。次に、それぞれの分

析試料から得られた昆虫組成について述べる。

試料1からは、計9点の昆虫化石が発見された。産出昆虫のうち、水生昆虫が3点、地表性歩行虫が2点であり、食糞ないし食屍性昆虫は1点も検出されなかった。なお、陸生の食植性昆虫やその他の昆虫は計4点確認された。

試料2からは、計13点の昆虫化石が発見され、内訳は水生昆虫が4点、地表性歩行虫が5点うち食糞ないし食屍性昆虫は2点検出された。陸生の食植性昆虫は1点確認されたのみであった。試料3からは、水生昆虫1点、地表性歩行虫3点、陸生の食植性昆虫1点、これに双翅目の囲蛹が1点伴われた。試料4からは、試料3同様6点検出されたのみであり、うち4点は地表性歩行虫であった。試料5からは計12点が検出され、このうち食植性昆虫が10点と過半を占めた。

種組成では、試料1より、水生・食植性で、現在も水田内や水田周囲の水路等に生息し、水田指標昆虫（森、1999）として知られるセマルガムシ *Coelostoma stultum* が2点検出された。また、試料2からは、セマルガムシ（1点）に加え、同じく水田指標昆虫であるマメガムシ *Regimbartia attenuata*（1点）、ガムシ *Hydrophilus acuminatus*（1点）をはじめ、種は特定できていないものの水田周辺の止水域に多く生息するゲンゴロウ科 Dytiscidae（1点）、同じく水田周辺の湿潤地表面上に認められるミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp.（1点）などが発見されたことが特筆される。試料1からは、草本植物や果樹等の花粉に集まるコアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda*（2点）の上翅片が検出された。

いっぽう、試料5では、人間の介在した二次林や果樹・畑作物などを加害する畑作害虫（森、1999）として名高いヒメコガネ *Anomala rufocuprea*（5点）、同様の生態を有するアオドウガネ *A. albopilosa*（1点）、コガネムシ *Mimela splendens*（1点）、検出部位が小さく種まで同定することができなかったサクラコガネ属 *Anomala* sp.（2点）についても、おそらく畑作物等に由来すると考えてよい昆虫片であった。

なお、試料2、および試料3、4からは、種の特定に有効に昆虫化石は発見できなかった。

4. 昆虫相から推定される古環境

福岡市下月隈C遺跡の弥生時代後期から奈良時代に至る地層中より発見された昆虫化石を同定・分析した結果、その群集組成から当時の古環境の一端が明らかになった。今回の分析では発見された昆虫化石があまりにも少なく、明確なことが言えるものではない。それを承知で、下月隈C遺跡の周辺環境を大胆に考察するとすれば、およそ以下のようなものになる。

古墳時代後期から奈良時代にかけての地層（試料1）からは、個体数が少ないものの水田指標昆虫として知られるセマルガムシやガムシ・マメガムシなどが検出された。同じ地層からは、水田内や水田周辺の止水環境に生息するゲンゴロウ科や、湿地や水辺を好むミズギワゴミムシ属なども見いだされた。その結果、このころ、本遺跡周辺に水田があったことが示唆される。同じ地層から、イネネクハムシ *Donacia provosti* やイネノクロカメムシ *Scotinophara lurida* などの稲作害虫が確認されれば、この推定をさらに補強するものとなる可能性があり、今後の分析に期待される場所である。

また、下月隈C遺跡第8次調査時の奈良時代以前とされる堆積物（試料5）からは、畑作害虫として知られるヒメコガネを多産し、これにアオドウガネ・サクラコガネ属・コガネムシなどが伴われた。ヒメコガネに随伴する種群もまたヒメコガネ同様、畑作物を加害したり人為度の高い植生に依存する人里昆虫ばかりであり、この結果、奈良時代を遡る一時期、遺跡のバックグラウンドと考えてよい丘陵地や下月隈C遺跡一帯の標高の高いところには畑作地が展開していた可能性が指摘される。

表1 下月限C遺跡から産出した昆虫化石

		和名	学名	試料1	試料2	試料3	試料4	試料5	小計	
水生性	食肉性	ゲンゴロウ科	Dytiscidea		E 1			A 1	2	4
		ヒメゲンゴロウ亜科	Colymbetinae			E 1	T 1		2	
	食植性	ガムシ科	Hydrophilidae	A 1					1	6
		ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky		H 1				1	
セマルガムシ		<i>Coelostoma stultum</i> (Walker)	P1E1	E 1				3		
マメガムシ	<i>Regimbartia attenuata</i> (Fabricius)		E 1				1			
地表性	食糞性	センチコガネ族	Geotrupini		A 1			1	2	13
		エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.		T 1				1	
	食肉・雑食性	オサムシ科	Carabidae	E 1	H1T1	A 1	A 1		5	
		ミズギワゴミムシ属	<i>Bembidion</i> sp.		P 1				1	
		ツヤヒラタゴミムシ属	<i>Synuchus</i> sp.	P 1			E 2		3	
		ヒラタゴミムシ族	Platynini				E 1		1	
		ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae					M 1	1	
ハネカクシ科	Staphylinidae			E 2			2			
陸生性	食植性	コガネムシ科	Scarabaeidae			E 1			1	15
		サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.					L 2	2	
		アオドウガネ	<i>Anomala albopilosa</i> Hope					E 1	1	
		ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky					H1E3S1	5	
		コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> Gyllenhal					E 1	1	
		コアオハナムグリ	<i>Oxycetonia jucunda</i> (Faldermann)	E 2					2	
		ハムシ科	Chrysomelidae				E 1		1	
		ゾウムシ科	Curculidae		A 1			E 1	2	
その他	不明甲虫	Coleptera	A 1					1	5	
	ケラ	<i>Grylotalpa africana</i> Palisot de Beauvois		L 1				1		
	アリ科	Formicidae	T 1	H1A1				3		
	双翅目	Diptera			C 1			1		
合 計				9	13	6	6	12	46	

(検出部位凡例)

H(Head)：頭部 An(Antenna)：触角 M(Mandible)：大腮 S(Scutellum)：小楯板 P(Pronotum)：前胸背板 C(Chrysalis)：囲蛹 E(Elytron)：鞘翅 T(Thorax)：胸部 A(Abdomen)：腹部 L(Leg)：腿脛節

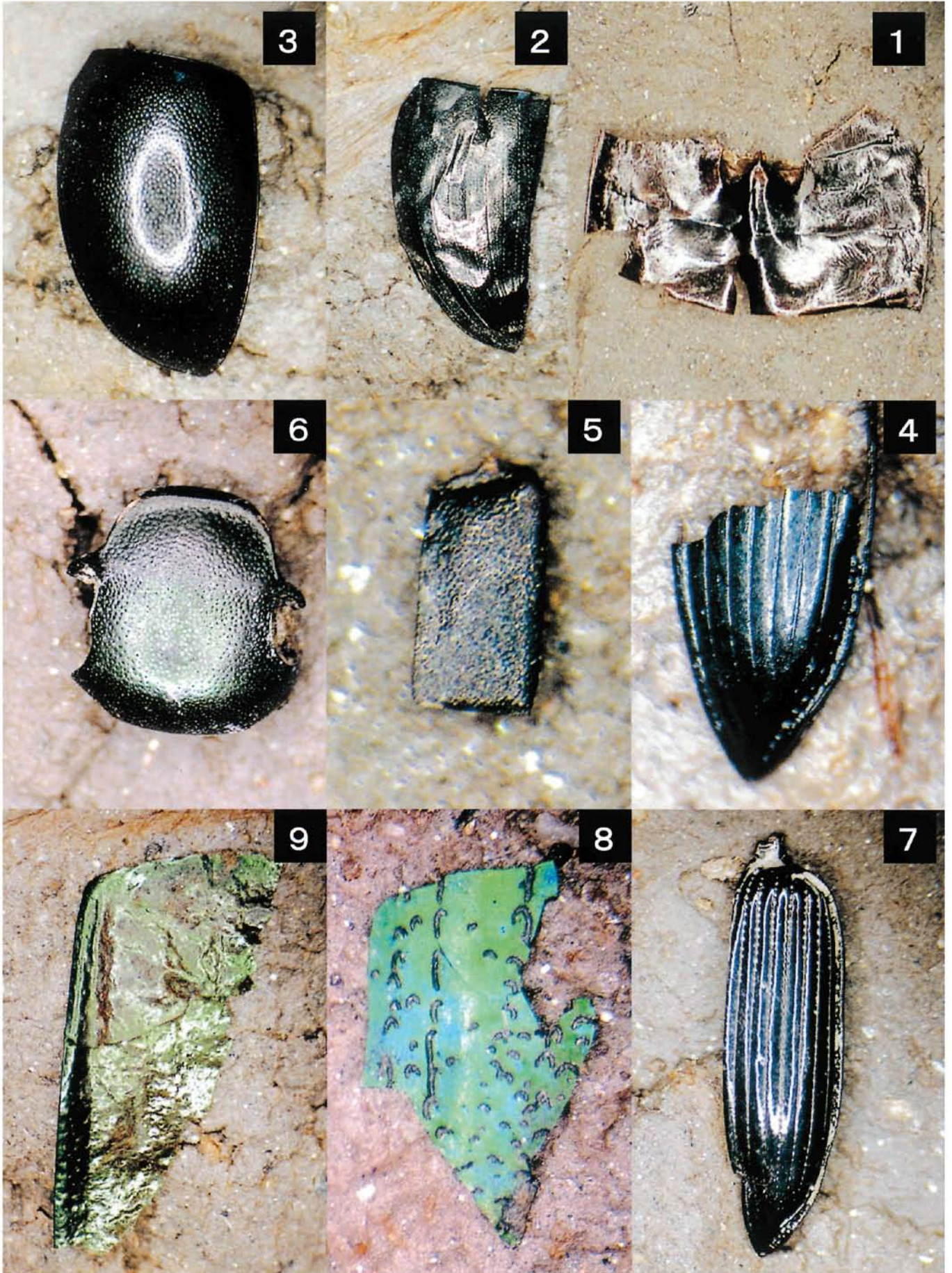
文 献

- 福岡市教育委員会（2003）、下月隈C遺跡。平成14年度（2003）年報、福岡市教育委員会、4-7。
- 森 勇一（1994）昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元。第四紀研究、33(5)、331-349。
- 森 勇一（1997）虫が語る日本史－昆虫考古学の現場から。インセクトリウム、34(1)・34(2)、18-23、10-17。
- 森 勇一（1999）昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史。国立歴史民俗博物館研究報告第81集「歴博国際シンポジウム論文特集号」、311-342。

図版 1.

下月隈C遺跡から産出した昆虫化石の顕微鏡写真

1. ヒメゲンゴロウ亜科 *Colymbetinae* gen.et sp.indet.
後胸腹板 幅4.2mm（試料4）
2. マメガムシ *Regimbartia attenuata* (Fabricius)
右上翅 長さ3.4mm（試料2）
3. セマルガムシ *Coelostoma stultum* (Walker)
右上翅 長さ3.3mm（試料1）
4. ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp.
右上翅下半部 長さ2.4mm（試料4）
5. ハネカクシ科 *Staphylinidae* gen. et sp. indet.
右上翅 長さ1.8mm（試料3）
6. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky
頭部 長さ2.8mm（試料5）
7. ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp.
右上翅 長さ4.8mm（試料4）
8. コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda* Faldermann
右上翅片 長さ2.8mm（試料1）
9. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky
右上翅 長さ4.1mm（試料5）



2. 第8次調査出土動物遺存体について

	地区	遺構番号	大分類・小分類	部位名	左右	部分1	成長度	切痕	火熱	備考	時代
001	第1面 E-14区	SD720 R-1	哺乳類ウマ	下顎	右	M1~M3と下顎体	成獣	不明	不明	M3 歯冠高4.35cm 遺存不良	中世
002	第1面 E-14区	SD720 R-1	哺乳類ウマ	下顎	左	P2~M3と下顎体	成獣	不明	不明	M3 歯冠高4.6cm 遺存不良	中世
003	第1面 E-14区	SD720 R-1	哺乳類ウマ	下顎歯 1本		小片化				歯冠高5.3cm前後	中世
004	第1面 F-17区	SD1032 R-2	哺乳類							ビビアナイト析出 遺存不良	中世
005	第2面 F-19区	SX1056 R-1	哺乳類?							遺存不良	古代
006	第1面 G-17区	SD1032	哺乳類ウシ・ウマ	肩甲骨?		近位端?	不明	不明	不明	遺存不良	中世

表1 出土動物遺存体一覧

遺構の時期は古代から中世が主体であり、第7次調査では溝から古代の土器片とともに木簡も出土しているため、調査地近隣官衙施設等や官衙が存在した可能性が指摘されている。

獣骨は主に溝から出土した。水洗選別等は行っておらず、溝の掘り下げ時に目に付いた骨を取り上げたものである。調査地点は沖積地で水気が多いため、骨にビビアナイトが析出して劣化が進んだ状態である。出土した獣骨のうち同定できたのはわずか2点のウマの下顎骨のみである。下顎は右下顎がM1~M3まで(P3らしき歯あり)、左下顎がP1~M3とその部分の下顎体が残っているが下顎体の遺存状態は非常に悪く、解体痕などは観察できない。両側ともM3の歯冠高の計測ができた。左右下顎は重なった状態で出土したと思われ、歯冠高に若干の差はあるが同一個体の可能性が高い。ウマの下顎骨が出土した溝は中世に属する。調査担当者の言では中世の水田面で牛馬の足跡を見ており、農耕に使役された可能性がある。第7次調査ではウシ・ウマの歯と四肢骨が古代の溝や水田面から出土している。遺体を埋葬・廃棄または祭祀に使用した場所と考えられる。しかし7次調査も今回も解体痕が確認できる状態ではなく、埋葬か廃棄かなど遺体の利用状況は不明である。



001外面



001内面



002側面



002内面

3. 第8次調査の土壌・自然遺物の分析調査

1. 土壌試料の珪藻分析・花粉分析

1. 試料

試料は、SK1147より採取した試料番号1、2、SK1152より採取した試料番号3-5、SK1157より採取した試料番号6、SK1159より採取した試料番号7、SD818より採取した試料番号8、9、SK1150より採取した試料番号10、11、SK1185より採取した試料番号12、13の、計13点である。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）などを参照する。

同定結果は、海～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率4.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai & Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表1、図1に示す。SK1150の試料番号11を除いて、珪藻化石が産出する。各遺構とも完形殻の出現率が約65%と化石の保存状態は比較的が良い。産出分類群数は、合計で25属157分類群である。以下に遺構ごとに珪藻化石群集の特徴を述べる。

- SK1147（試料番号1、2）

試料番号1、2は、ともに淡水域に生育する珪藻（以下、水生珪藻とする）が合計で約70%と産出し、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約30%産出する。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴も近似しており、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真+好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）が優占する。主要種の産状は、陸生珪藻に関しては近似するが、水生珪藻は試料ごとに異なっている。試料番号2は、流水不定性の *Gomphonema parvulum* が約20%と多産し、これに次いで同じく流水不定性の *Diploneis parma*, *Eunotia pectinalis* var. *minor*, *Gomphonema pumilum* 等を伴う。このうち、*Eunotia pectinalis* var. *minor* は、沼よりも浅く水深が1 m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地の環境指標となる沼沢湿地付着生種群である（安藤、1990）。

試料番号1は、とくに多産するものはなく、流水不定性の *Amphora affinis*, *Craticula cuspidata*, *Gomphonema sphaerophorum*, 沼沢湿地付着生種群の *Eunotia pectinalis* var. *minor*, *Pinnularia gibba*, *Pinnularia viridis*, *Gomphonema gracile* 等を伴う。陸生珪藻は、耐乾性の高い陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica* 等が多産する。

• SK1152（試料番号3-5）

珪藻化石群集は、試料番号4、5と試料番号3で違いが見られる。試料番号4、5は、陸生珪藻が全体の約80%を占める。陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, 未区分陸生珪藻の *Pinnularia schoenfelderi*, 水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群の *Pinnularia subcapitata* が10-20%産出する。水生珪藻は、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Navicula elginensis* 等が産出する。試料番号3は、水生珪藻が約60%産出し、その生態性の特徴はSK1147に近似する。主な産出種は、流水不定性の *Pinnularia mesolepta*, 沼沢湿地付着生種群の *Pinnularia gibba*, それに、塩分や塩類を豊富に含む淡水～汽水生種の *Rhopalodia gibberula* 等である。陸生珪藻では、*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *Pinnularia schoenfelderi* 等が産出する。

• SK1157（試料番号6）、SK1159（試料番号7）

両遺構とも陸生珪藻が優占し、その組成は、SK1152の試料番号4、5に近似する。陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica* が優占し、未区分陸生珪藻の *Pinnularia schoenfelderi*, 陸生珪藻B群の *Pinnularia subcapitata* を伴う。

• SK1185（試料番号12、13）

試料番号12と13で群集が異なる。試料番号13は、水生珪藻が優占する。その生態性の特徴としては、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、真+好止水性種が優占あるいは多産する。主要種は、淡水浮遊性で湖沼沼沢湿地指標種群の *Aulacoseira ambigua*, 偶来性浮遊性種（普段は、水生植物などに付着して生育しているが、波等の物理的な影響を受けて基物から剥離した後は浮遊生活を営む種）の *Fragilaria construens*, その変種の *Fragilaria construens* fo. *venter*, 流水不定性の *Amphora affinis* が産出する。これに対して、試料番号12は、水生珪藻は少なく *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *Pinnularia borealis* 等の陸生珪藻A群が多産する。

• SD818（試料番号8、9）

水生珪藻が全体の約90%と優占する。生態性の特徴や主要種の産状は、前述のSK1185の試料番号13に近似する。湖沼沼沢湿地指標種群の *Aulacoseira ambigua*, 偶来性浮遊性種の *Fragilaria construens*, *Fragilaria construens* fo. *venter*, 流水不定性の *Amphora affinis*, 流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Eunotia incisa*, *Eunotia pectinalis* var. *minor* が産出する。なお、低率であったが流水

表 1. 珪藻分析結果(2)

種 類	生 態 性		環境指標種	SK 1147	SK 1152	SK 1157	SK 1159	SD	SK 1150	SK 1185						
	羣分	pH									流 水					
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
<i>Diploneis parma</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind	4	5	-	-	-	1	-	-	7	-	-	1	4
<i>Diploneis yatukaensis</i> Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia arcus</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	ind	6	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Eunotia formica</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia implecata</i> Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	3	1	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-
<i>Eunotia incisa</i> W. Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	2	-	-	-	-	-	-	-	2	10	-	-	-
<i>Eunotia monodon</i> var. <i>asiatica</i> Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	14	8	-	-	-	-	1	3	13	-	-	5	4
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>ventralis</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	1	3	-	-	-	-	-	-	3	1	56	8	2
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>gracilis</i> (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-	27	10	-	-	14
<i>Fragilaria exigua</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	2	-	-	-	-	-	-	-	13	5	-	-	25
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	ac-il	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia rhomboidea</i> var. <i>saxonica</i> (Rabh.) De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Frustulia weinholdii</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	3	4	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	1
<i>Gomphonema augur</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	unk	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema augur</i> var. <i>gautieri</i> V. Heurck	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema contraterris</i> Lange-B. & Reichardt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema helveticum</i> Brun	Ogh-ind	al-il	l-ph	9	2	2	-	-	-	2	2	1	-	-	2	2
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-unk	ind	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Gomphonema pseudosphaerophorum</i> H. Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	6	17	3	-	-	-	-	5	2	4	-	-	3
<i>Gomphonema pumilum</i> (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Gomphonema sphaerophorum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	-	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Gomphonema subtile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Gyrosigma procerum</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	4	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2
				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
				-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	-	-	-

表 1. 珪藻分析結果(3)

種 類	生 態 性		環境指標種	SK												
	種分	pH		流 水	1147	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	20	8	19	47	45	40	37	4	1	2	2	19	2
Hantzschia amphioxys var. vivax (Hantz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Mastogloia elliptica (Agardh) Cleve ex A. Schmidt	Ogh-ind	ind	l-bi	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	1
Navicula contenta fo. biceps (Arnott) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	1	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	1	3	8	11	19	18	8	1	-	-	-	-	-
Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	28	13	9	16	41	33	35	6	4	2	-	32	6
Navicula paramutica Bock	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
Navicula pseudolanceolata Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
Navicula saxophila Bock	Ogh-ind	ind	ind	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula tantula Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
Navicula tokyoensis H. Kobayasi	Ogh-ind	ind	l-ph	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula viridula (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	9	5	-	-	1	1
Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	-	-	1	7	3	-	2	-	-	-	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	1	-	6	-	-	-	-	2	4	-	-	-	1
Neidium gracile Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Neidium iridis (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Neidium productum (W. Smith) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Neidium tokyoensis H. Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
Nitzschia angustata (W. Smith) Cleve	Ogh-ind	al-il	l-bi	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Nitzschia brennensis Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	3
Nitzschia debilis (Arnott) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Nitzschia nana Grunow	Ogh-ind	ind	ind	-	-	4	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1
Nitzschia sigmoidea (Ehr.) W. Smith	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Pinnularia acrophaeria W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	2	1	1	-	-	-	-	6	-	-	1	1
Pinnularia acuminata W. Smith	Ogh-ind	ac-il	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia appendiculata (Ag.) Cleve	Ogh-hob	ind	ind	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	7	2	6	9	10	13	5	1	-	-	2	15	-
Pinnularia borealis var. brevicostata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	2	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-

表 1. 珪藻分析結果(3)

種 類	生 態 性		環境指標種	SK													
	塩分	pH		流 水	1147	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	
<i>Stauroneis acuta</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis javanica</i> (Grun.) Cleve	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis kriegeri</i> Patrick	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Stauroneis legumen</i> var. <i>elliptica</i> H. Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis legumen</i> var. <i>nipponica</i> (Skv.) H. Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	1	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> fo. <i>hattorii</i> Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
<i>Stauroneis smithii</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis tenera</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	9	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Suriella linearis</i> W. Smith	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Synedra ulna</i> (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
海水生種				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種				1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種				0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種				4	4	10	8	11	0	3	14	12	6	0	3	12	
淡水生種				195	102	194	192	190	125	148	187	192	94	30	106	188	
珪藻化石総数				200	106	204	200	201	126	152	201	204	100	30	109	200	

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性
 Euh-Meh : 海水生種-汽水生種
 Meh : 汽水生種
 Ogh-Meh : 淡水-汽水生種
 Ogh-hil : 貧塩好塩性種
 Ogh-ind : 貧塩不定性種
 Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種
 Ogh-unk : 貧塩不明種

pH : 水素イオン濃度に対する適応性
 al-bi : 真アルカリ性種
 al-il : 好アルカリ性種
 ind : pH不定性種
 ac-il : 好酸性種
 ac-bi : 真酸性種
 unk : pH不明種

C. R. : 流水に対する適応性
 l-bi : 真止水性種
 l-ph : 好止水性種
 ind : 流水不定性種
 r-ph : 好流水性種
 r-bi : 真流水性種
 unk : 流水不明種

環境指標種群

C1 : 海水藻場指標種 (小杉, 1988)
 K : 中～下流性河川指標種、M : 湖沼浮遊性種、N : 湖沼沼澤地指標種、O : 沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)
 S : 好汚濁性種、U : 広域適応性種、T : 好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)
 R : 陸生珪藻 (RA : A群、RB : B群、RI : 未区分、伊藤・堀内, 1991)

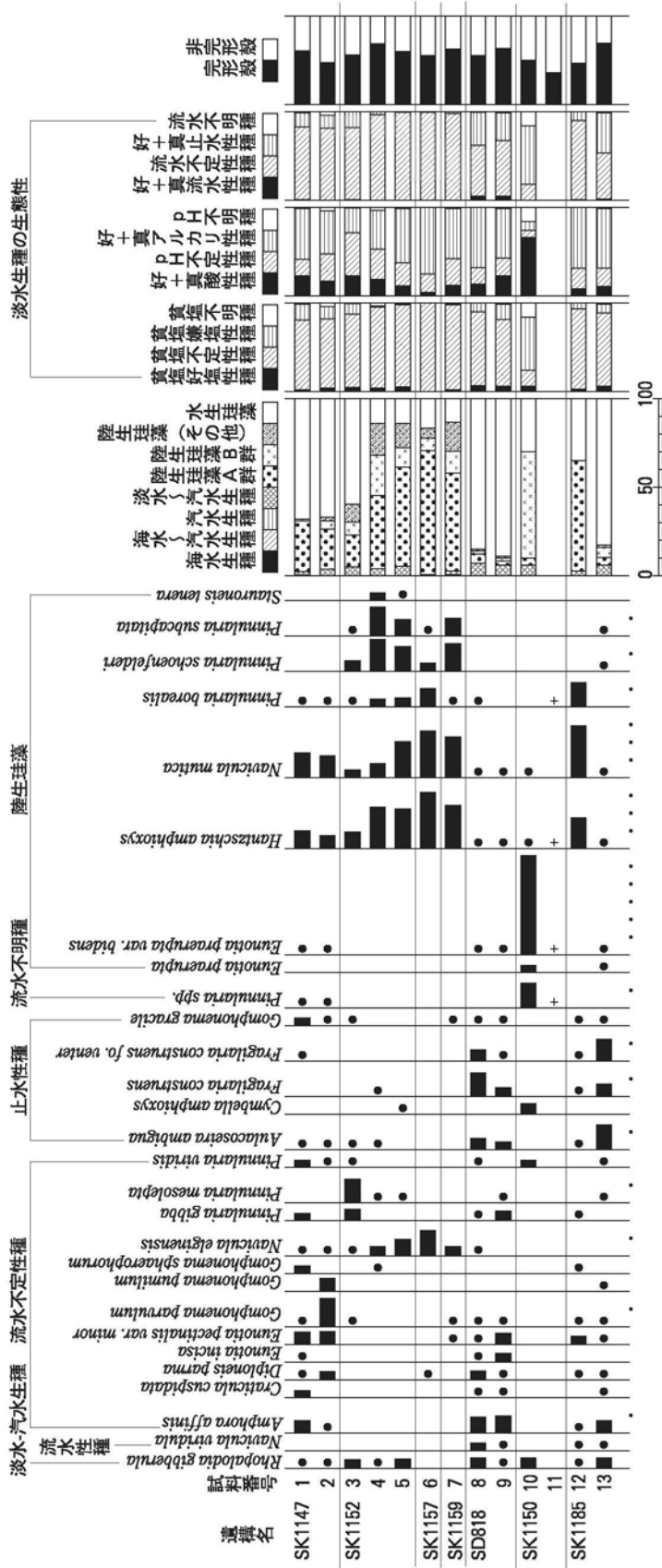


図 1. 主要珪藻化石群集

海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は4%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

性で中～下流性河川指標種群の *Navicula viridula* が産出する。中～下流性河川指標種群とは、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する種群である(安藤、1990)。

・SK1150 (試料番号10、11)

珪藻化石が産出した試料番号10は、陸生珪藻B群であり沼沢湿地付着生種群でもある *Eunotia praerupta* var. *bidens* が約60%産出し、同じく沼沢湿地付着生種群の *Eunotia praerupta*, *Pinnularia viridis* 等を伴う。

(2) 花粉分析

結果を表2、図2に示す。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。花粉化石の産出状況は全体的に良好で、試料番号12のみ定量解析が行えるだけの個体数を得ることができなかった。いずれの試料においても草本花粉の割合が高く、花粉化石群集は大きく3つに分けられる。

SK1147-SK1159 (試料番号1-7) をみると、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、次いでマツ属、シイノキ属も多く認められる。その他ではスギ属、クマシデ属-アサダ属、コナラ属コナラ亜属、エノキ属-ムクノキ属、ブドウ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などを伴う。また、わずかではあるが、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミウアオイ属、ツリフネソウ属、サンショウモなどの水湿地生に由来する花粉・胞子も検出される。

SD818、SK1150、SK1185 (試料番号8-11) をみると、木本花粉ではアカガシ亜属が多産し、マツ属などを伴い、前述のSK地点と類似するが、シイノキ属の産出が少ない。その他の種類では、スギ属、クマシデ属-アサダ属、コナラ属、エノキ属-ムクノキ属などが認められる。草本花粉はイネ科が多産し、カヤツリグサ科などを伴う点でSK地点と類似するが、ヨモギ属の占める割合が低い。また、アブラナ科、キク亜科、タンポポ亜科なども少ない。また、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ミズユキノシタ属、ゴキヅル属、サンショウモ、アカウキクサ属などの、水湿地生植物の種類数・検出量が多くなる。

SK1185の試料番号13をみると、木本花粉はシイノキ属が多産する点で他のSK遺構と類似した群集を示すが、草本花粉はアブラナ科、ヨモギ属キク亜科、タンポポ亜科などの産出が少ない点からSD, SX遺構と類似する。

4. 考察

(1) 珪藻分析からみた堆積環境

・土坑の堆積環境

土坑については、SK1147、SK1152、SK1157、SK1159、SK1185について珪藻分析を行った結果、何れも陸生珪藻と水生珪藻とが混在していた。その割合は、土坑や採取された層によって異なっている。

SK1152の試料番号4、5、SK1157の試料番号6、SK1159の試料番号7、SK1185の試料番号12では、陸生珪藻が優占していた。とくに、陸生珪藻A群が多く産出することから、土坑内の埋積土は水成堆積したのではなく好気的環境で徐々に堆積したことが推定される。これは、花粉分析の結果で土坑内からアブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科など乾いた環境に生育する人里植物が多く認められることとも調和的である。

表2. 花粉分析結果

種 類	試料番号	SK1147		SK1152		SK	SK	SD18		SK1150		SK1185	
		1	2	3	4	1157 6	1159 7	8	9	10	11	12	13
木本花粉													
マキ属		3	2	2	-	3	2	5	3	-	9	-	1
モミ属		3	2	5	2	2	2	3	3	7	7	1	-
ツガ属		1	-	1	1	3	1	1	-	5	3	-	1
トウヒ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
マツ属(不明)		15	11	-	3	6	3	-	74	33	41	25	11
マツ属(不明)		7	27	50	24	35	25	31	13	12	14	8	7
コウヤマキ属		1	1	1	-	-	2	-	2	2	-	2	-
スギ属		5	14	1	4	5	3	3	12	6	9	12	5
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		1	-	1	1	-	-	-	2	-	1	1	3
マオウ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤナギ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属		3	4	4	3	1	-	1	4	5	4	2	4
クルミ属		1	-	1	1	-	1	-	1	1	-	-	-
クマシデ属-アサダ属		7	3	3	2	4	1	-	1	5	2	6	4
カバノキ属		-	-	-	2	-	-	-	1	1	-	-	-
ハンノキ属		-	2	2	1	-	1	-	-	1	-	1	3
ブナ属		-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1	-
コナラ属コナラ属		11	13	5	4	7	10	4	8	17	13	15	12
コナラ属アカガシ属		106	84	93	54	33	52	40	105	121	72	89	5
クリ属		1	1	1	-	1	2	2	1	1	1	1	3
シイノキ属		32	30	35	18	27	28	24	5	14	8	9	42
ニレ属-ケヤキ属		1	-	-	-	2	1	-	-	4	-	1	1
エノキ属-ムクノキ属		8	6	5	1	1	1	1	4	5	4	12	7
ヤドリギ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
イスノキ属		1	1	2	-	1	1	-	-	9	5	2	2
サクラ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ユズリハ属		-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1
アカメガシワ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-
シラキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ウルシ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
モチノキ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-	3	-	-
トチノキ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ブドウ属		-	9	2	3	7	4	1	1	-	4	-	-
ノブドウ属		-	-	-	-	-	-	-	-	25	3	-	-
グミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ウコギ科		2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ハイノキ属		-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エゴノキ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
テイカカズラ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ガマズミ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉													
ガマ属		2	-	-	1	-	-	1	-	2	1	-	2
サジオモダカ属		-	1	-	2	1	-	-	1	-	-	-	-
オモダカ属		1	-	-	1	1	-	-	1	6	-	-	5
イネ科		225	135	296	271	187	184	136	306	354	259	246	8
カヤツリグサ科		44	31	31	17	29	29	24	34	70	22	38	47
イボクサ属		-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-
ソユクサ属		1	2	4	1	2	1	1	-	1	7	1	1
ミズアオイ属		1	-	-	-	-	-	-	5	15	2	-	9
クワ科		10	17	3	-	2	3	10	-	2	1	1	5
ギンギン属		6	4	6	5	1	-	2	2	1	5	4	-
サナエタデ節-ウサギツカミ節		-	6	-	1	2	1	1	2	5	4	21	2
アカザ科		9	9	3	2	2	4	3	-	-	4	1	1
ナデシコ科		4	2	2	2	2	1	3	-	1	-	1	-
キンボウグ科		-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-
アブラナ科		5	14	12	9	11	14	47	-	-	2	10	-
フレモコウ属		1	3	-	1	2	1	-	-	-	3	-	-
バラ科		1	-	-	2	7	6	-	-	-	-	4	-
ソラマメ属		-	-	4	2	2	4	1	-	-	1	-	-
ノアズキ属		-	-	13	7	15	7	4	-	-	1	-	-
マメ科		6	4	-	1	1	2	1	-	1	-	2	2
ツリフネソウ属		3	1	1	1	-	2	1	-	-	-	-	-
ミソノギ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヒシ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ミズユキノシタ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
セリ科		3	3	8	7	3	23	9	2	2	28	7	1
イヌコウジュ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
オギノツメ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
オオバコ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヤエムグラ属-アカネ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
オミナエシ属		-	-	1	1	-	1	2	-	4	3	-	-
ゴキツル属		-	-	-	-	-	-	-	2	5	-	-	7
キュウリ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヨモギ属		29	147	162	139	152	187	172	8	15	15	21	2
オナモミ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-
キク亜科		2	13	33	27	41	18	13	-	2	9	16	-
タンポポ科		9	24	20	15	19	17	56	-	1	11	8	2
不明花粉		11	8	21	11	10	10	13	-	12	6	9	5
シダ類孢子													
ヒカゲノカズラ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-
ゼンマイ属		1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
イノモトソウ属		2	-	-	2	-	3	-	1	2	1	2	-
サンショウモ		-	-	-	-	-	1	1	1	1	1	-	-
アカウキクサ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ミズニラ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
他のシダ類孢子		59	101	313	201	300	232	252	29	48	160	168	7
合 計													
木本花粉		210	213	218	124	140	143	116	242	244	217	215	8
草本花粉		362	416	599	515	484	506	488	365	487	376	392	15
不明花粉		11	8	21	11	10	10	13	0	12	6	9	0
シダ類孢子		62	101	313	203	301	236	253	33	51	164	172	7
総計(不明を除く)		634	730	1130	842	925	885	857	640	782	757	779	30

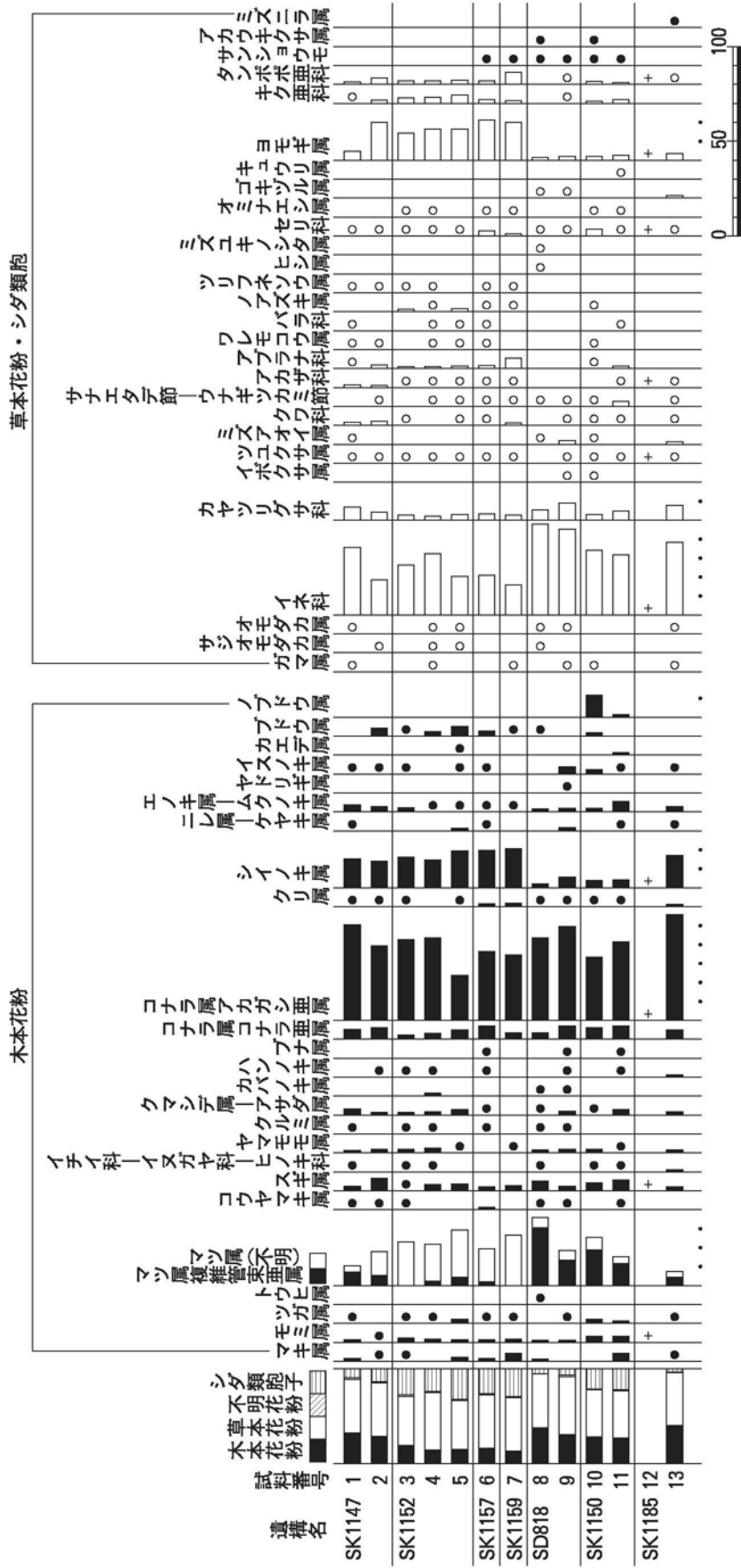


図2. 各遺構における主要花粉化石群集
 出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
 なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

一方、SK1147の試料番号1、2、SK1152の試料番号3、SK1185の試料番号13は、水生珪藻が多く産出し、全体の7割以上を占めている。本試料からは、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種、止水性種、湖沼沼沢湿地指標種群等を含む群集が確認された。優占種がみられないことや生態性の異なる種群が認められることから、いわゆる混合群集の様相を呈しており、周辺および上流部の様々な環境に生育していた珪藻が氾濫等により土坑内に流入・堆積したことが推定される。

・河川跡の堆積環境

SD818の試料番号8、9は、ともに珪藻化石群集が近似しており、中～下流性河川指標種群を含む流水性種、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種や止水性種、それに湖沼沼沢湿地指標種群等を含むことで特徴付けられた。本試料も混合群集の様相を呈していることから、河川内の流れが緩やかな場所に珪藻化石が集積していることが推定される。本試料の花粉分析では、浮葉植物のヒシ属、抽水植物のオモダカ属、ミズアオイ属、浮水植物のサンショウモ、アカウキクサ属などの水生植物が検出されている。珪藻化石の中にも沼沢湿地の示標種が含まれており、周囲にはこれらの水生植物が生育できるような沼沢湿地のような環境が存在したことが推定される。

・不明遺構の堆積環境

SK1150の珪藻化石が産出した試料番号10は、陸生珪藻B群であり沼沢湿地付着生種群でもある *Eunotia praerupta* var. *bidens* が優占することで特徴付けられた。この結果から、本試料は沼沢や湿地のような場所で堆積した土壌と考えられる。なお、珪藻化石の少なかった試料番号11も同じような群集で構成されていたことからすると同じような水域環境が推定される。

これらの遺構については、現地における堆積構造等の観察結果等も含めて堆積環境を検討することが必要である。

(2) 花粉分析からみた古植生

・森林植生

広域の森林植生を反映する木本花粉についてみると、コナラ属アカガシ亜属が多産し、マツ属、シイノキ属なども多く認められる。その他ではスギ属、クマシデ属-アサダ属、コナラ属コナラ亜属、エノキ属-ムクノキ属、ブドウ属などを伴う。この結果は、出土した自然木・流木や柱材・礎板に認められた樹種とも調和的である。このうち、アカガシ亜属、シイノキ属は、暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素である。これらのことから、弥生時代の遺跡周辺域はアカガシ亜属を主体とした照葉樹林が成立しており、部分的にスギ属、マキ属、モミ属、ツガ属などの温帯針葉樹が分布し、林縁部などにはイスノキ属やブドウ属なども生育していたと推測される。また、周辺の那珂川や御笠川などの河畔や自然堤防上には、クマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、エノキ属-ムクノキ属などが生育していたと推測される。

比較的多く産出するマツ属のうち、亜属まで同定できたものは全て複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。マツ属の急増は日本各地で知られており、その原因は自然干渉の結果としての二次林や植林が増加したためとされている（たとえば波田、1987など）。

九州各地の遺跡や沖積平野の花粉分析結果をみると、アカガシ亜属、シイノキ属を主体としていた植生が衰退し、マツ属花粉が急激に増加し始めるのは弥生時代中期～古墳時代（約2000-1500年前）とされている（たとえば Hatanaka, 1985；畑中ほか、1998など）。今回分析対象とされている遺構群は弥生時代とされていることから、得られた花粉化石群集は、マツ属が増加し始めた時期のものである

可能性がある。また、土坑やSK1185でシイノキ属の割合が高く、SD818・SK1150でシイノキ属の割合が少ない点は、周辺植生への人為干渉の差異を示している可能性があり、若干の時期差を示している可能性が考えられる。

・低地の植生

草本花粉群集組成をみると、いずれの試料もイネ科が多産する。その他の種類では、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などが検出される。これらは開けた明るい場所を好む、いわゆる「人里植物」を多く含む分類群であることから、遺跡内およびその周囲の草地に生育していたと推測される。また、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属、サンショウモ、アカウキクサ属などの水生植物、ガマ属、ツリフネソウ属、ミズユキノシタ属、ゴキヅル属などの湿地生植物も検出されることから、周辺域にこれらが生育する水湿地が存在したと推測される。

なお、SK群においてアブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などの人里植物が多く認められるのに対し、SD818・SK1150ではそれらの草本類が少ない。また、SD818・SK1150の方が、水湿地生植物に由来する花粉・胞子の種類数・個体数が多く認められる。これらのことから、多くのSK遺構周辺では比較的乾いた草地部分の環境を強く反映しており、SD818・SK1150では水湿地の環境を反映していると思われる。これは、遺構周辺の環境が異なっていた、あるいは遺構の利用形態の差により反映する環境が異なっていた可能性がある。

2. 第8次調査出土種実

1. 試料

種実分析は、弥生時代とされる各遺構から採取された土壌25試料（試料番号1～25）と、弥生～中世とされる各遺構から検出された種実単体試料について実施する。各試料の詳細は、結果と共に表3、4に示す。

2. 分析方法

土壌試料は200cc程度を水に一晩浸し、0.5mm目の篩を通して水洗する。篩の残渣と種実単体試料を、4、2、1、0.5mm目の篩に通して粒径別にシャーレに集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な果実、種子などを抽出する。ただし、種実単体試料は、10式（1000個体）を大幅に越える種実が確認されたため、栽培植物を優先して抽出する。

検出された種実遺体の形態的特徴を、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川、1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか、2000）等と比較し、種類を同定し個数を求めた。微碎片を含み個数の推定が困難である分類群は「+」、数字以上の個数が推定される分類群は「数字+」と表示した。種実単体試料の同定結果は、栽培植物のみの表示にとどめた。

分析後の種実遺体等は、試料別、種類毎にビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

3. 結果

分析・同定結果を表3、4に示す。各土壌試料からは、木本6分類群22個、草本31分類群4592個の種実が検出された他に、種類不明の種実、植物のトゲ、炭化材、部位・種類共に不明の植物や炭化物、昆虫遺骸、土器の破片などが確認された（表4）。検出された種実遺体分類群は、草本類主体の種類組成で、栽培植物のイネが369個、メロン類が4個確認された。また、SK1147（No.4）やSK1185（No.25）ではカラムシ属が、SK1152（No.6、7）ではイネが、SD818（No.15,16）ではトウゴクサ

パノオが、SK1150 (No.21、22) ではチドメグサ属やイヌコウジュ属が多量検出されるなど、遺構別における種類組成の差異が認められた。

一方、種実単体試料から同定された栽培植物は、木本2分類群(スモモ、モモ)82個、草本8分類群(イネ、アワーヒエ、オオムギ、コムギ、マメ類、エゴマ、メロン類、ヒョウタン類)1255個、計1337個であった(表3(単体栽培のみ))。時代別における検出状況は、第I面の中世とされる遺構からは、モモが3個確認された。第II面では、古代とされる遺構から、モモが19個確認された。古墳時代後期とされる遺構からは、スモモ1個、モモ16個、メロン類1個、ヒョウタン類23個が確認された。第III面の弥生時代とされる遺構からは、スモモ8個、モモ33個、イネ34個、アワーヒエ1個、オオムギ1個、コムギ2個、マメ類15個、エゴマ123個、メロン類1054個、ヒョウタン類1個が確認された。

各試料から同定された種実遺体の遺存状況は、栽培植物のイネ、アワーヒエ、オオムギ、コムギ、マメ類が炭化している以外は、比較的良好である。以下に、本分析にて同定された種実の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。

<木本>

・ブナ科 (Fagaceae)

果実の破片が検出された。黒褐色。破片の大きさは1.5cm以下。果実表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。着点は灰褐色でざらつく。コナラ属 (*Quercus*) やクリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) と思われる個体がみられる。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

種子が検出された。黄褐色で三角状広倒卵形。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄い。長さ2.2mm、径1.8mm程度。一辺が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・マタタビ属 (*Actinidia*) マタタビ科

種子が検出された。茶褐色、両凸レンズ状楕円体。長さ2mm、幅1mm程度。基部はやや突出し、切形。種皮は硬く、表面には円形・楕円形などの凹点が密布し網目模様をなす。

・スモモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出された。レンズ状の広楕円体でやや偏平。径1.5cm、厚さ1cm程度。基部は丸く臍点がある。一方の側面に縫合線が発達し、縫合線上に齧歯類(ネズミなど)によると考えられる食害痕が認められる個体がみられる。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)の完形、半分以下の破片が検出された。灰褐色、広楕円体でやや偏平。先端部はやや尖る。基部は切形で中央部に湾入した臍がある。長さ2.5cm、幅2cm、厚さ1.5cm程度。1本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線に沿って半分に割れた個体がみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。表面が磨耗した個体もみられる。

・キイチゴ属 (*Rubus*) バラ科

核(内果皮)が検出された。淡黄褐色、半円形~三日月形。長さ1.8mm、幅1.5mm程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

・ノブドウ (*Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv.) ブドウ科ノブドウ属

種子が検出された。灰褐色。広倒卵形、側面観は半広倒卵形で丸みがあり、基部はやや尖る。径4~4.5mm程度。背面にはU字状に開いたさじ状の模様がある。なお、同定根拠となる背面が欠損した破損個体を、ブドウ科 (Vitaceae) にとどめた。

＜草本＞

・オモダカ属 (*Sagittaria*) オモダカ科

果実が検出された。淡黄褐色、倒卵形で偏平。径2.5mm程度。果皮は薄く翼状。翼の外形は欠損する。表面は微細な網目が縦方向に並ぶ。果皮は透き通るため、中の種子が透けてみられる。中の種子は茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・オモダカ科 (Alismataceae)

種子が検出された。茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。径1.5mm程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎(果)が検出された。長楕円形でやや偏平。長さ4~7mm、幅2.5~3mm、厚さ1.5mm程度。胚乳は炭化しており黒色を呈す。基部の一端には胚が脱落した凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の縦溝が確認される。穎(果)は淡褐色、基部に円柱状の特徴的な果実序柄がある。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が規則的に縦列する。

・アワーヒエ (*Setaria itarica* (L.) P. Beauv.-*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科

胚乳が検出された。炭化しており黒色を呈す。広楕円形でやや偏平。径2mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部に胚の凹みがある。

・エノコログサ属 (*Setaria*) イネ科

果実が検出された。淡~黄褐色、狭卵体~半偏球体でやや偏平。長さ2.8mm、径1.5mm程度。果皮は薄く柔らかく、表面には微細な網目模様が縦列する。

・オオムギ (*Hordeum vulgale* L.) イネ科オオムギ属

胚乳の破片が検出された。炭化しており黒色を呈す。紡錘状長楕円形で頂部や基部がやや尖る。長さ5mm以上、径2.5mm程度。腹面は1本のやや太く深い縦溝があり、背面基部には胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色を呈す。楕円形でオオムギよりも丸みを帯びている。長さ3.8mm、径3mm程度。腹面には1本のやや太く深い縦溝がある。背面基部には胚の痕跡があり、丸く窪む。表面はやや平滑。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、片凸レンズ状の広倒卵形。長さ2mm、径1.5mm程度。背面はやや高く稜がある。先端部は尖り、基部から伸びる逆刺を持つ髭状の腕が残る。表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数の種を一括した。淡~黒褐色。三稜またはレンズ状倒卵体。径1~1.5mm程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。スゲ属 (*Carex*) と思われる個体を含む。

・イボクサ (*Aneilema keisak* Hassk.) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。灰褐色、半横長楕円形。径1.5mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が多数存在する。

- ミズアオイ属 (*Monochoria*) ミズアオイ科

種子が検出された。淡褐色、楕円体。長さ1mm、径0.6mm程度。種皮は薄く透過性、柔らかい。表面には縦に10本程度の隆起があり、隆起の間には横方向の密な隆線が配列する。

- カラムシ属 (*Boehmeria*) イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径1.2mm程度。先端部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

- カラムシ属 (*Boehmeria*) イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径1.8mm程度。先端部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

- カナムグラ (*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.) クワ科カラハナソウ属

種子が検出された。灰褐色、側面観は円形、上面観は両凸レンズ形。径4mm、厚さ1mm程度。頂部はやや尖り、縦方向に一周する稜に沿って半分に割れた個体が見られる。基部には淡黄褐色でハート形の臍点がある。種皮は薄く、表面は粗面。

- タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。黒色、丸みのある三稜状卵形で長さ2mm、径1.5mm程度、表面はやや平滑で光沢が強い、ハナタデ (*Polygonum caespitosum* Blume subsp. *yokusaianum* (Makino) Danser) またはイヌタデ (*Polygonum longisetum* De Bruyn) と思われる個体などがみられる。

- アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1.2mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

- ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

種子が検出された。茶褐色、腎状円形でやや偏平。径1mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

- トウゴクサバノオ (*Isopyrum trachyspermum* Maxim.) キンボウゲ科シロカネソウ属

種子が検出された。淡褐色、球体。径0.7mm程度。種皮は薄く、表面には小突起が密布しざらつく。

- タガラシ (*Ranunculus sceleratus* L.) キンボウゲ科キンボウゲ属

果実が検出された。広倒卵形～広楕円形でやや偏平。径1mm、厚さ0.5mm程度。縁は黄白色のスポンジ状で、中心部はやや凹み淡黄褐色で平滑。水に浮きやすい。

- キンボウゲ属 (*Ranunculus*) キンボウゲ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径1.8mm、厚さ0.5mm程度。先端部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄くスポンジ状で表面はざらつく。

- アブラナ科 (Cruciferae)

種子が検出された。赤褐色、楕円形で偏平。長さ1mm、幅0.7mm程度。基部は切形で、両面の同一側には臍点から頂部へ伸びる1個の浅い溝がある。種子表面には微細な網目模様がある。

- キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属 (*Potentilla*－*Duchesnea*－*Fragaria*) バラ科

核(内果皮)が検出された。灰褐色、腎形でやや偏平。径1mm程度。内果皮は厚く硬く、表面は粗面で、数本の隆条が斜上する。

- マメ類 (Leguminosae) マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色を呈す。長楕円形で長さ4.5～5mm、径3.5mm程度。2枚からなる子葉の合わせ目上に長楕円形の臍がある。種皮表面はやや平滑で光沢があるが、焼け膨れ、崩

れている個体がみられる。遺跡出土の炭化マメ類について、子葉内面の幼痕や初生葉の形態から、ササゲ、アズキ、リョクトウなどを判別する試みが行われている（吉崎、1992）。一方、野生種との雑種も多いため、形態のみから現在の特定の種類に比定することは難しいとも考えられている（南木、1991；南木・中川、2000など）。また、最近では、DNA分析による判別が開発されつつある（矢野、2002）。今回検出されたマメ類は、遺存状態が悪いため、現時点では形態のみによる種類の特定は控え、今後の資料の蓄積を待ち検討したいと考える。

・カタバミ属 (*Oxalis*) カタバミ科

種子が検出された。黒褐色、倒卵形で偏平。長さ1.2mm、幅0.8mm程度。基部はやや尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には4～7列の肋骨状横隆条が並び、わらじ状を呈す。

・エノキグサ (*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、倒卵形で長さ1.7mm、径1.2mm程度。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面は細かい粒状の凹みが密布しざらつく。

・コミカンソウ属 (*Phyllanthus*) トウダイグサ科

種子が検出された。淡～茶褐色、半広倒卵体。径1.2mm程度。背面は丸みを帯び、腹面の正中線は稜状。正中線の一端に臍がある。

・スミレ属 (*Viola*) スミレ科

種子が検出された。淡灰褐色、広倒卵体。径1.2mm程度。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には縦方向に走る1本の縫合線がある。種皮は薄く、種皮表面は細い縦筋が走りざらつく。種皮内面は横長の細胞が配列する。

・チドメグサ属 (*Hydrocotyle*) セリ科

果実が検出された。淡～黄褐色、半月形でやや偏平。径1mm程度。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面には1本の明瞭な円弧状の稜がある。

・セリ科 (*Umbelliferae*)

果実が検出された。黄褐色、狭披針形で偏平。長さ2mm、幅1.5mm程度。果実表面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

・サクラソウ科 (*Primulaceae*)

種子が検出された。茶褐色、倒台形。背面は平らで、楕円状、菱形状、円形状などの4～5角形をなす。径1mm程度。腹面は長軸方向に薄くなり稜状で、稜上の中央付近に広線形の臍がある。表面は5～6角形の凹みによる網目模様がある。

・イヌコウジュ属 (*Mosla*) シソ科

果実が検出された。茶褐色、倒広卵体。径1.3mm程度。基部には大きな臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・エゴマ (*Perilla frutescens* (L.) Britt. var. *japonica* Hara) シソ科シソ属

果実が検出された。茶褐色、倒広卵体。径2.6mm程度。基部には大きな臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・メハジキ属 (*Leonurus*) シソ科

果実が検出された。淡灰褐色、広倒被針状六稜体。長さ2.4mm、径1.3mm程度。背面は丸みがあり、腹面の正中線上と左右の縁は稜をなす。基部は舌状。表面はやや平滑。

・キラソウ属 (*Ajuga*) シソ科

果実が検出された。淡褐色、狭楕円体。長さ1.5mm、径0.9mm。基部付近に果実の長さの2/3に達する大きな楕円形の着点痕の孔がある。果皮表面は深い凹みによる網目模様が分布する。

- ・ナス科 (Solanaceae)

種子が発見された。淡灰褐色、歪な腎臓形で偏平。径1.7mm程度。側面のくびれた部分に臍がある。種皮は薄く柔らかく、表面には星形状の網目模様が臍を中心に同心円状に発達する。

- ・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が発見された。淡灰褐色、狭倒皮針形で偏平。長さ5～8.3mm、幅3～4mm程度。基部に倒「ハ」の字形の凹みがある。表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。完形種子の多くは、藤下(1984)の基準によるマクワ・シロウリ型の中粒種子(長さ6.1～8.0mm)に該当するが、小型の雑草メロン型(長さ6.0mm以下)や、大粒のモルディカメロン型(長さ8.1mm以上)も確認されたことから、複数の品種が含まれている可能性がある。

- ・ヒョウタン類 (*Lagenaria siceraria* Standl.) ウリ科ヒョウタン属

果実の破片と種子が発見された。茶褐色、果実は、果皮表面はやや平滑で光沢があり、内面はスポンジ状。破片の大きさ4cm程度。果皮断面は柵状で厚さ5mm程度。淡灰褐色。倒皮針形でやや偏平。長さ9.8mm、幅6mm、厚さ2mm程度。頂部はやや角張り、基部に臍と発芽口がある。種皮表面はやや平滑で、両面外縁部の幅広く低い稜にある2本の縫線は不明瞭。

- ・キク科 (Compositae)

果実が発見された。淡灰褐色、狭倒皮針形でやや偏平。長さ2.5mm、径1.3mm程度。頂部は切形で円形の臍がある。果皮表面には微細な網目があり、ざらつく。

4. 考察

(1) 種実遺体単体試料からみた植物利用

スモモ、モモ、イネ、アワ、オオムギ、コムギ、マメ類、エゴマ、メロン類、ヒョウタン類は、古くから栽培のために渡来した植物である(南木, 1991)。弥生時代、古墳時代後期から確認されたスモモや、弥生時代、古墳時代後期、古代、中世から確認されたモモは、観賞用の他、果実や核の中にある仁(種子)などが食用、薬用等に広く利用される。弥生時代から確認されたイネ、アワヒエ、オオムギ、コムギ、マメ類は、胚乳や種子が食用される。弥生時代から確認されたエゴマは、果実が食用や油料に利用される。弥生時代から多量確認されたメロン類は、果実が食用に利用される。弥生時代、古墳時代後期から確認されたヒョウタン類は、果実が食用や容器等に利用される。これらの栽培植物の可食部である種実が、各時代の遺構から検出された状況を考慮すると、当該期の本遺跡周辺域で栽培もしくは持ち込まれ利用されていたことが推定される。

(2) 弥生時代の周辺植生

弥生時代の土壌試料からは、栽培植物のイネの穎が多量とメロン類の種子が確認された。同時期の単体試料からもイネの胚乳や多量のメロン類が確認されていることから、本遺跡周辺域で栽培もしくは持ち込まれ利用されていたことが推定される。

栽培植物を除いた種実遺体分類群は、草本類主体の種類構成を示し、これまでに弊社が実施した本遺跡の古代や本遺跡に隣接する井相田D遺跡の縄文時代の分析結果と調和的である。井相田D遺跡では縄文時代の埋没林が確認されており、縄文時代の本遺跡周辺には平地林が広がっていたことが推定されている。縄文時代末には草地が急激に拡大し、稲作が行われ、弥生時代以降は、草地主体で低地林は丘陵地との林縁部や河畔などに限られていたことが推定されている。今回の分析対象である本遺跡の弥生時代の種実遺体分類群においても、これまでの成果を支持する結果となった。

検出された木本類は、高木類のブナ科、ヤマグワや、低木類のキイチゴ属、藤本類のマタタビ属、ノブドウなどで、林縁部や疎林地など明るい林地に生育する分類群である。多量検出された草本類は、

人里近くを開けた草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種類を多く含むことから、調査区付近や上述の木本類が生育していた明るい林地などに生育していたものに由来すると思われる。オモダカ属を含むオモダカ科、ホタルイ属の一部、ミズアオイ属、イボクサなどの水生植物や、やや湿ったところに生える種類を含むカヤツリグサ科、タデ属の一部、タガラシ、セリ科などは、栽培植物のイネが共に検出されていることから、稲作に伴う水田雑草に由来する可能性がある。カヤツリグサ科、カラムシ属、カナムグラ、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、トウゴクサバノオ、キンボウゲ属、アブラナ科、キジムシロ属ーヘビイチゴ属ーオランダイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ、コミカンソウ属、スマレ属、チドメグサ属、セリ科、サクラソウ科、イヌコウジュ属、メハジキ属、ナス科、キク科などは、やや乾いたところに生育していたものに由来すると思われる。

なお、SK1152のイネ、SK1147、SK1185のカラムシ属、SD818のトウゴクサバノオ、SK1150のチドメグサ属、イヌコウジュ属の多量検出など、遺構別に大きく異なる種類構成は、各遺構の局地的な堆積環境などの性格を反映している可能性がある。

3. 植物遺体分析

1. 試料

試料は、弥生時代・古墳時代・古代の遺構から出土した植物遺体を多量に含む土壌9点（試料番号1-9）である。

2. 分析方法

各試料の土壌を水洗し、残査を実体顕微鏡で観察して植物遺体を抽出する。イネ科の植物遺体が認められた場合、残存部が葉部の場合は灰像分析をする。桿部が残存している場合には横断面の組織観察を実施する。種実遺体および葉が残存していた場合には、それぞれ種実同定と葉同定を行う。木材・炭化材が残存していた場合には樹種同定を実施する。各分析の方法を以下に示す。

(1) 灰像分析

植物遺体を燃焼させ、灰中に含まれている植物珪酸体を含む組織片の形態を観察し、その特徴から種類を同定する。

(2) 桿の観察

剃刀を用いて、試料の横断面の切片を作成し、ガム・クロールで封入し、プレパラートとする。試料が脆い場合には、合成樹脂で包埋し、固化した後にダイヤモンドカッターによる切断と切断面の研磨を行い、プレパラートを作成する。プレパラートは生物顕微鏡で組織を観察する。

(3) 種実同定

上記種実同定と同じ手法を用い、形態的特徴と現生標本の比較から種類を同定する。

(4) 葉同定

葉を1枚ずつ剥離し、各部分が破損ないように台紙上に広げる。葉の形態と現生標本の比較から種類を同定する。同定後の葉は乾燥しないように濡れた状態で封入する。

(5) 樹種同定

試料の木口面、柾目面、板目面の切片を作成し、ガム・クロールで封入し、プレパラートとする。プレパラートを生物顕微鏡で観察し、木材組織の特徴から種類を同定する。試料が炭化材の場合には、乾燥させた上で3断面を実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で観察し、種類を同定する。

3. 結果

各試料からは枝状、葉状等の植物遺体が検出されたが、種実遺体および葉は確認できなかった。枝

状の植物遺体は、木材の枝とイネ科等の桿と考えられるものがあるが、いずれも保存状態が悪く脆い。したがって、分析は樹種同定の手法を用いて、各試料の枝状や葉状の物質の切片を作成し、組織観察からの同定を実施した。試料は、無作為に各試料から5点を選択した。同定結果を表16に示す。同定の結果、広葉樹の枝やシダ類と考えられるものが認められるが、いずれも小片で観察範囲が狭いため、ほとんどは種類の同定に至らなかった。以下に試料毎に観察結果を記す。

・試料番号1

小枝と葉状の繊維が認められる。小枝のうち、径が最も大きく（約5mm）、比較的保存状態の良い1点と、葉状の繊維4点について組織観察を実施した。

小枝は、横断面でほとんどが髄であるが、当年性の木材組織も一部認められる。木材組織は、道管がほぼ単独で散在する散孔材で、穿孔板は階段状となる。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-100細胞高以上となり、鞘細胞が認められる。以上の特徴から落葉広葉樹のウツギ属に同定される。

葉状の繊維は、繊維物質は認められるものの切片の作成が不可能である。樹脂に包埋しての切片作成も試みたが、ダイヤモンドカッターによる切断の過程で全て破損し、研磨薄片も作成できなかった。そのため種類については不明である。

・試料番号2

小枝と葉状の繊維が認められる。小枝は試料番号1に比較して小径（2mm程度）のものが多く、比較的保存状態の良い1点と、葉状の繊維4点について組織観察を実施した。

小枝は、横断面でほとんどが髄であるが、当年性の木材組織も一部認められる。木材組織は、小径の道管がほぼ単独で散在しているが、観察範囲が狭く、道管配列の詳細は不明。柾目および板目の切片が作成できず、放射組織の形態等は不明である。そのため、広葉樹であることは明らかであるが、種類の同定には至らない。

葉状の繊維は、試料番号1と同様の物質であり、切片ができなかったため種類の同定には至らない。

・試料番号3

葉状の繊維のみ認められ、枝状の植物遺体は認められない。葉状の繊維のうち、1点は切片が作成できたが、残りの4点は試料番号1と同様の物質で切片が作成できなかった。切片が作成できた1点も縦断面のみの観察で、短冊状の細胞が軸方向に配列する様子が認められる。イネ科等の組織に近いが、種類の同定には至らず草本類とした。

・試料番号4

葉状の繊維のみ認められ、枝状の植物遺体は認められない。葉状の物質は、全て試料番号1と同様の物質で切片が作成できなかったため、種類は不明である。

・試料番号5

微細な木片と葉状の繊維が認められる。木片1点と、葉状の繊維4点について組織観察を実施した。木片は、横断面で単独の道管が散在し、年輪界に向かって径を漸減させる散孔材。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高となる。全体的に保存状態が悪く、種類の同定には至らなかった。

葉状の繊維は、試料番号1と同様の物質であり、切片ができなかったため種類の同定には至らない。

・試料番号6

小枝状と葉状の繊維が認められる。小枝状1点と、葉状の繊維4点について組織観察を実施した。

小枝状は、横断面で繊維細胞を主とし、道管や放射組織が認められない。軸方向の断面では、繊維内にらせん肥厚が認められる。このことから、樹木ではない。組織の特徴はシダ類に似ているが、観察した範囲では特徴が捉えきれず、種類の同定には至らない。本報告ではシダ類？とする。

蕈状の繊維は、試料番号1と同様の物質であり、切片ができなかったため種類の同定には至らない。

・試料番号7

小枝と蕈状の繊維が認められる。小枝は試料番号1に比較して小径（2mm程度）のものが多い。比較的保存状態の良い1点と、蕈状の繊維4点について組織観察を実施した。

小枝は、横断面でほとんどが髄であるが、当年性の木材組織も一部認められる。木材組織は、小径の道管がほぼ単独または2個が放射方向に複合して散在しているが、観察範囲が狭く、道管配列の詳細は不明。柾目および板目の切片が作成できず、放射組織の形態等は不明である。道管配列はアワブキ属に似ているが、当年性であること、観察範囲が狭いこと、放射組織が観察できないことなどから種類の同定には至らない。

蕈状の繊維は、試料番号1と同様の物質であり、切片ができなかったため種類の同定には至らない。

・試料番号8

小枝と蕈状の繊維が認められる。小枝は試料番号1に比較して小径（2mm程度）のものが多い。比較的保存状態の良い1点と、蕈状の繊維4点について組織観察を実施した。

小枝は、切片作成の過程で崩壊したため、破片を封入して観察した。横断面でほとんどが髄であるが、当年性の木材組織も一部認められる。木材組織は、小径の道管がほぼ単独で散在しているが、観察範囲が狭く、道管配列の詳細は不明。柾目および板目の組織がほとんど観察できず、放射組織の形態等は不明である。そのため、広葉樹であることは明らかであるが、種類の同定には至らない。

蕈状の繊維は、試料番号1と同様の物質であり、切片ができなかったため種類の同定には至らない。

・試料番号9

小枝と蕈状の繊維が認められる。小枝は試料番号1に比較して小径（2mm程度）のものが多い。比較的保存状態の良い1点と、蕈状の繊維4点について組織観察を実施した。

小枝は、横断面でほとんどが髄であるが、当年性の木材組織も一部認められる。木材組織は、小径の道管がほぼ単独または2-3個が複合して散在しているが、観察範囲が狭く、道管配列の詳細は不明。柾目および板目の切片が作成できず、放射組織の形態等は不明である。そのため、広葉樹であることは明らかであるが、種類の同定には至らない。

蕈状の繊維は、試料番号1と同様の物質であり、切片ができなかったため種類の同定には至らない。

4. 考察

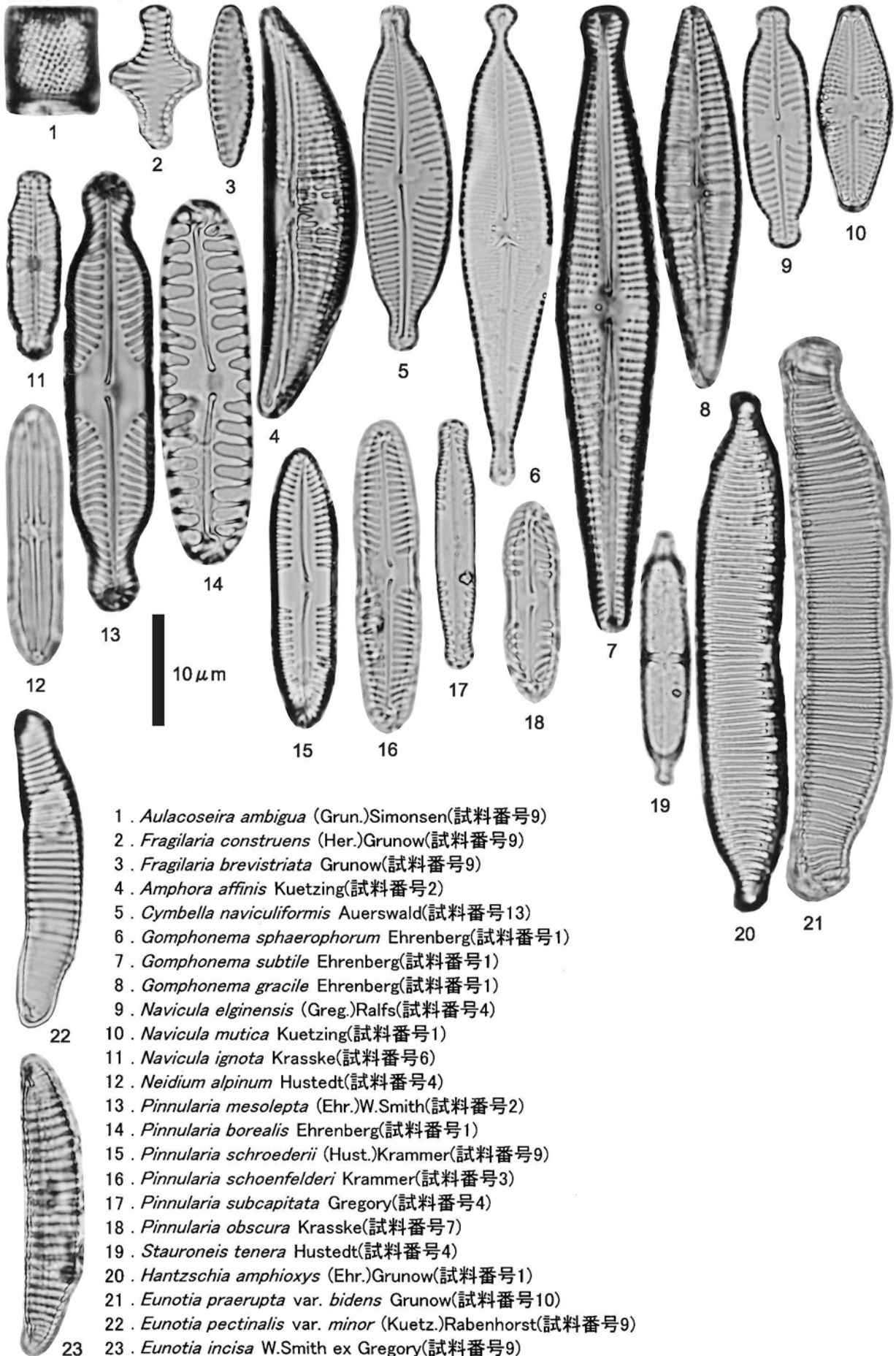
出土した植物遺体は遺跡周辺あるいは上流部に生育していたものが遺跡内に堆積したと考えられる。1点を除いて種類の同定には至らなかったため、どのような植物遺体が堆積したのか詳細は不明である。同定されたウツギ属は、杭材に認められており、木材も利用されていたことが推定される。ウツギ属は、落葉低木で径も太くはならない。日当りのよい場所に普通に生育していることから、低地の河畔等にも生育していた可能性がある。

引用文献

- 安藤 一男、1990、淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理、42、73-88。
 Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.
 藤下 典之、1984、出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法。古文化財の自然科学的研究、古文化財編集委員会編、同朋舎、638-654。
 原口 和夫・三友 清史・小林 弘、1998、埼玉の藻類 珪藻類。埼玉県植物誌、埼玉県教育委員会、527-600。
 橋本 鉄男、1979、ろくろ（ものと人間の文化史31）。法政大学出版局、444p。

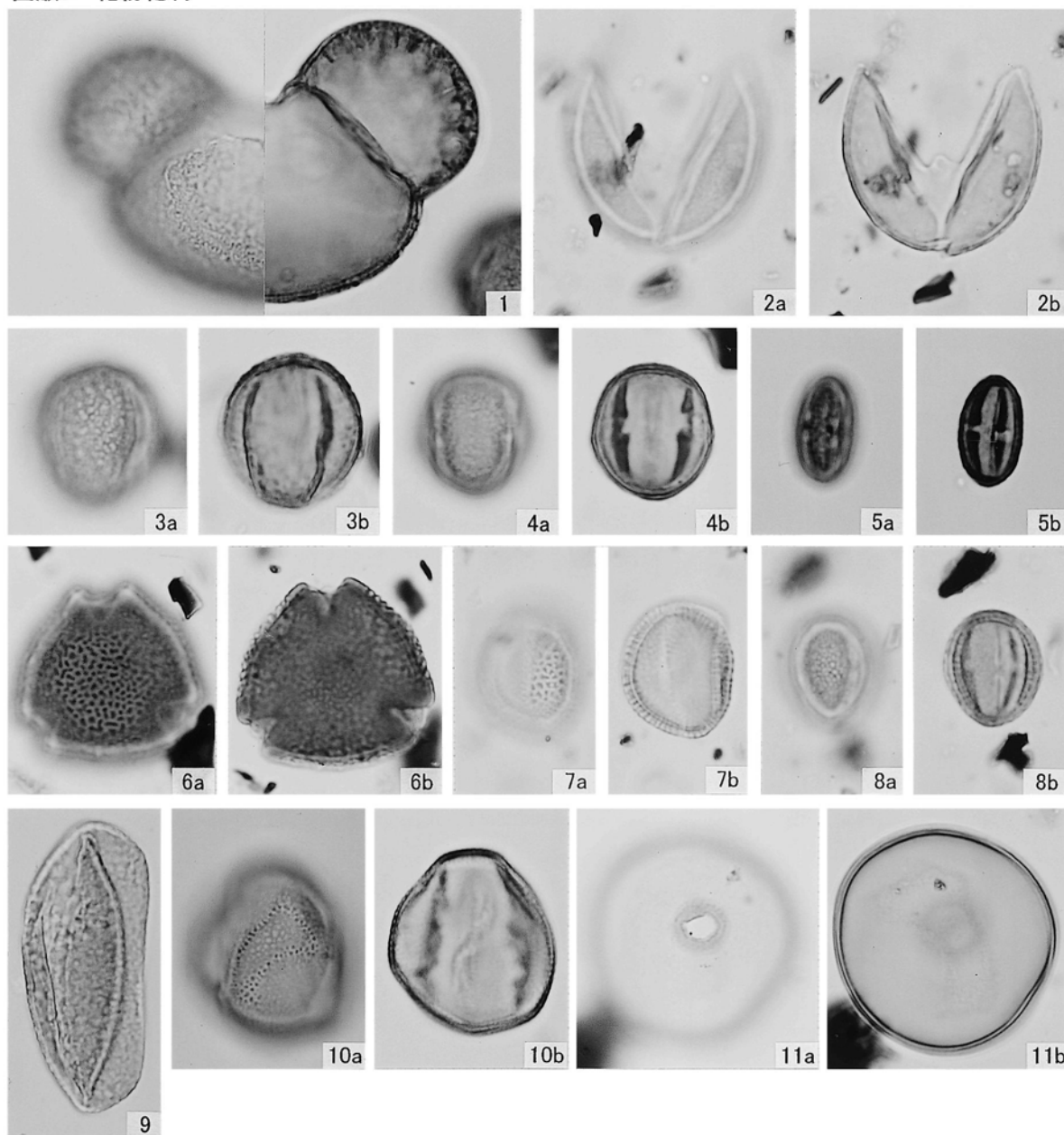
- 波田 善夫、1987、松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究
—松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態について—。資料集、日本自然保護協会、41-49。
- Hatanaka, K., 1985, Palynological studies on the vegetational succession since the Wurm glacial age in Kyushu and adjacent areas. *Jornal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University*, 18, 29-71.
- 畑中 健一・野井 英明・岩内 明子、1998、九州地方の植生史。安田 喜憲・三好教夫（編著）、図説 日本列島植生史、朝倉書店、151-161。
- 林 弘也・松本 昴、1980、瑞穂遺跡から出土した木製遺物の樹種同定。「瑞穂 福岡市比恵台地遺跡」、日本住宅公団、209-216。
- 石川 茂雄、1994、原色日本植物種子写真図鑑、石川茂雄図鑑刊行委員会、328p。
- 伊藤 良永・堀内 誠示、1991、陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用、珪藻学会誌、6、23-45。
- 小杉 正人、1988、珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究、27、1-20。
- Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J. CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1. Gustav Fischer Verlag*, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/2. Gustav Fischer Verlag*, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3. Gustav Fischer Verlag*, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/4. Gustav Fischer Verlag*, 248p.
- 松本 昴・林 弘也、1979a、門田遺跡谷地区出土の木材片の樹種名について。「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第11集 春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡谷地区の調査」、福岡県教育委員会、159-161。
- 松本 昴・林 弘也、1979b、辻田遺跡から出土した木材試料の樹種同定について。「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第12集 春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査」、福岡県教育委員会、144-155。
- 南木 睦彦、1991、栽培植物、古墳時代の研究 4 生産と流通 I、石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編、雄山閣、165-174。
- 南木 睦彦・中川 治美、2000、大型植物遺体。琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書 3-2 粟津湖底遺跡 自然流路（粟津湖底遺跡Ⅲ）、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会、49-112。
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志、2000、日本植物種子図鑑。東北大学出版会、642p。
- 能城 修一・高橋 敦、1996、中・近世における木材利用。第11回植生史学会シンポジウム「中世・近世の植生史」発表要旨、7-11。
- 嶋倉 巳三郎、1976a、木材の材質。「福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 板付 一市営住宅建設にともなう発掘調査報告書1971-1974-」、福岡市教育委員会、67-75。
- 嶋倉 巳三郎、1976b、福岡市鶴町遺跡出土木質遺物の材質調査報告。「福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 福岡市西区大字免 鶴町遺跡」、福岡市教育委員会、63-68。
- 嶋倉 巳三郎、1977、福岡市板付遺跡H-5 地点から出土した木質品の樹種について。「福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集 板付周辺遺跡調査報告書(4)」、福岡市教育委員会、111-114。
- 嶋倉 巳三郎、1981、樹種の鑑定。「福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集 福岡市博多区 那珂深ヲサ遺跡 I」、福岡市教育委員会、67-70。
- 矢野 梓、2002、遺跡から出土した小型豆のDNA分析、DNA考古学 Newsletter 3。
- 吉崎 昌一、1992、古代雑穀の検出。月刊考古学ジャーナル、No.355、2-14。

図版1 珪藻化石



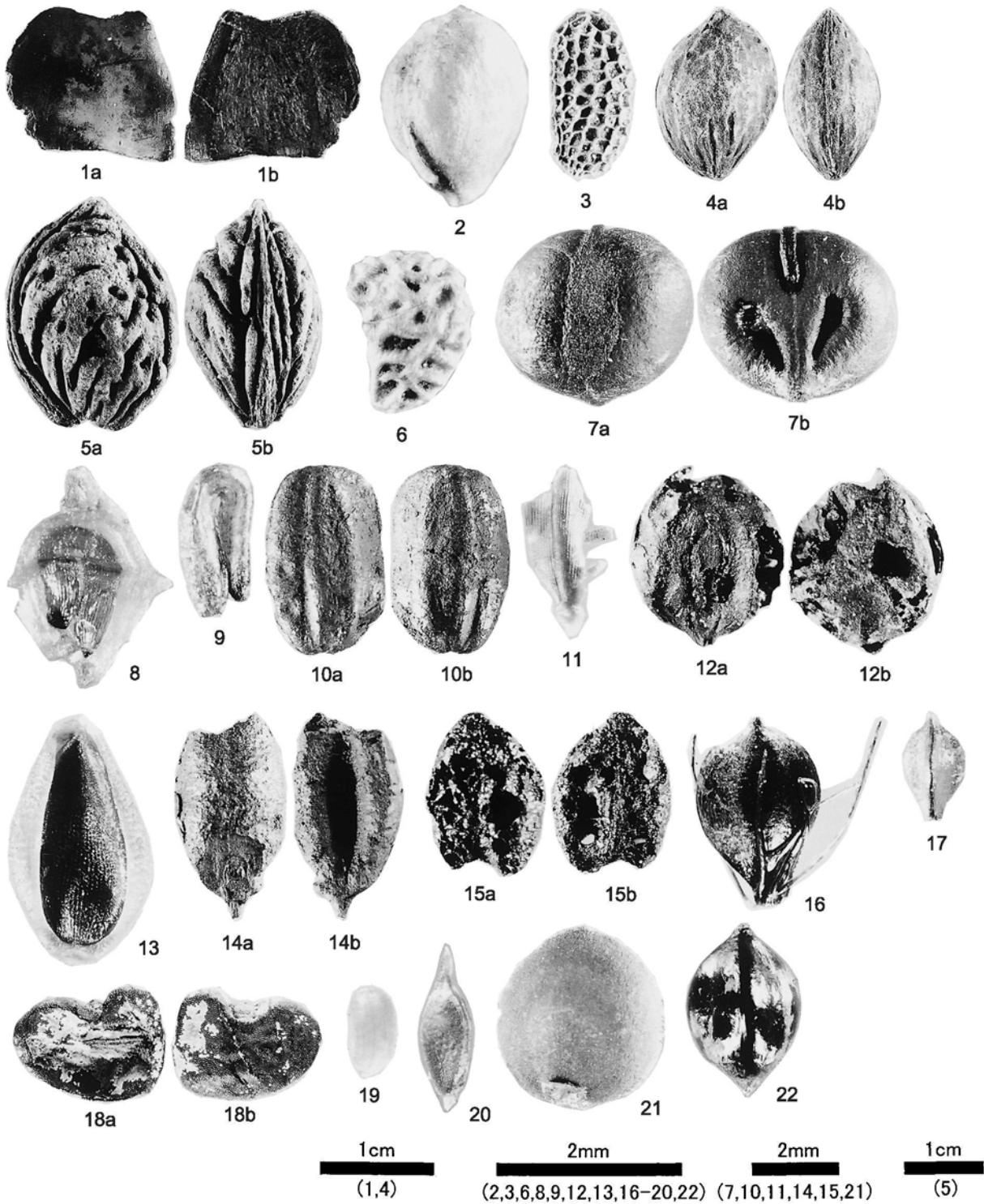
1. *Aulacoseira ambigua* (Grun.)Simonsen(試料番号9)
2. *Fragilaria construens* (Her.)Grunow(試料番号9)
3. *Fragilaria brevistriata* Grunow(試料番号9)
4. *Amphora affinis* Kuetzing(試料番号2)
5. *Cymbella naviculiformis* Auerswald(試料番号13)
6. *Gomphonema sphaerophorum* Ehrenberg(試料番号1)
7. *Gomphonema subtile* Ehrenberg(試料番号1)
8. *Gomphonema gracile* Ehrenberg(試料番号1)
9. *Navicula elginensis* (Greg.)Ralfs(試料番号4)
10. *Navicula mutica* Kuetzing(試料番号1)
11. *Navicula ignota* Krasske(試料番号6)
12. *Neidium alpinum* Hustedt(試料番号4)
13. *Pinnularia mesolepta* (Ehr.)W.Smith(試料番号2)
14. *Pinnularia borealis* Ehrenberg(試料番号1)
15. *Pinnularia schroederii* (Hust.)Krammer(試料番号9)
16. *Pinnularia schoenfelderii* Krammer(試料番号3)
17. *Pinnularia subcapitata* Gregory(試料番号4)
18. *Pinnularia obscura* Krasske(試料番号7)
19. *Stauroneis tenera* Hustedt(試料番号4)
20. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow(試料番号1)
21. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow(試料番号10)
22. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.)Rabenhorst(試料番号9)
23. *Eunotia incisa* W.Smith ex Gregory(試料番号9)

図版2 花粉化石



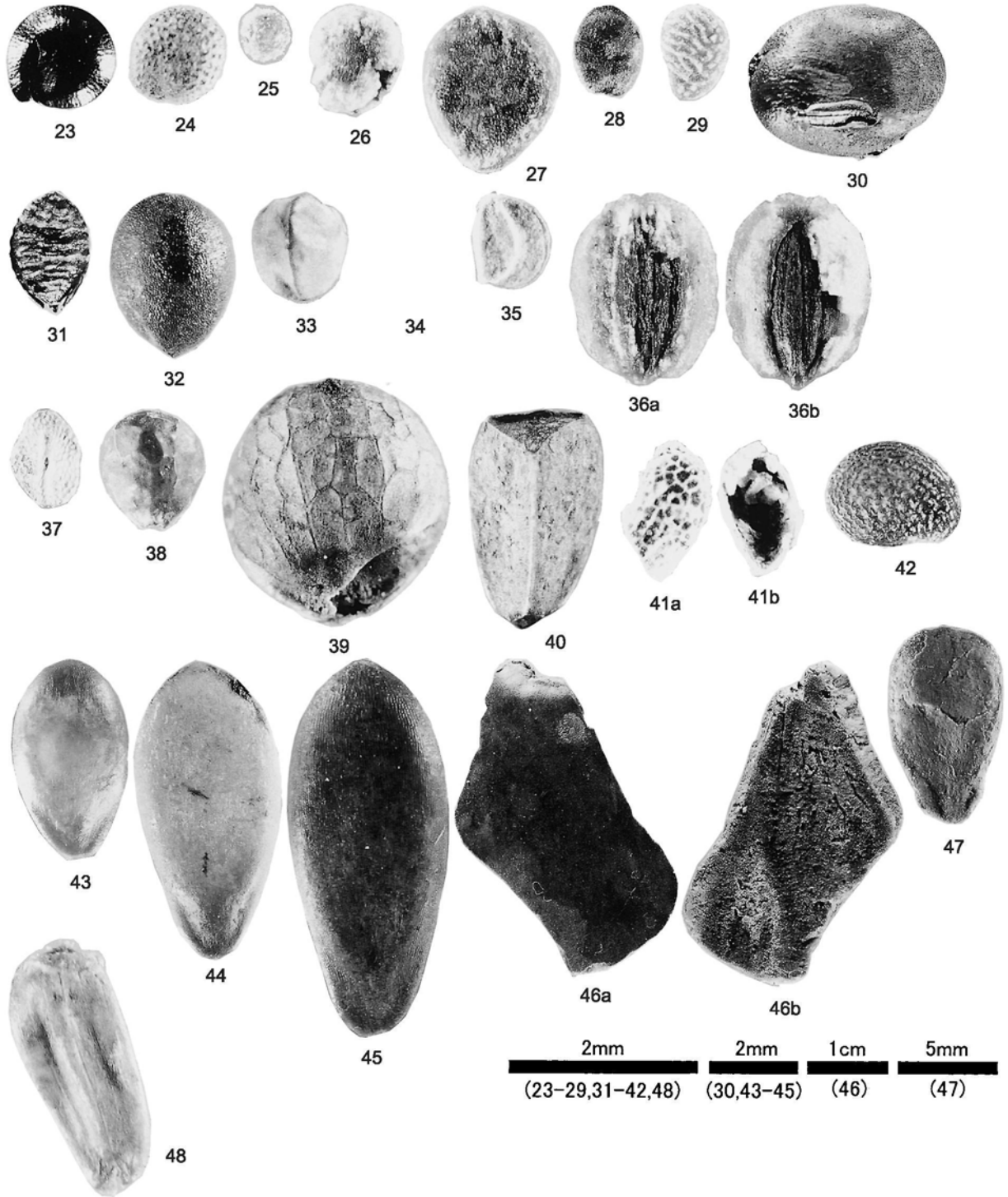
- | | |
|---------------------|------------------|
| 1. マツ属複維管束亜属(試料番号8) | 2. スギ属(試料番号5) |
| 3. コナラ亜属(試料番号1) | 4. アカガシ亜属(試料番号1) |
| 5. シイノキ属(試料番号8) | 6. ノアズキ属(試料番号3) |
| 7. アブラナ科(試料番号7) | 8. ヨモギ属(試料番号7) |
| 9. ミズアオイ属(試料番号9) | 10. イスノキ属(試料番号9) |
| 11. イネ科(試料番号1) | |

図版3 種実遺体(1)



- | | | |
|-------------------------|--------------------------|---------------------------|
| 1 . ブナ科 果実(土壤No.6) | 2 . ヤマグワ 種子(土壤No.3) | 3 . マタタビ属 種子(土壤No.19) |
| 4 . スモモ 核(第3面单体No.12) | 5 . モモ 核(第1面单体No.1) | 6 . キイチゴ属 核(土壤No.23) |
| 7 . ノブドウ 種子(土壤No.21) | 8 . オモダカ属 果実(土壤No.15) | 9 . オモダカ科 種子(土壤No.17) |
| 10 . イネ 胚乳(第3面单体No.41) | 11 . イネ 穎(土壤No.6) | 12 . アワーヒエ 胚乳(第3面单体No.38) |
| 13 . エノコログサ属 果実(土壤No.3) | 14 . オオムギ 胚乳(第3面单体No.8) | 15 . コムギ 胚乳(第3面单体No.17) |
| 16 . ホタルイ属 果実(土壤No.21) | 17 . カヤツリグサ科 果実(土壤No.25) | 18 . イボクサ 種子(土壤No.3) |
| 19 . ミズアオイ属 種子(土壤No.5) | 20 . カラムシ属 果実(土壤No.25) | 21 . カナムグラ 種子(土壤No.3) |
| 22 . タデ属 果実(土壤No.25) | | |

図版4 種実遺体(2)



- | | | |
|---------------------------------------|----------------------------|---|
| 23 . アカザ科 種子(土壤No.9) | 24 . ナデシコ科 種子(土壤No.6) | 25 . トウゴクサバノオ 種子(土壤No.15) |
| 26 . タガラシ 果実(土壤No.15) | 27 . キンボウゲ属 果実(土壤No.22) | 28 . アブラナ科 種子(土壤No.5) |
| 29 . キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 核(土壤No.9) | 30 . マメ類 種子(第3面单体No.12) | 31 . カタバミ属 種子(土壤No.10) |
| 32 . エノキグサ 種子(土壤No.9) | 33 . コミカンソウ属 種子(土壤No.3) | 34 . スミレ属 種子(土壤No.3) |
| 35 . チドメグサ属 果実(土壤No.21) | 36 . セリ科 果実(土壤No.22) | 37 . サクラソウ科 種子(土壤No.10) |
| 38 . イヌコウジュ属 果実(土壤No.22) | 39 . エゴマ 果実(第3面单体No.20) | 40 . メハジキ属 果実(土壤No.8) |
| 41 . キランソウ属 果実(土壤No.12) | 42 . ナス科 種子(土壤No.25) | 43 . -45. メロン類 種子(第3面单体No.13)(43:雑草メロン型 44:マクワ・シロウリ型 45:モモルディカメロン型) |
| 46 . ヒョウタン類 果実(第2面单体No.6) | 47 . ヒョウタン類 種子(第2面单体No.10) | 48 . キク科 果実(土壤No.25) |

4. 第8次調査出土遺物の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・
Zaur Lomtavidze・Ineza Jorjoliani

1. はじめに

下月隈C遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代, 3-20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-5555	位置：H-16区 遺構：SK1075 その他：No.1	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム 1 N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5556	位置：H-17区 遺構：SK1084 その他：No.2	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム 1 N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5557	位置：H-17区 遺構：SK1085 その他：No.3	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム 1 N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5558	位置：G-14区 遺構：SK1147 層位：東側第2層下層 その他：No.4	試料の種類：炭化物・植物遺体 (単子葉類の茎) 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム 1 N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5559	位置：G-14区 遺構：SK1147 層位：W-25 その他：No.5	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム 1 N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5560	位置：I-14区 遺構：SP46 その他：No.6	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム 1 N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5561	位置：F-12区 遺構：SP351・352 (SB1253) その他：No.7	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム 1 N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5562	位置：H-19区 遺構：SP486 その他：No.8	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム 1 N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5563	位置：F-19区 遺構：SK1150 その他：No.9	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム 1 N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5564	位置：G-20区 遺構：SX1190 その他：No.10	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム 1 N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)
			1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
PLD-5555	-26.76 \pm 0.17	1900 \pm 20	75AD(68.2%)125AD	50AD(95.4%)140AD	1900 \pm 21
PLD-5556	-28.94 \pm 0.15	2400 \pm 20	510BC(54.4%)430BC 420BC(13.8%)400BC	720BC(2.9%)690BC 540BC(92.5%)390BC	2400 \pm 22
PLD-5557	-30.28 \pm 0.22	2425 \pm 25	540BC(68.2%)410BC	750BC(15.4%)680BC 670BC(3.4%)640BC 550BC(76.7%)400BC	2427 \pm 23
PLD-5558	-11.13 \pm 0.17	1930 \pm 20	50AD(53.8%)90AD 105AD(14.4%)120AD	20AD(95.4%)130AD	1929 \pm 21
PLD-5559	-29.53 \pm 0.16	1865 \pm 20	80AD(55.9%)180AD 190AD(12.3%)210AD	80AD(95.4%)220AD	1866 \pm 22
PLD-5560	-31.38 \pm 0.14	1845 \pm 20	125AD(44.3%)180AD 185AD(23.9%)215AD	80AD(4.2%)110AD 120AD(91.2%)240AD	1846 \pm 22
PLD-5561	-28.47 \pm 0.14	1885 \pm 20	75AD(68.2%)135AD	60AD(95.4%)220AD	1884 \pm 22
PLD-5562	-30.51 \pm 0.19	1830 \pm 20	135AD(54.3%)200AD 205AD(13.9%)225AD	120AD(95.4%)240AD	1828 \pm 22
PLD-5563	-31.45 \pm 0.19	1945 \pm 20	25AD(68.2%)80AD	AD(87.2%)90AD 100AD(8.2%)130AD	1944 \pm 21
PLD-5564	-31.41 \pm 0.23	1850 \pm 20	125AD(45.0%)180AD 185AD(23.2%)215AD	80AD(5.5%)110AD 120AD(89.9%)240AD	1848 \pm 22

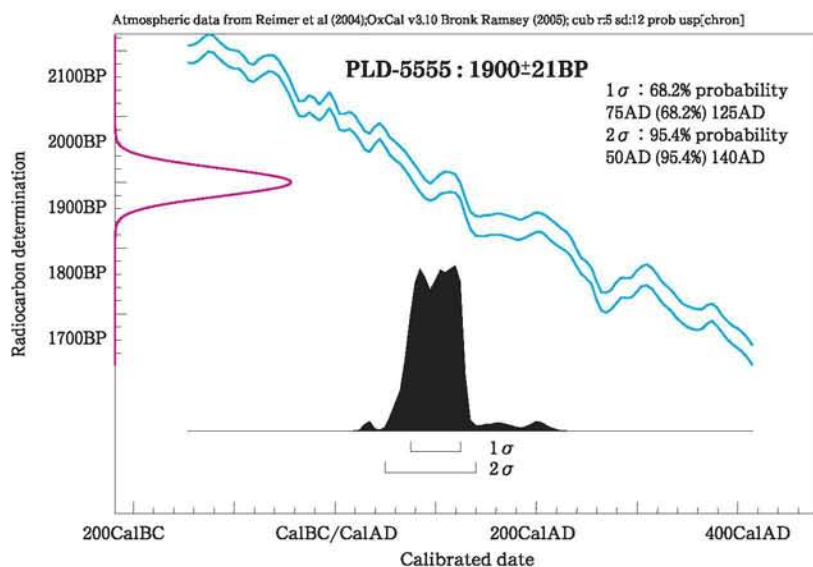


図1-① 暦年較正結果

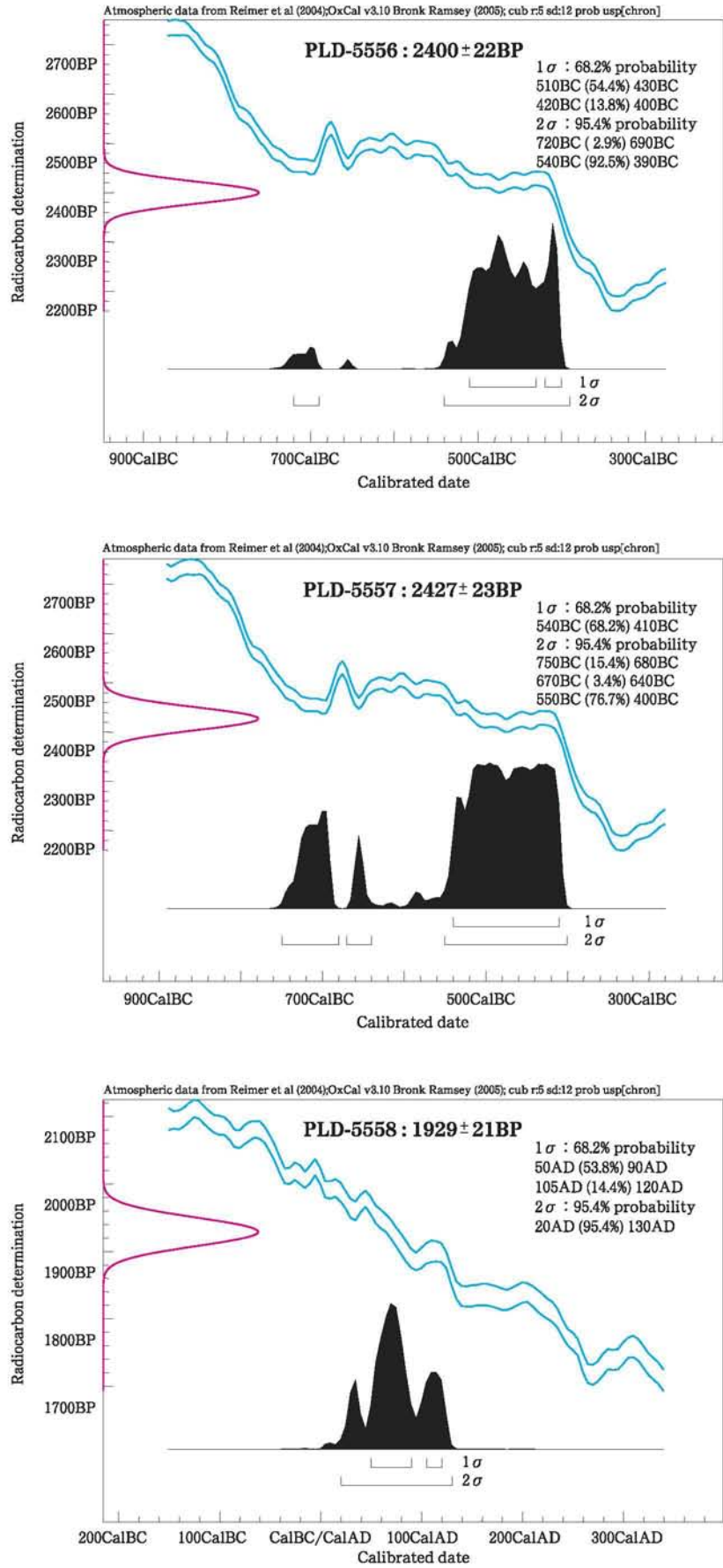


圖 1 - ② 曆年較正結果

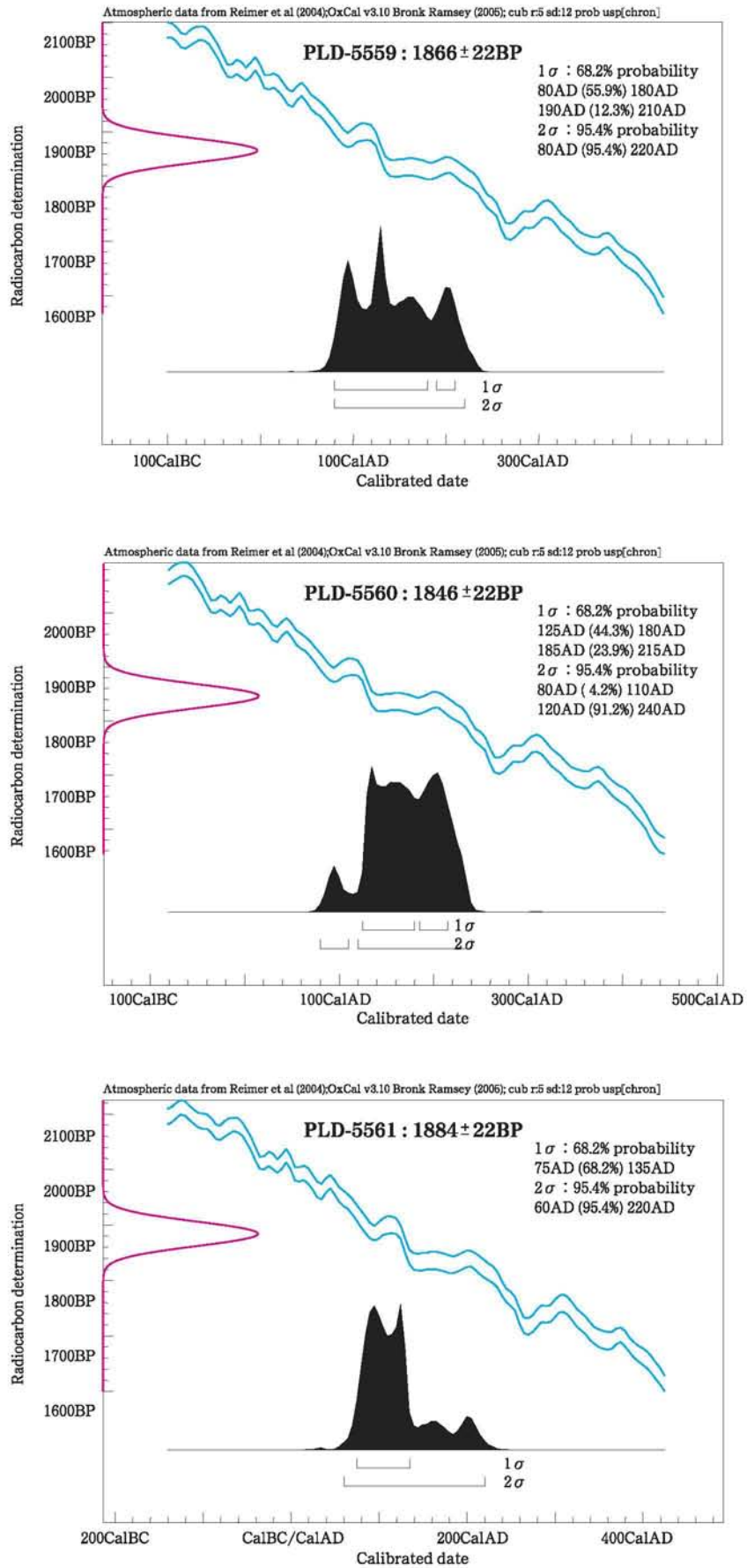


圖 1 - ③ 曆年較正結果

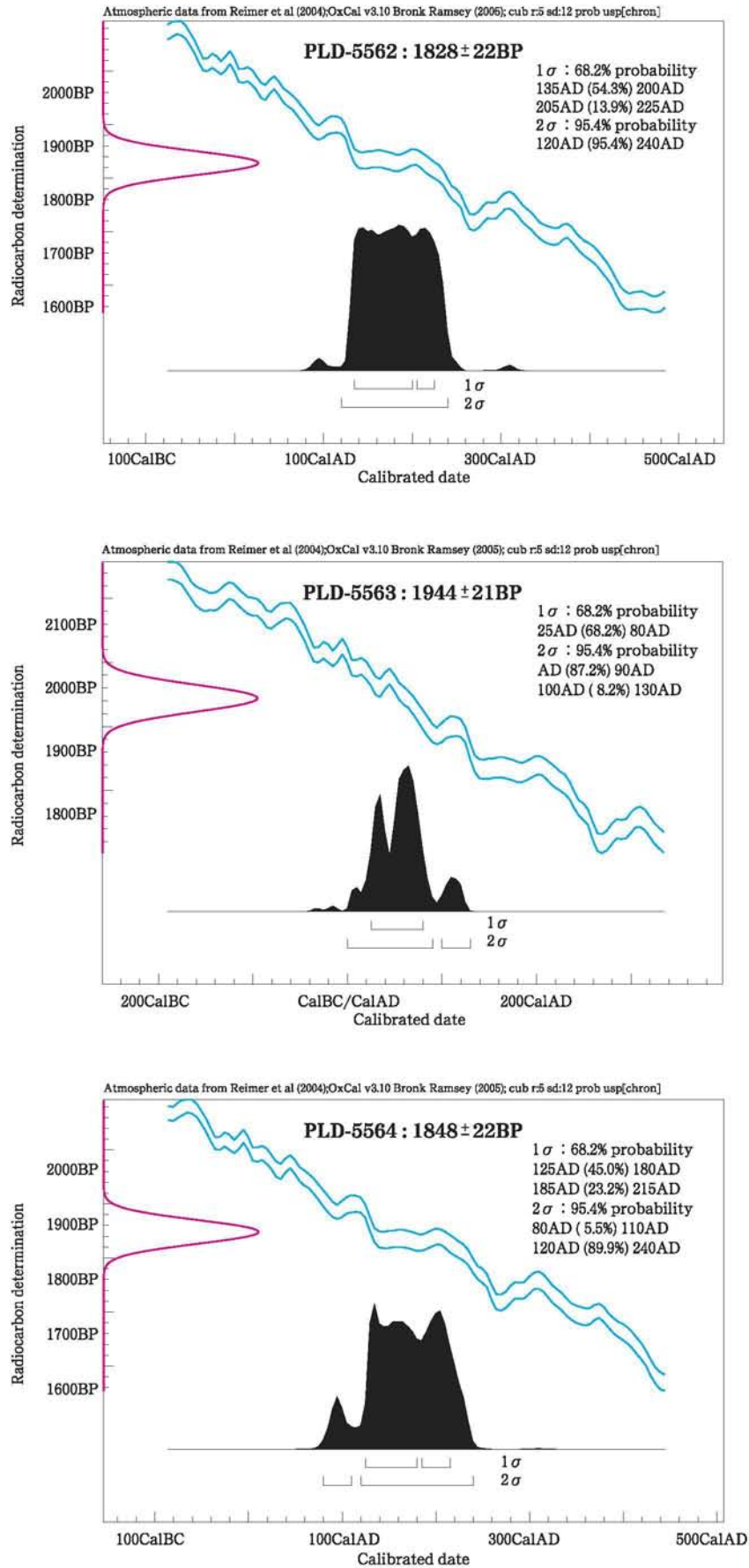


圖 1-④ 曆年較正結果

5. 第8次調査出土木材の樹種分析

1. 試料

当初樹種同定は、合計593点が対象とされていた。しかし、試料採取時の確認でリストにあるが、実際には点数が足りないもの、リストよりも多く遺物があるもの等があり、リスト通りの試料採取ができなかった。また、試料採取時に状態が悪いと判断されたものもあった。このことから、リストよりも多く遺物がある場合には現状を優先して、予定点数よりも多く試料を採取し、予備試料も含めて合計で指定点数より試料が多くなるようにした。最終的には、指定点数よりも5点多い598点について試料を採取した。内訳は、第8次第Ⅰ面の木器53点、木サンプル20点、第Ⅱ面の木器78点、木サンプル54点、第Ⅲ面の木器307点、木サンプル86点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1-5に記した。樹種同定用試料は、各木製品から木片を採取したが、完形の板材等については木片の採取が困難であったため直接切片を採取した。なお、第Ⅰ面木器No.12と第Ⅲ面木器No.23は炭化しており、生木部分での試料採取が不可能であったため、炭化した部分を試料とした。

2. 分析方法

木片については、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。各切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

炭化材は、乾燥させた後、3断面の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1-5に示す。保存状態が悪いために樹種の同定に至らない試料があった。それらの試料については、観察できた範囲での結果を記した。その他の木材は針葉樹9種類（マツ属複雑管束亜属・モミ属・スギ・ヒノキ・サワラ・ヒノキ科・マキ属・イヌガヤ・カヤ）、広葉樹44種類（ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ツブラジイ・スタジイ・ムクノキ・エノキ属・ケヤキ・ニレ属・クワ属・シキミ・クスノキ・タブノキ属・クスノキ科・ツバキ属・サカキ・ヒサカキ・ウツギ属・モモ・バクチノキ・サクラ属・カマツカ・バラ科ナシ亜科・ネムノキ・ユズリハ属・キハダ・ムクロジ・アワブキ属・モチノキ属・クストイゲ・ミズキ属・クマノミズキ類・ハリギリ・シャシャンボ・カキノキ属・タイミンタチバナ・ハイノキ属サワフタギ節・トネリコ属・チシャノキ・キリ・ガマズミ属・ツクバネウツギ近似種）とイネ科タケ亜科に同定された。

なお、紙面の都合から樹種同定の部分を削減するよう要望されたため、結果の一覧表と木材組織の記載は割愛した。また、写真図版は、1ページに4図版を縮小して掲載することとした。

4. 考察

(1) 弥生時代中期～古墳時代前期の木材利用

第Ⅲ面の試料が該当し、今回の分析試料中最も多い307点について同定を実施した。木製品は、柱や礎板が多く、他に平鋏、鋏の刃先、農耕具、槽、しゃもじ、脚、用途不明品（加工木製品、不明木製品、板材など）がある。表1～3に第Ⅲ面出土木器の遺構別・器種別種類構成を示す。

柱材と礎板には、針葉樹・広葉樹合わせて29種類が確認された。クリやシイノキ属を中心とした広葉樹材の利用が多くみられ、針葉樹の利用は少ない。このことは、第6次調査区の樹種同定結果とも調和的である。最も多くみられたクリは、重硬で強度や耐朽性に優れた材質を有する。クリ以外の樹種をみても比較的重硬で強度の高い種類が多く、柱材や礎板として強度の高い木材を選択していたことが推定される。これらの木材は、基本的には遺跡周辺に生育していた種類を利用した可能性があるが、栽培種のもも認められることから、周辺で栽培していた樹木も利用していたことが推定される。今回同定された種類の中には、クスドイゲが2点認められた。クスドイゲは、現在本州（近畿以西）・四国・九州・琉球の海岸近くの林内に生育する常緑低木であり、それほど大きくならないため、柱材として利用できたか疑問が残る。クスドイゲは、遺跡からの出土例も少ないため、現時点では過去の利用状況は不明であり、今後の資料蓄積が必要である。

木製品では、平鋏と鋏の刃先がいずれもアカガシ亜属であった。この結果は、第6次および第7次調査区の樹種同定結果とも調和的である。また、福岡市内でも板付遺跡など多くの遺跡で弥生時代から古墳時代にかけての鋏・鋤類について樹種同定が実施されているが、今回と同様にアカガシ亜属が多い結果が得られている（嶋倉, 1976a, 1976b, 1977, 1981; 松本・林, 1979a, 1979b; 林・松本, 1980）。アカガシ亜属は、一般に重硬で強度の高い材質を有することから、こうした材質面が利用の背景に考えられる。同じく強度に優れ、柱材などに多く認められるクリやシイノキ属が全く利用されていないことから、強度が高い樹種の中でもアカガシ亜属を特に選択していたことが推定される。

槽にはツバキ属が認められた。第7次調査区で出土した槽は全てクスノキであり、今回の結果とは異なる。ツバキ属は、重硬で強度が高く、クスノキに比較すると加工が困難であり、材質的にも大きく異なる。本遺跡では、材質の大きく異なる2種類が槽に利用されていたことになる。

(2) 古墳時代後期～奈良時代の木材利用

第Ⅱ面の試料が該当し、木製品78点について樹種同定を実施した。木製品は、建築材、柱、礎板、鋏、下駄の歯、斉串、曲物等があるが、用途不明の製品も多い。表3に第Ⅱ面木器の器種別種類構成を示す。

合計で22種類が認められ、全体的には広葉樹材の利用が多いが、スギ、ヒノキ、サワラなど、針葉樹類の占める割合が第Ⅲ面よりも高くなる傾向がある。このことは、第6次および第7次調査区の結果とも調和的である。針葉樹類の利用が多くなる背景には、曲物等割裂性を利用して加工する製品が出土するようになり、割裂性が高い針葉樹類が利用されるようになったことを反映していると考えられる。

針葉樹が利用される製品を除くと、鋏類のアカガシ亜属、建築材（建築材・柱・礎板）のアカガシ亜属、クリ、シイノキ属など、第Ⅲ面と似た木材利用が認められる。

(3) 中世の木材利用

第Ⅰ面の試料が該当し、木製品53点について樹種同定を実施した。木製品は、建築部材、桶の底、曲物、漆器碗、しゃもじ、箸、下駄等がある。このうち、下駄の中には月星のマークが入ったゴム紐の鼻緒のものもあり、現代に近い遺物も含まれていると考えられる。表4に第Ⅰ面木器の器種別種類構成を示す。全体ではスギとヒノキ科を中心とした針葉樹が多くを占めており、広葉樹の利用は少ない。

曲物や桶の底板など板状の加工を施す製品にスギやヒノキ科が多い結果は、2層の花粉分析結果とも調和的であり、引き続き同様の木材利用が行われていたことが推定される。下駄は、一木で台と歯をつくる連歯下駄と台に別材から作った歯を差し込む差歯下駄の2種類がある。また、連歯下駄のうち、No.14-3はすり減った歯に別材で制作した歯を継ぎ足している。下駄にスギやヒノキ科が多い結果は、第7次調査区の結果とも調和的である。スギやヒノキは、中世から近世にかけての下駄材として最もよく利用されている種類であり、多くの報告例が知られている（能城・高橋, 1996）。

漆器では、碗がケヤキ、破片？が樹皮であった。ケヤキの漆器碗は第7次調査区でも出土している。ケヤキは、民俗事例でも碗・皿の素材として利用される種類である（橋本, 1979）。一方、樹皮は、

通常木材を加工する際に外される部分であり、樹皮付きの木材が漆製品に加工された可能性は低い。そのため、漆製品の破片については、樹皮製品に漆が塗布された可能性がある。

(4) 古植生について

本遺跡からは自然木も多数出土している。これらは木サンプルとして一括されているが、木サンプル中には杭材も多く含まれている。杭材も基本的には遺跡周辺で入手可能な木材が利用された可能性があり、古植生を反映していることが推定される。したがって、本報告では、自然木と杭材とを合わせて古植生に関する検討を行う。なお、木器試料中にも杭材が認められたため、集計にあたっては木器の杭材試料も含めた。表5に自然木・杭材の層別別種類構成を示す。

樹種同定を行った自然木・杭材は、第Ⅰ面が21点、第Ⅱ面が70点、第Ⅲ面が121点である。第Ⅲ面ではクヌギ節を中心に23種類が確認された。全て広葉樹であり、針葉樹は認められない。基本的には第6次および第7次調査区の自然木・杭材で確認された種類と調和的である。ツブラジイ、スタジイ、タブノキ属、アカガシ亜属は暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）を構成する種類である。その他の種類にも照葉樹林中に生育する種類が多く含まれている。一方、クヌギ節やコナラ節は、森林伐採後の二次林を構成する種類であり、クリやヤマグワ等も二次林内に生育する。遺跡の立地を考慮すれば、周囲の台地上等には常緑広葉樹を中心とした植生やクヌギ節やコナラ節等で構成される二次林が見られたことが推定される。一方、比較的多く見られたヤナギ属には河畔など水分の多い土地にも生育する条件の良い場所に生育する種類が含まれていることから、周囲の低地等に生育していたことが推定される。

第Ⅱ面は、22種類が確認され、スタジイやサカキが多い。基本的には第Ⅲ面と同様の植生が推定される。なお、第7次調査区では第Ⅱ面で針葉樹の複雑管束亜属が多くなる傾向が認められたが、今回の試料では1点も認められなかった。

第Ⅰ面では、試料数が少ない上に、全て杭材である。確認された種類が遺跡周辺で入手できたことが推定される。

参考文献

- 松本 昴・林 弘也、1979a、門田遺跡谷地区出土の木材片の樹種名について。「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第11集 春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡谷地区の調査」、福岡県教育委員会、159-161。
- 松本 昴・林 弘也、1979b、辻田遺跡から出土した木材試料の樹種同定について。「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第12集 春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査」、福岡県教育委員会、144-155。
- 南木 睦彦、1991、栽培植物、古墳時代の研究 4 生産と流通Ⅰ、石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編、雄山閣、165-174。
- 南木 睦彦・中川 治美、2000、大型植物遺体、琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書3-2 粟津湖底遺跡 自然流路（粟津湖底遺跡Ⅲ）、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会、49-112。
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志、2000、日本植物種子図鑑、東北大学出版会、642p。
- 能城 修一・高橋 敦、1996、中・近世における木材利用。第11回植生史学会シンポジウム「中世・近世の植生史」発表要旨、7-11。
- 嶋倉 巳三郎、1976a、木材の材質。「福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 板付 一市営住宅建設にともなう発掘調査報告書1971-1974-」、福岡市教育委員会、67-75。
- 嶋倉 巳三郎、1976b、福岡市鶴町遺跡出土木質遺物の材質調査報告、「福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 福岡市西区大字免 鶴町遺跡」、福岡市教育委員会、63-68。
- 嶋倉 巳三郎、1977、福岡市板付遺跡H-5地点から出土した木質品の樹種について。「福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集 板付周辺遺跡調査報告書(4)」、福岡市教育委員会、111-114。
- 嶋倉 巳三郎、1981、樹種の鑑定。「福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集 福岡市博多区 那珂深ヲサ遺跡Ⅰ」、福岡市教育委員会、67-70。

表2 第8次第Ⅲ面木製品の種類構成

器種	樹種	複維管束属	モミ属	スギ	カヤ	クスギ節	コナラ節	アカガシ属	クリ	ツブラジイ	スダジイ	ムクノキ	クワ属	クスノキ	タブノキ属	クスノキ科	ツバキ属	サカキ	ヒサカキ	シキミ	サクラ属	カマツカ	ムクロジ	モチノキ属	アワブキ属	シャシャンボ	ハリギリ	キリ	種類不明	合計
建築材					2			1		2	1											1							8	
平鋸								1																					1	
鋸の刃先								1																					1	
農耕具			1					2																					3	
農耕具の柄								1																					1	
不明農耕具								1																					1	
槽									1								1												1	
しゃもじ									1																				1	
脚									1																				1	
木器未製品										1																			1	
矢板																							1						2	
板材			2					1	2						1	1											1		7	
杭						10		4	1	3		2	1			2	1	3	2	2				2	1				35	
杭か建築材									1																				1	
薄い板材								1																					1	
加工板材								1							1								1			1			4	
棒状加工品			1																										1	
方柱状の角材			1															1											2	
不明木材				1																									2	
不明木製品			1					6																					7	
加工木製品								1																					1	
加工木片		1																										1	2	
加工品																		1											1	
木製品			1																										1	
不明							3	1	1		1																	1	9	
合計		1	1	6	1	16	1	22	7	5	3	2	1	1	1	3	2	5	2	2	2	1	1	1	3	1	1	1	95	

表3 第8次第Ⅱ面木製品の器種別種類構成

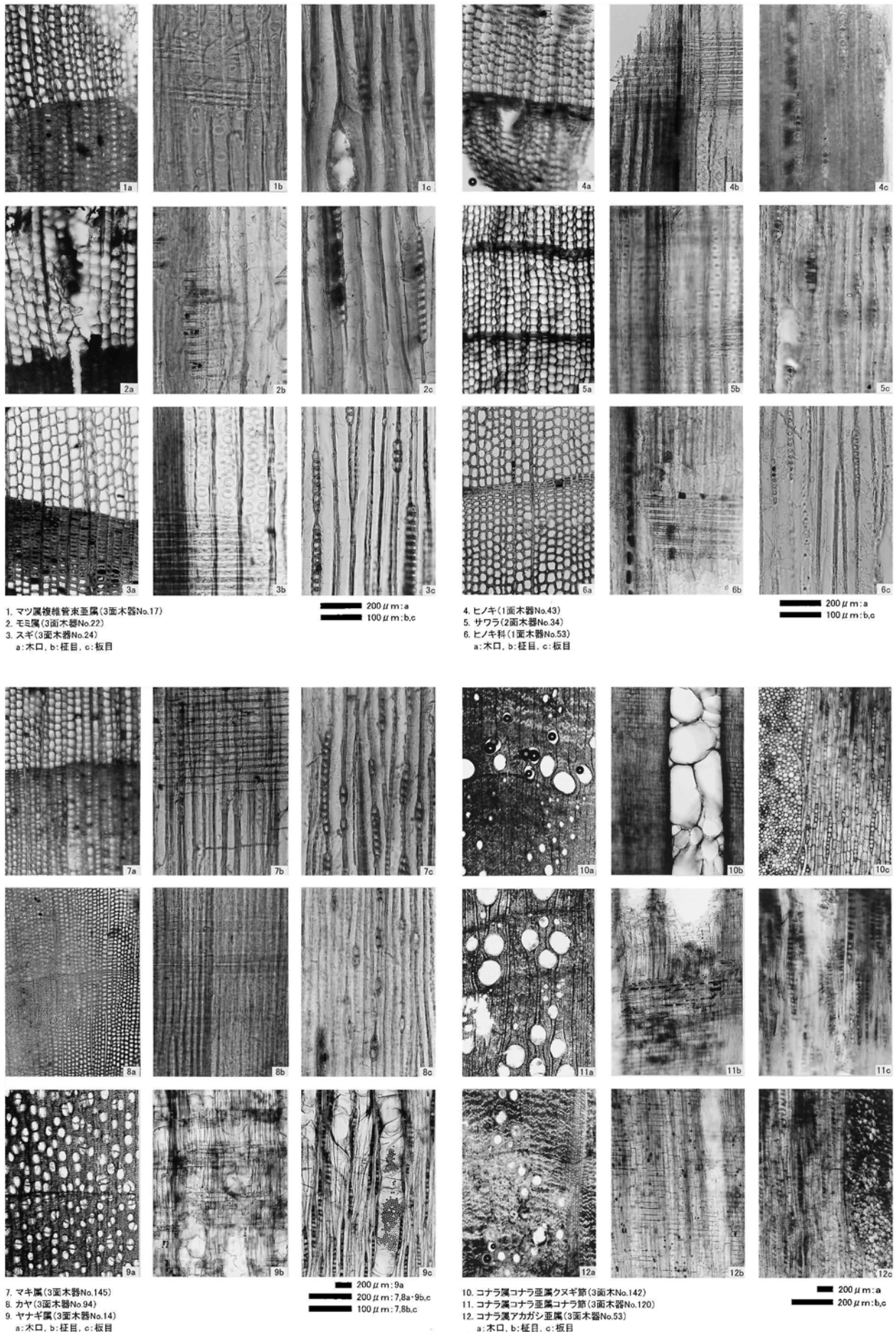
器種	樹種																			合計						
	スギ	ヒノキ	サワラ	ヒノキ科	イヌガヤ	クヌギ節	コナラ節	アカガシ亜属	クリ	ツブラジイ	スダジイ	ケヤキ	クスノキ	クスノキ科	シキミ	ツバキ属	サカキ	ウツギ属	カマツカ		アワブキ属	ガマズミ属	タケ亜科	種類不明	樹皮	
建築材									1	1										1	1					4
柱							1		1																	2
礎板						1				1																2
杭					1		1			2	5		1	1	2			1					2			16
矢板										1																1
鍬ほぞ穴								1																		1
ニ又鍬								1																		1
下駄の歯			1																							1
斎串		1																								1
祭祀具																	1									1
曲物底板	1																									1
曲物側板	1	1																								2
曲物蓋				2																						2
曲物枠				1																						1
曲物	1	1																								2
木製品	1																									1
木片	1	1		1				1															1			5
割材								1																		1
桜皮																									1	1
板切れ			1	1																						2
板材	4			1							1			1												7
角材										1																1
加工板材	1		1	1					1																	4
加工材		1																								1
加工木材										3	1															4
加工木片	2		1	1				1			1	1					1									8
不明木製品								1					1													2
不明								1							1				1							3
合計	12	5	4	8	1	1	1	8	2	8	10	1	2	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	78

表5 自然木・杭の層別種類構成

樹種	1面	2面	3面
マツ属	10		
イヌガヤ		1	
ヤナギ属			14
コナラ属		1	36
コナラ属		1	3
コナラ属	3	2	10
コナラ属		1	7
ツブラジイ		4	7
スダジイ	2	14	5
ムクノキ			2
ニレ属			2
クワ属			1
クスノキ		1	
クスノキ科	2	3	5
シキミ		5	4
ツバキ属	1	3	2
サカキ		10	5
ヒサカキ			2
ウツギ属		1	
サクラ属			1
バラ科		1	
ナシ科			1
ネムノキ			
ユズリハ属	1		
ムクロジ		2	
モチノキ属		1	1
アワブキ属		6	7
タイミンタチバナ		2	
クマノミズキ類			
シヤンボ	1	2	1
カキノキ属			1
ハイノキ属		1	
サワフタギ節	1	1	1
トネリコ属			
チシャノキ			
ガマズミ属		2	
ツクバネウツギ属			1
近似種			
広葉樹 (環孔材)		5	2
合計	21	70	121

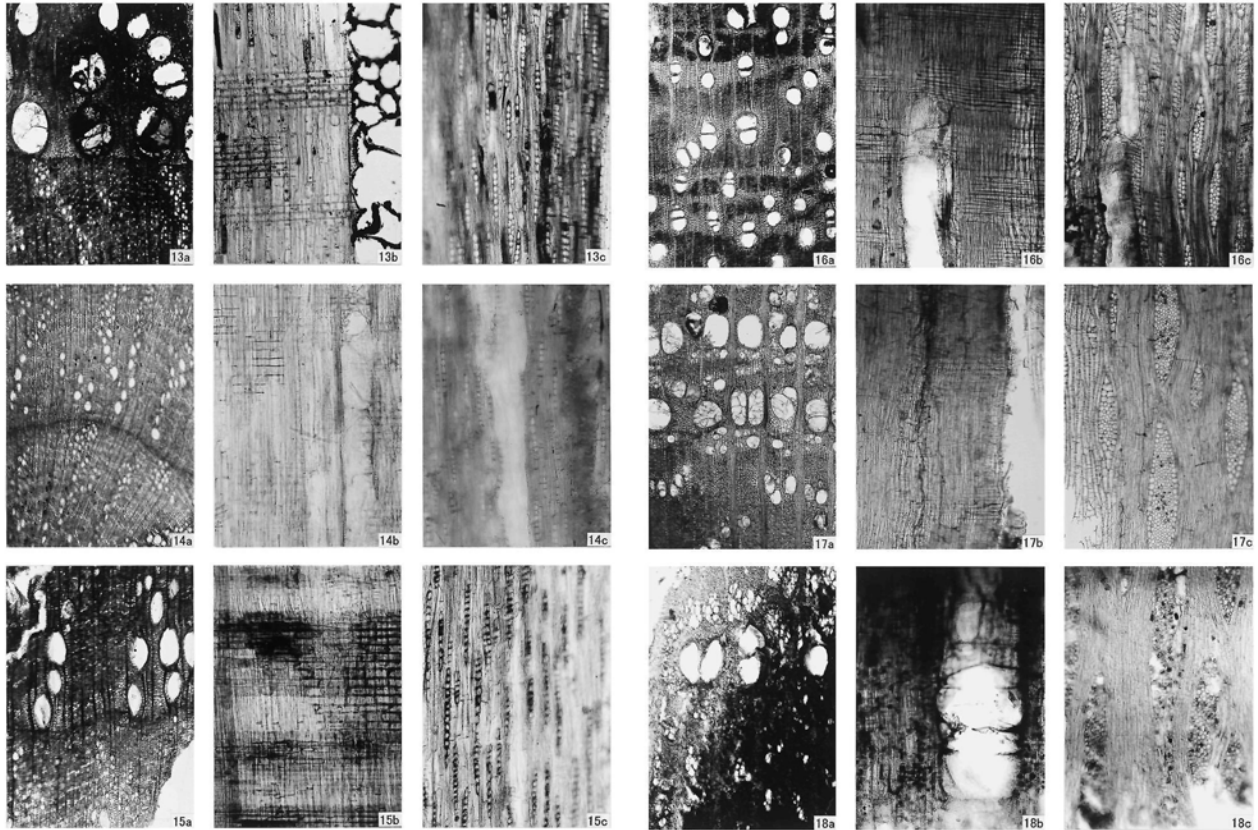
表4 第8次第I面木製品の器種別種類構成

器種	樹種	複維管束亜属	スギ	ヒノキ	ヒノキ科	針葉樹	アカガシ亜属	ツブラジイ	スダジイ	ケヤキ	シキミ	サクラ属	トネリコ属	広葉樹	樹皮	合計
建築部材		1	1													2
杭		1														1
桶の底?			1													1
曲物側板				1												1
曲物底板		1			2											3
漆器碗									1							1
漆製品の破片?															1	1
しゃもじ								1								1
箸			1		2											3
角材			1													1
下駄			5		5								1			12
下駄歯				1	2											3
差歯下駄の台					1											1
差歯下駄の歯				1	1											2
檜											1					1
玩具														1		1
板材			9	1	2	1										13
部材			1													1
棒・下駄									1							1
棒状木製品			1													1
木製品																1
合計		2	21	4	15	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	53



※木器番号は本報告の遺物番号に一致しない

図版1 出土材・木材組織光学顕微鏡写真(1~12)

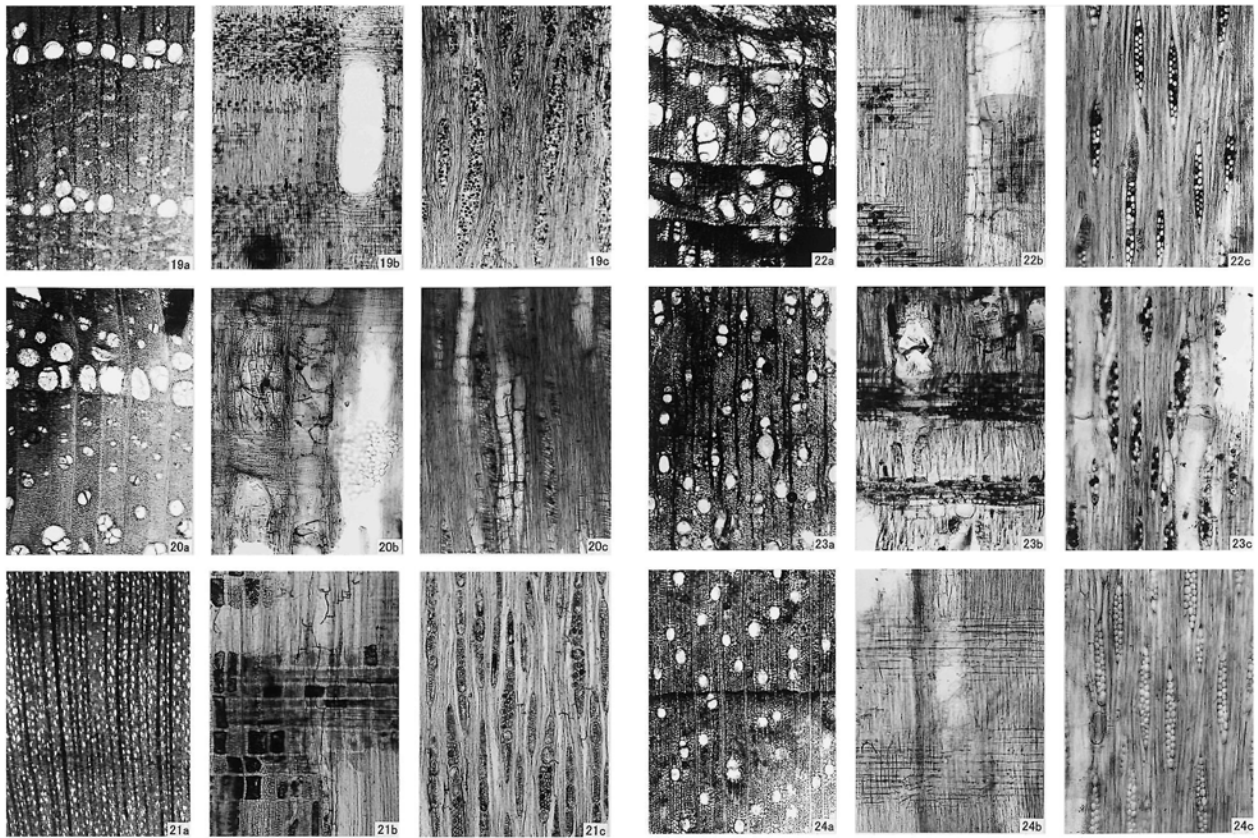


13. クリ(3面木器No.119)
14. ツブラジイ(3面木器No.15)
15. スタジイ(3面木器No.121)
a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μm: a
200 μm: b,c

16. ムクノキ(3面木器No.92)
17. エノキ属(3面木器No.182)
18. ケヤキ(2面木器No.55)
a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μm: a
200 μm: b,c



19. ニレ属(3面木器No.51)
20. クワ属(3面木器No.83)
21. シキミ(3面木器No.13)
a: 木口, b: 柎目, c: 板目

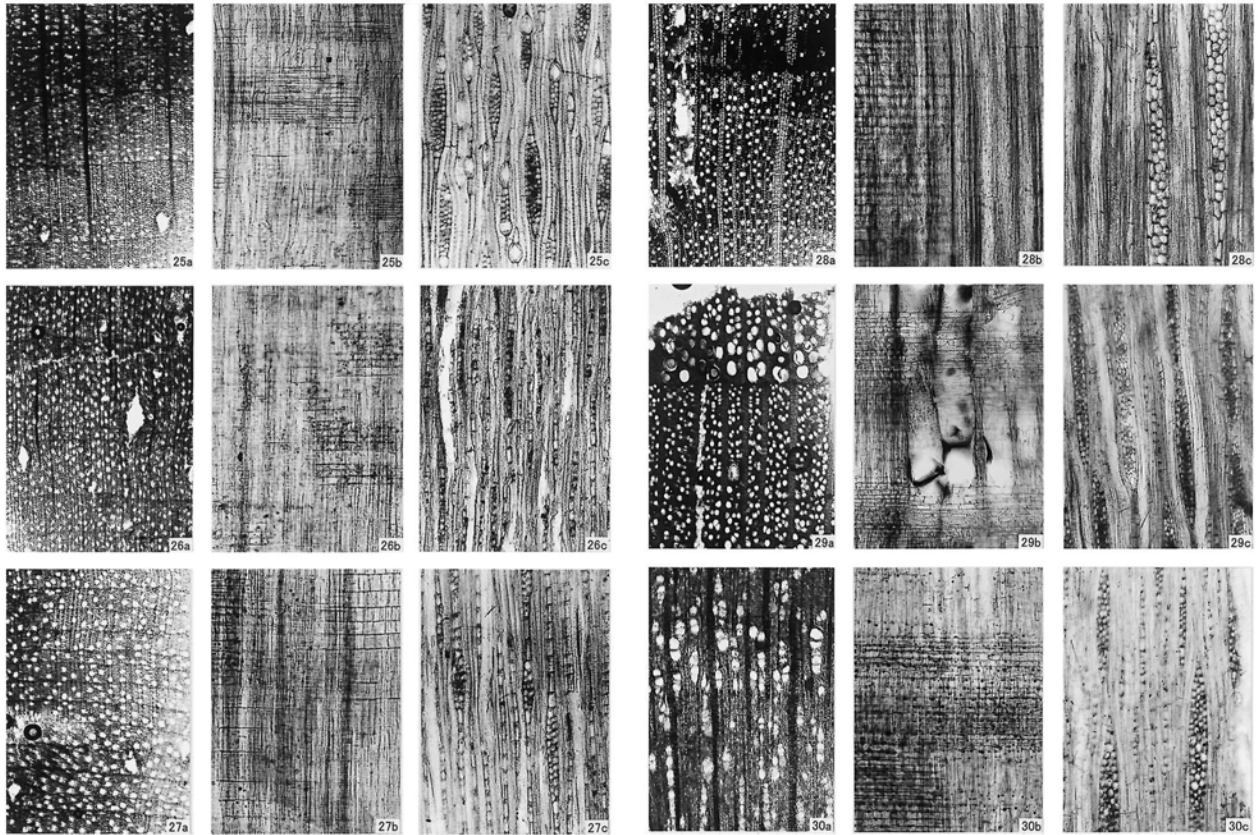
200 μm: a
200 μm: b,c

22. クスノキ(3面木器No.104)
23. タブノキ属(3面木器No.21)
24. クスノキ科(3面木器No.117)
a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μm: a
200 μm: b,c

※木器番号は本報告の遺物番号に一致しない

図版2 出土材・木材組織光学顕微鏡写真(13~24)

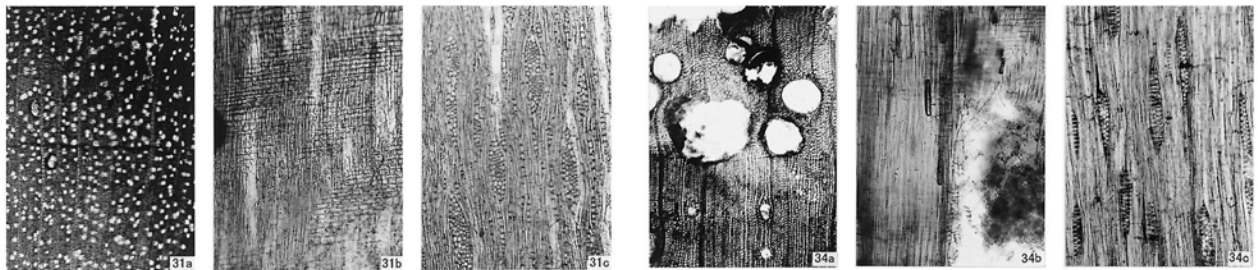


25. ツバキ属(3面木器No.72)
26. サカキ(3面木器No.82)
27. ヒサカキ(3面木器No.78)
a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200 μm: a
200 μm: b,c

28. ウツギ属(2面木器No.11)
29. モモ(3面木器No.230)
30. バクチノキ(3面木器No.265)
a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200 μm: a
200 μm: b,c

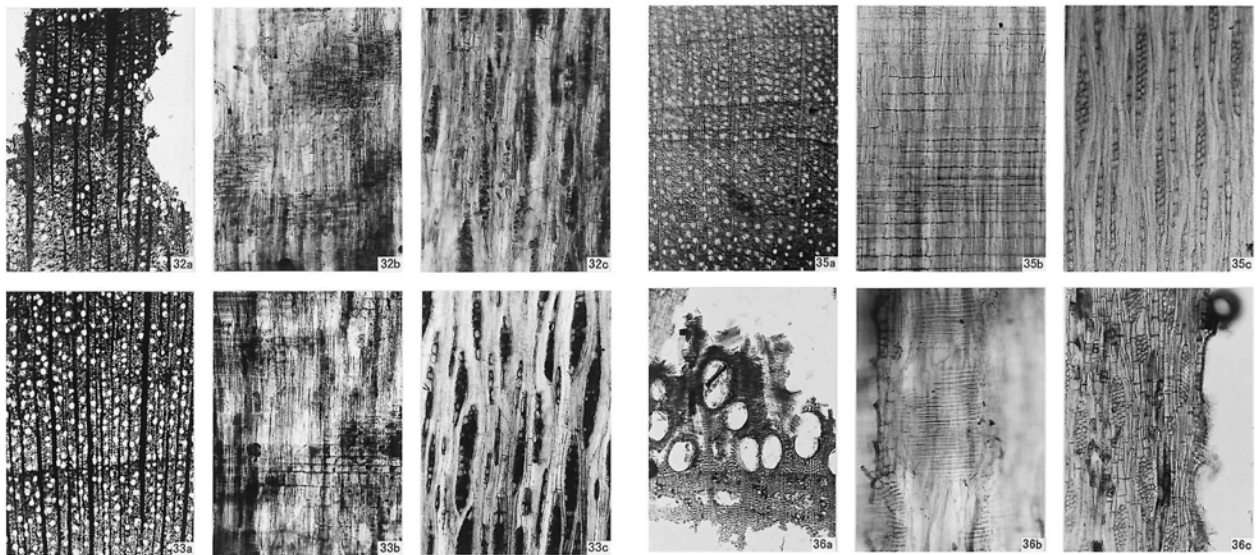


31. サクラ属(3面木No.129)
32. カマツカ(3面木器No.8)
33. ハラ科ナン亜科(2面木No.29-5)
a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200 μm: a
200 μm: b,c

34. ネムノキ(3面木器No.103)
35. ユズリハ属(1面木No.3)
36. キハダ(3面木器No.259)
a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200 μm: a
200 μm: b,c



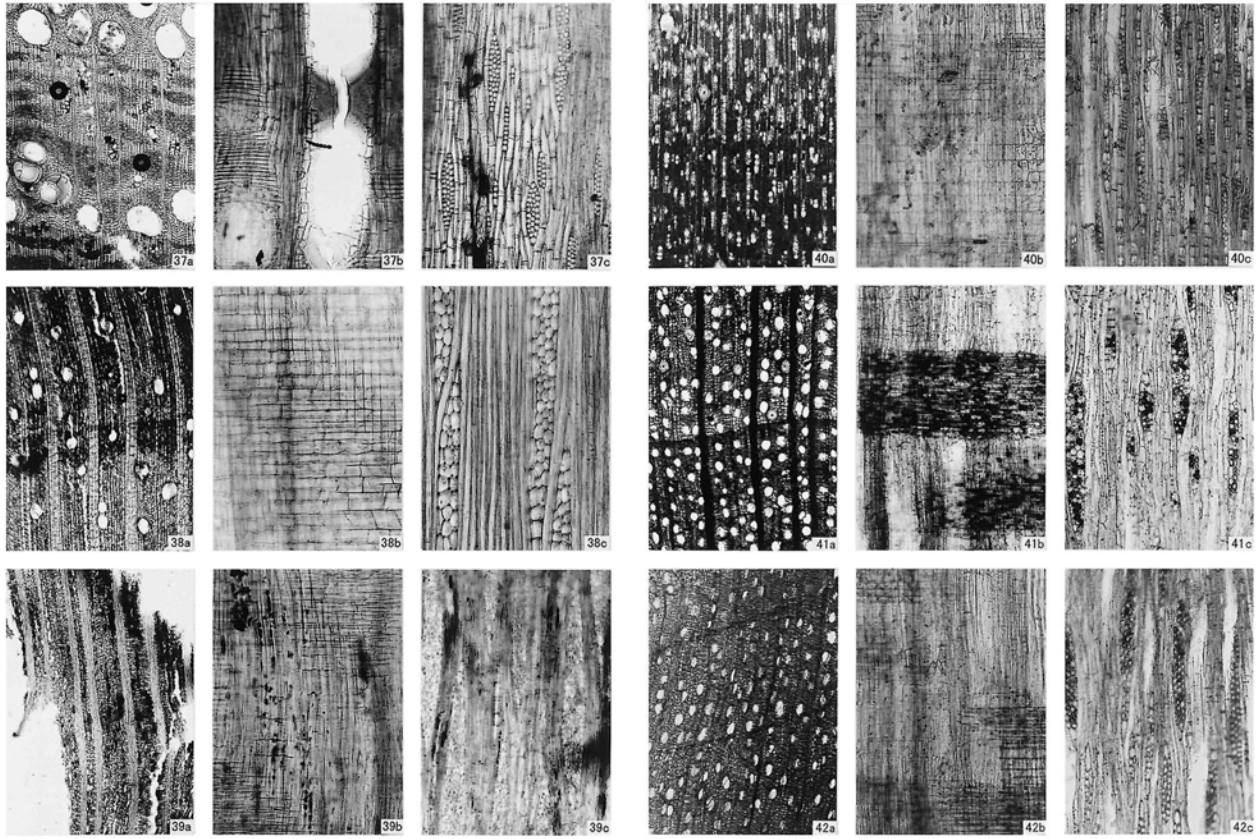
31. サクラ属(3面木No.129)
32. カマツカ(3面木器No.8)
33. ハラ科ナン亜科(2面木No.29-5)
a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200 μm: a
200 μm: b,c

34. ネムノキ(3面木器No.103)
35. ユズリハ属(1面木No.3)
36. キハダ(3面木器No.259)
a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200 μm: a
200 μm: b,c

※木器番号は本報告の遺物番号に一致しない

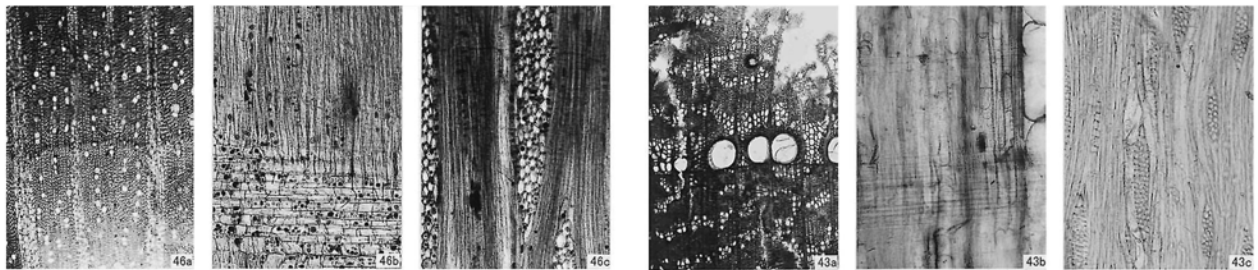


37. ムクロジ(3面木器No.87)
38. アワブキ属(3面木器No.118)
39. モチノキ属(3面木器No.50)
a:木口, b:径目, c:板目

200 μm: a
200 μm: b,c

40. クスドイゲ(3面木器No.275)
41. ミズキ属(3面木器No.10)
42. クマノミズキ類(1面木No.1-1)
a:木口, b:径目, c:板目

200 μm: a
200 μm: b,c

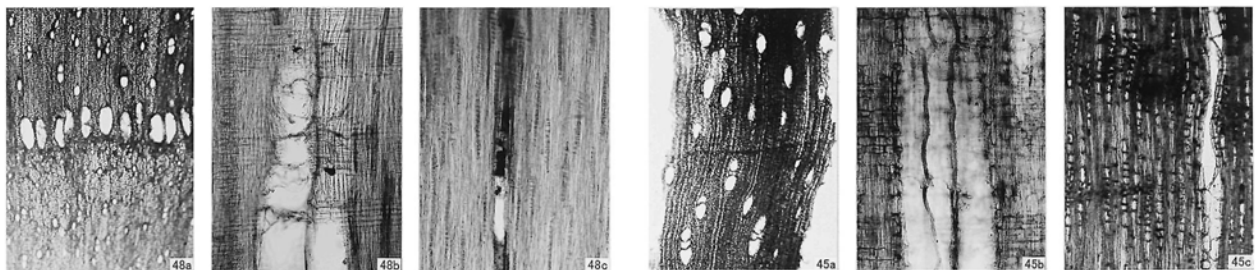


46. タイミンタチバナ(2面木No.23)
47. ハイノキ属サワタギ節(2面木No.29-2)
48. トネリコ(1面木No.1-3)
a:木口, b:径目, c:板目

200 μm: a
200 μm: b,c

43. ハリギリ(3面木器No.167)
44. シヤンパンボ(3面木器No.75)
45. カキノキ属(3面木No.60)
a:木口, b:径目, c:板目

200 μm: a
200 μm: b,c



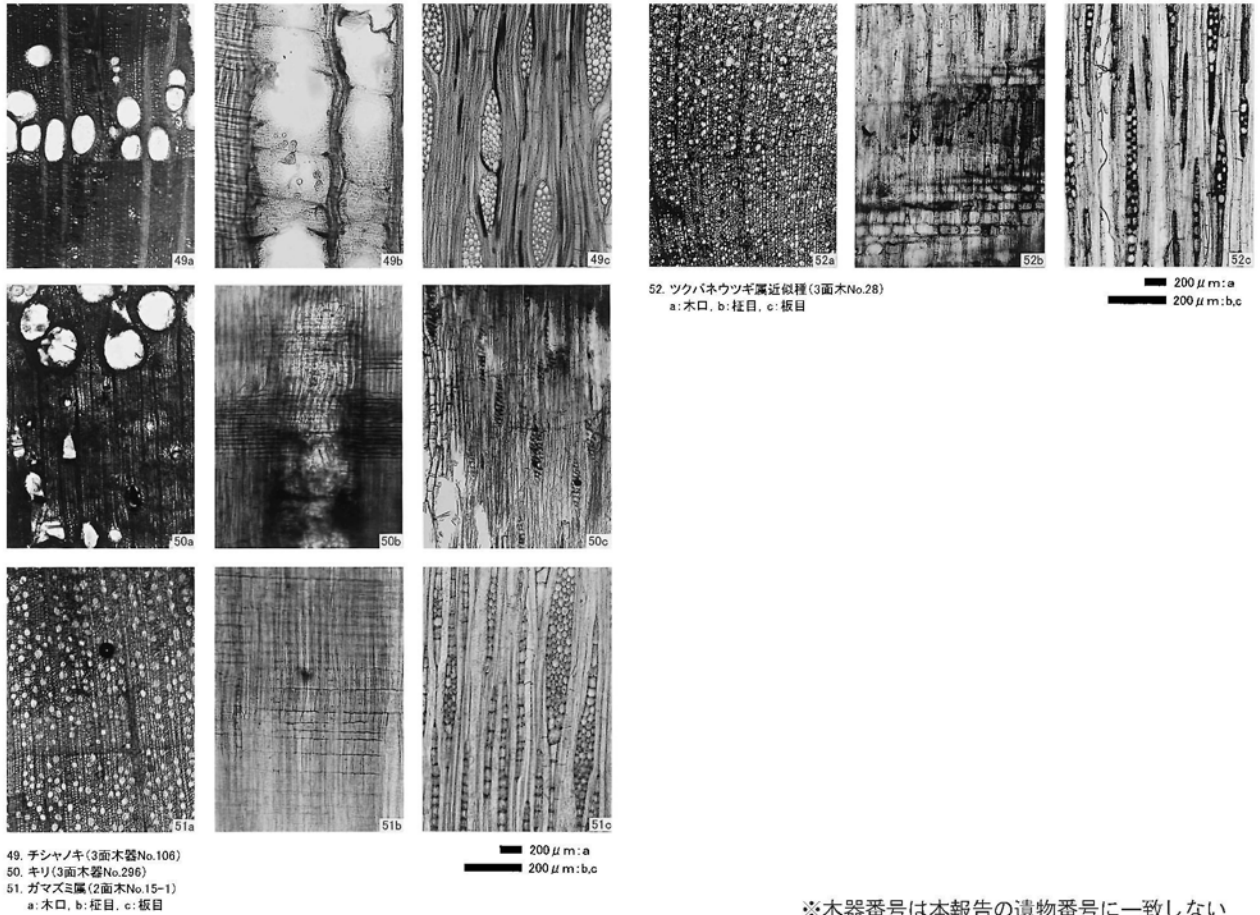
46. タイミンタチバナ(2面木No.23)
47. ハイノキ属サワタギ節(2面木No.29-2)
48. トネリコ(1面木No.1-3)
a:木口, b:径目, c:板目

200 μm: a
200 μm: b,c

43. ハリギリ(3面木器No.167)
44. シヤンパンボ(3面木器No.75)
45. カキノキ属(3面木No.60)
a:木口, b:径目, c:板目

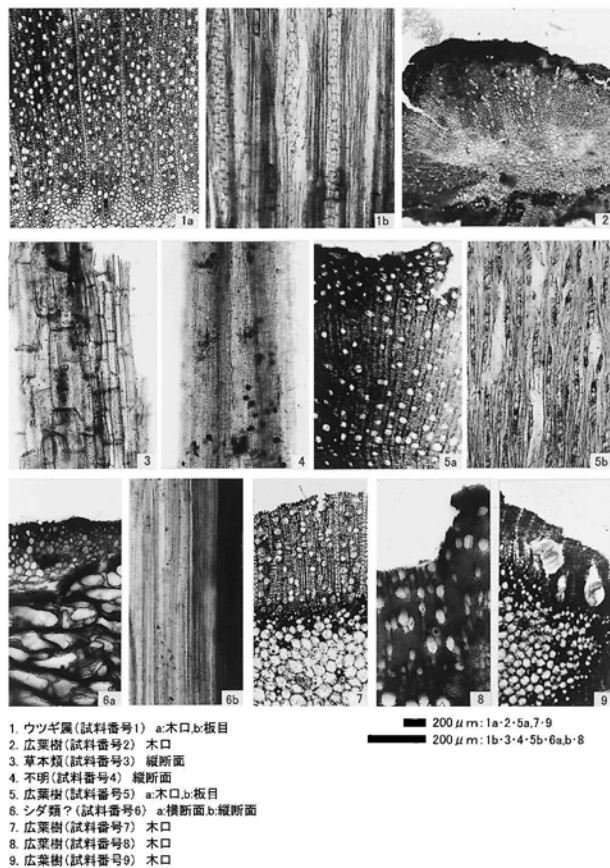
200 μm: a
200 μm: b,c

※木器番号は本報告の遺物番号に一致しない



※木器番号は本報告の遺物番号に一致しない

図版5 出土材・木材組織光学顕微鏡写真(49~52)



図版6 植物遺体光学顕微鏡写真

第Ⅶ章 総括

1. 下月隈C遺跡を中心にして条里・河川について考える

日野尚志

はじめに

筑前国席田郡について若干述べた^①ことがある。『倭名類聚抄』によれば、石田・大国・新居の3郷からなる小郡で、他の筑前国14郡には小郡は存在していなかった。この郷数が9世紀中頃の史料によって作成されたものであったとしても奈良時代と同じであったか否かは別問題である。しかし、奈良時代に関する席田郡の史料は存在しない。同じ郡名が美濃国にあって、『続日本記』靈龜元年(715)7月27日条に「尾張国外從八位上席田君邇近及新羅人七十四家。貫₂于美濃国₁。始建₂席田郡₁焉。」とあり、715年に成立した事が判明するが、その位置から本巢郡から分離独立した可能性が強い。『倭名類聚抄』によれば、4郷からなる下郡で、筑前国席田郡と類似しているといえよう。

筑前国席田郡も美濃国席田郡と同様ではなかったと推測されるが明確でない。それは隣接する粕屋郡から「加麻又郡」と記された墨書土器^②が出土し、出土地点近くに蒲田の遺称地があるので、この加麻又郡が消滅した時に郡の再編があって席田郡が誕生した可能性もあるからである。

その席田郡は中世でも史料に乏しいが、小郡であったために時代が進むにつれて郡域が蚕食された可能性が強く、古代の郡域を明確にするには至っていない。

下月隈C遺跡では出土遺物から9世紀に施行されたと想定される条里地割も検出されていることに注目したい。それは仁明天皇の皇女高子内親王家領があって、9世紀後半観世音寺の寺田との間に土地争いがあり、その位置を想定し、また、そこがどのような景観であったかを検討することによって条里、土地争いの要因、河川流路跡などの問題にアプローチすることが可能ではないかと考えたからである。

1 席田群の図と里の比定について

席田郡の条里地割はかつて述べた^③ように那珂・席田・粕屋(郡の一部)、御笠(郡の一部)4郡にわたって一町方格の地割が連続し、同一の規格のもとに施行されたことが判明している。また、里界線も郡境で異なることがない。さらに六町間隔の里界線が郡境と無関係に連続していることがわかる。

このような状況から考えて、図と里の呼称制度も4郡で統一されていたのではないかと考えられるが、五畿七道諸国をみても郡を単位にしている事例が圧倒的に多いことを考慮すると図と里の比定には慎重に対処すべきであろう。なお、筑前国には条の代わりに図を使用する。類例は紀伊国のみである。これは各郡の各条ごとに1巻(1図1巻という)を作成したので、図を使用したのであろう。

前途^④したように那珂郡には3図6里の史料が唯一あるのみで、水城以北の御笠郡には史料が存在しない。粕屋郡では施行単位の異なる地割が多々良川下流域の兩岸、その支流の金出川流域と須恵川以西の席田郡に接する3地域に分布する。幸い条里関係の古文書が存在し、金出川流域を除く2地域の図と里の復原が可能であるが断案とはいきれない。

席田郡に連続する粕屋郡では坪並の原則からすれば、条は西から東へ、里は北から南へと数え進まなければならないが、著者の想定した図と里の比定では坪並の原則と一致しない。この比定も一つの想定にすぎないが、同一の条里区に属する粕屋郡須恵川流域の条里地割が席田郡境から東へ図、北から南へ里を数え進むと考えられることから、席田郡も同様であった可能性が強い。そうであれば席田郡でも坪並の原則と一致しないことになる。

古代の席田郡域がどの範囲であったか明らかでない。著者はかつて席田郡域を想定^⑤したことがあるが、再考して条里地割の北限である箱崎付近と考え、西限は山陽道の大路まで、南限は御笠森までであったと考えたい。その場合、考えておかなければならない事がある。それは史料にみえる「6図

8里27坪1反」の「8里」は「同里」の誤りと判断して考慮を進めたい。その理由は条里地割の分布から、東西方向に8里を数えることは不可能であること、反対に東西方向に6図（1図と6図は東西方向に1町強しか存在しない）を数えることが殆ど不可能であるからである。以上の条件をつけて図と里を考えてみたい。

坪並は第1図に示したように上臼井の小字「佐ノ坪」・「市ノ町」、青木の小字「先八ノ坪」・「九ノ坪」、東光寺の小字「サノ坪」の位置から西北隅を1ノ坪、西南隅を36ノ坪とする連続式であることが判明する。坪付小字名は他に若干存在するが必ずしも本来の位置にあるとは限らない。

条(図)に関する小字名は存在しない。里に関する小字名としては比恵の小字に「一里山」があるが、ここに「山」があったとは考えにくい。御笠川下流域左岸に沿うことから、土砂の推積した微高地であったことは間違いない。しかし、条里地割は認められない。著者が考えるように山陽道の大路までを席田郡とすると「一里山」は2里に属するが、第1図からも判明するように西北端近くは1里と2里の里界線の延長線に接する。一方、この「一里山」を1里の遺称地として山陽道から以西の1町強のはみ出しを無視して里を数え進むと4里が丘陵地になり、耕地のない丘陵地で9世紀に土地争いがあったとは考えにくいので、山陽道の大路から里を数え進んだと判断したい。ただし、1里は若干存在していたとみるべきであろう。図は地割の北限から南に1図・2図と数え進んだと判断したい。以上、条件づきで図と里を比定したのが第1図である。

次に席田郡に関する条里関係の古文書^④について述べておきたい。貞観9年(867)3月26日条の古文書を始めとして、同年10月12日条、同年閏12月25日条、貞観11年(869)10月15日条の古文書があり、土地争いになった地点が図・里・坪で記されている。

これらの古文書で注目しておきたいのは延暦11年(792)3月13日観世音寺に施入された寺田が国郡図帳に寺田と記入されていたこと、また、承和14年(847)に「校田図帳目録」さらに「検席田郡仁寿2年(852)班田帳」とあり、少なくとも869年までは席田郡に田図・校田図・班田図があったことに留意したい。

多数の古文書にみえる図・里・坪を図ごとに整理しておきたい。

3図3里13坪

4図2里31坪 4図3里5坪・21坪・5坪(15坪のミスか)16坪・19坪

5図3里23坪・27坪 5図4里14坪・15坪・22坪・24坪

6図3里28坪・29坪・30坪・34坪

6図4里18坪・19坪・27坪・28坪・29坪・30坪・34坪

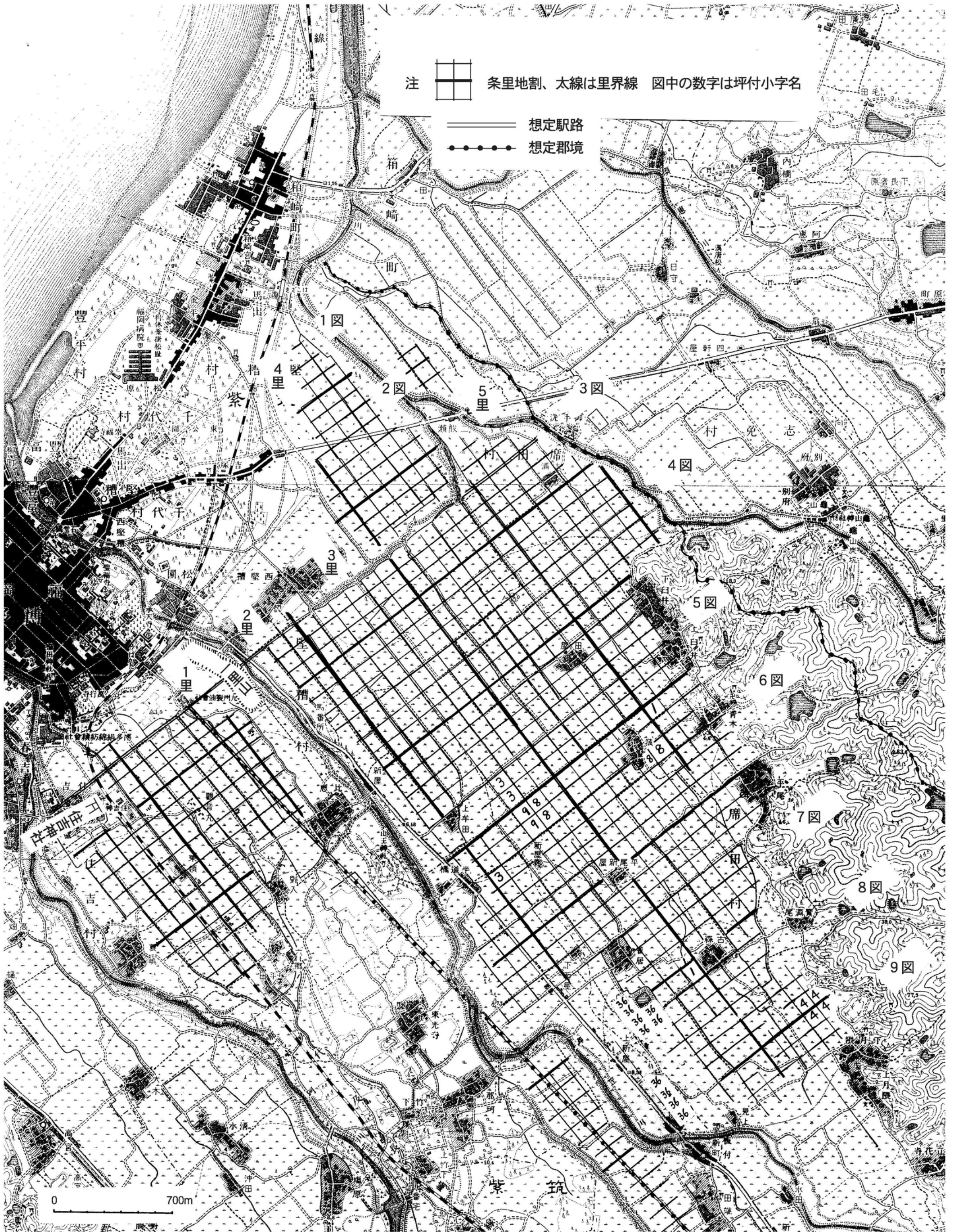
これらのことから図が3図から6図まで、里は2里から4里までは確認できる。

2 観世音寺の寺田と高子内親王家領との土地争いについて

なぜ観世音寺と高子内親王家との間に土地争いが生じたのか、古文書だけでは把握できないので別の方法はないかと考えてみた。そこで注目されるのが、図・里・坪記載のなかで6図4里18坪牟多田、同里30坪牟多田である。今日の小字的地名がつけられている。席田郡には上臼井に「牟田々」、下臼井に「牟田々」の2つの小字名があって両者は南北に連続している。この2つの小字名が6図4里18坪・30坪になれば大変注目されるが残念ながら一致しない。しかし、「牟田々」地名が9世紀中頃までさかのぼる可能性があることに注目したい。そこで御笠川下流域の小字図を作製し、そこに古文書に出てくる地点を記入して考察を始めたい。

著者がかってトレーシングペーパーに写していた小字図から作製したのが第2図である。長い年月の間に東光寺の一部を紛失し、空白地区が生じている。この空白地区は丘陵地で条里地割は存在しない。

第3図には429の小字があるので検討してみたい。その最大の狙いは御笠川の旧河道を暗示する小字名があるか否かの検討である。小字名は大別して「古川・川原田」などの河川を暗示する地名、河



第1図 席田郡の条里地割（南部は除く）

川の後背地にあって、しばしば洪水を受け、土砂の推積があるような場所を暗示する「サコ・ツル・コモリ・ムタ」地名に分類できるのではないかと考えられるが、ここでは8つのパターンに分類してみたい。

1. 河川地名（古川・川原田・正フリ川）、「フリ」⁽⁷⁾は「フル」と同じで関西以西に分布し「古い」を意味する。
2. 牟田地名（上牟田・中牟田・無(牟)田々）、湿地・沼地を意味する。
3. サコ(ザコ)地名（サゴ・砂子・砂入・真砂）、サコ地名は湿地・砂地を意味する。
4. ショオココロ地名（正頃田）、ショオココロ地名は川の曲流部の砂地⁽⁸⁾をいみする。
5. ツル地名（長尾鶴）、ツル地名は水路・水路のある低地⁽⁹⁾を意味する。
6. コモリ地名（古森）、コモリ地名は沼地・窪地⁽¹⁰⁾を意味する。
7. ショーズ地名（正津）、ショーズ地名は細流⁽¹¹⁾を意味する。
8. ツ地名（津屋）、「交通位置」の「ツ」から船着場や港⁽¹²⁾（ここでは河港）を意味する。

参考地名

1～8と比較して取扱いに留意する地名。

「深」のつく地名（深田・深町）、「深」地名は低湿地を意味する。

「水」のつく地名（水町）、「水」地名は低湿地を意味する。

以上のように参考地名を含めて10パターンを考えてみた。いうまでもなく、これらのパターンに属する小字名がすべて1～10パターンに記した「意味する」ことに記したような景観に由来するかどうか明確ではない。しかし、それなりに意味があって、その土地につけられた呼称と考えるべきであろう。第4図は1～10までのパターンに属する小字名を記号化して記入したものである。一方、空中写真に見える旧河道跡、それに続く曲線を描いた小字境（条里施行地域では直線状の小字境が多い）、発掘で確認された旧河道跡の位置を考慮した場合、現在の御笠川の本流に5本の旧河道跡が推定できるようなルートである。そこで想定されるそれらのルートを第6図に記入し、8つのパターンに分類した小字図に寺田・係争地を記入した第5図とを対比してみると、1の河川地名、3のサコ(サゴ)地名、4のショオココロ地名、6のコモリ地名、7のショーズ地名などが河道跡と想定される部分にあることが判明する。これら5本の旧河道のうち、第6図のA点は下月隈C遺跡の西北端で河道跡が確認されているので、A-B間は9世紀までは機能していたと考えたい。また、調査区東側で検出された古墳時代後期から古代前期にかけて西南から東北方向に流れていた河川は9世紀頃には南北方向の流路となり、中世まで継続して流れていたことが判明している。しかし、調査区の北側では明確でないが、小字「杭手」(X点)が河川に杭を打って護岸工事をしていた地点を意味すると考えれば、ここを流れてD点に達し、D-E間の旧河道跡を流れていたであろう。残る2本の旧河道跡の変遷は不明であるが、K-N間は、さらにその南側でも約6.5kmにわたって旧河道跡が確認され、その間も含めて旧村境になっていたことに注目したい。そのなかでも旧那珂・下月隈村境のM-L間に旧河道跡を示す部分(堤防を含めて約30m)があり、また、その南側の旧板付・上月隈村境のK-J間にも河道跡(堤防を含めて約30m)がある。他の旧河道跡よりも川幅が広いことから、御笠川の本流であったと考えてよいのではないだろうか。

御笠川の本流を上流域の井相田付近から第6図のJ点に達していたと考えれば比較的直線状に流れていたことになる。K点の北にもみられる旧河道跡はN点まで追跡可能であるが、この間も御笠川の本流であったとすれば、川幅も広く舟運があって、その河口部に近い比恵の小字「津屋(第7図参照)」に河港(上流に向かうための乗り換えの拠点)とすれば、N点から北上すれば「津屋」に達することができる。このことは御笠川の本流(主流)であったから河港があったと考えるのが当然であろう。

ところで、発掘調査区⁽¹³⁾から9世紀代に埋まったことが判明しているP点は東隣に小字「伊賀町(Y点)」がある。「イガ」は「イカ」と同じで、洪水の起こり易い平地⁽¹⁴⁾の意味があり興味深い。この発掘地点より北のルートは明確でないが、直線で北上すれば、Q点からS点までの旧河道跡に達し、S

点の北でN点から来た御笠川の本流と合流していたとすれば、そこが小字「津屋」である点に注目したい。一方、Q点からさらに北上すれば、現在の流路に一致する。

以上のようにP点から北上する河川がどこを流れていたのか想定してみたが、2つのルートに絞られるといえよう。前者であれば、2つの河川が「津屋」で合流することになり、著者にとっては都合がよいことになる。N点から南は仮に直線で南下してO点に達したとすれば、8世紀代まではO-Z間の曲流部の御笠川は流れていなかったと考えられる。それは発掘調査で確認された複数の駅路跡を直線で結んだルートがこの曲流部にきて、2度渡ることになる。古代の駅路が短い区間で2度も同じ河川を渡るとは考えられないからである。

著者の想定する御笠川本流をN点から南下して井相田付近までとし、その南は空中写真から判読できる流路跡、現在の御笠川の流路から考えて、水城を出る山陽道は旧博多駅南側付近までの間、水城の北で1度御笠川を渡るだけであったと思われる。

次に、これら10パターン¹⁰の記号化した地図に観世音寺の一切経由の位置と高子内親王家との間で紛争になった地点を記入（第5図参照）して考察を進めたい。

最初に感じることは延暦11年（792）に観世音寺に施入された寺田が10パターン¹⁰のいずれかに一致するか、それに近い地点にあることから、施入当時は水利の便がよく、水田耕作に好都合の良田が選定されたのではないだろうか。しかし、下月隈C遺跡で検出された旧河道跡から、9世紀になって洪水が発生するようになって席田郡では河川が荒れて、土地が削られてくぼんだり、あるいは流路が変化してそれまでの景観が大きく変わり、土地争いに発展したのであろう。貞観11年（869）10月15日条の古文書によれば、仁寿2年（852）の班田図には6図3里・4里の8町内に観世音寺・高子内親王領があって、そこは両者とも「治田不注」が多く、そのために景観が変わったあとで、少しでも有利な地点を自己の所領といったのではないだろうか。

さて、土地争いの焦点であった6図3里28・29・30・34坪、6図4里18・19・29・30坪のなかで注目されるのは、6図4里18・30坪に記される「牟田々」である。そこが湿田か沼田であったのであろう。第6図からも判明するように30坪は旧河道に沿い、18坪は1町弱離れているが、下月隈C遺跡の旧河川跡と同様に9世紀代になってしばしば洪水が発生し、そのために河川沿いの地区が後背湿地化したために、「牟田々」と呼ばれるようになったのではないだろうか。そうであれば、上臼井・下臼井にある小字「無田々」も地名の由来が9世紀中頃までさかのぼることも考えられよう。

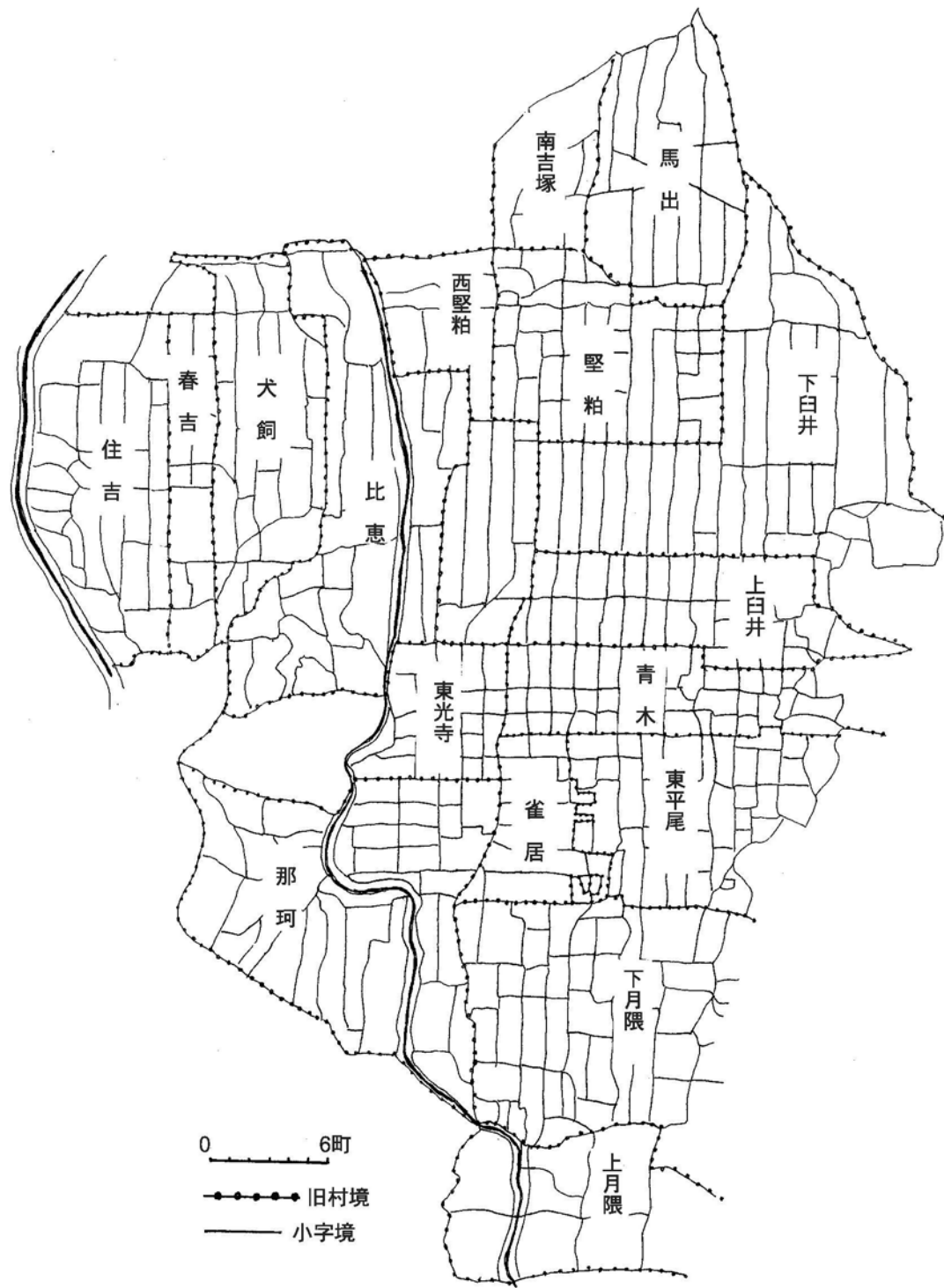
土地争いの地点が旧河道沿いであれば、E-D間の旧河道跡は9世紀代には機能していた可能性が強い。

なお、伊勢守源冷家に妨取りされた5図3里23坪も旧河道跡（第6図参照）にあたるので、ここも河川の洪水、それに伴う景観の変化での妨取とすれば、Q-Sを結ぶ旧河道跡が9世紀代にここを流れていたことを物語るといえよう。

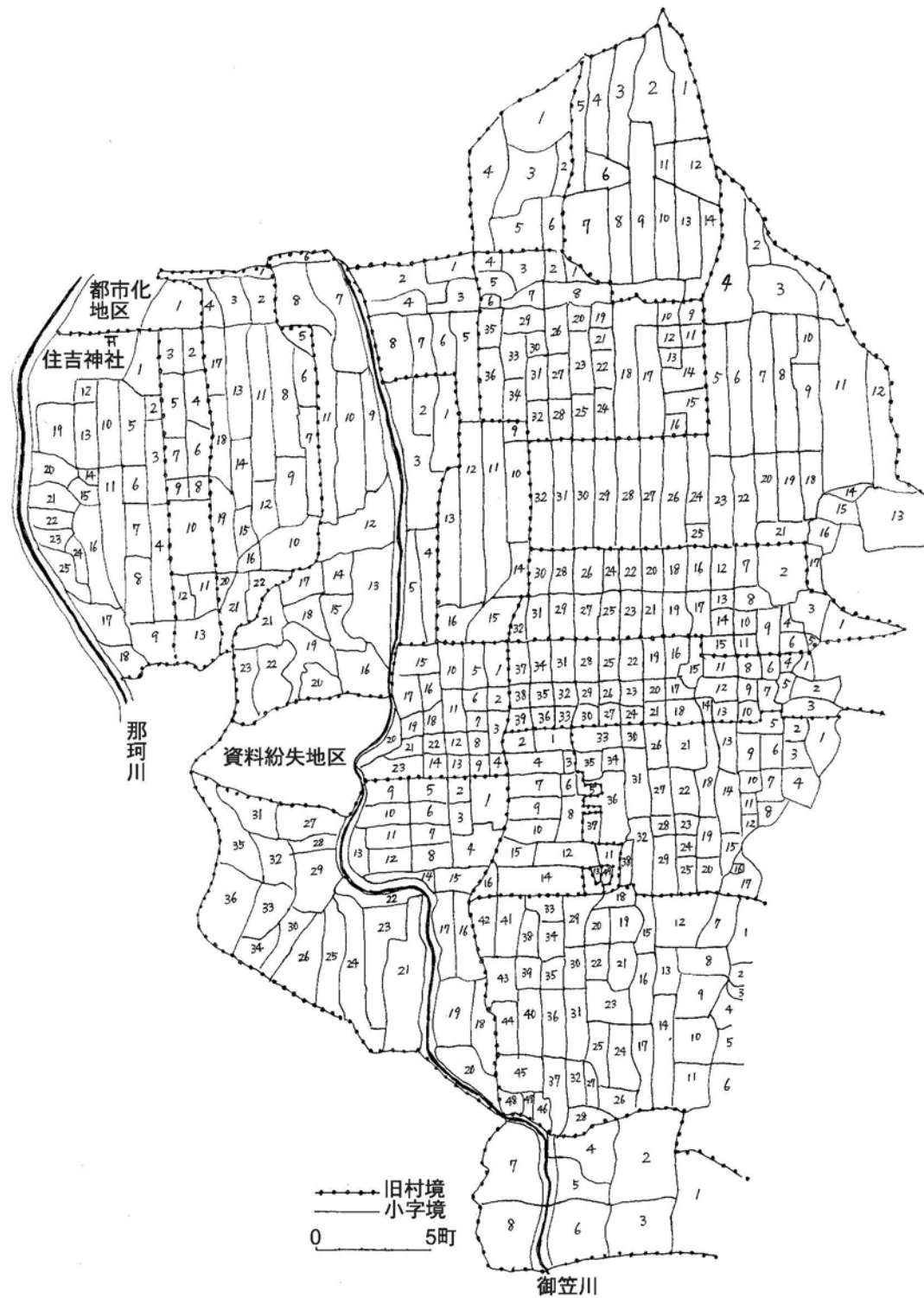
旧河道の一つであるA-B間は下月隈C遺跡で検出された旧河道に絡がることは、その位置から確実である。B点から以北では「古川」と「長尾鶴」の間を流れ北上していたとみられる。その場合、2つの小字名「水町」が河川に沿うことになる。

一方、F点からG点、少し北上してH-I間にも旧河道跡が想定される。H-G間は直線で結ぶことが可能であるが、I点から北ははっきりしない。直線で延長すると、ここでも2つの小字名「深田」「深町」に沿うことになる。

このルートは古森集落のほぼ中央を流れていたが、おそらく自然堤防上に位置していたとみられ、そこに小字「ツバクラ（第3図参照）」があり注目される。それは「ツバクラ」に倉庫の意味¹¹があり、河川に沿って倉庫が設置されていたことに由来するのではないだろうか。しかし、9世紀代にここを流れていた有力な手がかりはないが、貞観11年（869）10月15日条の古文書に記す観世音寺、高子内親王領の土地争いの地点が、この旧河道跡上にあるので当時は流れていたと考えたい。



第2図 御笠川下流の旧村名



第3図 御笠川下流域の小字名の位置

旧春吉村

1. 藤田
2. 平松
3. 馬場添
4. 中木
5. 敷町
6. ハッ溝
7. 溝間
8. 三百科
9. 知川
10. 宮嶋
11. 菅田
12. 三宅田
13. 大郷

旧住吉村

1. 宮後
2. 馬転
3. 東領
4. 井田利
5. 馬渡
6. 沖
7. 社
8. ロノ坪
9. 平田
10. 小柳
11. 福部
12. 番尺
13. 水尺
14. よし原
15. 棚口
16. 洗田
17. 中津
18. 天上田
19. 木ノ下
20. 出口
21. 古川
22. カイナ
23. 南小路
24. 水カイジ
25. 榎田

旧犬飼村

1. 堀田
2. 上新開
3. 中新開
4. 下新開
5. 龜崎
6. ダコタ
7. 神取
8. 障子町
9. 白別当
10. 松本
11. 下松本
12. 大坪
13. 中犬飼
14. 綿丸
15. 八反田
16. 野入
17. ピンガキ
18. 観音丸
19. ハッ溝
20. 畠田
21. 池田
22. 長市

旧比恵村

1. 栗原
2. 松本
3. 屋敷町
4. 八反町
5. 三ノ川
6. 出来町
7. 一里山
8. 龜崎
9. 返り町
10. 六反田
11. 美中
12. 門ノ内
13. 土手田町
14. 井手元
15. 水町
16. 扇子
17. 頭寄
18. 六郷
19. 井尻
20. 古賀
21. 池田
22. 小林
23. 花免

旧西堅粕村

1. 今町
2. 西之前
3. 古賀
4. 前田
5. 御馬所
6. 松本
7. 千町
8. サキ町
9. 野間
10. 津屋
11. 中牟田
12. 千把町
13. 大坪
14. 吉田
15. 幸角
16. 上牟田

旧堅粕村

1. 久保田
2. カキノヘ
3. 奥
4. 古小路
5. 辻
6. 藤田
7. 高廻り
8. 畑ヶ田
9. ハッ溝
10. 内ハッ溝
11. 御酒田
12. 井長田
13. こも口
14. ロノ坪
15. 鴨生
16. 敷地町
17. 八郎町
18. 千代
19. 大溝
20. 半三郎
21. 入道町
22. 小柳
23. 花黒
24. 八反花黒
25. 土柱
26. 持田町
27. 深町
28. ソリ橋
29. 松木
30. 道枕
31. 五月田
32. 九郎町
33. 水町
34. 鉢田
35. 大門
36. 御馬所

旧南吉塚村

1. 北吉塚
2. 興四郎町
3. 今町
4. 松原
5. 南吉塚
6. 畑田

旧馬出村

1. 雲雀田
2. 大畷田
3. 立平井田
4. 平井田
5. 平相町
6. 宮前
7. 瓦田
8. 溝間
9. 小深町
10. 鉢株田
11. 水町
12. 中畷町
13. 初向
14. 相町
15. 久保田

旧下白井村

1. 水沼
2. 柴垣
3. 畑田
4. 苦尾
5. 蒲生
6. 小深町
7. 井手尻
8. 菱町
9. 穴石
10. 大浦
11. 砂原
12. 大河原田
13. イナキ
14. 下浦
15. 山崎
16. 向小路
17. 鍋田
18. 百田
19. 桑ノ元
20. ハブ
21. サツマ
22. 口戸
23. 尾ヶ田
24. 川原田
25. 山吹
26. 正頃田
27. 深田
28. 無田々
29. 四角
30. 小柳
31. 深町
32. 榎田

旧上白井村

1. 宮ノ前
2. 柳井町
3. 居屋敷
4. 宮日田
5. 八楽
6. 藤田
7. 村田
8. 菱町
9. 三ノ丸
10. 御小森寺
11. 市ノ町
12. 公見
13. 栗尾
14. 早良町
15. 奈良田
16. 栄崎
17. 天神免
18. 桶田
19. 松本
20. ギョウデン
21. 川原田
22. 深田
23. 砂入
24. 幸田々
25. 入道町
26. 高田町
27. 用水
28. 中ノ坪
29. 天福
30. 武士町
31. 佐ノ坪
32. ナヤケ辻

旧青木村

1. キンソ
2. 蔵間
3. 前田
4. 八落
5. 地藏堂
6. 西ノ口
7. スイキ
8. 神在
9. 幸木
10. クエ丸
11. コヒテ
12. 前ハノ坪
13. 杭田
14. 前木ノ下
15. こも田
16. 松ノ木
17. 先木ノ下
18. 毛羅門
19. 火渡
20. モエ
21. 功口
22. 瓦田
23. 周藤町
24. 入道町
25. カゲ丸
26. 小町
27. 水町
28. 中塚毛
29. 唐干田
30. 平田
31. 先ハノ坪
32. 草刈
33. 徳住
34. 九ノ坪
35. 大坪
36. ビク町
37. 下曲
38. 上曲
39. 真砂

旧雀居村

1. ビク町
2. ヒモノ
3. 小坂
4. 小柳
5. 津波黒
6. 頭割
7. 炭焼
8. 机田
9. 瓦田
10. 正ブリ川
11. 大畷
12. 雀喰
13. ホコ通
14. 一ツ木
15. 宮敷
16. 角田

旧東平尾村

1. 宮ノ前
2. 中ノ坪
3. 修理田
4. 奥小路
5. ゴスデン
6. 野入
7. 古賀ノ後
8. 井尻
9. 杭田
10. 船廻
11. 畑ヶ田
12. 屋敷
13. サゴ
14. 土穴
15. 内草刈
16. 見川原
17. 宝満尾
18. すきその
19. 溝添
20. 草刈
21. ハカセ
22. 高井田
23. 池尻
24. 馬転
25. 塚原
26. コウ
27. アミヨ
28. 下馬転
29. コヲヨリ
30. 横枕
31. 長尾鶴
32. コウミ
33. 花畑
34. 水町
35. 政子
36. 古川
37. 津波黒
38. 戸井本

旧下月隈村

1. 宝満尾
2. 小石谷
3. 小浦
4. 鳥越
5. 森ノ後
6. 天神森
7. 傘
8. 迎田
9. 水町
10. 四ノ坪
11. 藤田
12. 柳井町
13. 大町
14. 杭手
15. 久保田
16. 友田
17. 松本
18. 真砂
19. 古森
20. 一ノ坪
21. 高崎
22. 平田
23. 角上
24. 中田
25. 吉政
26. 持田
27. 竹買
28. 竹買上
29. 米丸
30. 天神丸
31. 須丸
32. 苗代町
33. 高祖
34. 三ッ栗
35. 楠本町
36. 正津町
37. 深町
38. 畑ヶ田
39. 踊町
40. 裏セ町
41. 三十六
42. 長町
43. 古川
44. カイン
45. 柿本町
46. 見上前
47. 見上
48. 見上後
49. 小嶋

旧上月隈村

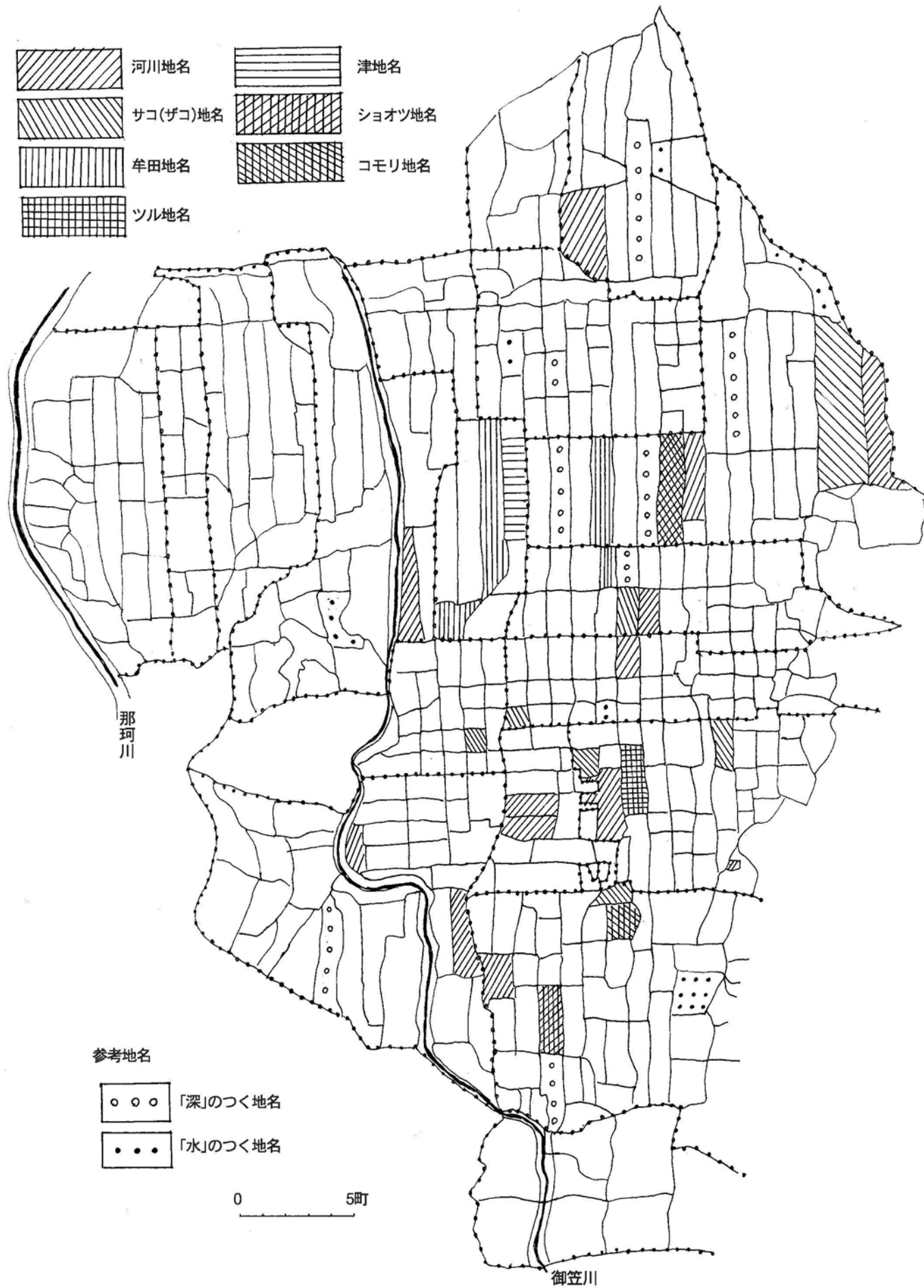
1. 山浦
2. ムシロシキ
3. 天神免
4. 大手木
5. 用中
6. 蔵ノ後
7. 丸田
8. 田中

旧東光寺村

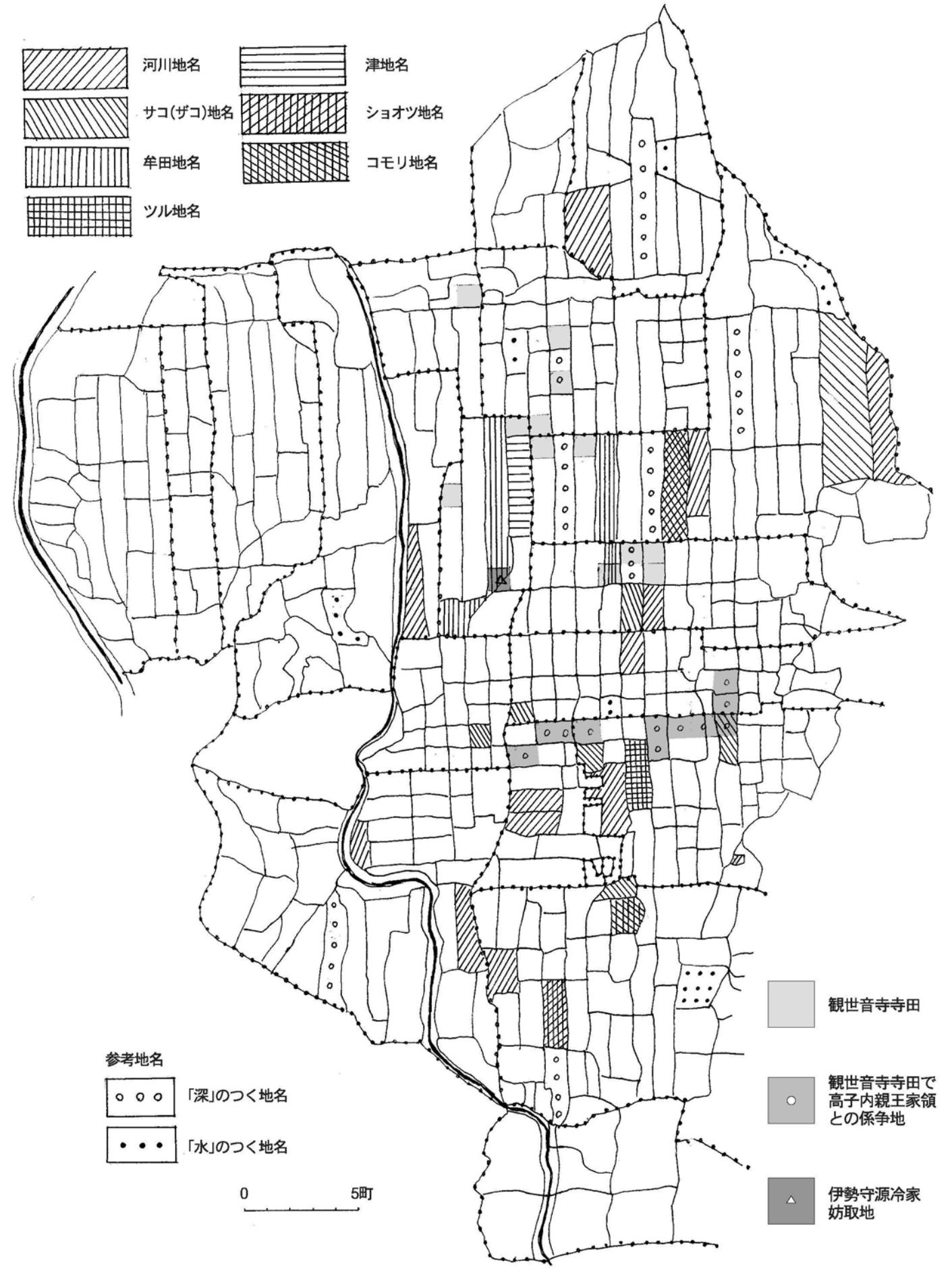
1. 入道町
2. ヲヲビ
3. 高日田
4. 高丸
5. 宮田町
6. サノ坪
7. 京屋町
8. 丸田
9. 田中
10. 島ノセ
11. 深町
12. 杉町
13. 馬転
14. 八反田
15. 摺田
16. 半道橋
17. 才平田
18. 六反田
19. 長田
20. 金島
21. 日渡
22. 畑ヶ田
23. 橋詰

旧那珂村

1. 洲高
2. 警固町
3. 尾形町
4. 宮敷
5. 入道町
6. 京手
7. 伊賀町
8. 堤田
9. 田中園
10. 伊奈岐
11. 土穴
12. 大坪
13. 瓦ヶ田
14. 三百目
15. 永田
16. 瓦田
17. 藤原
18. 三十六
19. 長尾
20. 宿
21. 久平
22. 門田
23. 君休
24. えぼし形
25. 深オサ
26. 下原
27. 原ノ畑
28. こも牟田
29. 沼口
30. 俗前
31. 堀ノ内
32. 柿添
33. 奥
34. 立石
35. 常ノ上
36. 古賀畑



第4図 小字名の分類



第5図 観世音寺の寺田・係争地と小字名との関係

以上、席田郡の中央部よりやや北側における旧河道跡について述べてみた。下月隈C遺跡で検出された2つの大きな河道跡のうち西北側のは第6図のA-B間、東側のほぼ南北方向に流れる旧河道跡はD-E間の旧河道跡とそれぞれ絡がっていたと考えれば、現在の地表地表面に見える旧河道跡は9世紀代まで機能していただけでなく、その後も長く機能していたと考えたい。そうであれば、F-G・H-I、K-N・O-P-Q-S間もそれぞれ同様とみてよいであろう。第6図に示したように5つの旧河道跡を想定してみたが北部ははっきりしない。そこで憶測に憶測を重ねて考えてみたい。第7図に示したように御笠川の本流をN-Tとした場合、その北は「津屋」に至ったことは間違いない。その場合、S点までの旧河道跡も「津屋」で合流していたのであろう。現在の御笠川に分流もなかったとすれば、著者の想定した人工水路¹⁰も「津屋」に達していたことが考えられる。ここを河港とすれば、想定される山陽道までは3町の距離となる。「津屋」の北ははっきりしないが、A-B-C-D-E、C-F間が旧村境であったことを重視して、この旧村境に沿って御笠川が流れていたのではないだろうか。E点一帯の犬飼の小字「堀田」は東西に細長く、それが川幅と河川跡を示すとみられる。

第7図のような流路を想定するとC点で2分することになるが、C点の北には海岸砂丘があって北に流れることが出来ずに2分されたのではないだろうか。

他の3つの旧河道跡の北側を想定するのは困難である。その中でH点から北はおそらくG点に達していたことは間違いないだろう。そうであればG-F間に人工水路があっても不自然ではない。F点から西に人工水路らしき痕跡がないのはC-F間が御笠川の本流で現在の御笠川(仮に分流があったとしても)がなかったとしても延長する必要はなかったことになる。この西堅粕・堅粕の集落と水田は昭和2年(1927)12月17日に区画整備が完了し、条里地割も消滅してしまった。

次に9世紀代の風水害等についてみてみたい。『日本文徳天皇実録』の天安2年(858)6月20日条に、5月1日に大風暴雨が九国=嶋に大きな損傷を与えたと記されるのを始めとして、『日本三代実録』貞観6年(864)12月26日条に阿蘇山、同9年(867)2月26日条に鶴見田岳、同16年(874)7月2日条に開聞岳の爆発と10年の間に3つの火山爆発があった。また、この間の貞観11年(869)7月14日条に肥後国大風雨とあるなど、西海道で860年前後に不安定な気象状況が続き、大きな災害が発生したと考えられる。席田郡の土地争いに関する古文書の年代が貞観9・10・11年に集中しているのも、大きな災害が発生したことと無関係ではないだろう。

下月隈C遺跡の条里地割について

下月隈C遺跡では古墳時代後期から古代前期遺構面と古代遺構面(8-9世紀)が検出されている。前者は発掘範囲では旧河川の流路が検出され、その旧河道にはさまれた地区に亀ノ甲状の水田区画が多数検出されている。いずれも小区画で統一性があるとは考えにくい。

これに対して古代遺構面は南北に直線状に伸びる大畔が一つ、東西方向に同じような大畔が二つ、それぞれ検出されている。この方位はN35°Eで、水城以北の条里はN37°Eを基準にしているので、若干のずれが生じているが、この程度の相違は問題ではないと思われる。しかし、その東西方向の大畔の間隔は報告書¹⁰の800分の1の図面上で計測しても約100mで、1町(約109m)より若干短い。また、この南北方向の大畔より東に古代から中世にかけて南北にほぼ直線状に流れていた河川が坪界線に相当するが、この間も約100mとなっている。これがなんらかの理由でここだけが基準より約1割短くなったのか限られた発掘範囲内で結論を求めるのは無理と考えたい。

大畔に囲まれた範囲内では小さな直線状の小畔によって小区画に分割されており、古墳時代後期に造成された亀ノ甲状の水田区画が一掃されたと考えることができよう。古墳時代に不規模な小区画が形成された水田地区に条里地割が施行される場合、その亀ノ甲状の土地区画の上に一町方格の網(水路又は道路)をかぶせる事例もあるが、ここではそのような処置がとられていないので、条里地割の施行に際して強力な権力が働いた事例の一つといえよう。

下月隈C遺跡では9世紀に条里水田の始まりを想定しているが、『平安遺文』第1巻の延喜5年(905)の『観世音寺資財帳』に記す「那珂郡3区6里31世良田2反130歩、12大野田1反⁴⁾」は「坪」が記されないかわりに原初的な地名(今日の小字地名に近い)である「世良田・大野田」が記されている。このような形式は奈良時代の古文書にみられる特徴である。おそらく「世良田・大野田」と呼ばれた水田に条里地割を施行し、その後に条里呼称制度を導入した際に1~36までの番号をつけ、その際に地割施行前に呼ばれていた呼称を併記したとみられる、やがて呼称制度に慣れてくると小字的な地名は除かれ、数字の次に「坪」がつくようになった。その初見は『平安遺文』第1巻の『山城国紀伊郡司案』にみられる延暦19年(800)である。従って那珂郡と同じ条里区に属する席田郡の条里地割も8世紀代までに大部分は施行されていたとみられる。

限られた発掘範囲ではあるが、現在の地表面に残る地割との関係をみておきたい。

8-9世紀の直線状の大畔を福岡市刊行の地形図に示すことは可能である。しかし、現在の地表面の地割は月隈C遺跡付近では整然とした条里地割とはいいがたい。そこで整然とした条里地割の残る古森・雀居付近から一町方格を地形図に示して下月隈C遺跡付近に至り、報告書に記される大畔を記入してみると殆ど一致する。従って厳密には若干の誤差が生じている可能性もあるが、現在の地表面の条里地割が埋没していた条里地割を踏襲しているといえよう。

大阪府の城山遺跡⁵⁾では埋没していた条里地割を囲む一町方格と現在の地表面の坪境線と42mの相違があることが判明している事例もあるので、下月隈C遺跡の条里地割の検出は貴重な事例といえよう。

ところで、下月隈C遺跡は席田郡の9区4里と想定されるが、検出された南北方向の大畔の一町西側が里境線になるが、発掘範囲外である。里境線の水路(又は畦畔)が坪境線の水路より広いのかといった点にも興味もたれる。

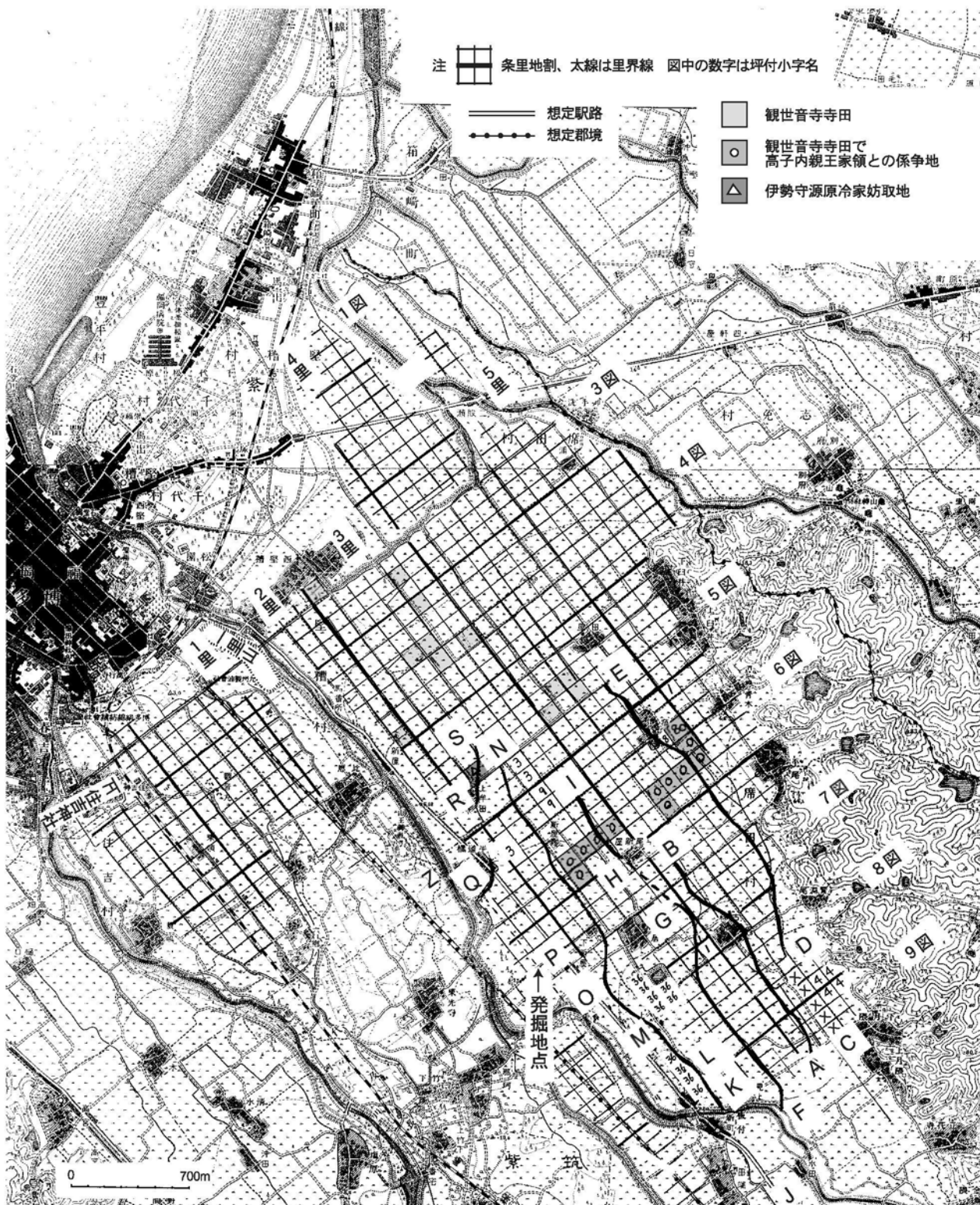
おわりに

下月隈C遺跡で検出された条里地割・旧河川跡と古文書から席田郡の条里と埋没条里との関係、小字名から河川の流路を憶測し、土地争いなどの問題点に触れてみた。大胆な憶測に終始し、問題点も多い。今後、御笠川の流路に関するデータが豊富になり、流路に関する論述が出ることを期待したい。

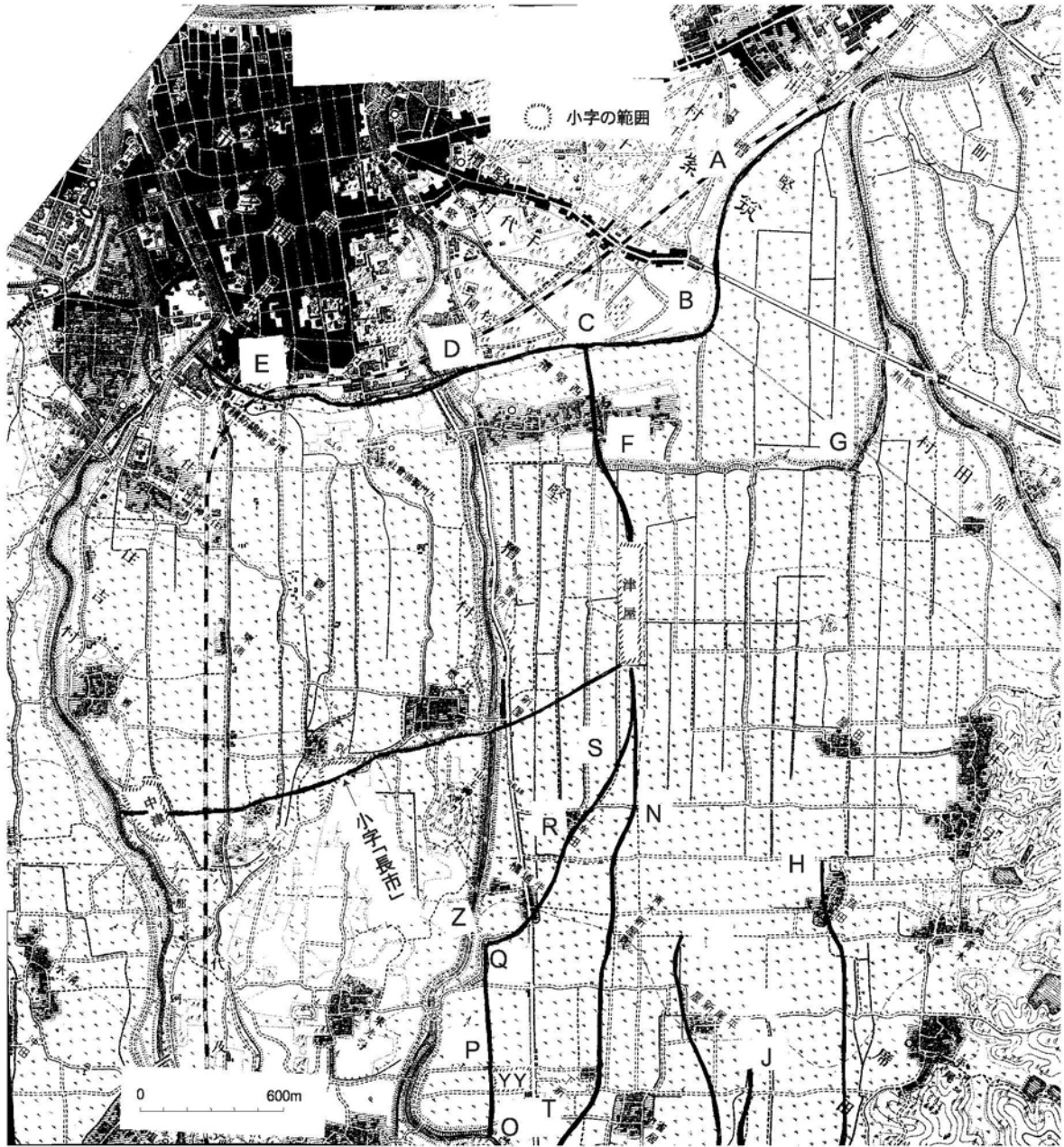
最後に発掘現場での説明、文献・地図等で福岡市教育委員会の山崎龍雄氏には大変お世話になり、厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 日野尚志(2005):「比恵・那珂遺跡群を中心にして諸問題を考える」、『那珂38』(2005)、福岡市埋蔵文化財調査報告書第842集
- (2) 『江辻遺跡』(2002):粕屋町文化財調査報告書、粕屋町教育委員会
- (3) 日野尚志(1976):「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠4郡における条里について」、『佐賀大学教育学部研究論文集』第24集(1)
- (4) 前掲(3)
- (5) 前掲(1)
- (6) 『平安遺文』第一巻(1967):・154、・160、・161、・162
- (7) 『日本の地名』(1964):角川書店、18頁
- (8) 前掲(7)、12・48頁
- (9) 前掲(7)、58頁
- (10) 前掲(7)、29頁
- (11) 前掲(7)、52頁
- (12) 前掲(7)、57頁
- (13) 『東那珂遺跡I』(1986):福岡市埋蔵文化財調査報告書第821集
- (14) 前掲(7)、19頁
- (15) 前掲(7)、57頁
- (16) 前掲(3)
- (17) 前掲(1)
- (18) 阪田育功(1988):「大阪平野の条里遺構」、『条里制研究』第4号、条里制研究会 79-105頁



第6図 席田郡の条里地割（南部は除く）



第7図 憶測御笠川下流域の流路

2. 各面のまとめ

月隈調節池建設に伴う調査は、平成10～15年度まで実施した調査総面積45,749㎡の大規模な調査であった。調査では弥生時代前期初頭から中世にわたる各時期の遺構を確認した。当地は御笠川右岸に立地した沖積地であるため、各時期での地形の変化が読みとれる貴重な遺跡であることが判明した。本書は第8次・第9次調査の報告ではあるが、報告書としては最終年度の報告になる為、今次のまとめを中心に、第4～9次調査全体の簡単なまとめと気づいた点について触れ若干の考察行いたいと思う。また調査では、古代の時期の墨書土器、木簡、木製祭祀具など、通常集落では出土し得ない重要な遺物が出土しており、それらについて若干の考察を行なった。

1) 古代末～中世のまとめ

調査では第I面である。主な遺構としては、第8次・第9次調査では水田遺構と、席田郡条里の南北方向坪境に沿った幅4～6mを測る溝を検出した。この南北溝に沿って近世～近代の水路があり、間に洪水砂や客土の間層を挟むものの、当地が現代まで連綿と地割に基づいた基幹水路を踏襲し水田を営んで来たことが分かる。Fig. の第4～9次調査全体の遺構配置図では、西側第4～6次調査区で集落があり、東側第7～9次調査区は水田となる。その下の第2面（古代後期）では調査区全域が水田であるので、この両面間に大きな地形変化が起こっている。本書の日野尚志氏の考察でも触れられているが、席田郡一帯は大宰府観世音寺領と高子内親王家、後の内蔵領の所領が錯綜しており、9世紀代には度重なる大雨で御笠川が氾濫し耕地が荒れ、両方で所領争いが起こっている、御笠川旧河道に近い西側一帯は特に洪水の影響を受けやすく、水田に洪水砂が厚く堆積し自然堤防として微高地化していたものと思われる。その荒れた耕地を再開発するために、中世に微高地上に集落が進出し、後背地である集落東側に条里規制に沿った南北溝を掘削し、その周りに水田を営んでいたものと考えられる。第7・8次調査区のSD720の両岸に多数打込まれた護岸杭は洪水などによって崩れた岸を補強するために打込まれた結果である。またこの時期、水田区画は前代の条里地割りを踏襲するものの、中央半分に東西方向の杭を打込んだ畦があり、それを基準に南北に細長い水田区画とする半折形区画となっている。

2) 古墳時代後期～古代のまとめ

調査では第II面、第4・6次調査では第II面・第III面に該当する。東側を南北に走る中世水路SD720以西では条里地割に基づいた水田畦畔が良好に検出された。畦畔には1町四方の大畦も検出され、地割を考察する上で良好な資料を得ることができた。これらの畦畔の時期は6次で9世紀代の洪水流路に切られていることから9世紀初頭を降らず8世紀代に遡る可能性がある。第5、6次調査で下層から南北の大溝と重なる溝が検出されたことから第II面の時期を遡って条里地割が敷かれていた可能性が高い。

古墳時代後期の畦畔は5次調査で良好に検出された。北東方向へ蛇行する流路に沿った地形に合わせて畦畔が築かれている。7次調査の西側の畦畔下には粗朶が敷かれ水防の備えが為されていた。問題なのは7次調査の中央部で検出された畦畔と水路SD734の時期である。畦畔は直線的で5次調査で検出された畦畔ともやや異なる。また、8次調査のSD735の水口から発した水路の方向とほぼ同じであることから、8世紀代を大きくは遡らないように思われ、条里地割が施行される直前に近い形状の可能性もある。また、水路SD734も8世紀後半に埋没したSD735と大きくは隔たらない時期と思わ

れる。なお、7次調査では近世に継がれていく水防の技術も数多く見受けられた。

特記すべきことに7次調査の流路SD735から「皇后宮職」が書かれた木簡が出土したことである。当地の性格や遺跡を解釈していく上で鍵となるべきもので、当初、平安遺文に書かれた高子内親王との関係が想起されたが、時期的には遡ることが判明した。文書内容から郡符木簡クラスが考えられ、近くに官衙の存在が思い浮かべられた。しかし、示唆するものは現在までに「里長」と書かれた墨書土器が唯一の遺物で他は「戌」、「美」「福」などの吉祥句を書いた墨書土器や人面土器、人形など祭祀遺物が多い。今後周辺の調査成果を含め再検討する必要がある。

3) 弥生時代前期初頭～古墳時代前期ころのまとめ

調査では第Ⅲ面、第4・6次調査では第Ⅳ面に当たる。第8次・第9次調査区では、微高地部に掘立柱建物を主体とする集落と、谷部に展開する水田面を検出した。第5～7次調査区でも低地で水田遺構らしき痕跡、また高所部土坑などから多量の炭化米、数多くの農耕具、ネズミ返しなどの出土から集落周辺で水田耕作が行なわれていたことは間違いない。

集落は、各微高地上にFig. 160のように3カ所は存在する。集落の開始時期については、縄文時代早期からの遺物も僅かに見られるが、弥生時代前期初頭、板付I式古段階の時期からである。ただ集落の中心は、豊富な出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の時期である。前期の遺構は土坑SK1075・1084・1085、SD1104・1131などが中心となるが、掘立柱建物SB1259・1260などからも前期の遺物が出土しており、粕屋町の江辻遺跡や福岡市早良区の入部遺跡などで検出されている細長い掘立柱建物例などから同時期の建物と考える。また北側第7次調査区と合わせて計56棟、第6次調査区も合わせると76棟となる。建物の約6割が1×2間規模の建物で台地周縁に沿って建て替えられていった状況が窺える。これに反し竪穴住居跡は第6次調査区で3～4棟、第7次調査区2～3棟しか検出されていない。後世の開発で削平された可能性もあるが、湿気の多い沖積地の住まいであることや、洪水などの水害を避けるために、高床の建物を住居としていたと考える。集落の中心時期が後期後半から終末期であるのは、安田喜憲氏によれば（安田喜憲『気候と文明の盛衰』1990）、弥生時代中期の温暖期から後期は一転寒冷期になるとする。当地一帯では海水面の低下が地下水位の低下をもたらし、比較的微高地が安定化し居住するのに適するようになっていたことによると考える。掘立柱建物の柱穴には、沖積地の特性からか礎板・柱が遺存していた。前期の建物は、礎盤はなく柱のみである。後期の建物は礎板が出現している。礎板・柱の樹種は第6～8次ともクリなどの広葉樹が多く、周辺で容易に入手できるものである。第6次調査区では集落周囲を環状に巡る溝を確認している。

また第7次調査では銅戈の鋳型が1点出土している。本遺跡で青銅器生産が行なわれていたことは、間違いないが、工房跡は不明である。ただ第8次調査で確認した鍵孔型に巡るSD1181は内部に明瞭な建物施設はないものの、春日市などの工房跡出土例などからそれに類するものとする。

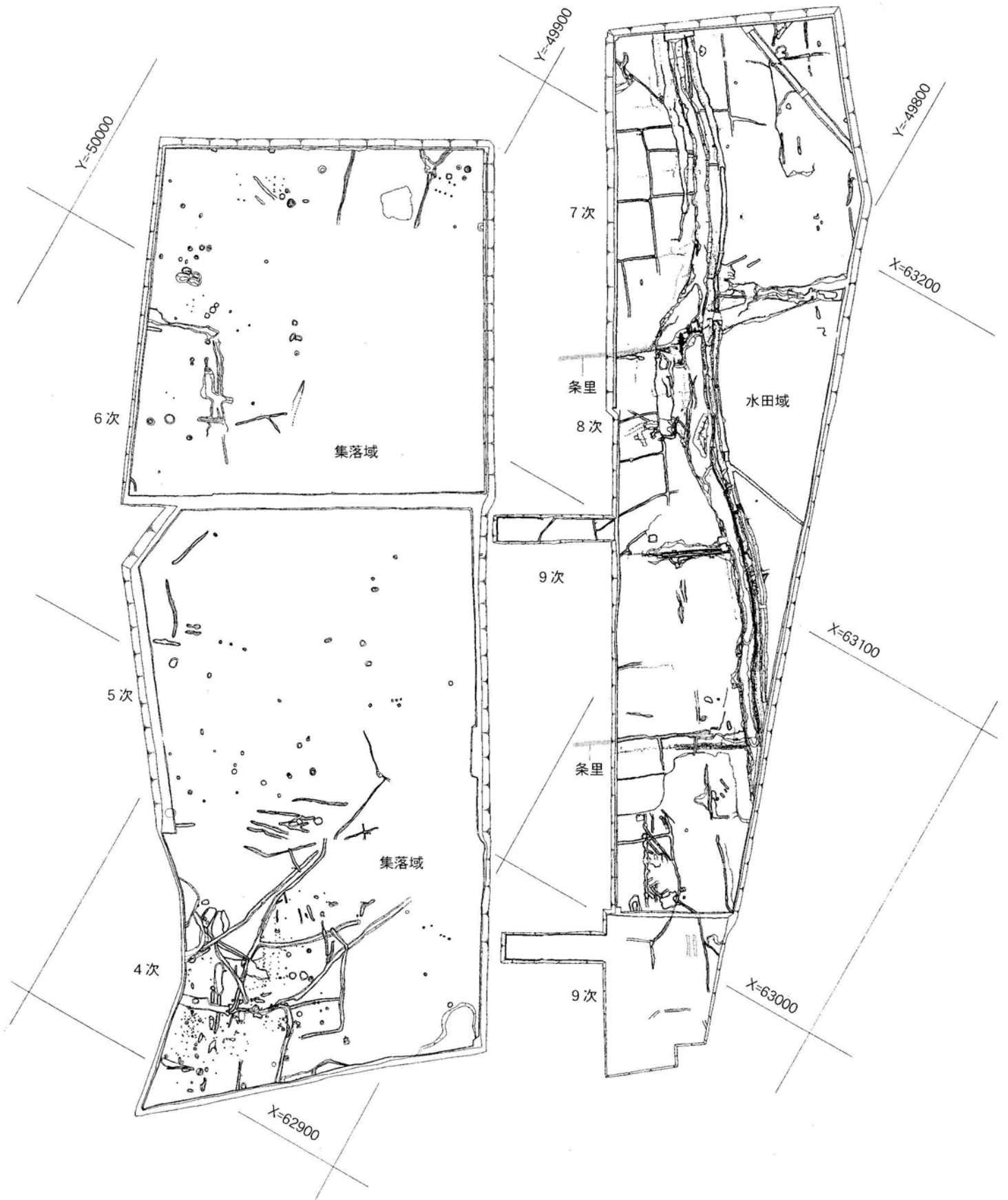


Fig.157 第4～9次中世遺構面 (1/1,500)



Fig.158 第4～9次古代遺構面 (1/1,500)

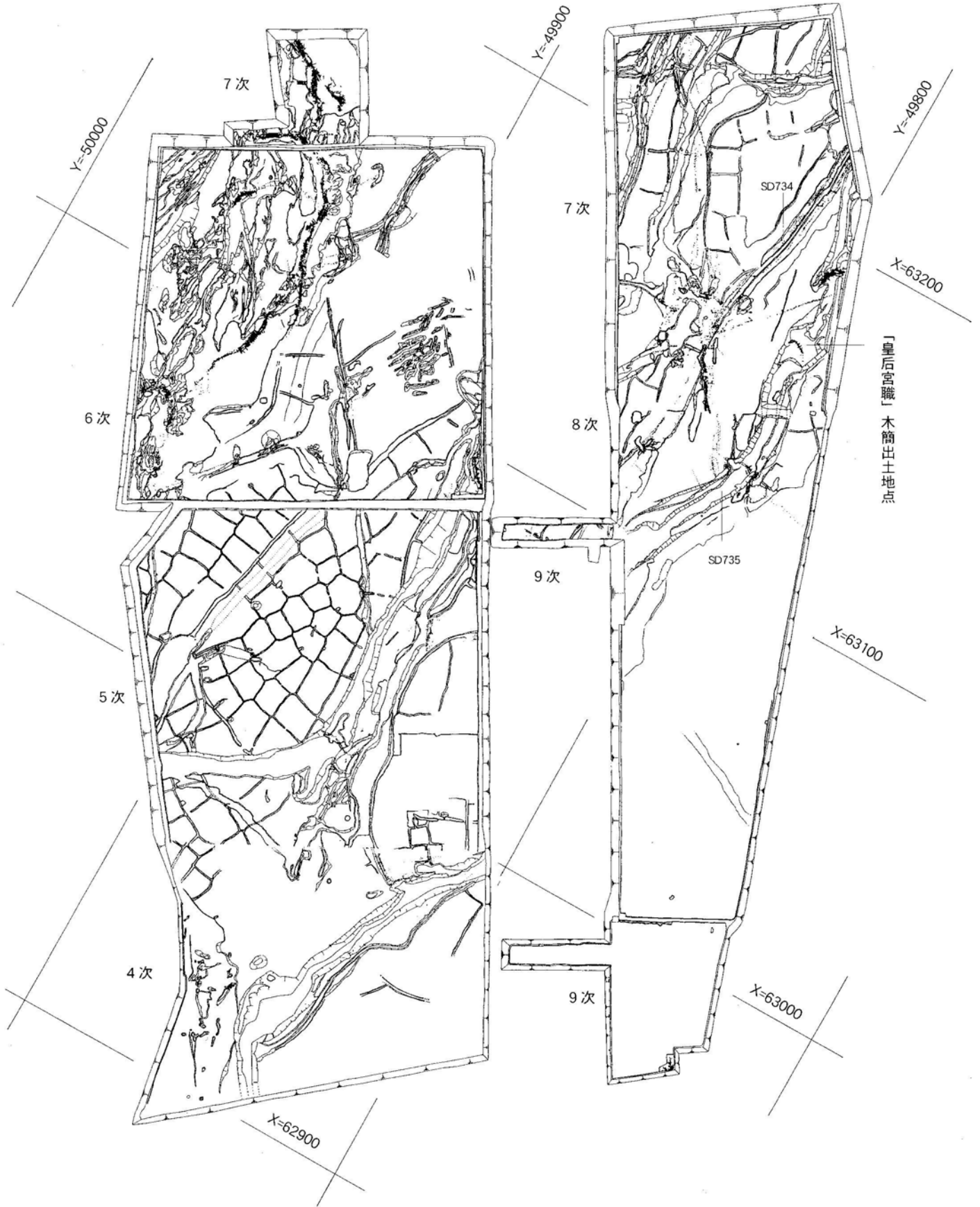


Fig.159 第4～9次古墳時代後期から古代前期遺構面 (1/1,500)

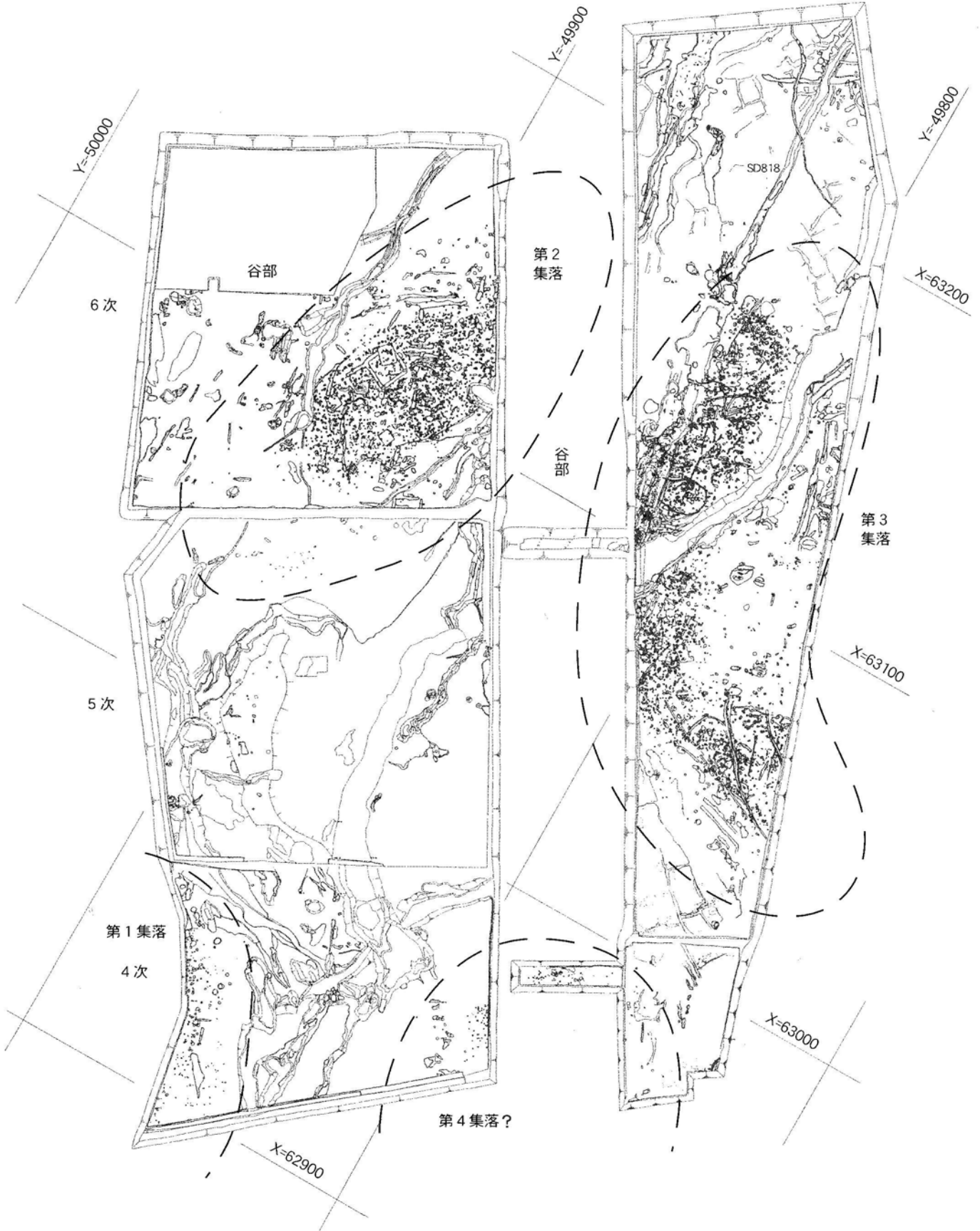
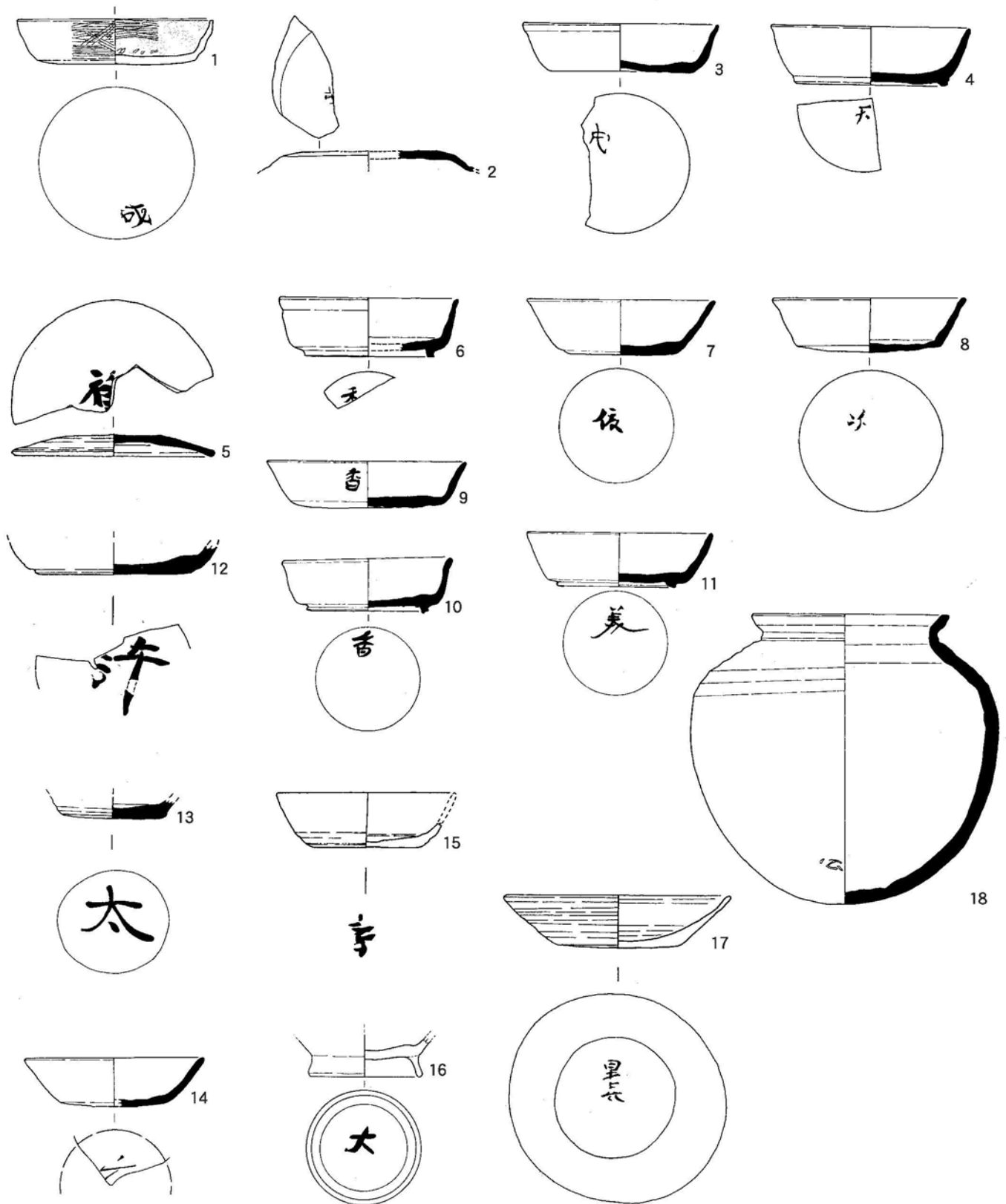
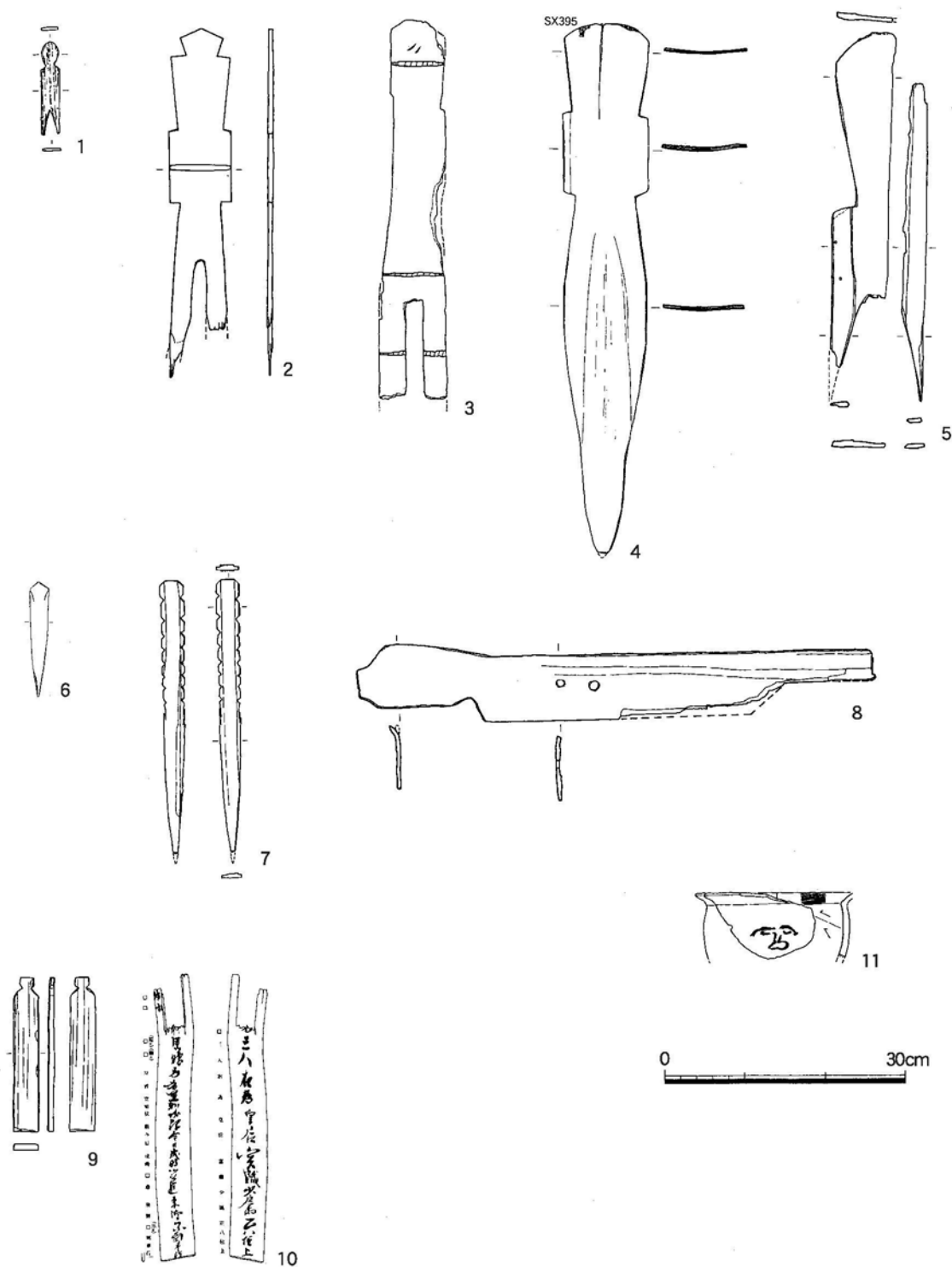


Fig.160 第4～9次弥生時代前期から古墳時代前期遺構面 (1/1,500)



1~4・6、7次 SD735、5、7次 SX932、7~11、8次 SD735、12、8次 SD703、13、7次 SD362、14、6次 SD402、15、6次 SD305、16、6次 SX395、17、7次 SX933、18、7次 SD735

Fig.161 第6~8次調査出土墨書土器 (1/4)



1、8次 SD735(SX1050)、2・5・7・8・9、6次 SX395、3、6次 SX403、4、7次 SX395、
6、7次 SD735(SX744)、10、7次 SD735(SX744)、11、8次 SD735

Fig.162 第6～8次調査出土祭祀木器と木筒 (1/8)

報告書抄録

ふりがな	しもつきぐましーいせき なな
書名	下月限C遺跡Ⅶ（本文編）
副書名	－福岡空港周辺整備事業に伴う下月限C遺跡第8・9次発掘調査報告－
巻次	Ⅶ
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	932
編著者名	山崎龍雄/荒牧宏行/森勇一/パレオ・ラボ株式会社/パリノ・サーヴェイ株式会社/日野尚志/屋山洋
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL092-711-4667
発行年月日	西暦2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもつきぐましーい 下月限C遺 跡群第8次 調査	ふくおかしはかた くつきぐまよんちゆうめ 福岡市博多区月限4丁目	40132	2625	33°34'15"	130°27'41"	20020401～ 20030331	7,400	調節池工事
しもつきぐましーい 下月限C遺 跡群第9次 調査	ふくおかしはかた くつきぐまよんちゆうめ 福岡市博多区月限4丁目	40132	2625	33°34'12"	130°27'42"	20030401～ 20031031	2,000	調節池工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下月限C遺跡 第8次調査	集落・水田	弥生時代、古墳時代、古代、中世後期、近世	弥生時代-掘立柱建物+土坑+溝+古墳時代-溝・自然流路+水田+土坑/古代-溝・川跡+堰+水田/中世-溝+水田+堰/近世以降-溝	弥生時代-弥生土器+石器+銅鏃+鉄器+ガラス玉+木器/古墳時代-土師器+須恵器+木器/古代-土師器+須恵器+墨書土器+木器+木製祭祀具/中世-土師器+中国産陶磁器+石製品+木製品/近世-国産陶磁器+木製品	奈良時代の川跡から人形・人面墨書土器、また弥生時代集落では30棟を超える掘立柱建物を検出した。
下月限C遺跡 第9次調査	水田・流路	弥生時代、古墳時代、古代、中世	弥生時代-溝+水田+ピット/古墳時代-溝+水田/古代-水田/中世-水田	弥生時代-弥生土器+石器+ガラス玉+木器/古墳時代-土師器+須恵器+木器/古代-土師器+須恵器+木器/中世-土師器+中国産陶磁器+木製品	
要約	<p>調査地が所在する下月限C遺跡は福岡空港南側に隣接する一帯で、御笠川東側の沖積微高地上に立地する遺跡である。調査は洪水対策の調節池建設に伴って平成10年から15年迄実施した。</p> <p>第8次調査 弥生時代から中世にかけての遺構の調査を行った。第Ⅰ面は古代末から中世後期の時期で、条里地割された畔畔と第7次調査に続く水路と思われる溝である。溝からは堰が検出された。第Ⅱ面は古墳時代後期から奈良時代頃の時期で、水田面と奈良時代に埋没した川跡がある。川跡中からは人形や人面墨書土器などが出土した。第Ⅲ面は弥生時代中期から古墳時代前期迄の時期である。この面では第7次調査区から続く高所部で掘立柱建物跡から構成される集落を検出した。また北西側では弥生時代後期末から古墳時代初め頃の溝などを検出した。溝内には堰があった。また南西側低地部には水田があったようである。</p> <p>第9次調査 建設予定地の南東隅部と、調節池通水管部分の調査である。各面で水田面と、自然流路・溝を検出した。</p>				

下月限C遺跡Ⅶ

－本文編－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第932集

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
平成19年3月30日

印刷 大野印刷株式会社
福岡市博多区榎田2丁目2-65